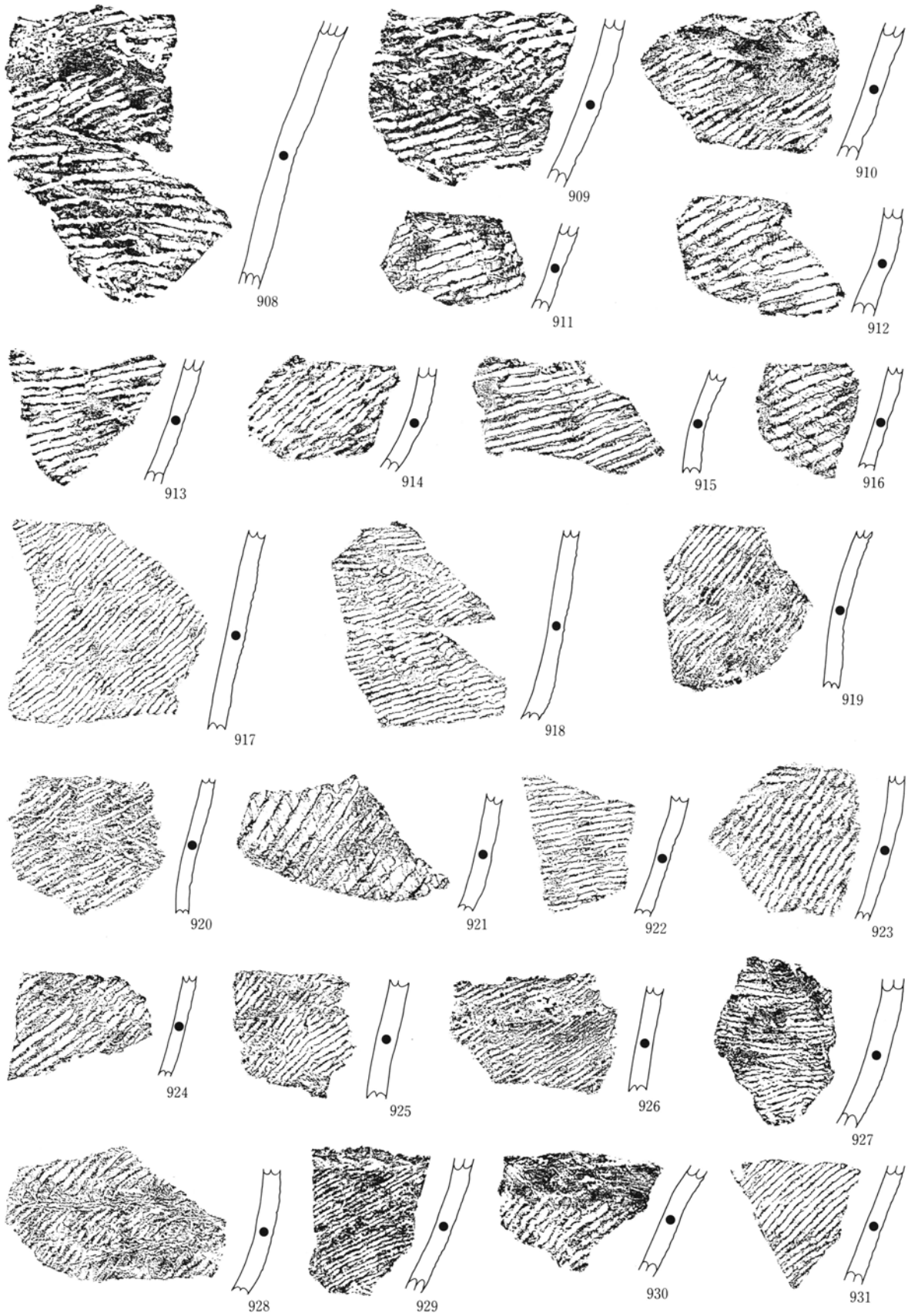
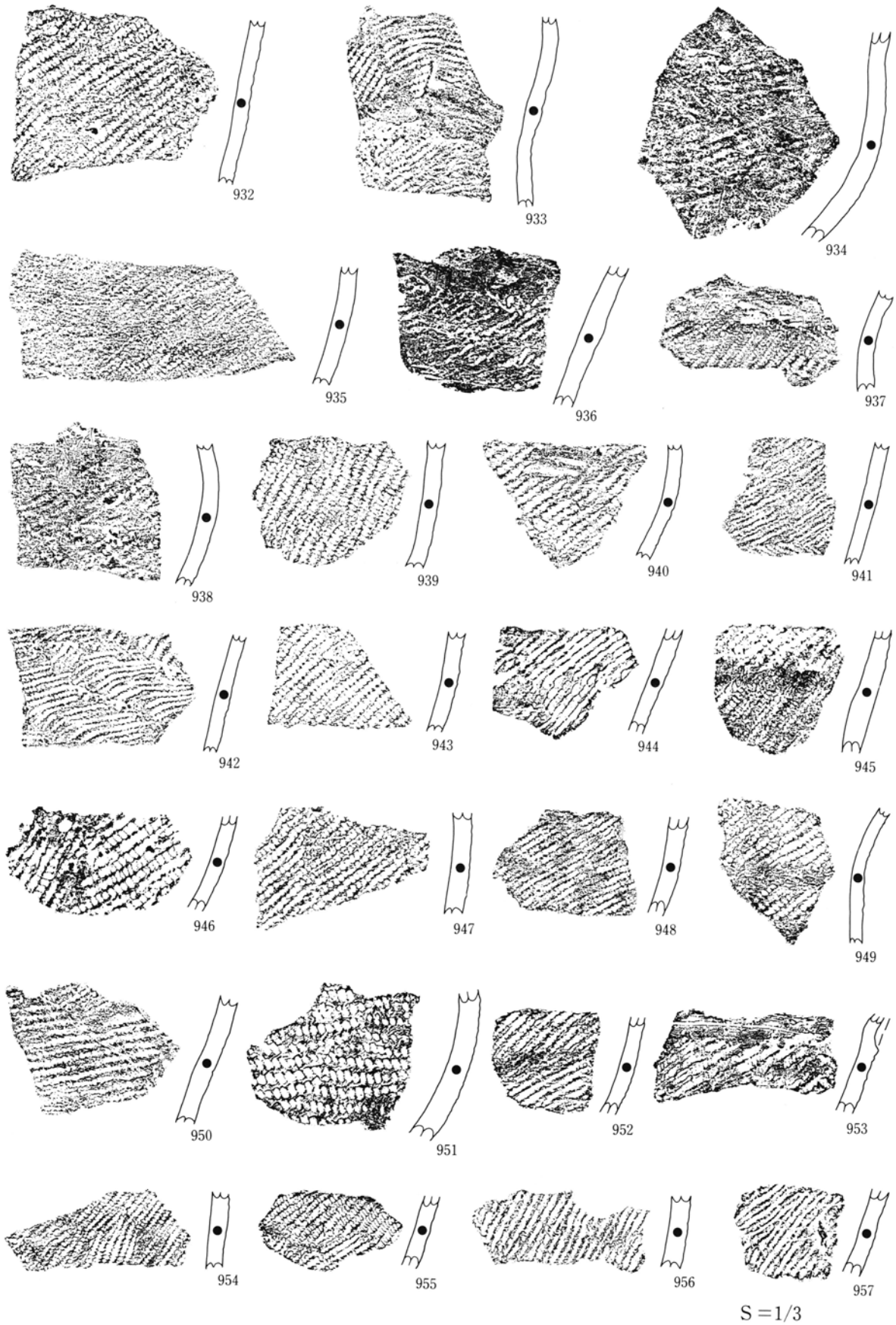
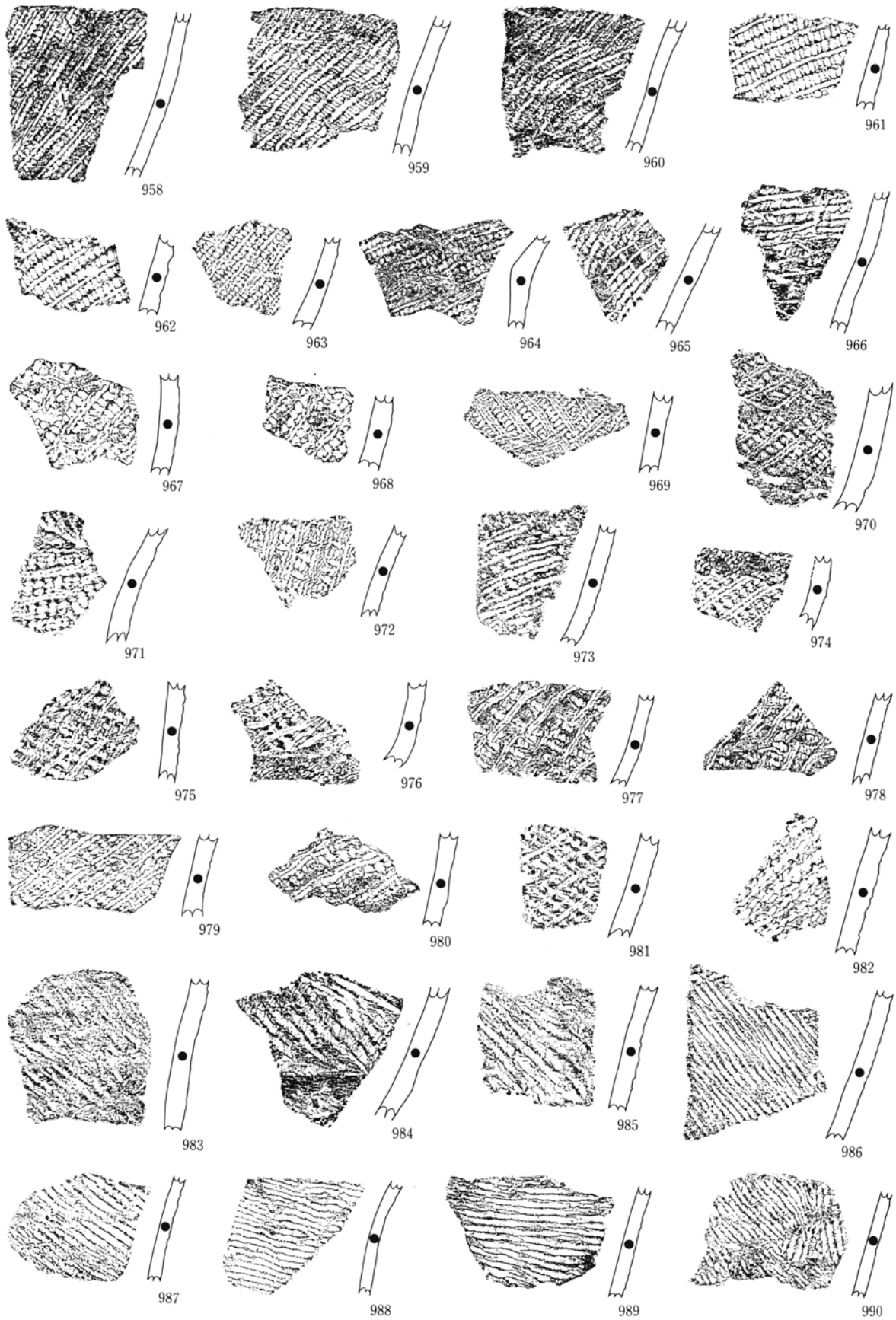


S＝1/3

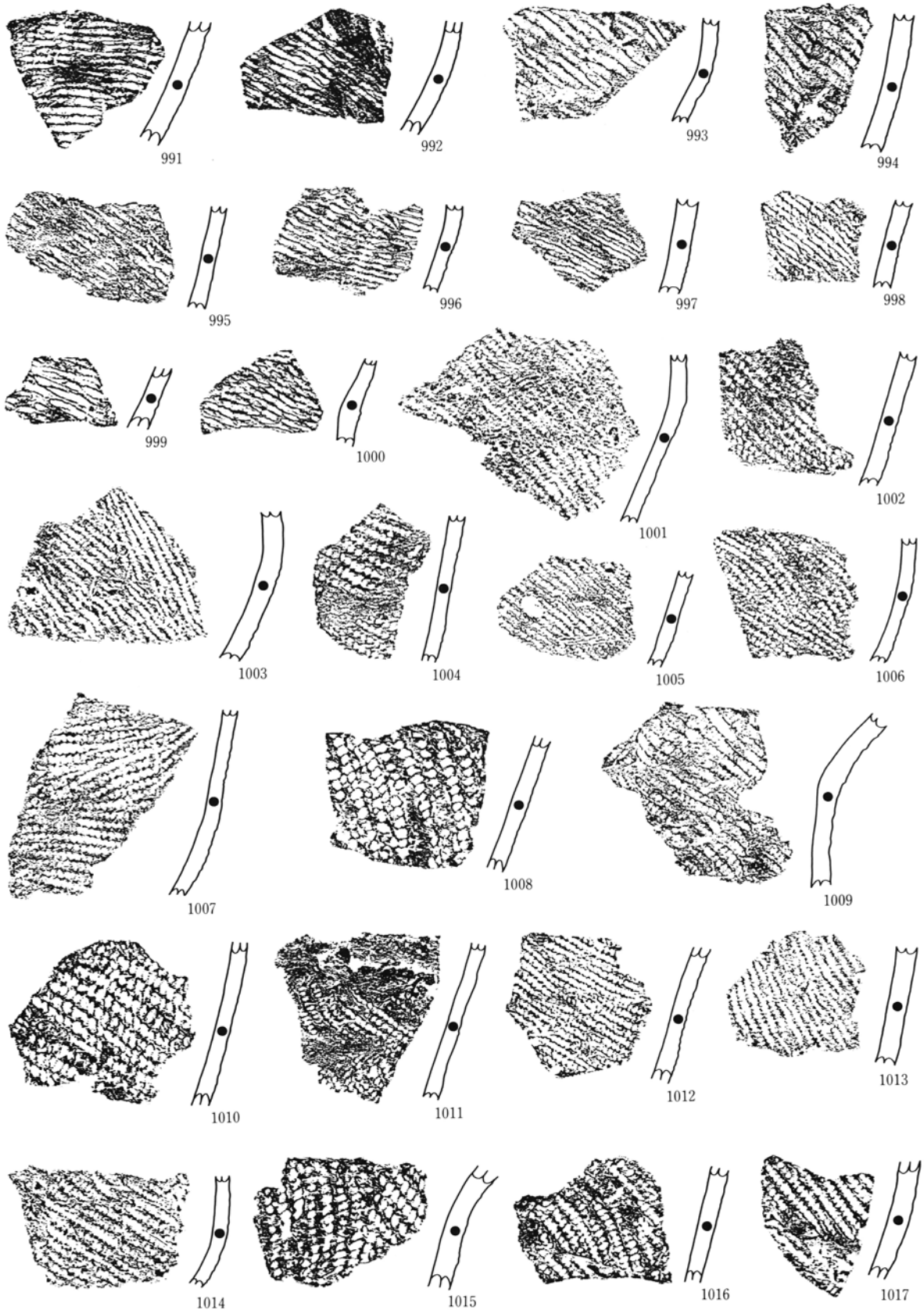
第152図　遺構外Ｃ区出土土器（23）



第153図　遺構外Ｃ区出土土器（24）

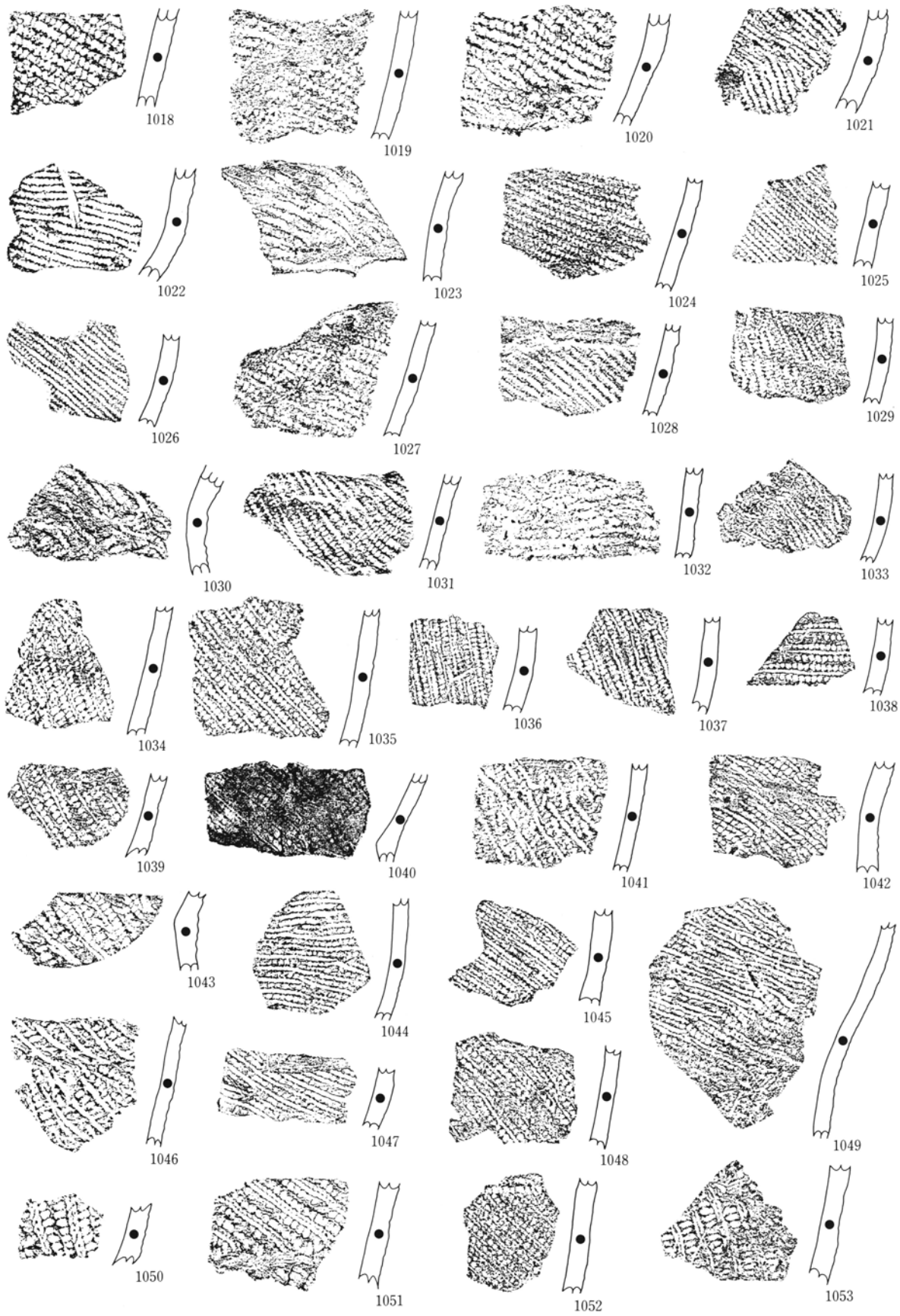


第154図　遺構外Ｃ区出土土器（25）　　Ｓ＝1/3



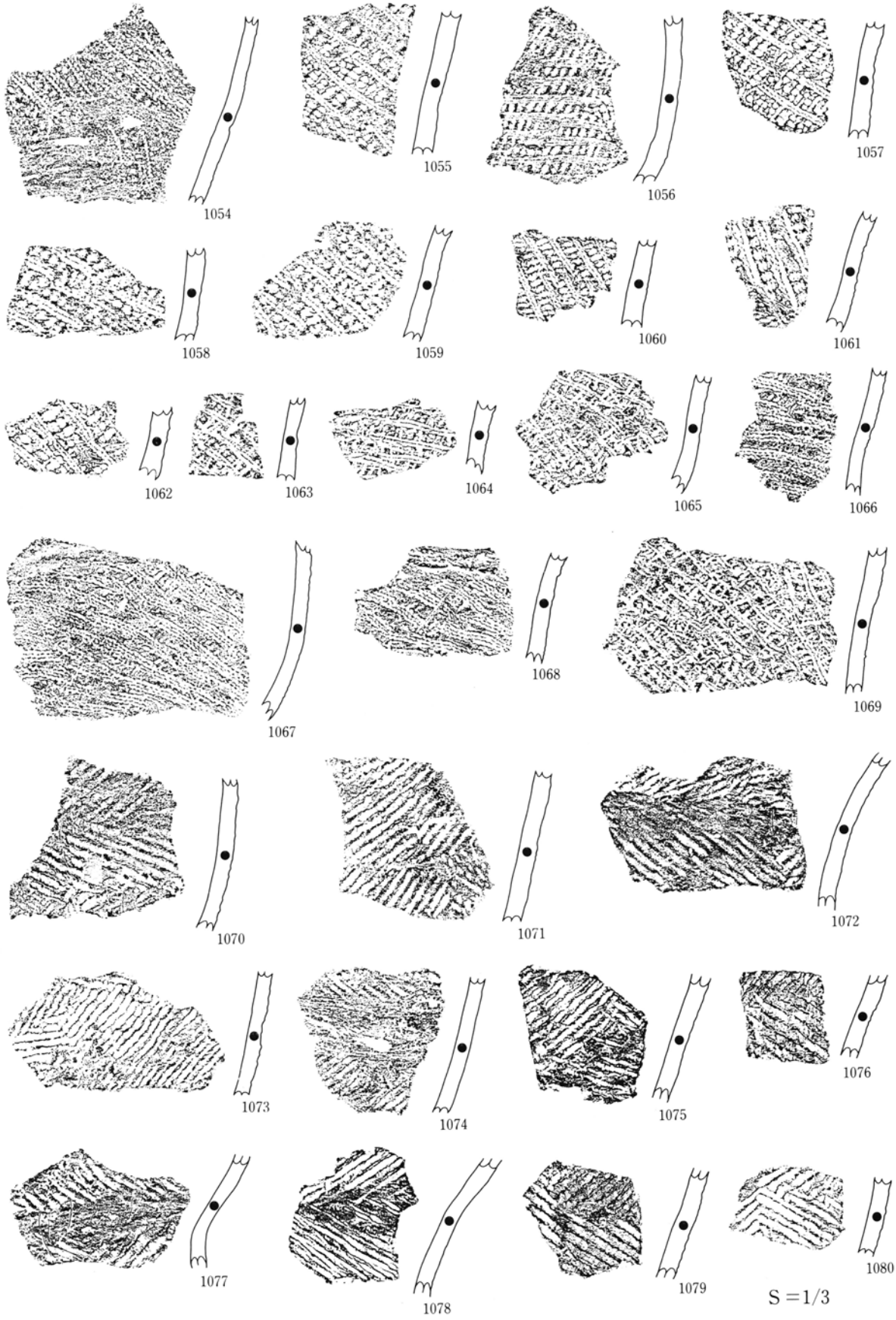
S＝1/3

第155図　遺構外Ｃ区出土土器（26）

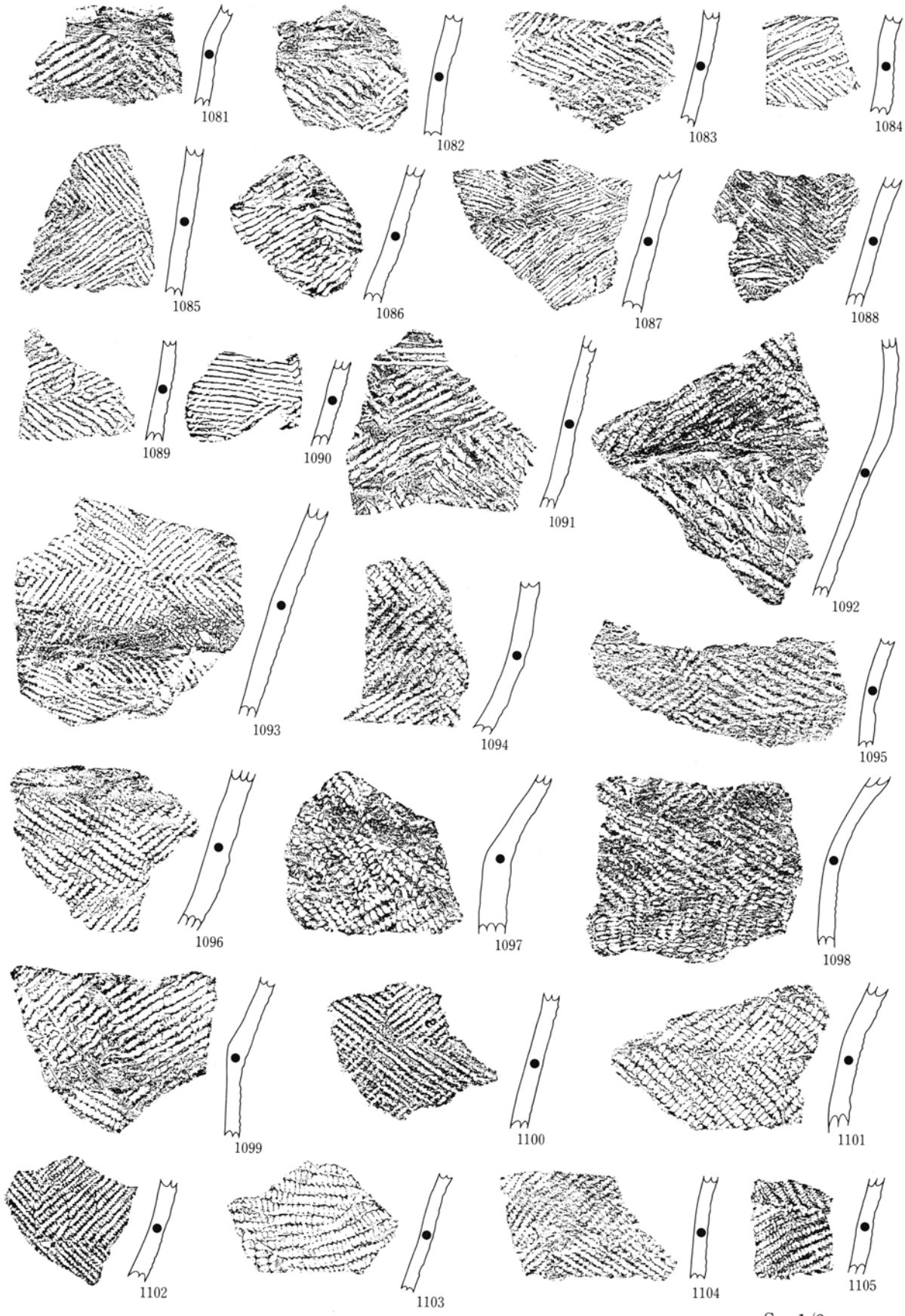


S＝1/3

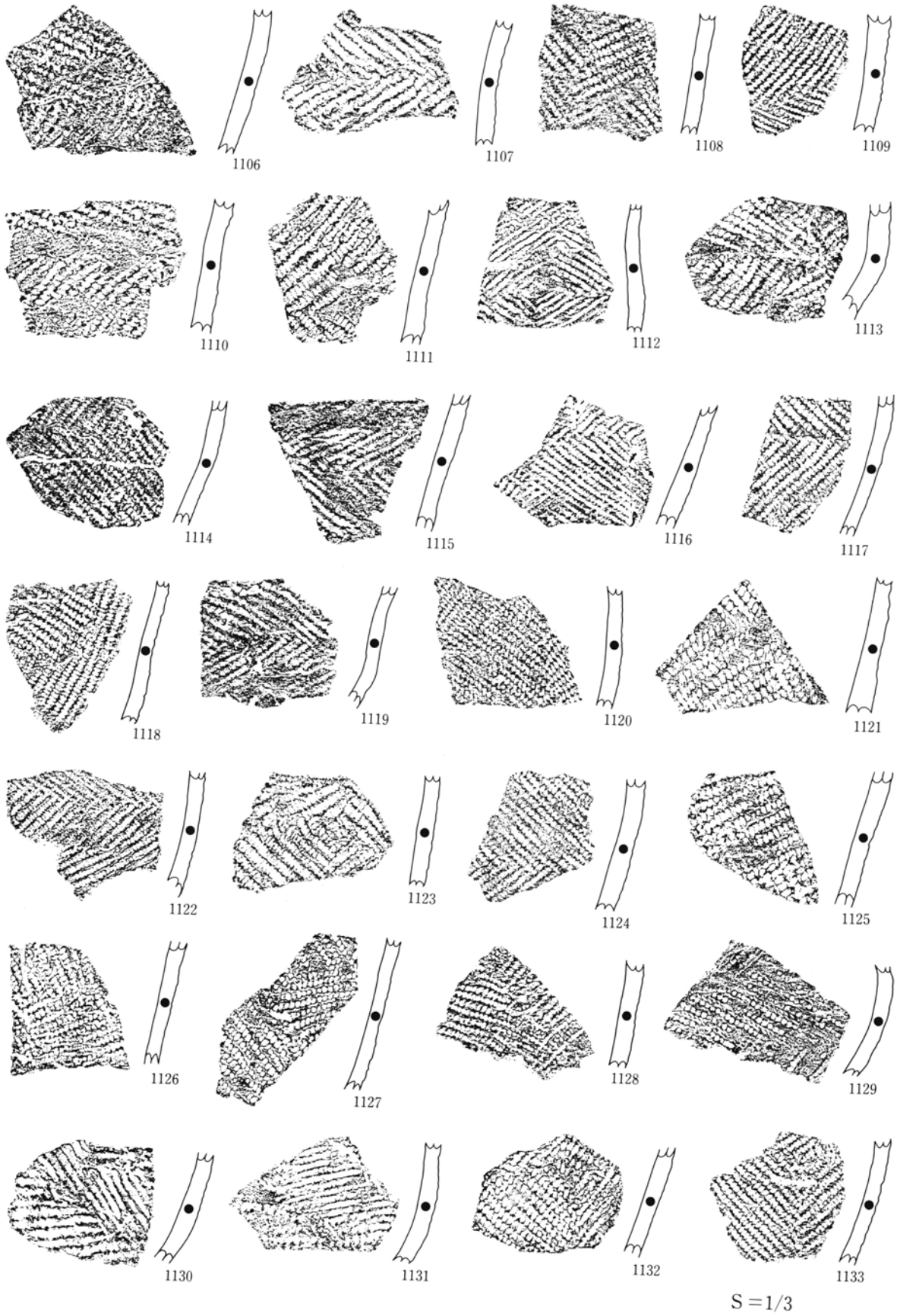
第156図　遺構外Ｃ区出土土器（27）



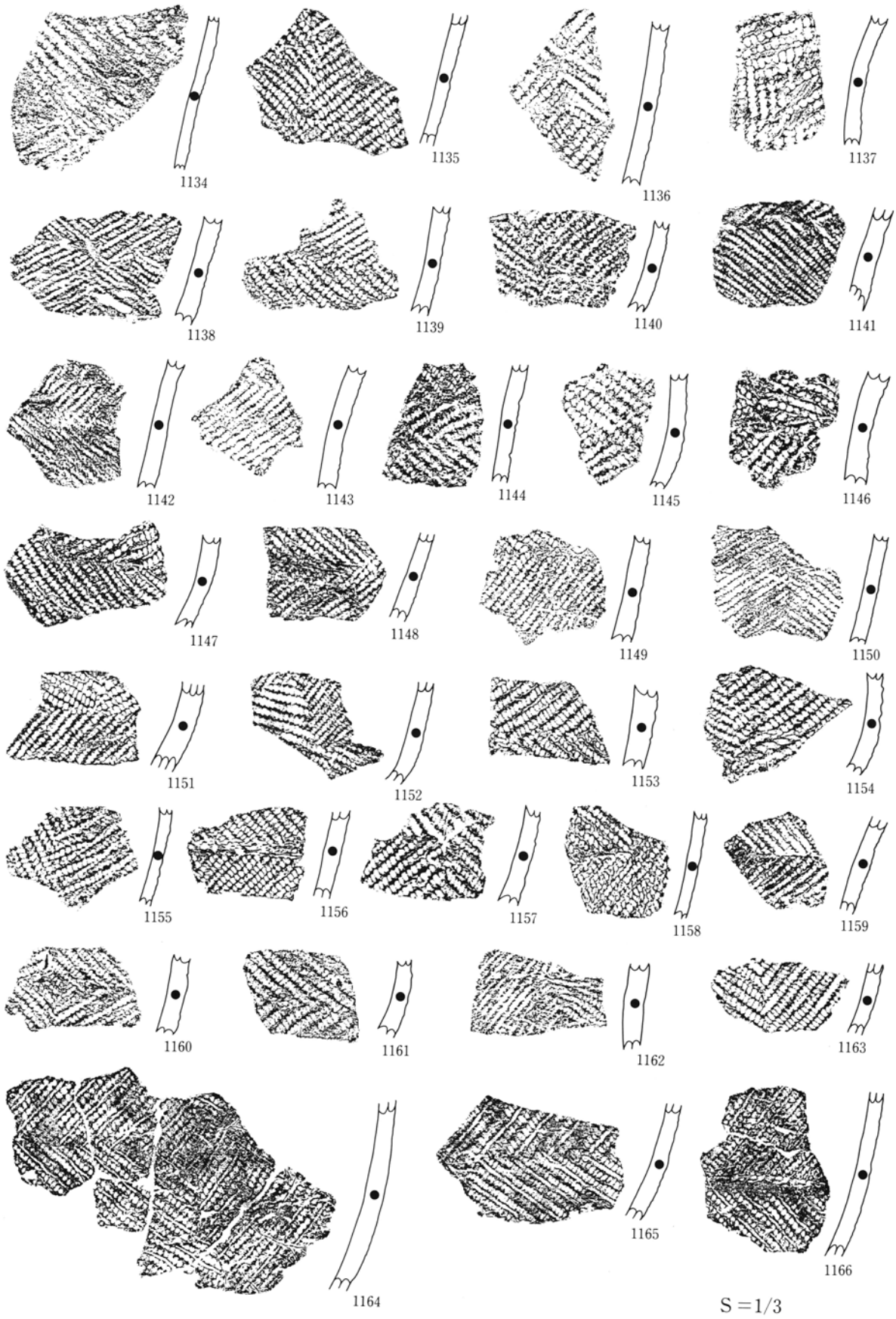
第157図　遺構外Ｃ区出土土器（28）



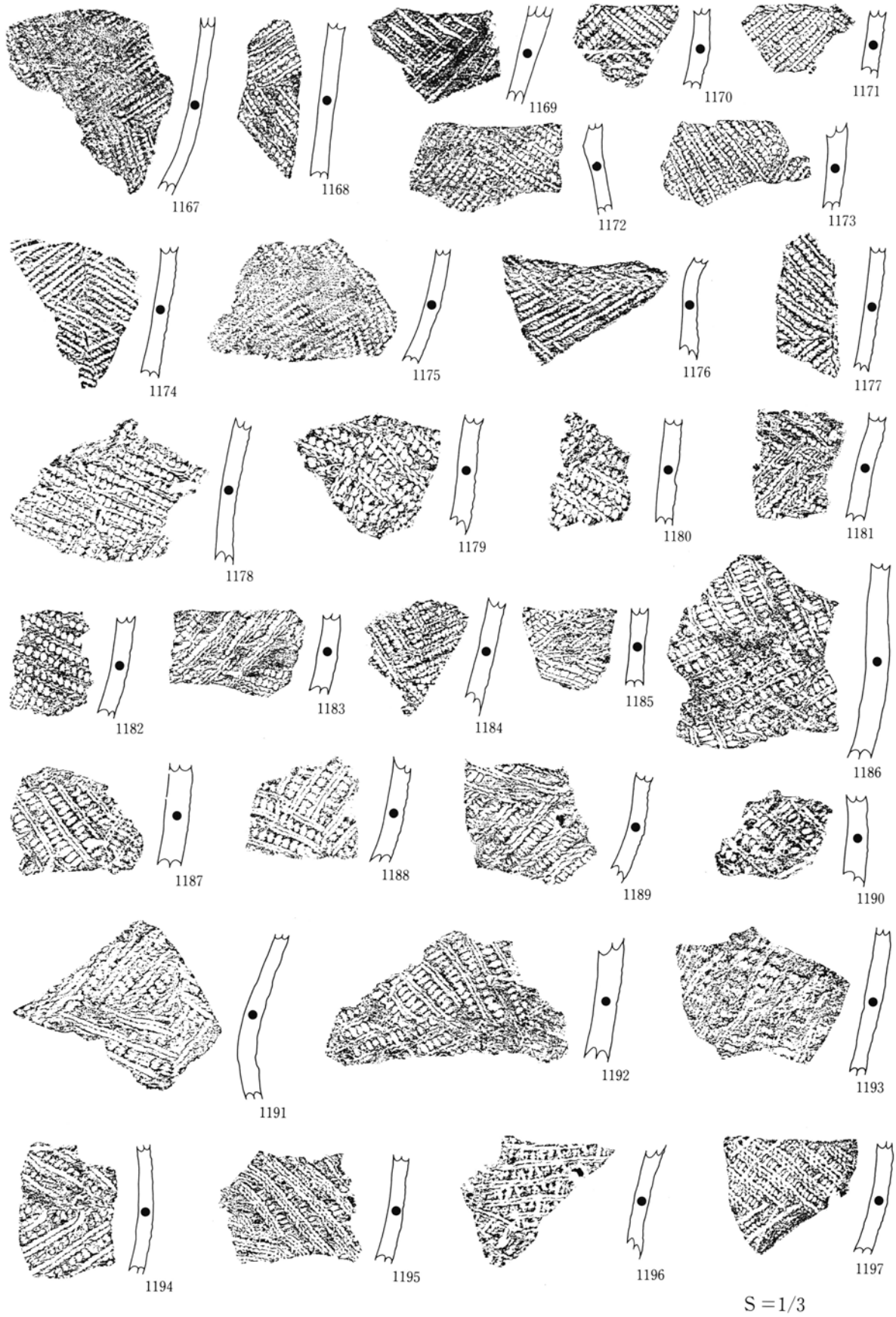
第158図　遺構外Ｃ区出土土器（29）　　S＝1/3



第159図　遺構外Ｃ区出土土器（30）



第160図　遺構外Ｃ区出土土器（31）



第161図　遺構外Ｃ区出土土器（32）

縄文を施すものである。350は口縁部に櫛歯状工具による条線で菱形を描き、菱形の交点に円を加え、条線の上下に連点状刺突をもつものである。351・357・360・364は口縁部に波長下からの垂下する細い隆帯をもち、櫛歯状工具による条線と連点状刺突により菱形を描く。351の垂下する隆帯の両脇には、連点状刺突が加えられている。360の垂下する隆帯上には、横位に連点状刺突が加えられている。358・369は口縁部に波長下からの垂下する細い隆帯をもち、櫛歯状工具による連点状刺突により菱形を描くもの。359・361・362は口縁部に波長下からの垂下する細い隆帯をもつもので、菱形文の無文部にあたるものと思われる。361の隆帯の両脇および362の隆帯上には、連点状刺突が加えられている。352は口縁部に櫛歯状工具による条線と、条線間に連点状刺突をもち菱形を描くもので、菱形の交点部に十字状の連点状刺突を加えている。353は口縁部に櫛歯状工具による条線と、条線間に連点状刺突をもち、二重の菱形を描くようであり、菱形の交点下には山形状の連点状刺突が加えられ、口縁部文様帯の下部に１条の連点状刺突が巡らされている。354・356は口縁部に櫛歯状工具による連点状刺突で二重の菱形を描き、菱形の中心には縦位の連点状刺突が加えられている。366は口縁部に櫛歯状工具による条線と連点状刺突で菱形を描き、以下の胴部にRLの縄文を施すものである。365・367・368・370・379は口縁部に櫛歯状工具による連点状刺突で、菱形等の文様を描くもの。371～374・378・390は口縁部に櫛歯状工具による条線で菱形を描き、条線の上下に連点状刺突を添わせるもの。375～377・380～389・91は口縁部に櫛歯状工具による条線と連点状刺突等で、菱形等の文様を描くものである。392・393は口縁部に櫛歯状工具による条線と連点状刺突で菱形等の文様を描き、頸部の括れ部に細い隆帯と連点状刺突を横位に巡らせて文様帯区画を行うもの。394～397は頸部の括れ部に細い隆帯と連点状刺突を横位に巡らせて文様帯区画を行い、以下の胴部に縄文を施すものであり、施文される縄文にはLRとRLによる羽状縄文であると思われ、０段多条の縄が用いられるものもある。398・399は櫛歯状工具による横位の連点状刺突と、以下に縄文が施されるものである。

Ｂ類　半裁竹管により、爪形刺突ないし連続爪形等で主文様を描くものを本類としたが、さらに次のような種別に分類できる。

１種　爪形刺突により、文様を描く類。

404・05は口縁下に半裁竹管による縦位の爪形刺突をもつ平行沈線帯をもち、その直下に同様の平行沈線を横位に１条巡らせて区画し、以下に同様な平行沈線で文様を描く。406～411は波状口縁となる口縁下に縦位の沈線帯をもち、その直下に爪形刺突をもつ平行沈線を横位に数条巡らせて区画し、その下に同様の平行沈線で文様を描くものであり、411は羽状縄文が施されている。400～403は波状口縁となる口縁下に相互刺突文状に間隔のあく爪形刺突をもつ平行沈線を数条巡らせるもので、400では以下に縄文が施され、401は波状口縁の波底部に小突起をもつものである。413・414は同一個体となるもので、波状口縁となる口縁直下に１条の隆帯を巡らせ、隆帯下に１条の半裁竹管による爪形刺突を巡らせており、以下にはLRの付加条縄（１本付加）の縄文を施している。415・416は口縁下に半裁竹管による２条の爪形刺突と平行沈線を巡らせ、以下に縄文を施している。417は波状口縁となる口縁下に半裁竹管による爪形刺突を（）状にもつ平行沈線を２条巡らせ、その下に同様の沈線で菱形等の文様を描くものである。418・420・422・425・429・431～433・437～439・441・442・444は波状口縁となる口縁下に半裁竹管による爪形刺突をもつ平行沈線を数条巡らせ、その下に菱形等の文様を描くものである。421・426・427は平口縁となる口縁下に半裁竹管による爪形刺突をもつ平行沈線を数条巡らせ、その下に菱形等の文様を描くものである。467～471は頸部の括れ部に相互刺突文状に間隔のあく爪形刺突をもつ平行沈線を数条巡らせるもので、467には口縁部文様に爪形刺突をもつ平行沈線で菱形が描かれ、胴部にはRLの縄文が施されている。472～474は口縁部文様に爪形刺突をもつ平行沈線ないし沈線

で、の字状の文様を描くもの。476は口縁部に爪形刺突をもつ平行沈線で、横位ないし縦位に文様を描くもの。477・478・480・486・～488・498・503・507・514・515は口縁部に爪形刺突をもつ平行沈線で、菱形等の文様を描くものである。525～529・531～534・540は頸部の括れ部に爪形刺突をもつ平行沈線を数条巡らせて文様区画し、以下の胴部に縄文を施すものである。施文される縄文は、羽状縄文となるものが主と思われるが、525には直前段多条の縄が、527には付加条縄が施されている。

さらに、爪形刺突ではあるが、連続的な施文方法を採るものがある。440・445・449・502・509・522・532が、それである。一見すると連続的に見えるが、平行沈線と爪形の向きが異なることや、平行沈線からはみ出る部分もある等、連続爪形文とは異なるものである。

２種　連続爪形により、文様を描く類。

５は４単位の波長部が緩やかな大波状口縁で、頸部が括れ、口縁は外反するが波長部が内反ぎみとなり、口縁部全体が丸みをおびる深鉢形の器形を呈し、口縁下に半裁竹管による２条の連続爪形が巡り、その下の口縁部には大形の菱形が連続爪形で描かれ、頸部の括れ部には連続爪形が数条巡らされて文様区画がなされている。450～452は波状口縁の口縁下に連続爪形が数条巡らされ、以下に連続爪形による菱形等の文様が描かれるものである。483～485・491～495は口縁部に連続爪形による菱形等の文様が描かれるものである。530・538・539は頸部の括れ部に連続爪形を数条巡らせて文様区画し、以下の胴部に縄文を施すものである。施文される縄文は、羽状縄文となるものが主と思われるが、530には０段多条の縄が用いられている。

なお、454～466は波状ないし平口縁となる口縁下に、細い半裁竹管による爪形刺突をもつ平行沈線および平行沈線を数条巡らせるもので、これらの土器はその施文文様の特徴から、本群よりもII期III群C類に含められるものと思われる。

C類　半裁竹管等により、平行沈線等で主文様を描くものを本類とした。

544・546・547・549～582は波状口縁となる口縁下にやや太めの半裁ないし多裁竹管により平行沈線を数条巡らせ、その下に大形の菱形等の文様を描くものである。このうち、554・565は地文に縄文を施しているものである。545は小波状口縁となる波頂下に垂下する隆帯をもち、口縁下に平行沈線を数条巡らせ、その下に大形の菱形等の文様を描くものである。548は波状口縁となる口縁部に、半裁竹管による平行沈線を数段巡らせ、さらに単沈線で鋸歯状の文様を描く。また、地文に縄文が施されている。583・584は同一個体となるもので、波状口縁となる口縁直下に半裁竹管による爪形刺突を１条巡らせ、その下に平行沈線を数条巡らせており、口縁部には菱形等の文様を描くようである。585～598は平口縁となる口縁下に平行沈線を数条巡らせ、その下に鋸歯状ないし菱形等の文様を描くものである。599～602は平口縁となる口縁下に平行沈線が数条巡るものであり、地文に縄文が施されている。施文される縄文には、付加条縄を用いるものもみられる。604～683は口縁部にやや太めの半裁ないし多裁竹管等により、菱形や鋸歯状等の文様を描くものであり、605・606・608・611・613・615・671～683等のように頸部の括れ部に平行沈線を数条巡らされている。684～693も同様に、口縁部へ平行沈線が描かれるものであるが、地文に縄文を施しているものである。694～715は頸部の括れ部に平行沈線を数条巡らせるもので、以下の胴部には羽状縄文等の縄文が施されている。9696・700・707には０段多条のLRないしRLの縄文が、697・705にはLの縄文が709・714にはLR（０段多条）とRL（０段多条）による羽状縄文、713にはLRとRL（０段多条）による羽状縄文がそれぞれ施されている。

II期Ｖ群

６・７・716～1197が本群の土器であり、胎土に繊維を含む。これらの土器は、施文される縄文原体から次のように分類される。

Ａ類　閉端環付縄による、ループ縄文を施すものを本類とした。

716～721は平口縁となる口縁以下に、閉端環付縄によるループ縄文を施すものである。716にはループ部分だけが、短く多段に施文されている。

Ｂ類　Ｌ撚りの縄文を施すものを本類とした。

722～790は口縁部片であり、908～982は胴部片である。

725は波状口縁となる波頂部に突起をもち、口縁以下にＬの縄文を施すものである。775・778は波状口縁となる口縁以下に、Ｌの縄文を施すものである。726は平口縁となる口縁に角状の突起をもち、口縁以下にＬの縄文を施すものである。727～739・765・776・777は平口縁となる口縁以下にＬの縄文を施すものであり、中には繊維束の粗いものもある。722は波状口縁となる波頂下に筒状の把手をもち、口縁以下に０段多条のLRの縄文を施すものである。732は小波状口縁となる波頂部に突起をもち、口縁以下にLRの縄文を施すもの。724は平口縁となる口縁直下に１条の隆帯を巡らせ、以下に０段多条のLRの縄文を施している。740～748・750・751・753～764・766～774・785～787は平口縁となる口縁下にLRの縄文が施されるものであり、746・755の口縁下には穿孔する孔があり、758の口縁下には穿孔途中の孔がみられる。また、744・755・756・758・761・762・766・764・766・768・769・771には、０段多条の縄が用いられている。752は口縁以下に、０段多条による前々段反撚りのLRRの縄文を施すものである。782・784・788～790は平口縁となる口縁以下に附加条縄の縄文を施すものであり、RLの軸縄と反対の方向へ細い２本組の縄を絡げるものである。749も附加条縄によるもので、軸縄に右巻き・左巻きに附加させ、格子目状に現れている。780・781・783は直前段反撚りのLLRの縄文が施されるもので、783は波状口縁となる波頂下に突起をもつものである。

908～931・953・956・957は胴部にＬの縄文を施すものであり、繊維束の粗いものもある。932～952・954・955は胴部にLRの縄文を施すものであり、932・939・943・948・949・955には０段多条の縄が用いられている。958～982は附加条の縄文が施されるもので、958・961～968はLRの軸縄と同方向に１本ないし２本絡げたものであり、959・960・970～982はRLの軸縄と反対の方向へ細い２本組の縄を絡げたものである。これら附加条縄の軸縄には、０段多条の縄を用いたものもある。

Ｃ類　Ｒ撚りの縄文を施すものを本類とした。

791～866は口縁部片であり、983～1069は胴部片である。

791～811は平口縁の口縁以下にＲの縄文を施すものであり、中には繊維束の粗いものもある。805の口縁下には、穿孔する孔を有する。813・815～825・827～844・846～849は平口縁となる口縁下にRLの縄文を施すものであり、813・815・817・830・834・837・838には０段多条の縄が用いられている。849の口縁には、角状の突起を有する。845は波状口縁となる口縁以下に、RLの縄文を施すものである。814・826・850～866は平口縁となる口縁以下に附加条縄の縄文を施すものであり、826・850～856・864・865はRLの軸縄と同方向に１本ないし２本絡げたものである。860は軸縄と同方向に細い２本組の縄を絡げたもの。814・857～859・861～863・866はLRの軸縄と反対の方向へ細い２本組ないし数本の縄を絡げるものである。812は平口縁となる口縁以下に、０段多条による前々段反撚りのRLLの縄文を施すものである。

983～1000は胴部にＲの縄文を施すものであり、繊維束の粗いものもある。1001～1007・1009～1033は胴部にRLの縄文を施すものであり、1001・1003・1005・1009・1010・1013・1014・1016・1017・1022・1028・1029・

1031には０段多条の縄が用いられている。1034～1069は附加条の縄文が施されるもので、1034～1049はRLの軸縄と同方向に１本ないし２本絡げたものであり、1050～1052は軸縄と同方向に細い２本組の縄を絡げるものである。1053～1069はLRの軸縄と反対の方向へ細い２本組ないし３・４本組の縄を絡げたものである。これら附加条縄の軸縄には、０段多条の縄を用いたものもある。なお、1067・1068は同一個体となるものである。

Ｄ類　羽状縄文を施すものを本類とした。

６・７・867～906は口縁部片であり、1070～1197は胴部片である。

870は波状口縁となる口縁以下に、ＬとＲによる羽状縄文を施すものである。７・867～869・871～877は平口縁となる口縁以下にＬとＲによる羽状縄文を施すものであり、繊維束の粗いものもある。７に施される羽状縄文は、かなり乱れている。878・879は平口縁の口縁に突起をもつものであり、口縁以下にはＬとＲによる羽状縄文を施すもので、879の突起下には縦位の沈線を有する。６・880～895は平口縁となる口縁下にLRとRLによる羽状縄文を施すものであり、６・882・884～886・888・890・891はLR・RL共に０段多条の縄を用いるもので、893はLRとRL（０段多条）によるものである。905は平口縁となる口縁部に角状突起をもち、口縁以下にLRとＲによる羽状縄文を施すものである。897～904・907は平口縁となる口縁以下に附加条縄による羽状縄文を施すものであり、897～900・903・907はLR・RLの軸縄と同方向に１本ないし２本絡げたものである。901・902・904はLR・RLの軸縄と反対の方向へ細い２本組ないし３本の縄を絡げるものである。896はやや内反する平口縁の口縁以下に、０段多条による直前段反撚りのLLとRRで羽状縄文を施すものである。

1070～1082・1085・1086・1088・1089～1091・1112は胴部にＬとＲによる羽状縄文を施すものであり、繊維束の粗いものもある。1083・1084はＬと０段多条のＲにより羽状縄文を施し、108はＬ・Ｒ共に０段多条によるものである。1092は胴部の上半にLR（０段多条）とRL（０段多条）による羽状縄文を施し、下半に撚りの弱いRLの縄文を施すものである。1141はLR（０段多条）とＲによる羽状縄文が施されている。1093～1108・1110・1111・1113～1128・1130～1137・1140・1141・1143～1145・1147～1163は胴部にLRとRLによる羽状縄文を施すものであり、1093・1094・1098～1105・1107・1111・1116・1122・1123・1141・1143～1145・1150・1152～1154・1157・1161・1163にはLR・RL共に０段多条の縄が用いられ、1117・1118・1124・1125・1133・1135・1136・1151にはLRないしRLのどちらか一方に０段多条の縄を用いて羽状縄文を施すものである。また、1109はLR（０段多条）とRL（附加条）により羽状縄文を施すものである。1129・1138・1146・1164～1197は附加条の縄により羽状縄文が施されるもので、1138・1146・1164～1176はLR・RL共に軸縄と同方向に１本ないし２本絡げたものであり、1129・1177～1185はLR・RL共に軸縄と同方向に細い２ないし３本組の縄を絡げるものである。1186～1197はLR・RL共に軸縄と反対の方向へ細い２本組ないし３・４本組の縄を絡げたものである。さらに、1186のように、附加させる縄の数を違えるものも存在する。これら附加条縄の軸縄には、０段多条の縄を用いたものもある。

Ⅱ期Ⅵ群

1213～1419が本群の土器であり、胎土には繊維を含まない。これらの土器は、施文される文様から次のように分類される。

Ａ類　地文に縄文をもち、沈線で文様を描くものを本類とした。

1213は口縁以下にRLの縄文を施した後、口縁直下に細い半裁竹管による爪形刺突をもつ平行沈線を１状

巡らせ、以下に平行沈線で弧状線等により文様を描くものである。1214は波状口縁となる口舌部に刻みをもち、口縁直下に細い半裁竹管による爪形刺突をもつ平行沈線を１状巡らせ、波頂下に縦位の平行沈線と円形刺突を配し、その両側に平行沈線で弧状線等により文様を描くものである。1215～1225は地文にLRないしRLの縄文を施し、口縁部から胴部にかけて細い半裁竹管による横位・斜位・弧状等の平行沈線で文様を描くものであり、1219～1225には円形刺突が縦位に配されている。

Ｂ類　爪形刺突をもつ平行沈線で文様を描くものを本類とした。

1226は平口縁となる口縁下に爪形刺突をもつ平行沈線を２条巡らせ、その下に平行沈線で鋸歯状の文様を描くものである。1227～1229は同一個体となるもので、平口縁となる口縁部の上下に爪形刺突をもつ平行沈線を巡らせて区画し、同様の沈線で鋸歯状に文様を描くと共に、鋸歯内部に２個単位の円形刺突を配する。胴部以下にはRLの縄文が施されている。1230～1233は口縁部に爪形刺突をもつ平行沈線を巡らせて区画し、同様の沈線ないし平行沈線で鋸歯状に文様を描くものであり、胴部にはLRないしRLの縄文が施される。1234～1238は平口縁となる口縁下に爪形刺突をもつ平行沈線を巡らせ、その下に同等の沈線で曲線等により木の葉文等の文様を描くもので、文様内に縄文をもつものもある。1239・1240は平口縁となる口縁下に爪形刺突をもつ平行沈線で木の葉文等の文様を描くもので、1240は文様内に縄文が充填されている。1241～1245は胴部に爪形刺突をもつ平行沈線ないし平行沈線で木の葉文等の文様を描くものであり、文様内に縄文をもつものや、円形刺突を配するものもある。1266～1285は平口縁となる口縁下に、1287～1289は波状口縁となる口縁下に爪形刺突をもつ平行沈線を数条巡らせるもので、1267・1282のように地文に縄文をもつものや、1271・1278・1289に代表されるように無文となるものもある。胴部以下にはLRないしRLの縄文を施すものであり、1288・1289は同一個体となるものである。

Ｃ類　平行沈線で文様を描くものを本類としたが、さらに次のような種別に分類できる。

１種　弧状線等により、文様を描く類。

1290～1298は口縁部に半裁竹管による平行沈線で縦位および横位に区画し、区画内に斜位的な弧状の平行沈線で文様を描くものであり、縦位の円形刺突をもつ。1312は平口縁となる口縁に突起をもち、口縁下に櫛歯状工具による条線を巡らせ、条線上に刺突を施し、縦位に円形刺突で区画し、区画内に横位の弧状の条線を描く。1313は波状口縁となる口舌部に刻みをもち、口縁下に爪形刺突をもつ平行沈線を３条巡らせ、波頂下に円形刺突で区画し、区画内に横位の弧状条線を描いている。1314は平口縁となる口縁下に櫛歯状工具による条線を巡らせ、条線上に刺突を施し、口縁部に横位の弧状の条線を描くものである。1300～1303は口縁部に櫛歯状工具による状線で縦位および斜位に文様を描くもので、1301～1303の縦位沈線上には円形刺突が配されている。1304～1311は口縁部に櫛歯状工具による横位の弧状の条線を描くもので、1304・1305・1307・1310には縦位の円形刺突をもつ。1315～1334は口縁部に条線ないしは平行沈線で横位のレンズ状となる弧状の文様を描くもので、縦位に区画する沈線や、縦位の円形刺突をもつものもある。1332・1333は条線でレンズ状に描かれた文様内に、横位の波状文が条線で施されているものである。1334は条線による弧状線を描いた下に、横位の条線を巡らせて区画し、その下部に条線による波状文を描くものである。

２種　平行ないし波状文により、文様を描く類。

1337・1338は平口縁となる口縁下に横位の条線を数条巡らせ、縦位の円形刺突をもつものである。1339～1341は口縁部に横位の条線を数条巡らせ、縦位の円形刺突をもつものであり、1341の胴部にはRLの縄文が施されている。1342～1359は平口縁となる口縁下に数段の条線ないし沈線を巡らせると共に、波状文を施すものであり、1354には縦位の円形刺突が施されている。1360は平口縁となる口縁下に条線による波状文

が施され、縦位の円形刺突をもつもの。1361～1381は口縁部に条線ないし沈線で横位および波状文を描くものであり、1363には縦位の短沈線が、1373・1374・1380には縦位の円形刺突が施されている。また、1363・1367・1370・1377・1378の胴部には、LR ないし RL の縄文が施されている。

D類　口縁以下に縄文を施し、円形刺突のみを施文するものを本類とした。

1382～1390・1392は平口縁となる口縁以下に LR ないし RL の縄文を施し、口縁下に円形刺突を施すものであり、1384は横位に、それ以外は縦位に施文している。1391は波状口縁となる口縁以下に RL の縄文を施し、波頂下に縦位の円形刺突を施すものである。1393～1421は口縁以下に LR ないし RL の縄文を施し、頸部から胴部にかけて縦位の円形刺突を施すものであり、1407のように2個単位とするものもみられる。また、1417・1418・1420のように2列に施すものや、1419のように横位・縦位に施すものもある。

II期Ⅶ群

8～26・1422～2661・2802～2912が本群の土器であり、胎土には繊維を含まない。これらの土器は、施文される文様から次のように分類される。

A類　幅広な半裁竹管により、連続する爪形文で文様を描くものを本類としたが、さらに次のような種別に分類できる。

1種　幅広な連続爪形文のみで、文様が描かれる類。

1422～1451は平口縁となる口縁下に幅広な半裁竹管による連続爪形文を数条巡らせるもので、1422～1425等にみられるように口縁下に幅狭な無文部をもつものもある。1439には口縁部に、僅かに縄文がみられる。1452～1460は平口縁となる口縁下に幅広な連続爪形文による平行ないし曲線的な文様を描くものであり、1455の口縁下には穿孔する孔を有する。また、1454の口舌部には刻みをもち、口縁以下には地文として RL の縄文が施されている。1461～1464・1466～1480は波状口縁となる口縁下に幅広な連続爪形文による平行ないし曲線的な文様を描くものであり、1461・1468・1476等のように口縁下に幅狭な無文部をもつものもある。1464・1474・1479には、口縁以下に地文として縄文が施されている。また、1461・1464の口縁には小突起をもち、1474～1477も小突起をもつものである可能性が高い。1478・1480の口舌部には、刻みを有する。1465は波状口縁となる口舌部にハ字状の刻みをもち、口縁下には爪形刺突をもつ平行沈線が3条巡らされ、口縁部の地文に縄文を施すと共に、弧状の平行沈線を描いている。

1583～1585・1587～1589・1591は口縁部に幅広な半裁竹管による連続爪形文を、横位のみに数条巡らせるものである。1634～1696は口縁部から胴部にかけて文様が施されるものであり、施文される文様は幅広な連続爪形文で横位・縦位・曲線に、蕨手や崩れた木の葉文等の文様を描く。1647・1650・1658・1670の地文には縄文が施され、1643・1686～1696には円形刺突が配されている。なお、1637～1639・1643に施されている連続爪形文は、他の爪形文に比べ、かなり密に施されている。

2種　幅広な連続爪形文に挟まれた帯状部分に、斜位の刻みを有する類。

1483～1547は平口縁となる口縁直下に幅狭な無文部をもち、口縁部に幅広な半裁竹管による連続爪形文と連続爪形文に挟まれた帯状の部分に刻みを有する施文法で、横位に複数列巡らせるものである。これらの内、1506～1508・1546の口縁には小突起をもつが、1506の小突起は2個が一単位となるものである。また、1498の口舌部にはハ字状の刻みが施され、1504には幅広な連続爪形が、1505には半裁竹管による刺突が施されているものである。なお、1543・1544の連続爪形文間には、半裁竹管による刺突が施されている。1548は平口縁となる口縁部に爪形刺突をもつ平行沈線と刻みをもつ隆帯を巡らせるものであり、1549は口縁下に平行沈

線を数条巡らせ、その下に刻みをもつ隆帯を巡らせて区画し、爪形刺突をもつ平行沈線で曲線的な文様を描くものである。地文に縄文を施している。1550～1552は平口縁となる口縁下に、帯状の刻みを有する連続爪形文の複数列を単位とし、横位・縦位・曲線等により文様を描くものであり、1552には円形刺突が配されている。1553～1582は波状口縁となる口縁直下に幅狭な無文部をもち、口縁部に帯状の刻みを有する連続爪形文の複数列を単位とし、横位に巡らせるものであり、1556・1560・1562・1568・1572・1577には縦位・曲線等の文様を描くようである。また、1557・1559・1561・1562・1572の口縁には小突起をもち、1568・1571・1572の口舌部には刻みを有している。

1592～1633は口縁部ないし胴部に、連続爪形文間に帯状の刻みを有する幅広な連続爪形文のみを、横位に複数列施すものである。1697～1806は口縁部から胴部にかけて文様が施されるものであり、施文される文様は帯状の刻みを有する連続爪形文の複数列を単位とし、横位・縦位・曲線に蕨手や崩れた木の葉文等の文様を描く。1726の地文には縄文が施され、1776～1806には円形刺突が配されている。さらに、1697・1742・1870～1825は胴部にLRないしRLの縄文が施されるものである。

Ｂ類　半裁竹管により、平行沈線で文様を描くものを本類とした。

23は口縁が外反し小突起をもつ平口縁の深鉢であり、口縁下および頸部に横位の平行沈線で文様区画し、区画内に斜位の平行沈線で格子目状の文様を描く。地文には結節をもつRLの縄文を施している。25は口縁が短く外反する小波状口縁となる小型土器で、口縁部には横位の平行沈線で文様区画し、区画内に斜位の平行沈線を施す。胴部には横位の平行沈線を数条巡らせるだけで、地文はもたない。26は平口縁となる深鉢で、口縁下に幅広く平行沈線を横位に施すものである。

1826は平口縁となる口舌部に刻みをもち、口縁下に横位の平行沈線を数条巡らせるもの。1828～1832は平口縁となる口縁下に、数条の平行沈線を巡らせるものである。1835～1837は平口縁となる口縁に小突起をもち、口縁下に数条の平行沈線を巡らせるものである。1833・1834は波状口縁となる口縁部に、横位の平行沈線を数条巡らせるもの。1838は波状口縁となる波頂部に双頂上の小突起をもち、口縁下に刻みをもつ４条の隆帯を巡らせ、口縁部にＹ字状および横位の平行沈線で文様を描いている。1827・1839～1861は平口縁となる口縁下に、数条を単位とする平行沈線で横位・弧状に文様を描くものであり、1847～1861には地文にLRないしRLの縄文が施されている。また、1855は口舌部に刻みをもち、1859～1861の口縁には小突起をもつ。1862・1863は平口縁となる口縁下に数条の刻みをもつ浮線文を巡らせ、口縁部に半裁竹管の平行沈線による格子目状の文様を描くもので、1862の格子目内には円形刺突が施されている。この２片は、浮線文をもつということから、本類よりも次のＣ類に含められるものである。1864・1868・1869は平口縁となる口舌部に刻みをもち、口縁以下に地文となる縄文を施し、口縁部には横位の平行沈線で口縁部文様の区画をし、区画内に平行沈線で格子目状の文様を描いている。1865・1867は平口縁となる口縁下に横位の平行沈線を巡らせ、口縁部に平行沈線で格子目状の文様を描くものである。1866は平口縁となる口縁に小突起をもち、口縁下に平行沈線による格子目状の文様を描くもの。1870～1873は平口縁となる口縁下に斜位の平行沈線を施すものであり、1871の口縁直下には刻み状の刺突をもつ。1874～1881は口縁部が屈曲するように内反する平口縁で、口縁下に数条の平行沈線を巡らせ、口縁部に曲線等による蕨手状の文様を描くものである。1875～1880は口縁以下に縄文を地文とするものである。

1882～1884・1901は口縁部に平行沈線で崩れた木の葉文状の文様を描くものであり、1883の下部には刻みをもつ隆帯が巡っている。1885・1886は同一個体となるもので、口縁部に連続爪形文と共に、平行沈線で文様を描くもの。1895～1900・1902～1917は口縁部に平行沈線で文様を描くものであり、施文される文様には

横位・縦位・斜位・弧状等により蕨手状等の文様が描かれる。また、これらの土器には、地文にLRないしRLの縄文が施されている。1918～1923は口縁部ないし胴部に横位・斜位の平行沈線が描かれるものであり、1924～1926は数条を単位とした平行沈線で鋸歯状に文様を描くものである。1927～1930は同一個体となるもので、頸部の屈曲部に数条の平行沈線を巡らせ、胴部に数条を単位とした平行沈線で弧状の文様を描くものである。1931～1949は胴部に格子目状の平行沈線を施すものであり、1950～1964は胴部に斜位ないし縦位の平行沈線を施すものである。1887～1894は口縁部から胴部にかけて平行沈線を巡らせるものであり、1887～1889・1894の地文には縄文が施されている。1965～1990は胴部に数条の平行沈線を巡らせるもので、1983～1990では数段の平行沈線が施されている。なお、1965は地文に縄文をもつものであり、大方の胴部にはLRないしRLによる縄文が施されている。

C類　細い粘土紐を貼り付けた、刻みをもつ浮線文で文様を描くものを本類としたが、さらに次のような種別に分類できる。

1種　平行沈線・連続爪形文等による文様を、合わせ持つ類。

8は頸部が大きく括れて口縁が外反し、2個一対の小突起をもつ平口縁の深鉢形を呈する。口端部に縦位・弧状の浮線文をもち、口縁および頸部に刻みをもつ浮線文を横位に数条巡らせて文様区画し、区画内に同様の浮線文で曲線的な弧状・蕨手状の文様を描く。胴部には数条の浮線文を数段巡らせ、口縁部から胴部には円形刺突が配される。地文に、結節をもつRLの縄文が施されている。19は底部に高台の付く土器の胴部下反で、胴部文様を刻みをもつ浮線文で区画し、区画内に沈線で木の葉文等の文様を描き、木の葉文内に縄文をもつ。また、器面全面に朱彩が施されている。

1993～1995は同一個体となるもので、平口縁となる口縁に2個単位の小突起をもち、口舌部に斜位の刻み状の短沈線を施す。口縁下には3条の刻みをもつ浮線文が巡らされ、小突起下には縦位の文様区画がなされ、頸部下に数条の浮線文を巡らせて口縁部文様を区画している。口縁部の区画内には、半裁竹管による格子目状の文様を描き、格子目の交点部に円形刺突を施しているものである。1997・2001・2002・2020も、これらの土器と同一個体の可能性がある。1996は平口縁となる口舌部に浮線文をもち、口縁部に刻みをもつ浮線文で文様区画を行い、区画内に半裁竹管による平行沈線で格子目状の文様を描く。1998は平口縁となる口縁部に、刻みをもつ浮線文で文様区画を行い、区画内に半裁竹管による平行沈線で格子目状の文様を描く。1999・2000は平口縁となる口舌部に刻みをもち、口縁下に刻みをもつ浮線文を数条巡らせるものである。2149は口縁部に刻みをもつ浮線文で文様区画を行い、区画内に半裁竹管による平行沈線で格子目状の文様を描き、格子目の交点部および格子目内に円形刺突を施すものである。2152・2153は同一個体となるもので、口縁部に刻みをもつ浮線文で文様区画を行い、区画内に半裁竹管による平行沈線で格子目状の文様を描き、格子目内に円形刺突を施すものである。2156の胴部には、RLの縄文が施されている。2151・2155・2156は口縁部に刻みをもつ浮線文で文様区画を行い、区画内に半裁竹管による平行沈線で格子目状の文様を描き、格子目内に円形刺突を施すもの。2157は口縁部に刻みをもつ浮線文で文様区画を行い、区画内に単沈線で格子目状の文様を描くもの。2159は口縁部に刻みをもつ浮線文で文様区画を行い、区画内に半裁竹管による平行沈線で格子目状の文様を描くものである。

2150・2154・2160・2162～2156は口縁部に刻みをもつ浮線文で文様区画を行うと共に、浮線文で文様を描き、文様の隙間に円形刺突を施すものである。

2009は平口縁となる口縁下に、刻みをもつ浮線文と連続爪形文で横位に数条巡らせるもの。2021は口縁部が屈曲するように内反する緩やかな波状口縁となるもので、口縁下には穿孔する孔を有する。口縁下には刻

みをもつ浮線文が3条巡らされ、口縁部には地文に縄文が施されると共に、幅広な連続爪形文による文様が描かれている。2148は口縁部から胴部にかけて、刻みをもつ浮線文と幅広な連続爪形文により、直線・曲線等による蕨手文等の文様を描くものである。

2種　浮線文のみで文様を描く類。

9は頸部が括れて口縁部が外反し、口縁が屈曲するように内反する波状口縁となる深鉢形を呈する。波長部に獣面突起をもち、口舌部に浮線文でレンズ状の文様を有する。口縁部には刻みをもつ浮線文を横位に巡らせて文様区画を行い、区画内には曲線で蕨手状ないし渦状の文様を描く。地文には、縄文が施されている。10は外反する口縁部が屈曲して内反し、波状口縁となる大形の深鉢で、口縁以下に刻みをもつ浮線文を、数条を単位とするように横位に数段施すものであり、地文に縄文をもつ。14は口縁部が大きく外反し、さらに屈曲して内反する平口縁となる小型土器で、口舌部に浮線文で文様をもち、口縁部および胴部を横位の浮線で区画する。区画内には、曲線的な弧状や円形の文様が描かれる。この浮線文は、梯子状となる縦位の浮線をもつ。地文には、縄文が施されている。11は筒状となる体部の脇にエラ状に延びる部分をもち、エラ状を境とする半面に刻みをもつ浮線文を施し、もう一方は無文となるものである。特殊な器形となる土器と思われるが、その器形については不明である。

2005～2007・2010・2011は外反する平口縁となるもので、口縁下に刻みをもつ浮線文を数条巡らせ、口縁部に同様の浮線文で曲線等の文様を描くものである。2005の口舌部には刻みを有し、2006・2010には地文に縄文が施されている。2004・2008は外反する平口縁となるもので、口縁部に浮線文で曲線等の文様が描かれるものであるが、浮線文上に縄文をもつものである。2004の地文には、縄文が施されている。2012～2019は波状ないし平口縁となる口縁下に浮線文を数条巡らせるものであり、2013の口舌部には刺突をもち、2015の口舌部には縦位の浮線文が、2019の口舌部には刻みが施されている。これらの浮線文には、2013・2014・2018・2019では刺突が施され、2012・2015～2017では刻みが施されている。また、浮線文下には、それぞれ縄文が施されている。2063～2066は外反する小波状口縁となるもので、2066の口舌部には刻みをもち、口縁以下に刻みをもつ浮線文で横位に数段巡らせるものであり、2066には横位の浮線文間に曲線および蕨手状の文様が描かれている。これらの土器の地文には、縄文が施されている。2022～2032・2047は口縁が内反する小波状口縁となるもので、2027・2028・2031は口縁部が大きく屈曲して内反するものである。2027の波長下には、縦位の沈線がみられる。施文される文様は、刻みをもつ浮線文により文様区画を行う横位の浮線を数条巡らせ、区画内に同様の浮線文で曲線的な蕨手状ないし渦巻き上の文様を描いている。なお、地文には縄文が施されている。2060は双頂の波状口縁となるもので、双頂部に突起を有し、双頂下にボタン状貼付文をもつ。口縁部に施文される文様は、刻みをもつ浮線文を横位に巡らせるものであり、地文に縄文を施している。2033～2046・2048～2059は口縁が内反する平口縁となるもので、2033～2035・2038・2046・2051は口縁部が大きく屈曲して内反するものである。施文される文様は、刻みをもつ浮線文により文様区画を行う横位の浮線を数条巡らせ、区画内に同様の浮線文で曲線的な蕨手状ないし渦巻き上の文様を描いている。なお、地文に縄文が施されているものもある。2061は平口縁となる口縁部に刻みをもつ浮線文により梯子状となるような施文法で、曲線的な入り組み状の文様を描くものであり、地文に縄文を施している。2062は平口縁となる口縁部に、刻みと刺突をもつ浮線文および隆帯で蕨手状の文様を描くものである。

2067～2089は口縁が内反する波状ないし平口縁となるもので、口舌部に刻みや刺突をもち、口縁部に刻みをもつ浮線文により文様区画を行う横位の浮線を数条巡らせ、区画内に同様の浮線文で曲線的な蕨手状ないし渦巻き上の文様を描いている。なお、地文に縄文が施されているものもある。

2090～2124は口縁が内反する平口縁ないし小波状口縁となるもので、2090～2094のように口縁部が大きく屈曲して内反するものが多くみられる。口舌部に施文される文様に特徴があり、連続するレンズ状となるように緩い波状を細い浮線文で描き、レンズ状内に縦位の浮線を施すものである。口縁部には、数条を単位とする刻みをもつ浮線文で、横位に文様区画を行うと共に、曲線等による蕨手状ないしは渦巻き状の文様を描くものである。また、2122のように、梯子状となる浮線文で文様を描くものもある。2113には浮線文による文様の他に、円形刺突が施されている。これらの多くには、地文に縄文が施されている。2125～2139も口舌部に浮線文による文様をもつものであるが、波状口縁ないし口縁に突起をもつものであり、口縁部には先と同様の文様が浮線文で描かれている。2140は内反する平口縁に、口舌部・口縁部共に先と同様の浮線文による文様が描かれるものであるが、口縁直下に「の」字状の隆帯貼付をもつものである。

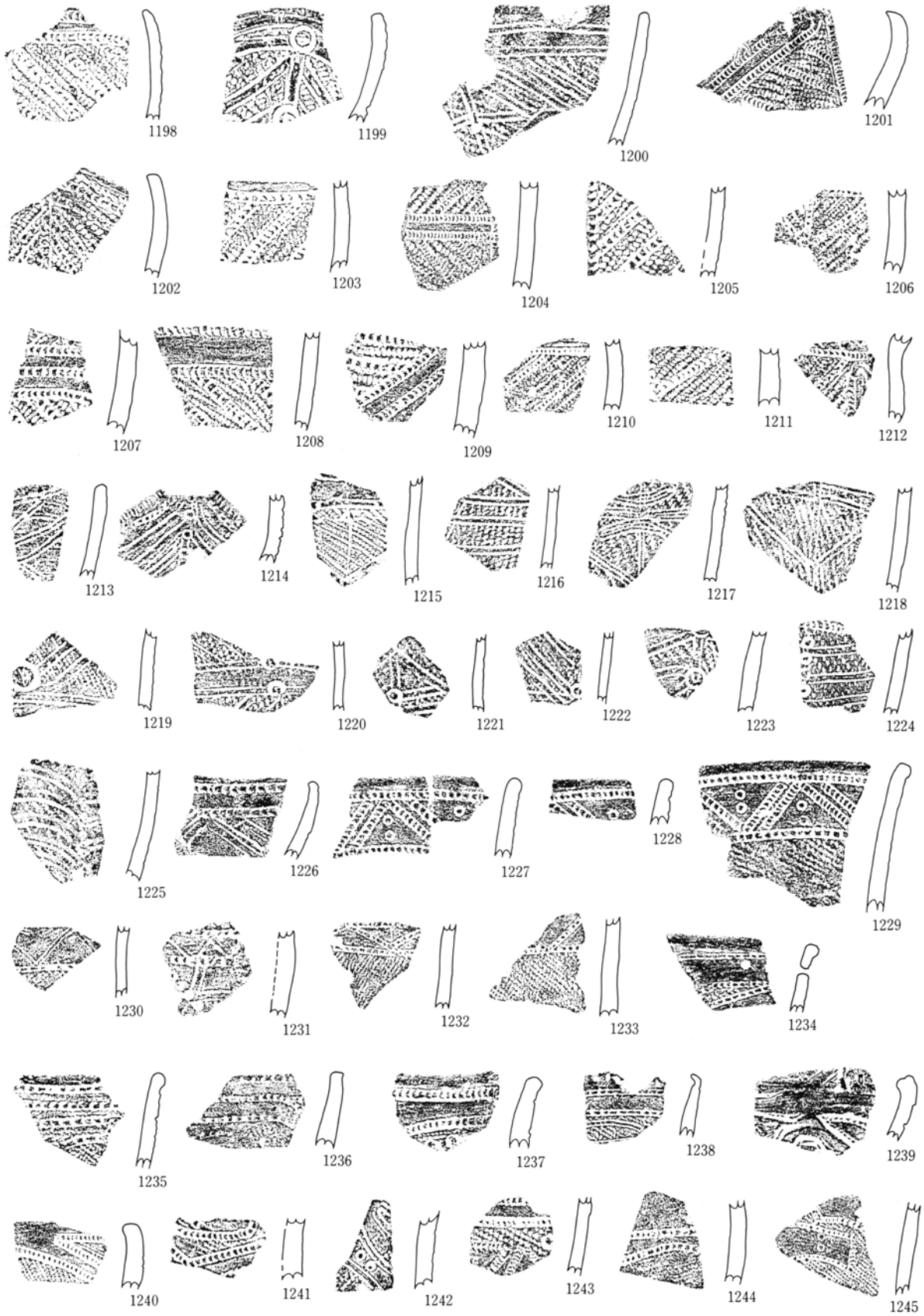
2143～2147は内反する平口縁となるもので、2143の口縁には２個の小突起をもち、口縁以下に数条を単位とする横位の浮線文のみを数段巡らせるものであるが、浮線文上に縄文をもつものである。なお、地文には縄文が施されている。

2166～2348は口縁部から頸部・胴部にかけて、刻みをもつ浮線文で横位に文様区画し、区画内に同様の浮線文で曲線等による蕨手状ないし渦巻き状等の文様を施すものである。2173・2206・2327～2333の浮線上は、縄文をもつ。これらの土器の多くには、地文に縄文が施されており、2212・2218には結節縄文が施されている。2324・2325は頸部の括れ部に、口舌部に施文される文様と同様の文様が、浮線文で施文されている。2326には楕円状の文様が、2327にはＸ字状ないし菱状の文様が描かれている。2335～2348は梯子状となる浮線文で、文様が描かれるものである。2349～2522は頸部から胴部にかけて数条を単位とする浮線文を横位に数段巡らせるもので、2349～2483の浮線上には刻みが施されているが、2427・2477～2483に施される浮線は細く低いものであると共に、刻みも密に施されているものである。2428～2487の浮線上には刺突が施され、2488～2522の浮線上には縄文が施されている。これらの土器の地文には縄文が施されているが、中には結束羽状縄文や結節縄文が施されているものもある。

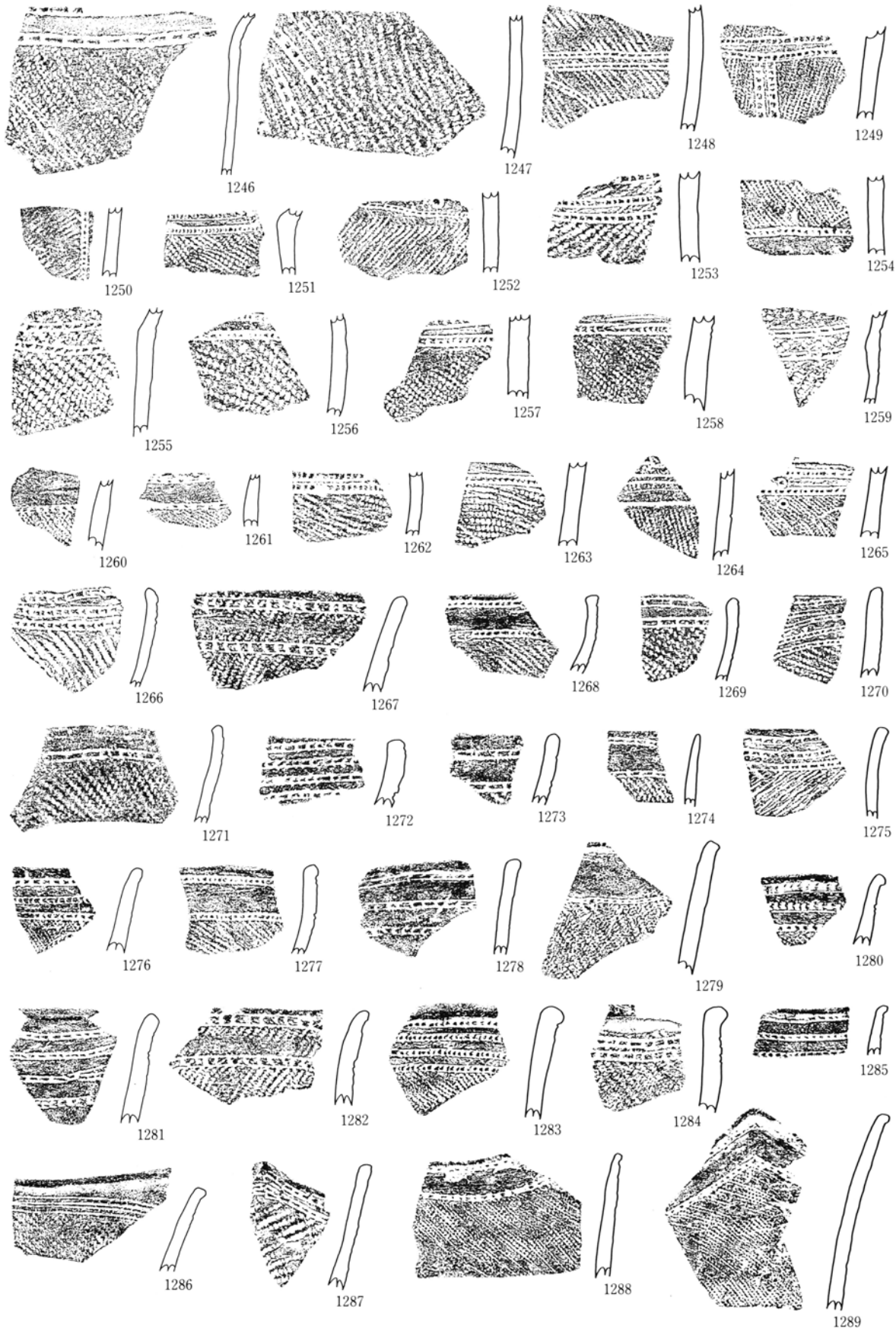
Ｄ類　浅鉢の器形となるものを本類とした。

18は球胴状に内反する平口縁となる浅鉢形を呈し、口縁以下に刻みをもつ浮線文を巡らせて文様帯区画を行い、区画内に部分的に爪形刺突をもつ平行沈線で木の葉文の文様を描く。口縁下に孔をもつ有孔浅鉢である。20は底部から口縁にかけて２段の括れをもち、口縁部が屈曲して内反する平口縁の浅鉢形を呈し、口縁下に孔をもつ有孔浅鉢である。施文される文様は、刺突をもつ沈線を横位に巡らせて文様帯区画し、区画内に同様の刺突をもつ沈線で曲線的な弧状・円形等の文様を描くものである。21・22は無文の浅鉢となるもので、22は口縁が短く直立する有孔浅鉢である。12は平口縁の口縁下に孔をもつ無文の有孔深鉢であり、本類には属さないが、ここで扱った。

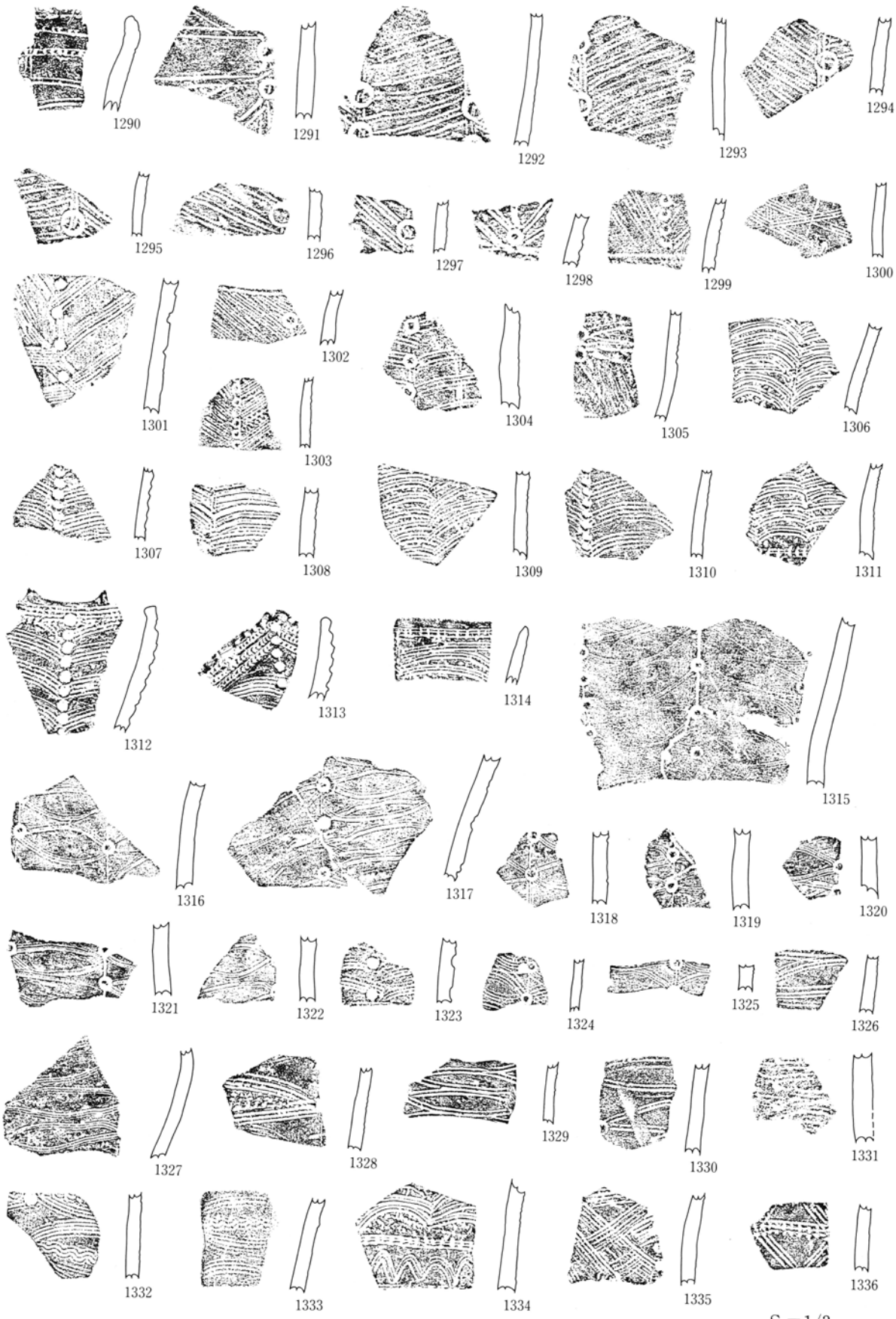
2523は本類ではなく、Ⅱ期Ⅵ群に属するものである。2524～2530は浅鉢形となるか判然としないものであるが、口縁部以下に爪形刺突をもつ平行沈線で木の葉文を描くものであり、文様内には縄文がみられる。また、2525は刻みをもつ浮線文をもつ。2531～2539は口端部が平らになる浅鉢で、2531～2534は同一個体となるものであり、口端部に浮線による波状文と沈線による木の葉文が描かれ、木の葉文内には爪形刺突を充填している。胴部にも同様の木の葉文が描かれている。2535～2539は口端部に浮線文による波状・レンズ状等の文様が描かれ、胴部には連続爪形で木の葉文を描き、木の葉文内に縄文を施す。2540～2545は口縁部が屈曲するように内反する浅鉢で、2544・2545の口縁は僅かに直立する。施文される文様は、口縁下に刻みをもつ浮線文を数条巡らせ、以下に連続爪形による木の葉文を描く。なお、2541は有孔浅鉢となるものである。



第162図　遺構外Ｃ区出土土器（33）

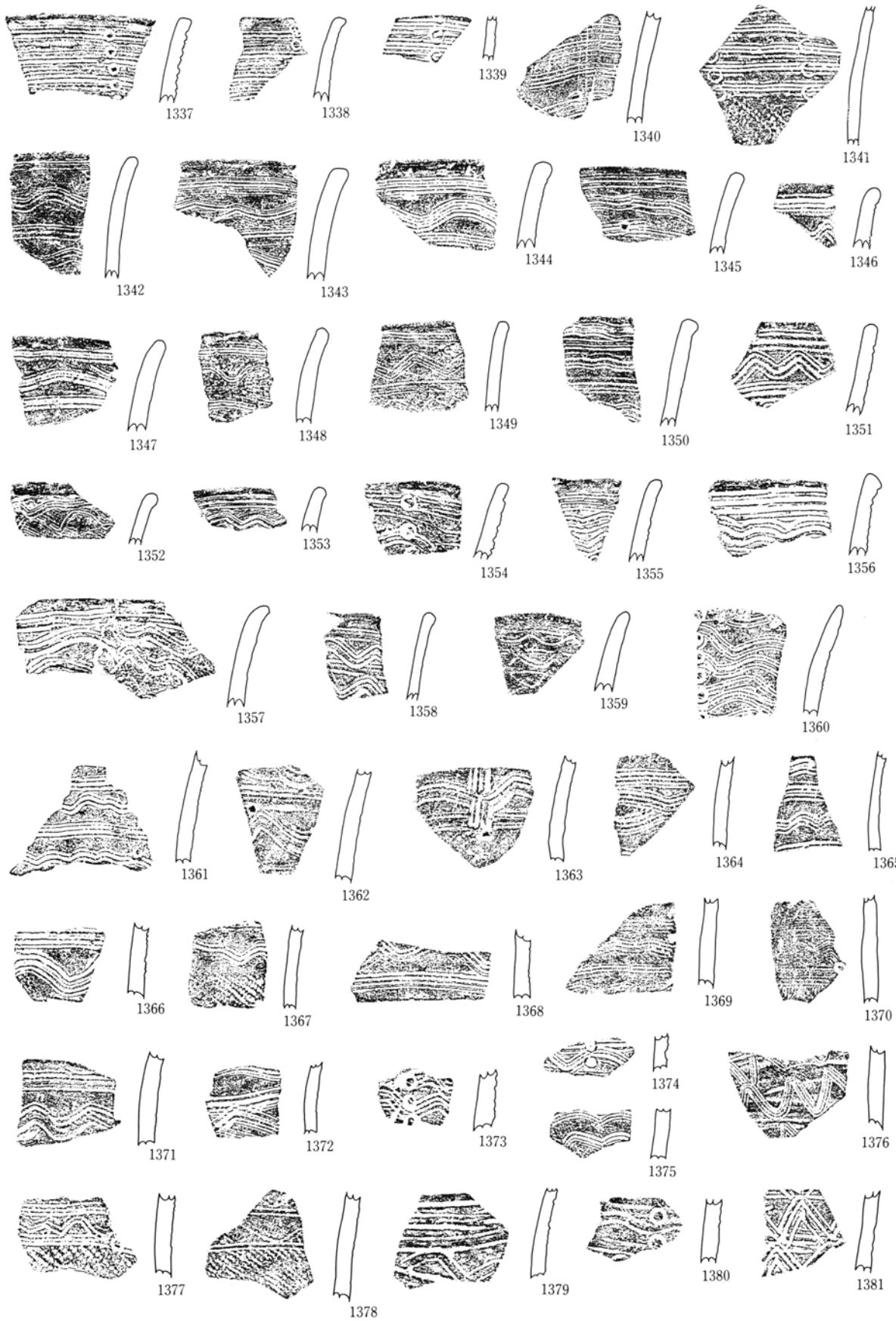


第163図　遺構外Ｃ区出土土器（34）　　Ｓ＝1/3



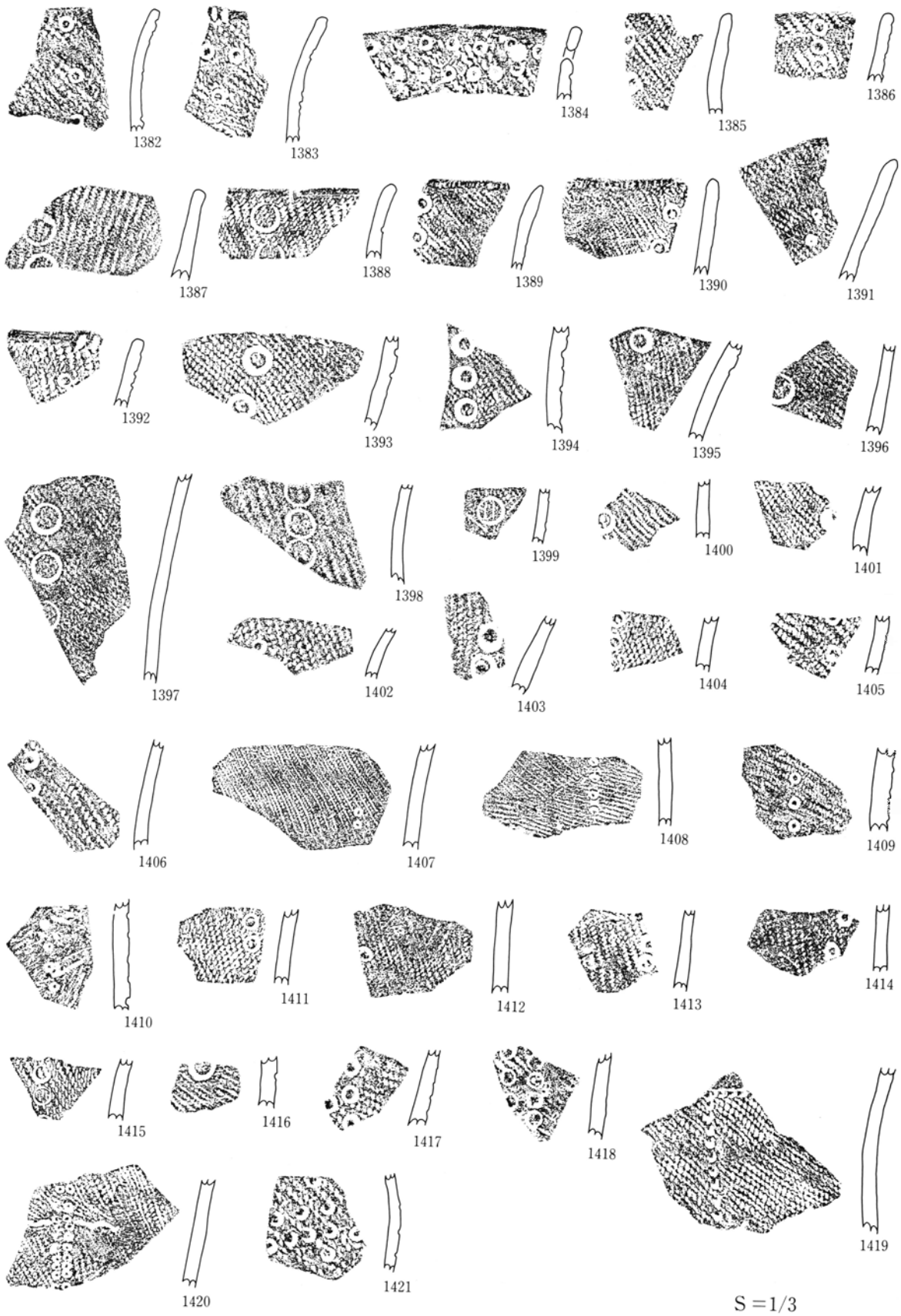
S＝1/3

第164図　遺構外Ｃ区出土土器（35）



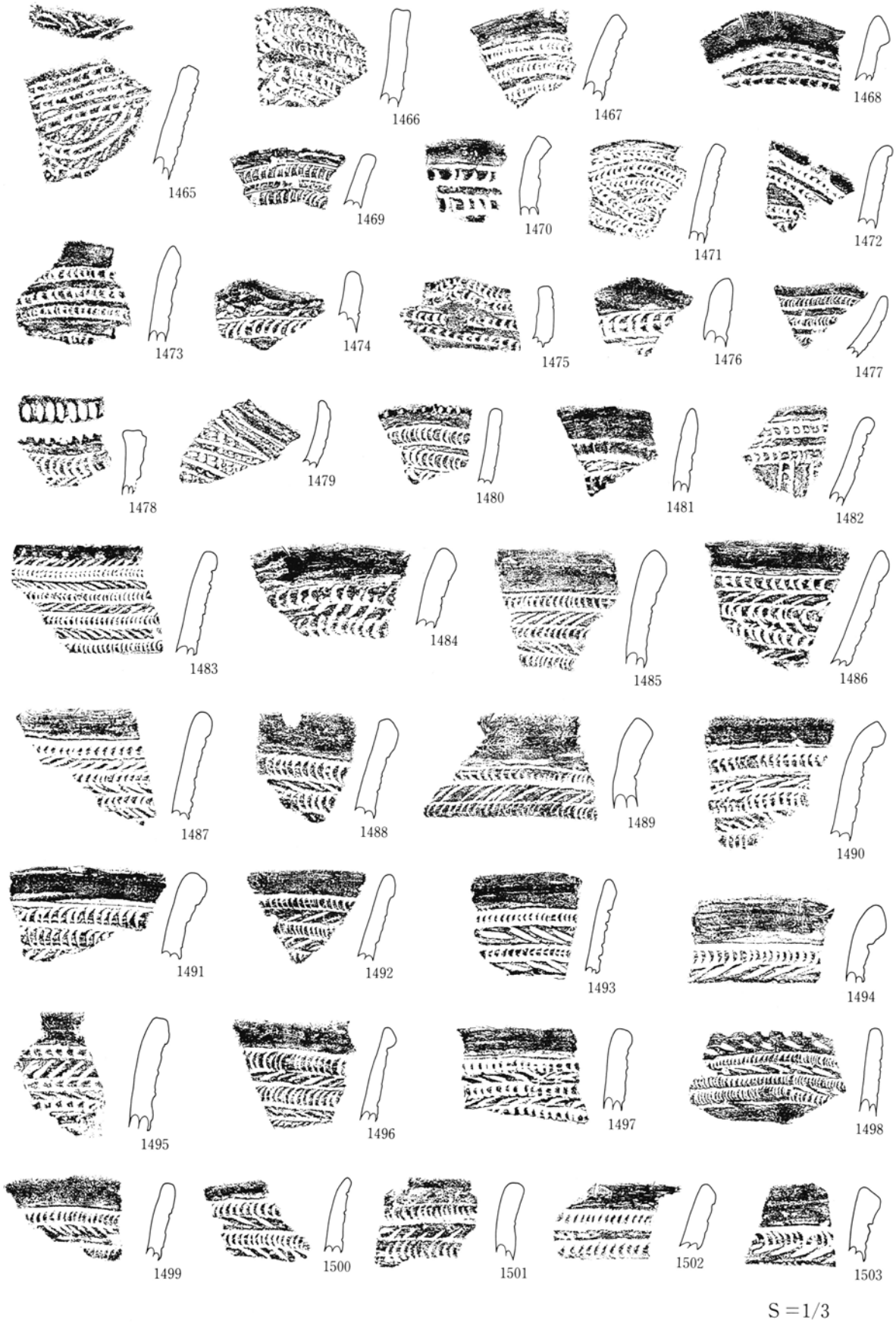
S＝1/3

第165図　遺構外Ｃ区出土土器（36）



第166図　遺構外Ｃ区出土土器（37）

第167図　遺構外Ｃ区出土土器（38）　　Ｓ＝1/3



S＝1/3

第168図　遺構外Ｃ区出土土器（39）

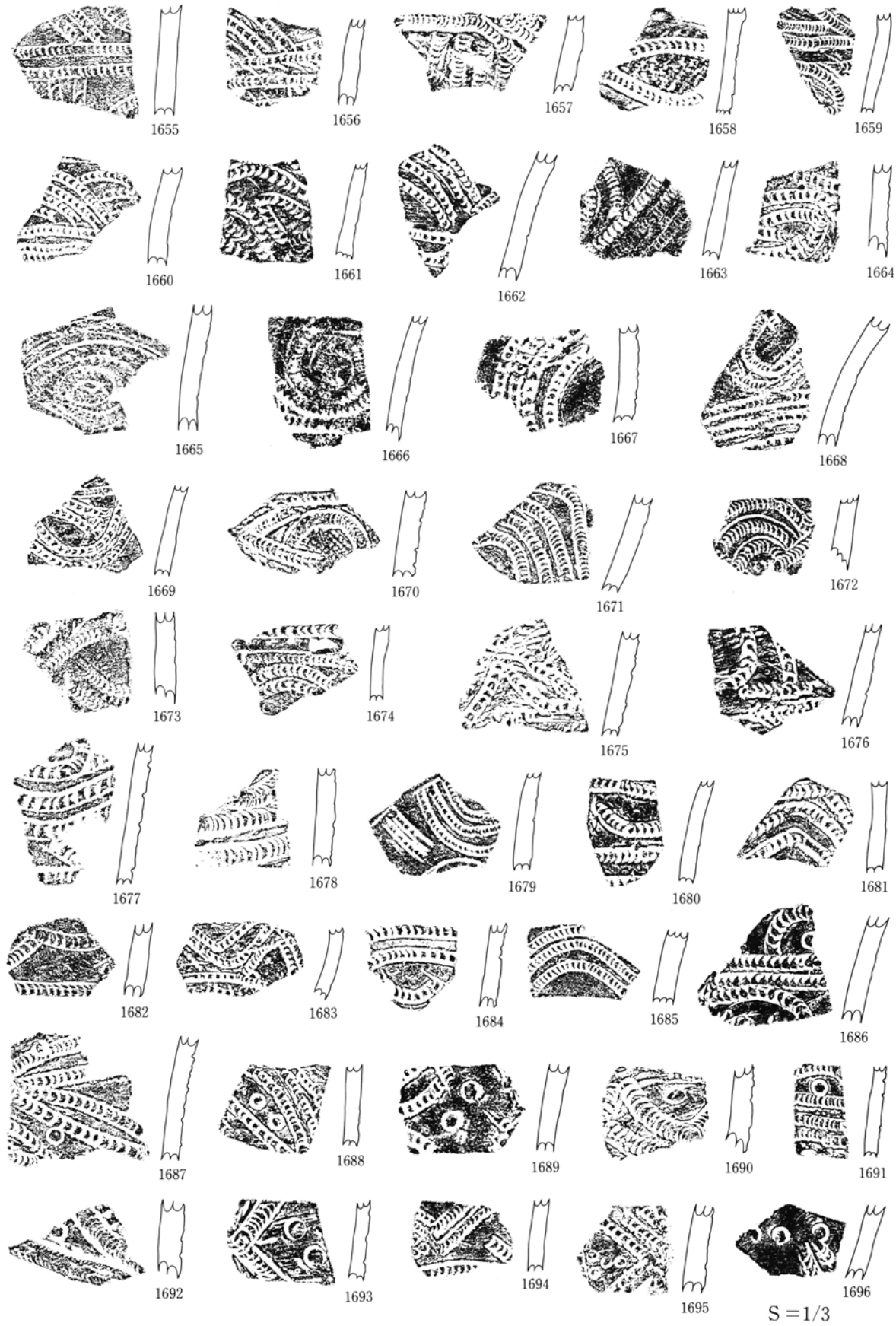
第169図　遺構外Ｃ区出土土器（40）

S＝1/3

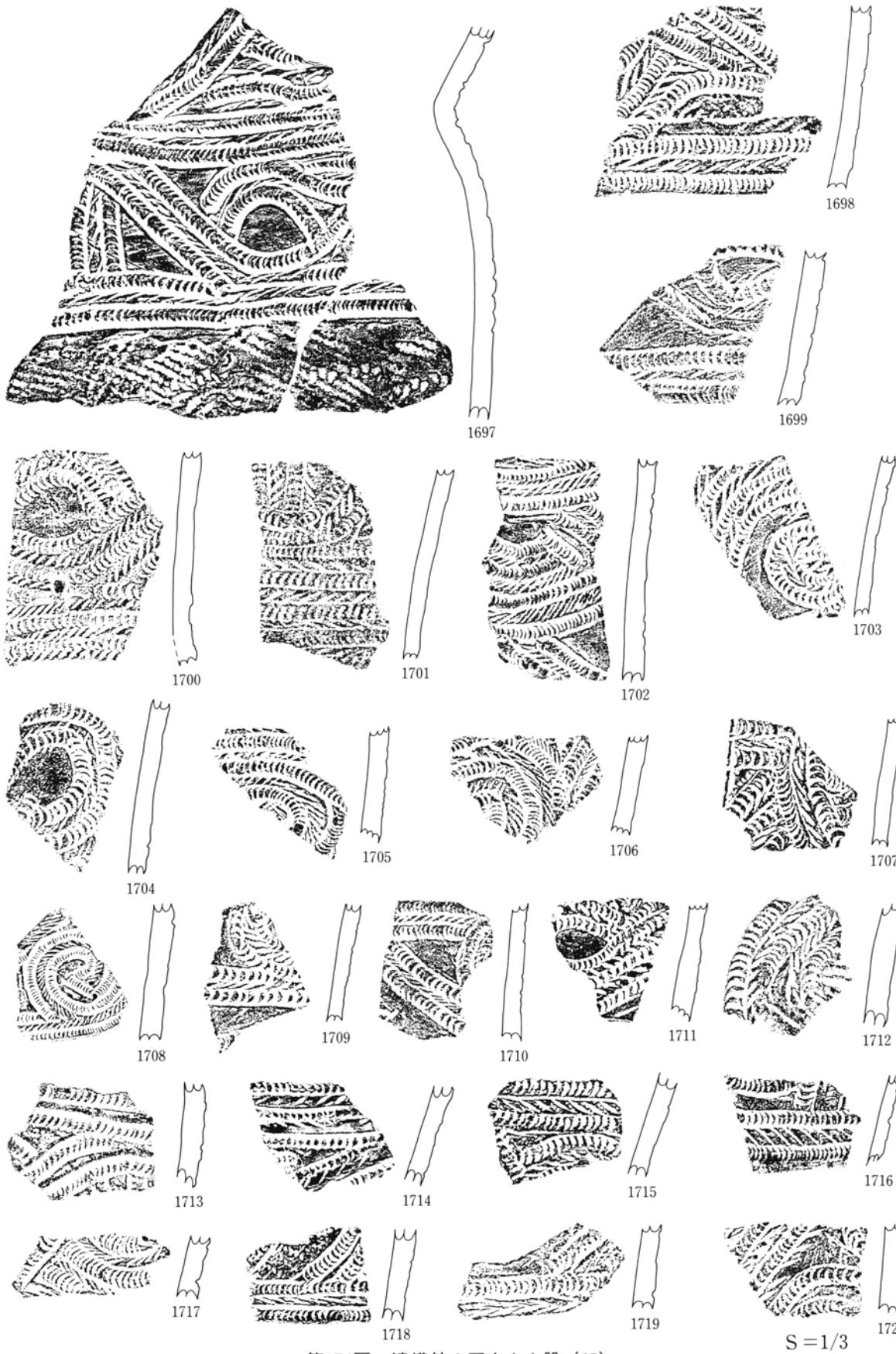
第170図　遺構外Ｃ区出土土器（41）

第171図　遺構外Ｃ区出土土器（42）　　Ｓ＝1/3

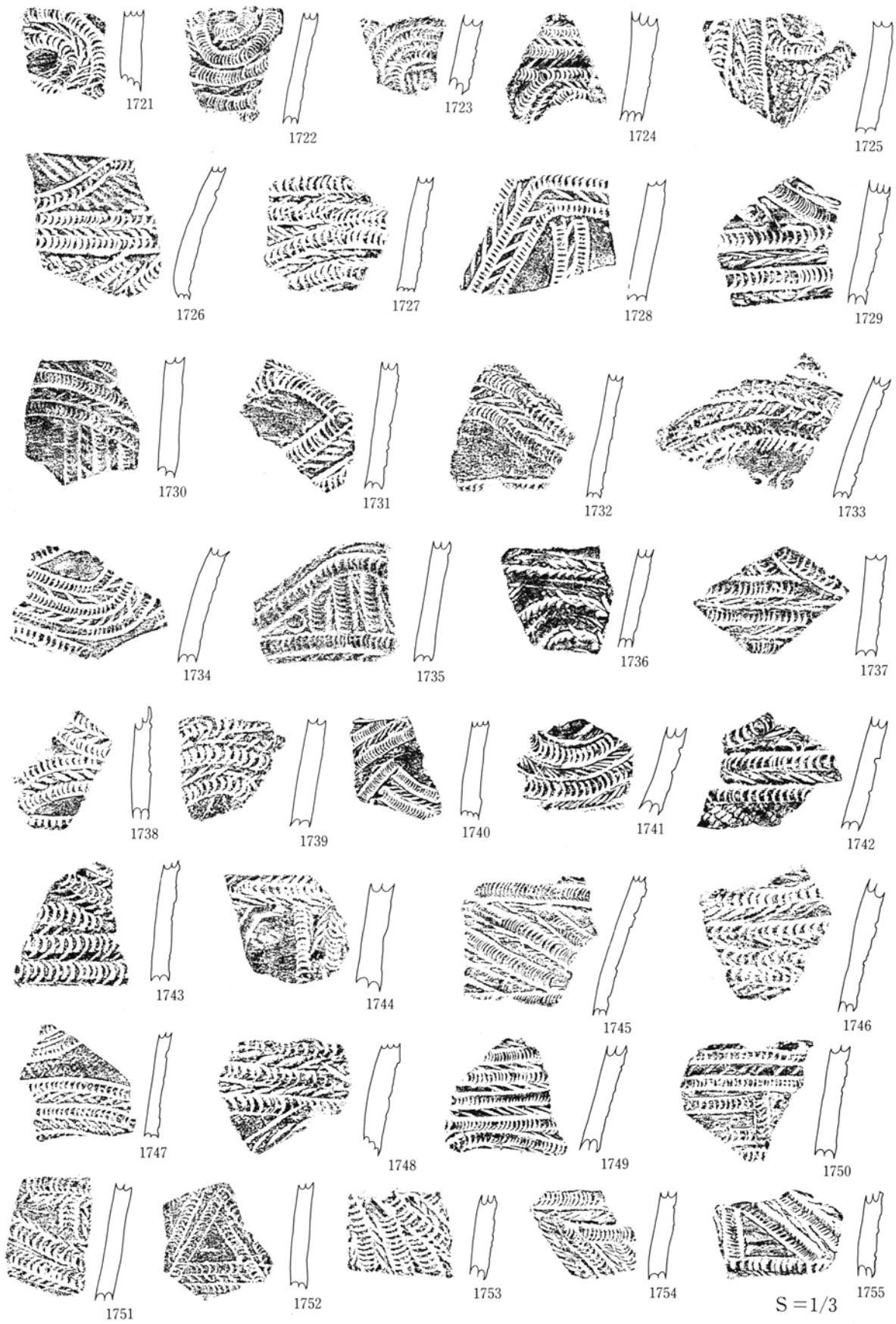
第172図　遺構外Ｃ区出土土器（43）



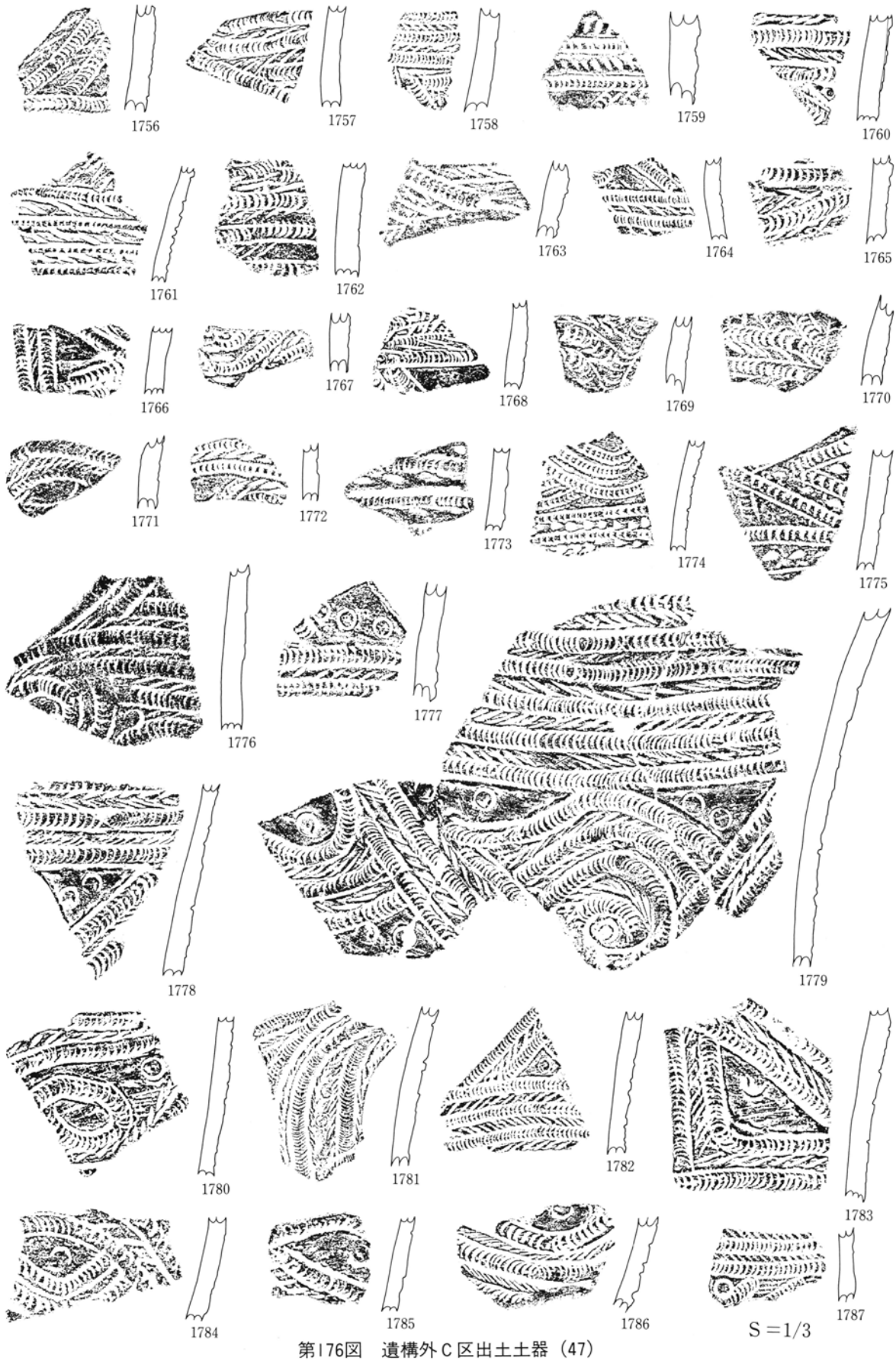
第173図　遺構外Ｃ区出土土器（44）



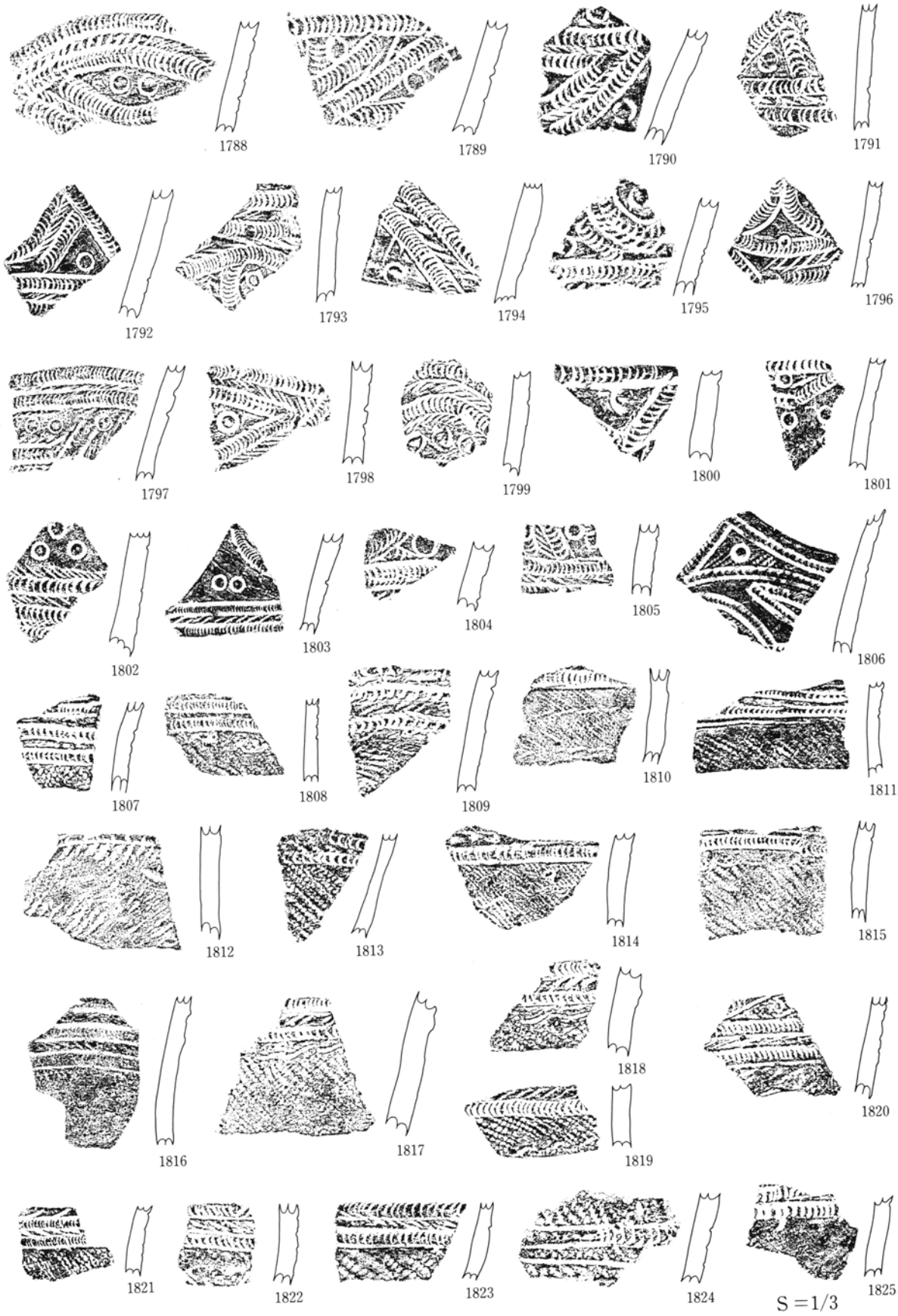
第174図　遺構外Ｃ区出土土器（45）



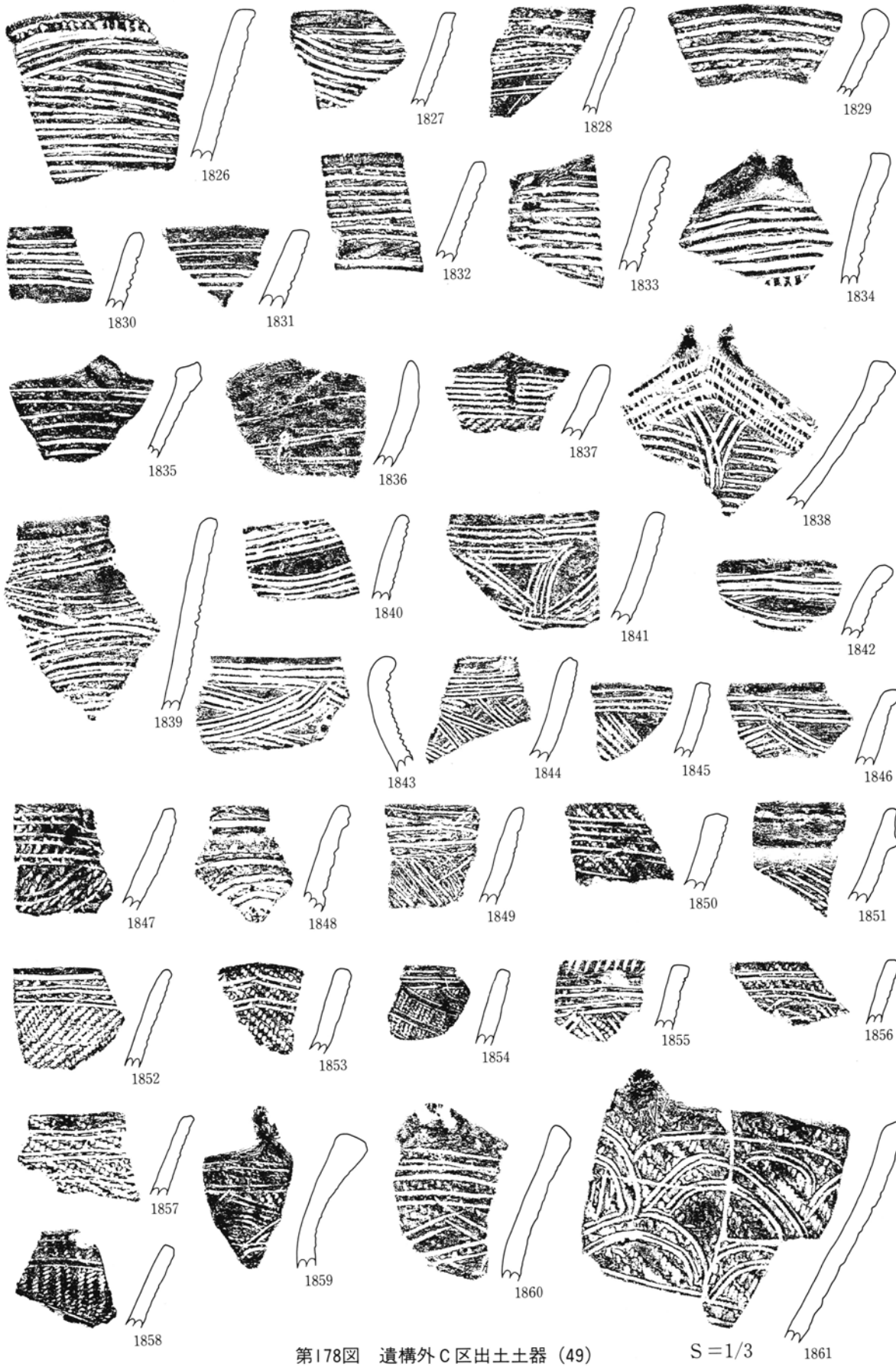
第175図　遺構外Ｃ区出土土器（46）



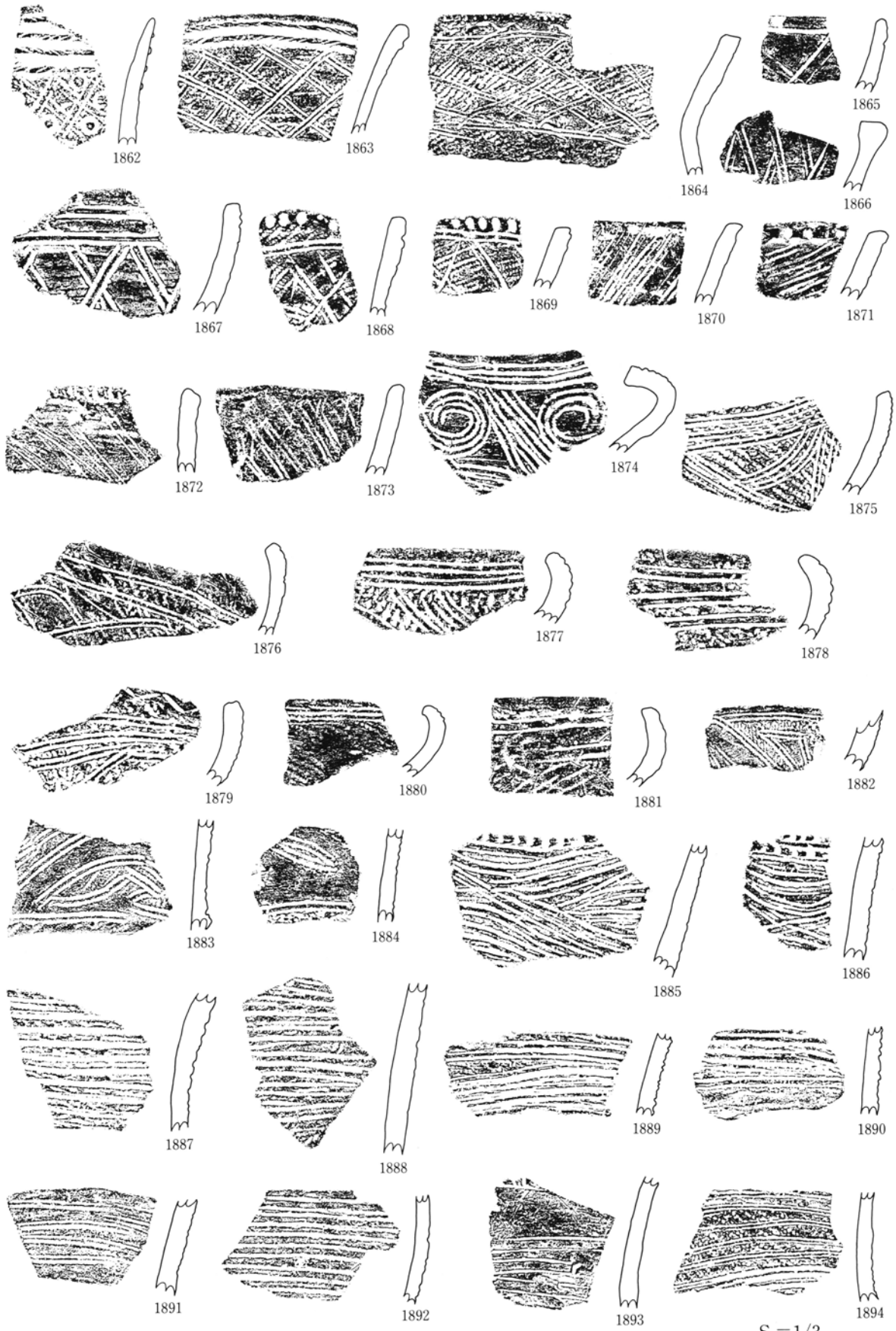
第176図　遺構外Ｃ区出土土器（47）



第177図　遺構外Ｃ区出土土器（48）

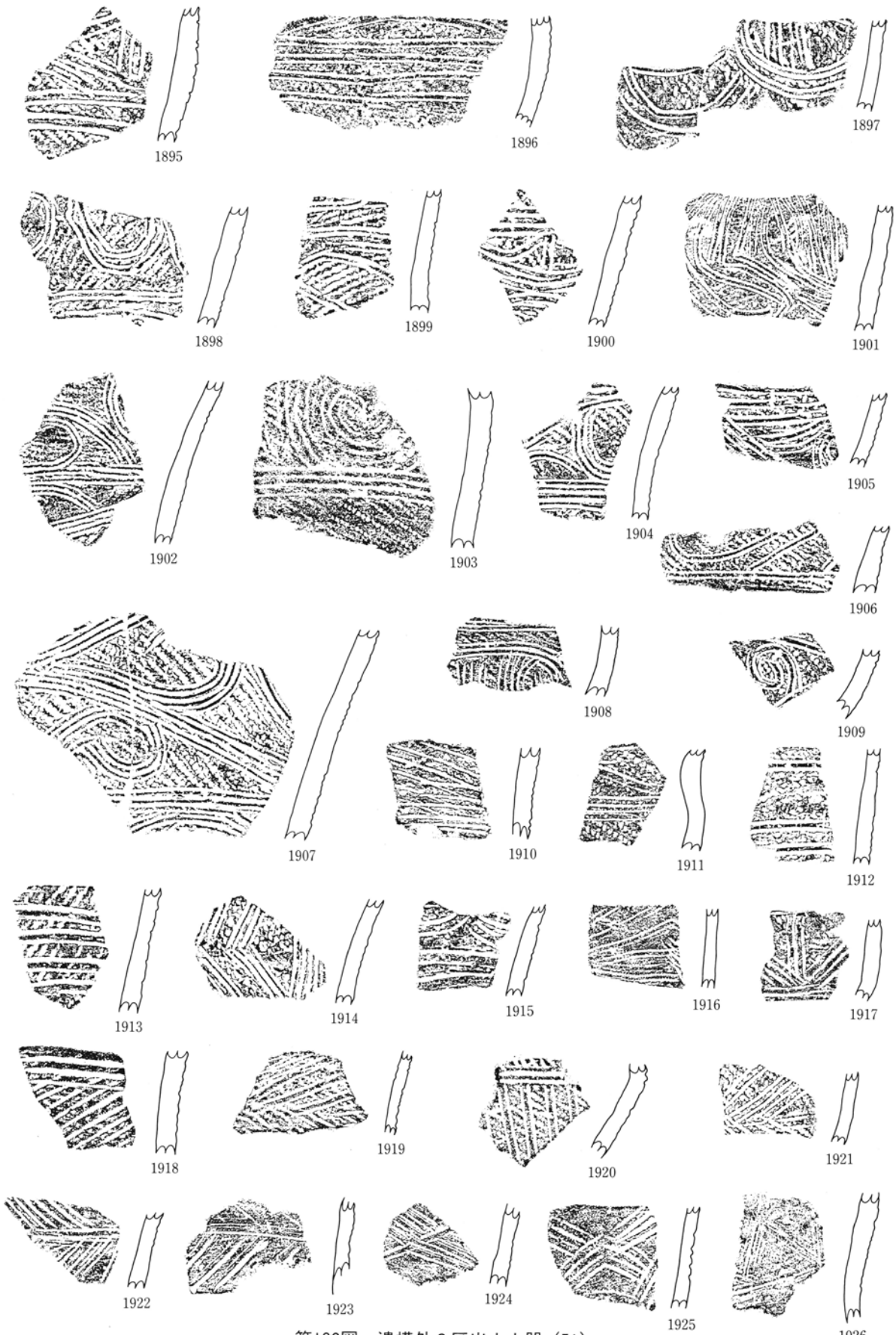


第178図　遺構外Ｃ区出土土器（49）　Ｓ＝1/3

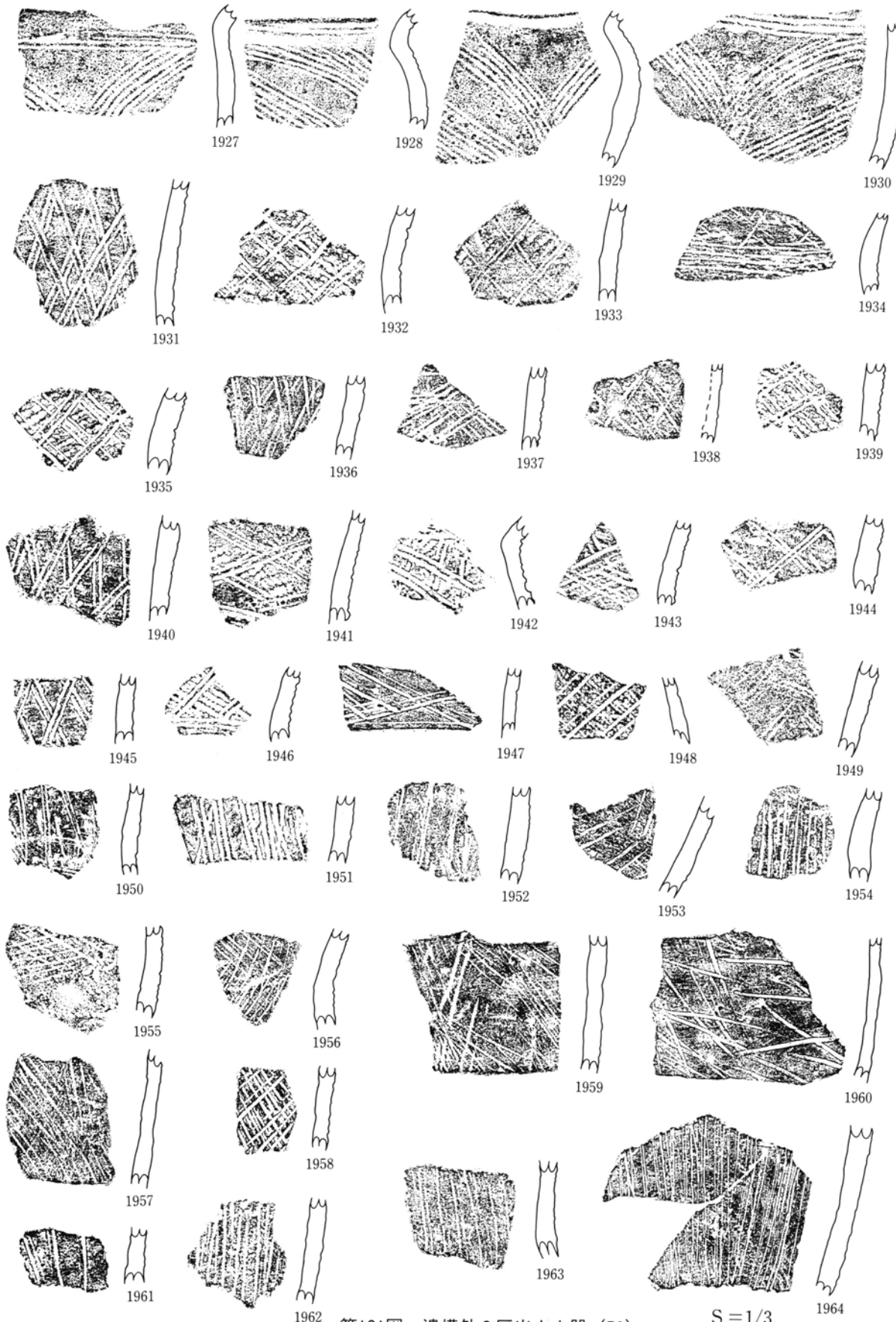


S＝1/3

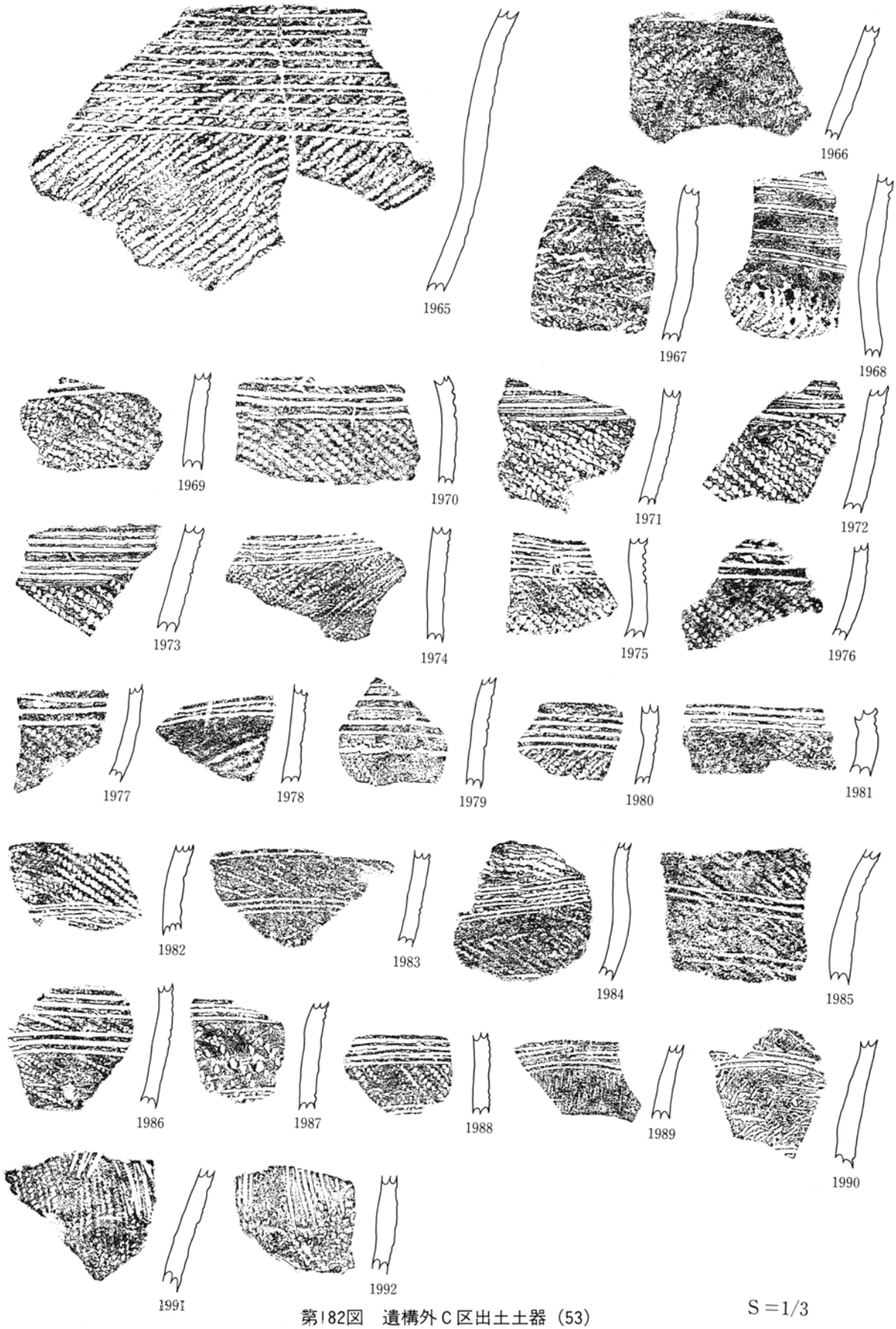
第179図　遺構外Ｃ区出土土器（50）



第180図　遺構外Ｃ区出土土器（51）　Ｓ＝1/3

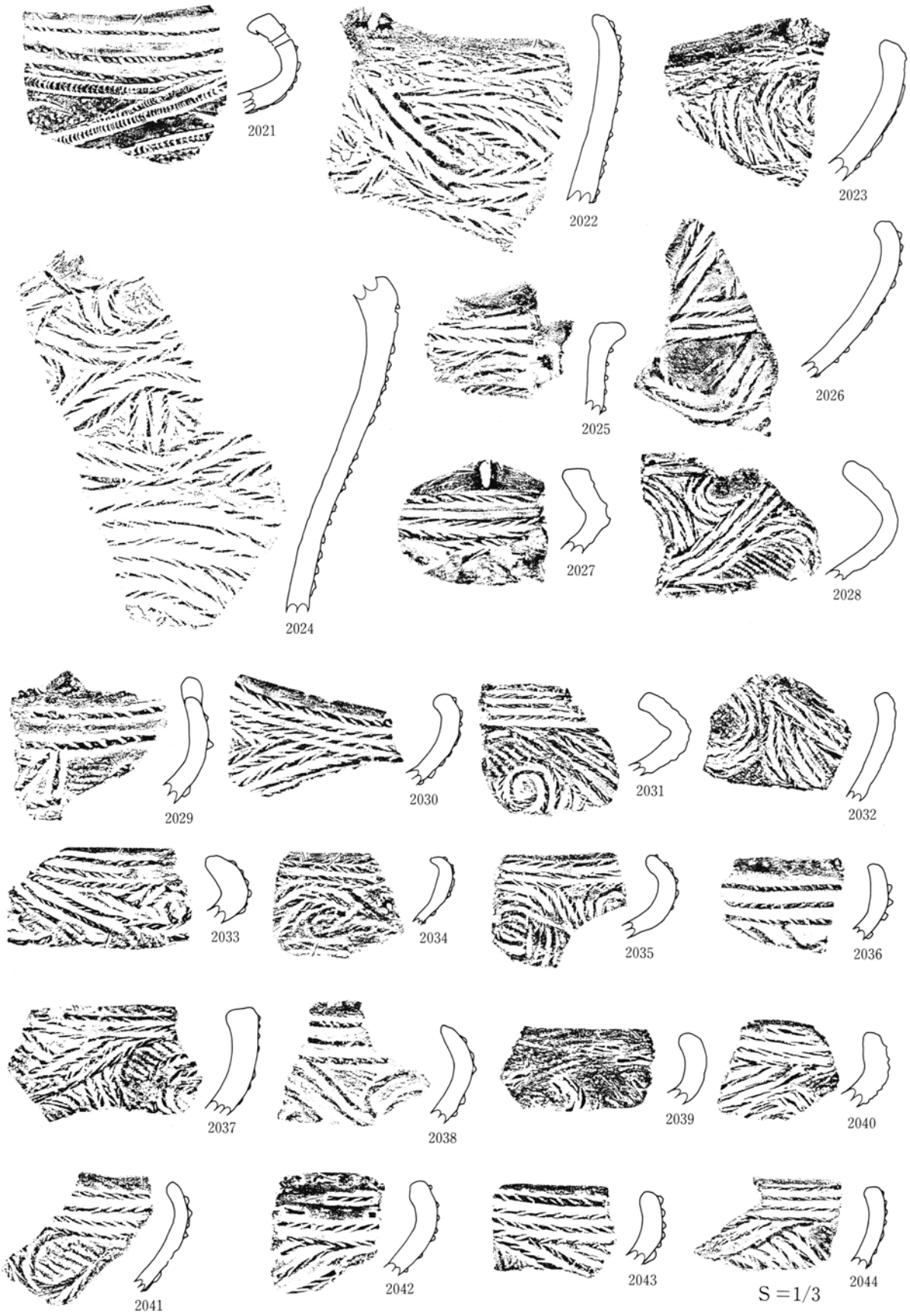


第181図　遺構外Ｃ区出土土器（52）　Ｓ＝1/3



第182図　遺構外Ｃ区出土土器（53）　　Ｓ＝1/3

第183図　遺構外Ｃ区出土土器（54）



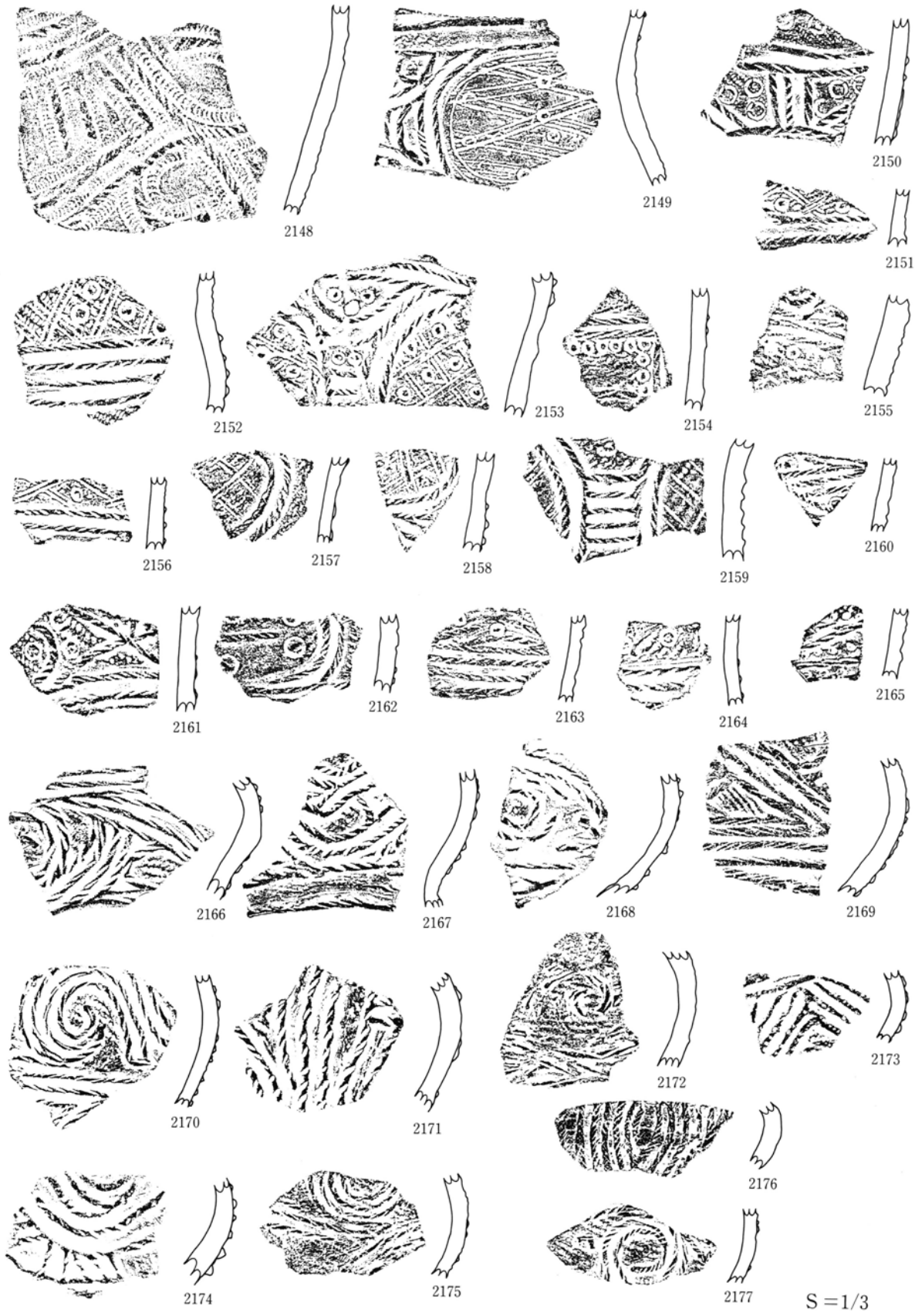
第184図　遺構外Ｃ区出土土器（55）

第185図　遺構外Ｃ区出土土器（56）

第186図　遺構外Ｃ区出土土器（57）

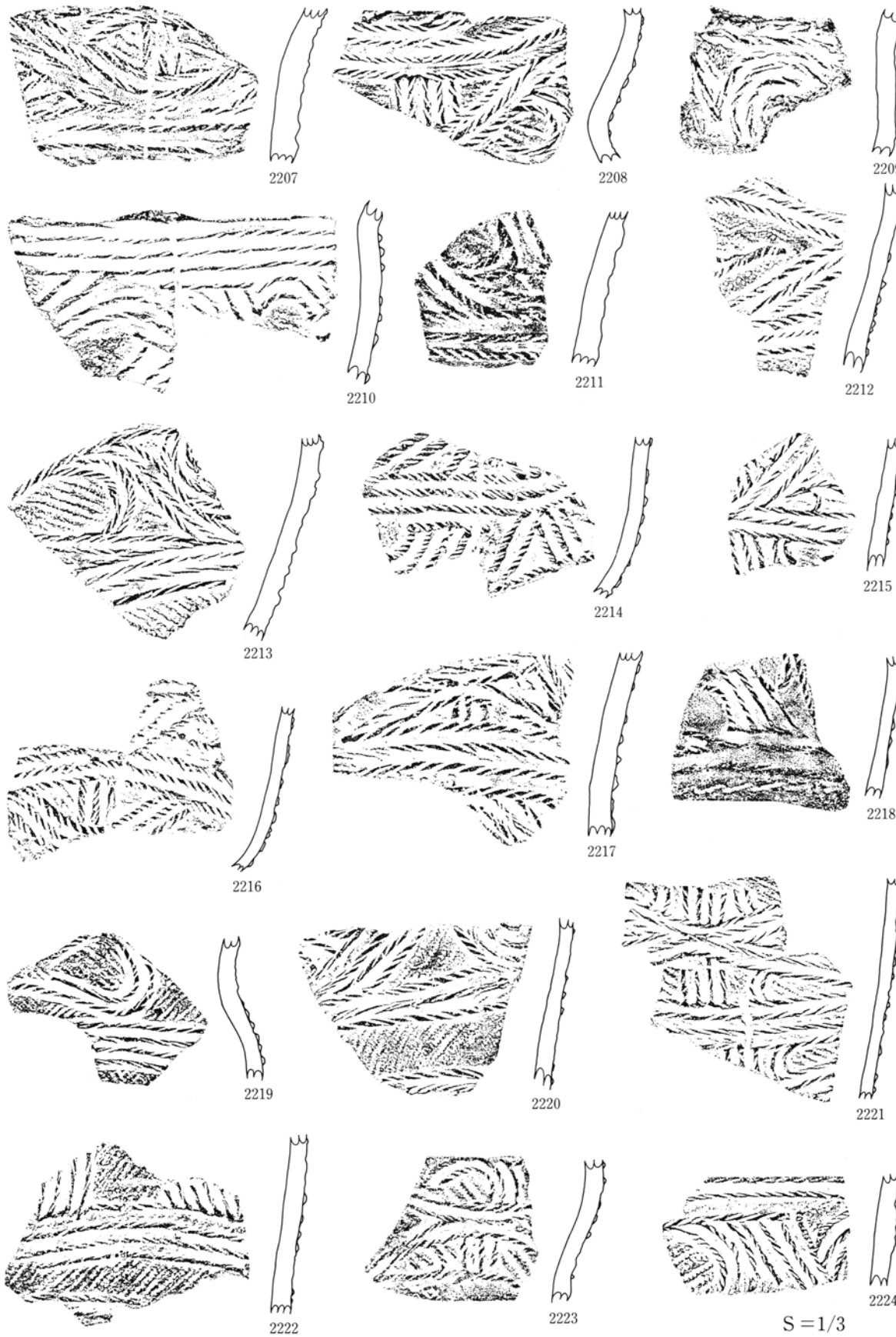
第187図　遺構外Ｃ区出土土器（58）

第188図　遺構外Ｃ区出土土器（59）　　Ｓ＝1/3



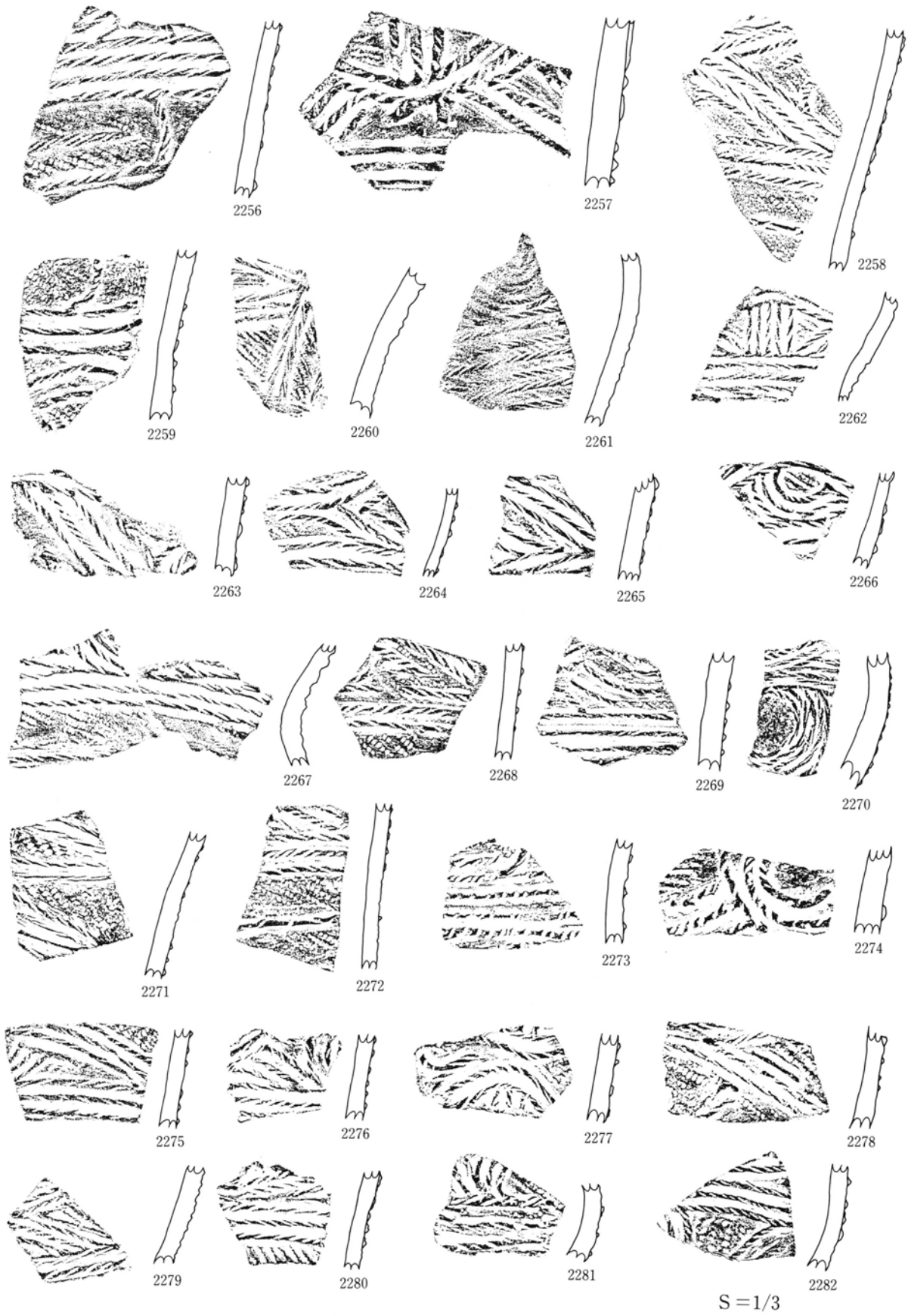
第189図　遺構外Ｃ区出土土器（60）

第190図　遺構外Ｃ区出土土器（61）

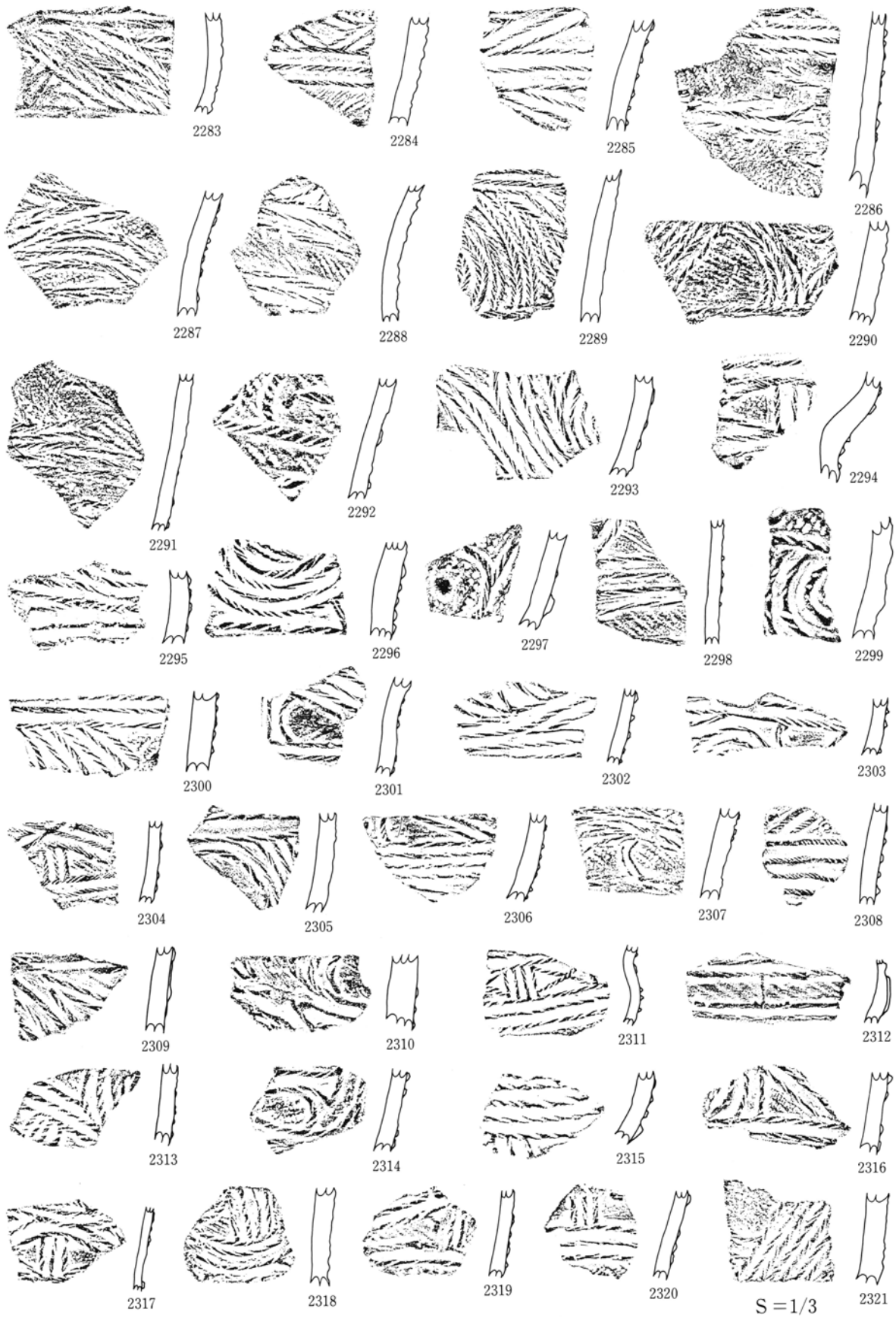


第191図　遺構外Ｃ区出土土器（62）

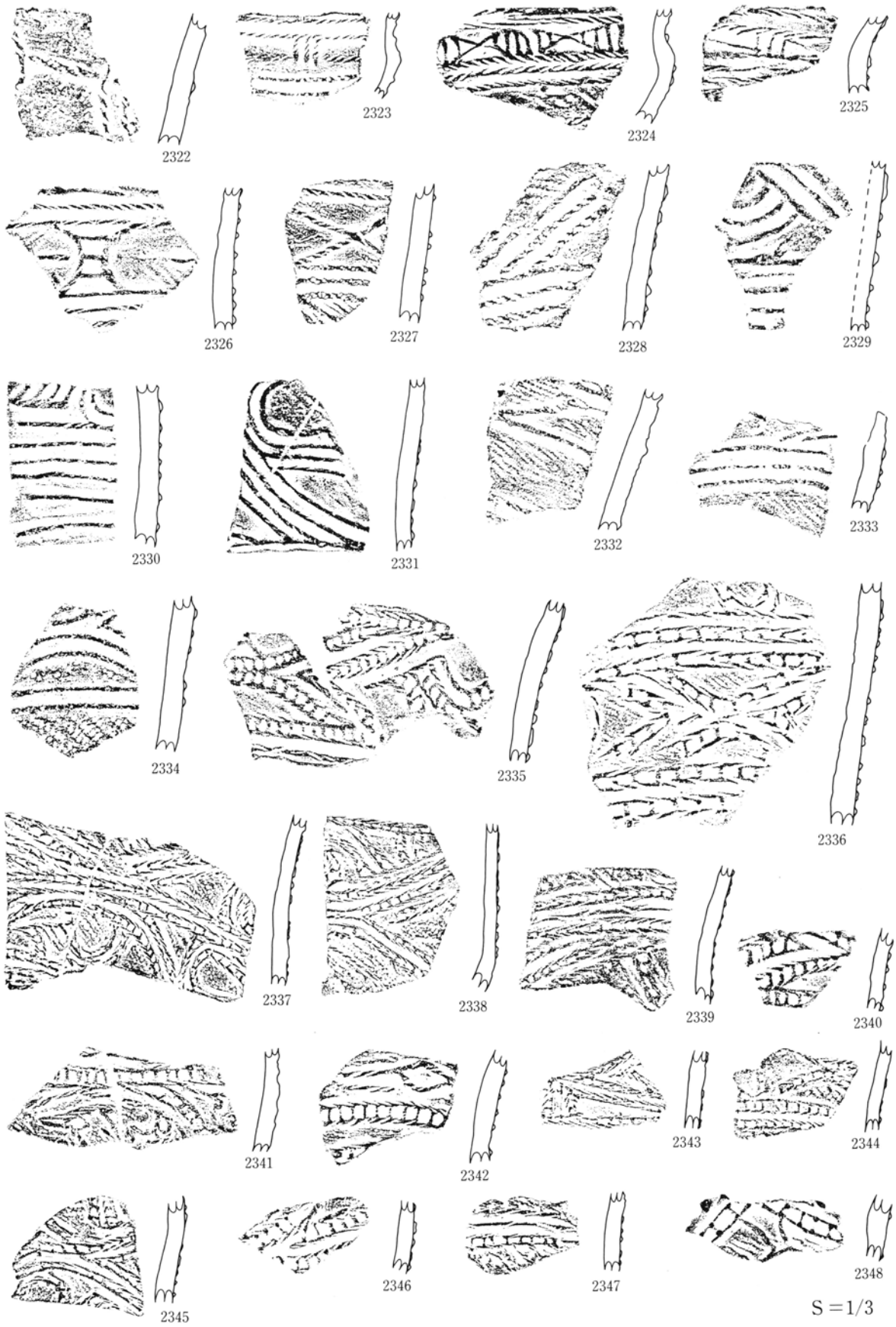
第192図　遺構外Ｃ区出土土器（63）



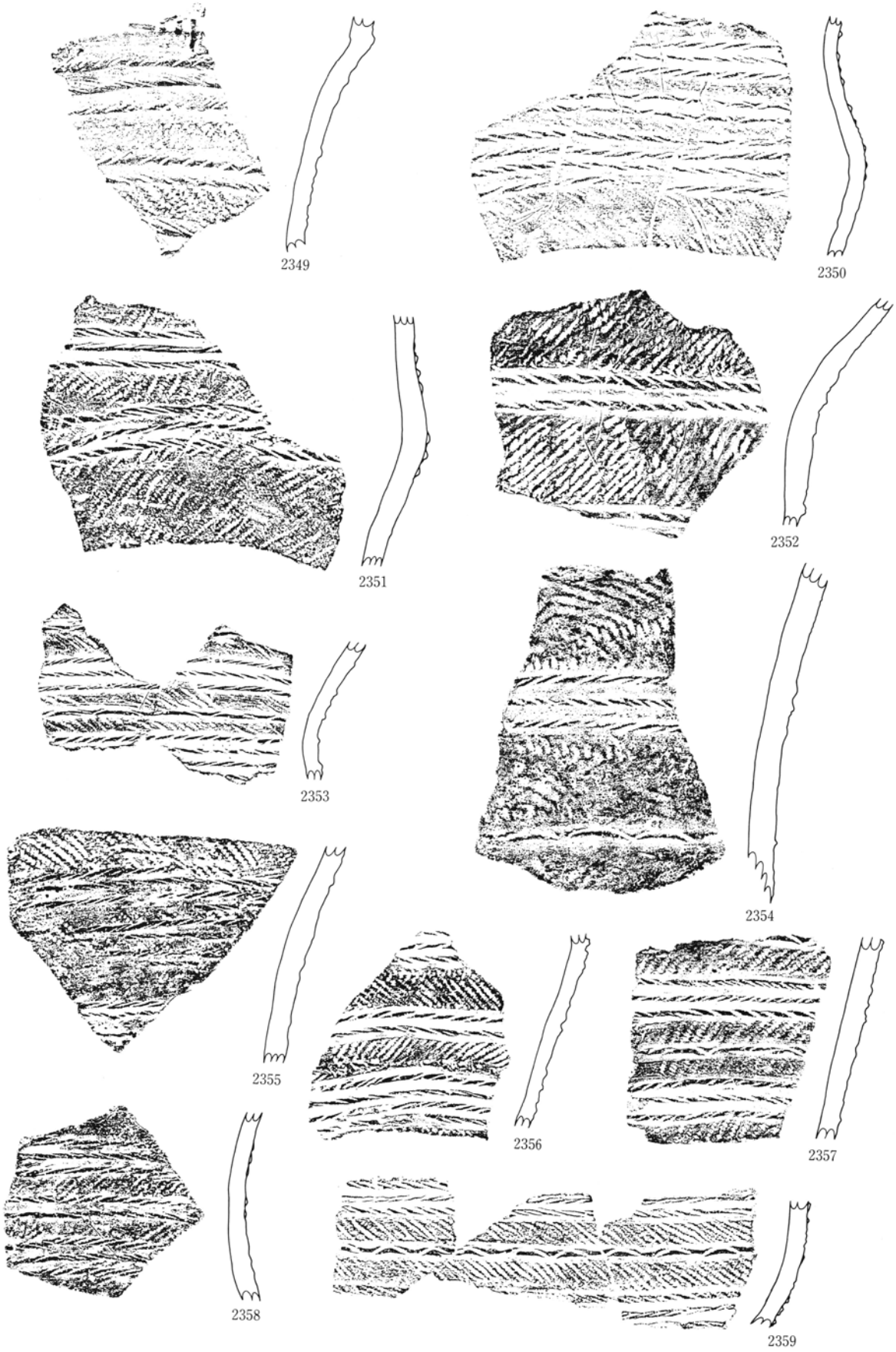
第193図　遺構外Ｃ区出土土器（64）



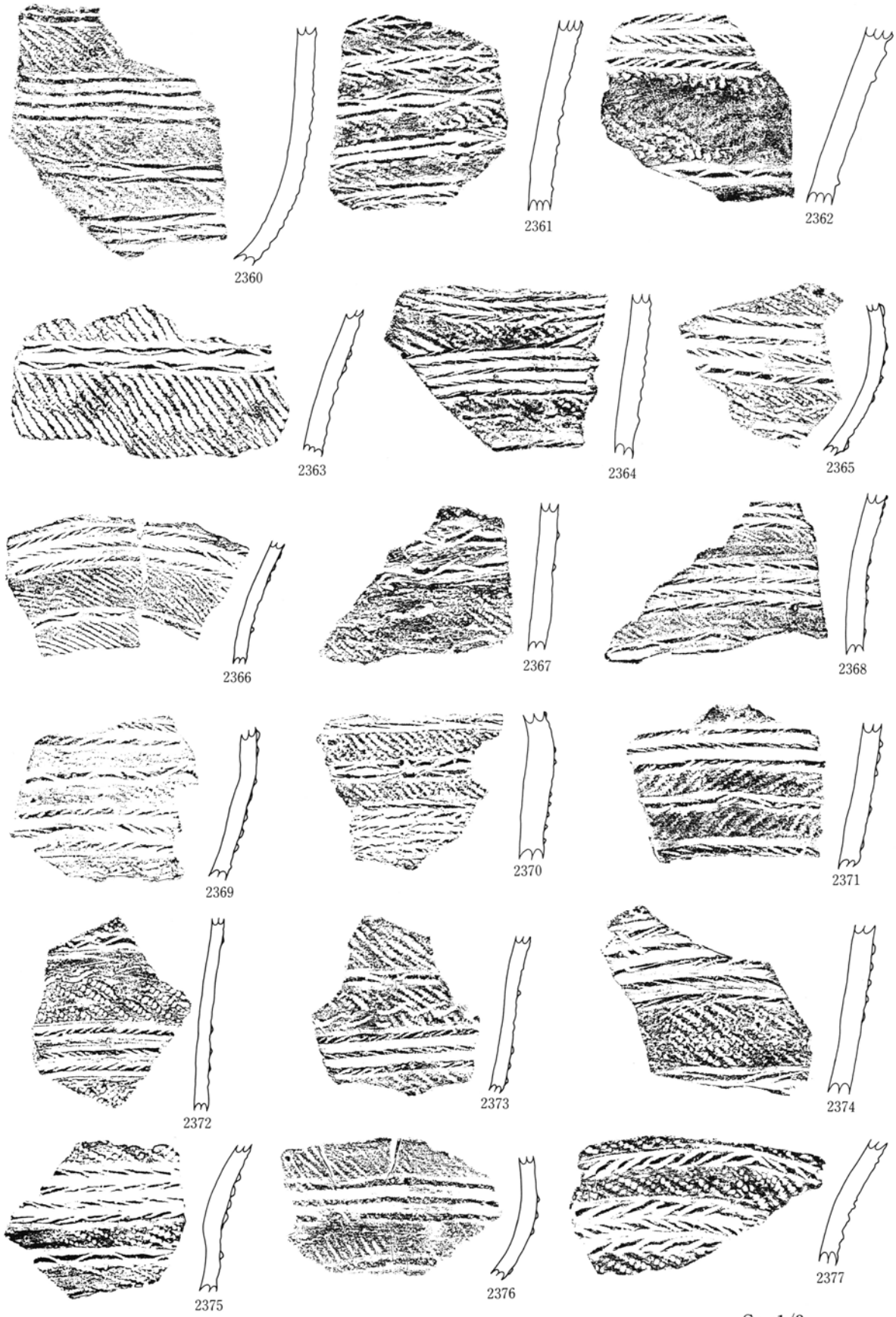
第194図　遺構外Ｃ区出土土器（65）



第195図　遺構外Ｃ区出土土器（66）

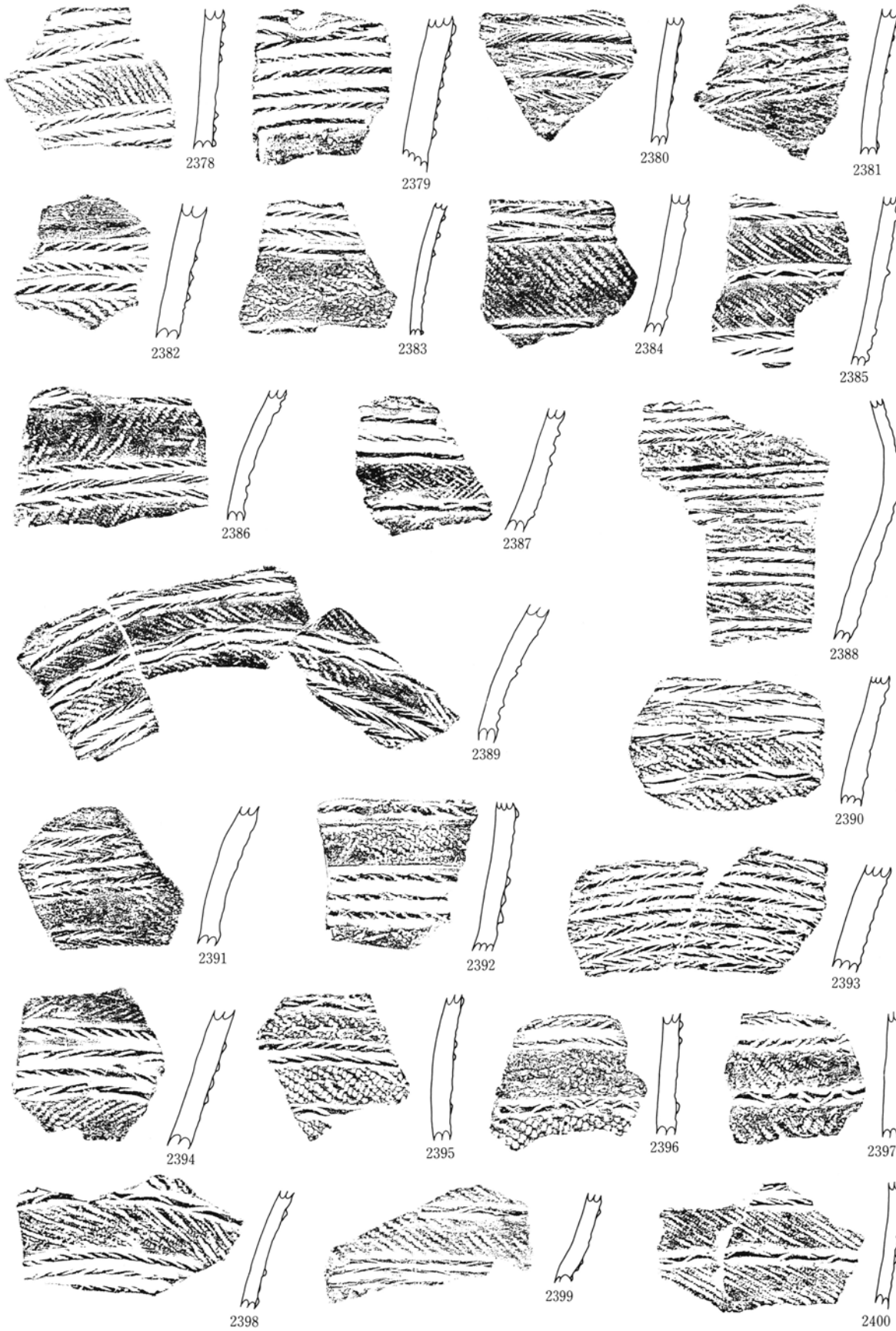


第196図　遺構外Ｃ区出土土器（67）　　Ｓ＝1/3

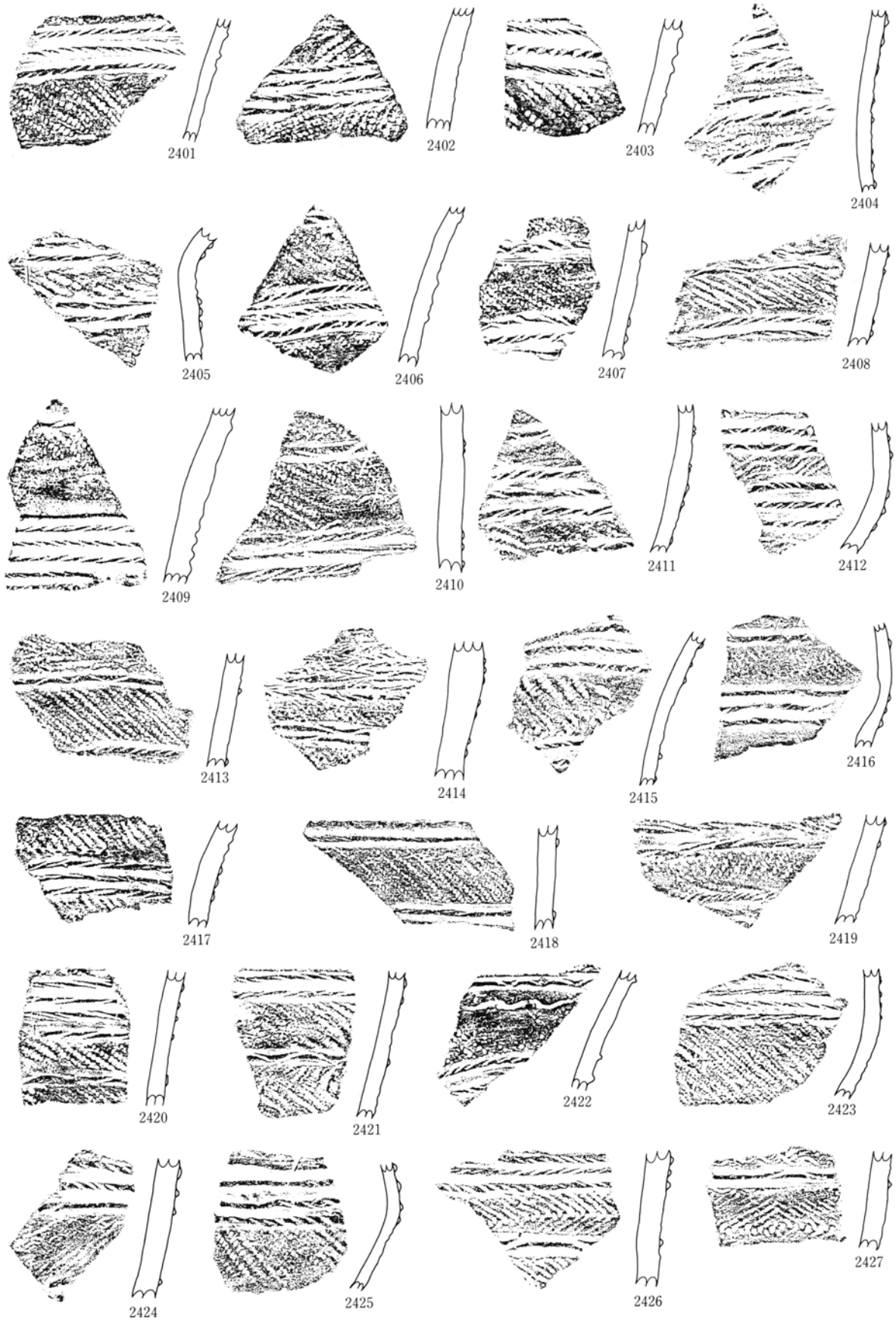


S＝1/3

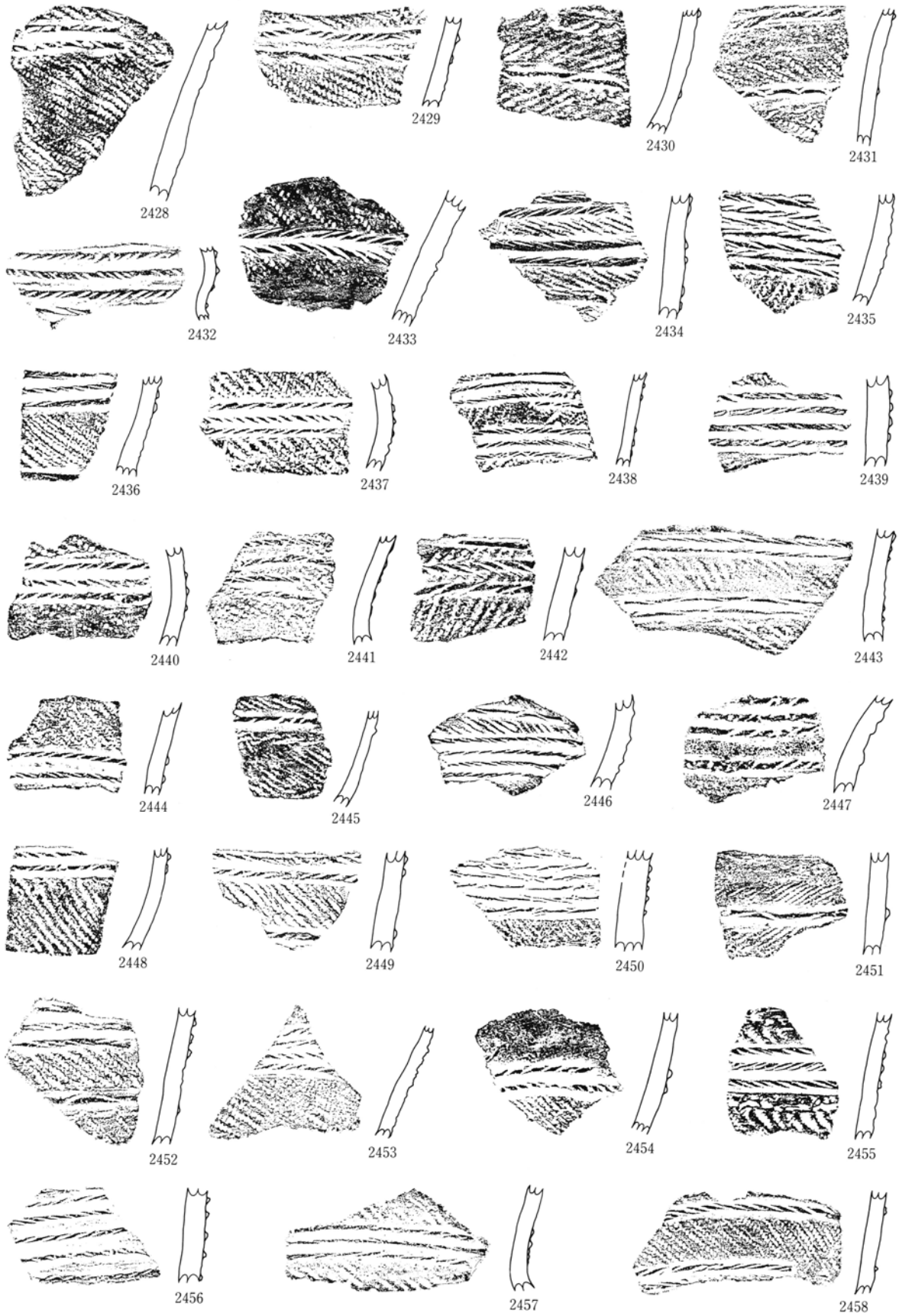
第197図　遺構外Ｃ区出土土器（68）



第198図　遺構外Ｃ区出土土器（69）　　Ｓ＝1/3

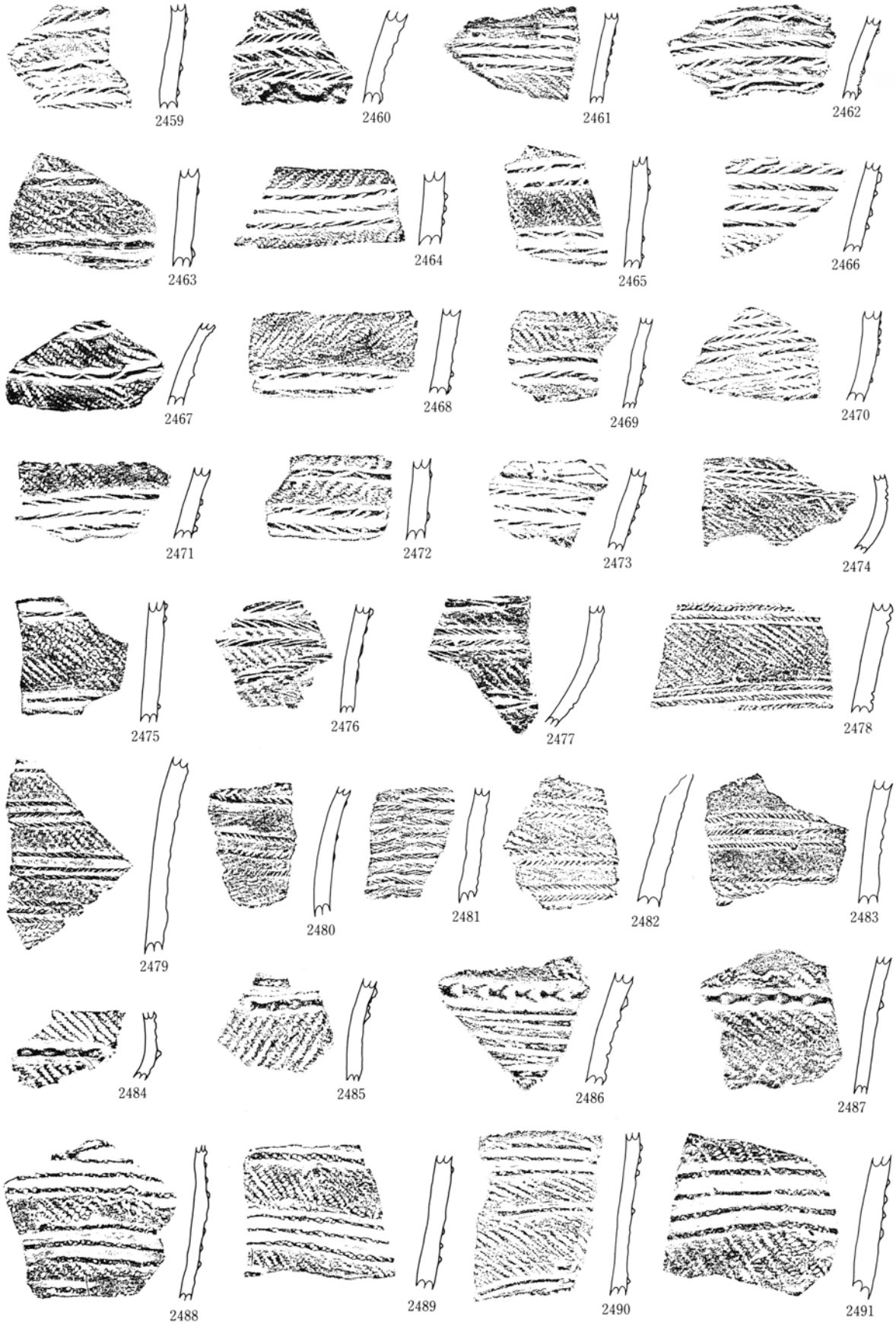


第199図　遺構外Ｃ区出土土器（70）　　Ｓ＝1/3



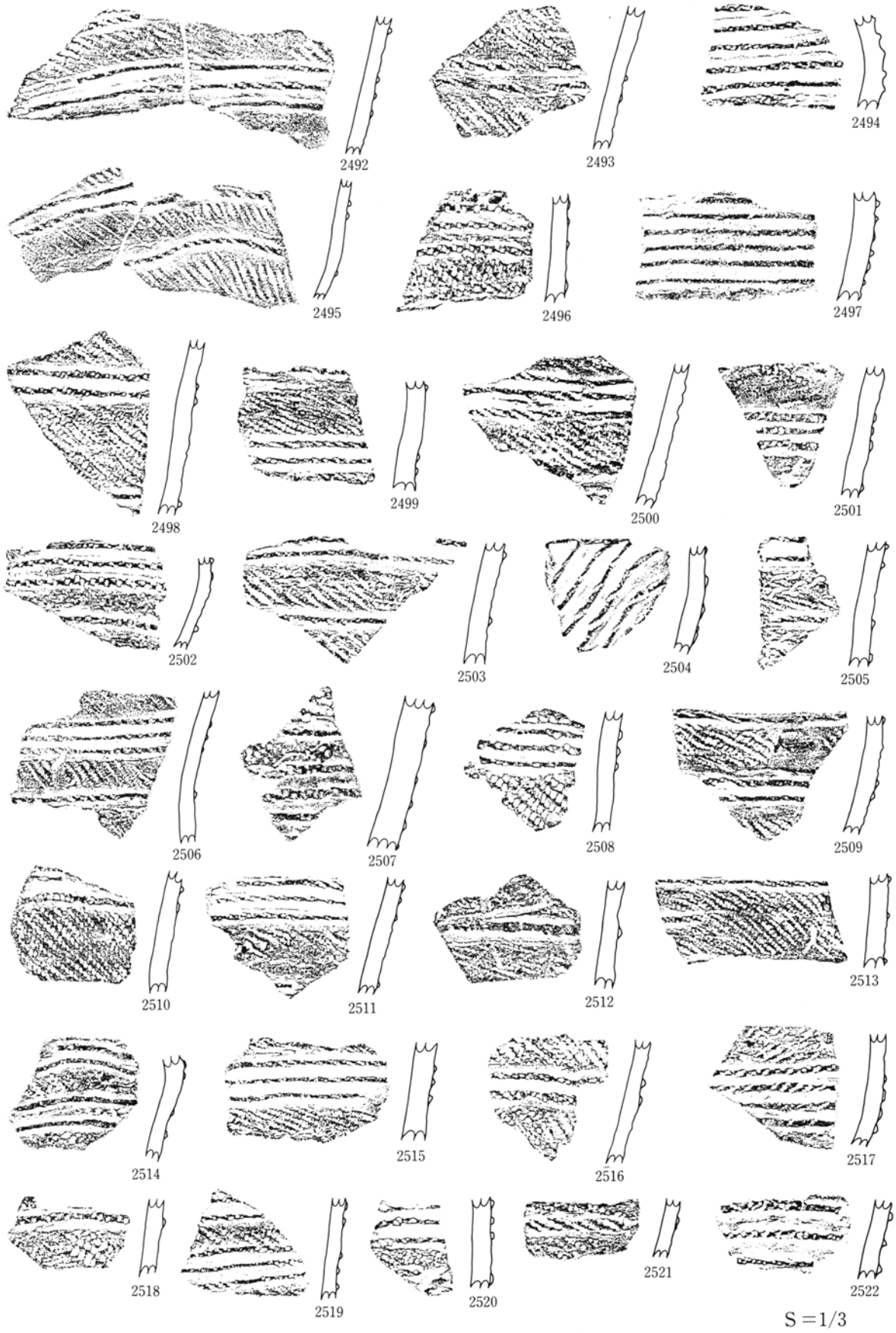
S＝1/3

第200図　遺構外Ｃ区出土土器（71）



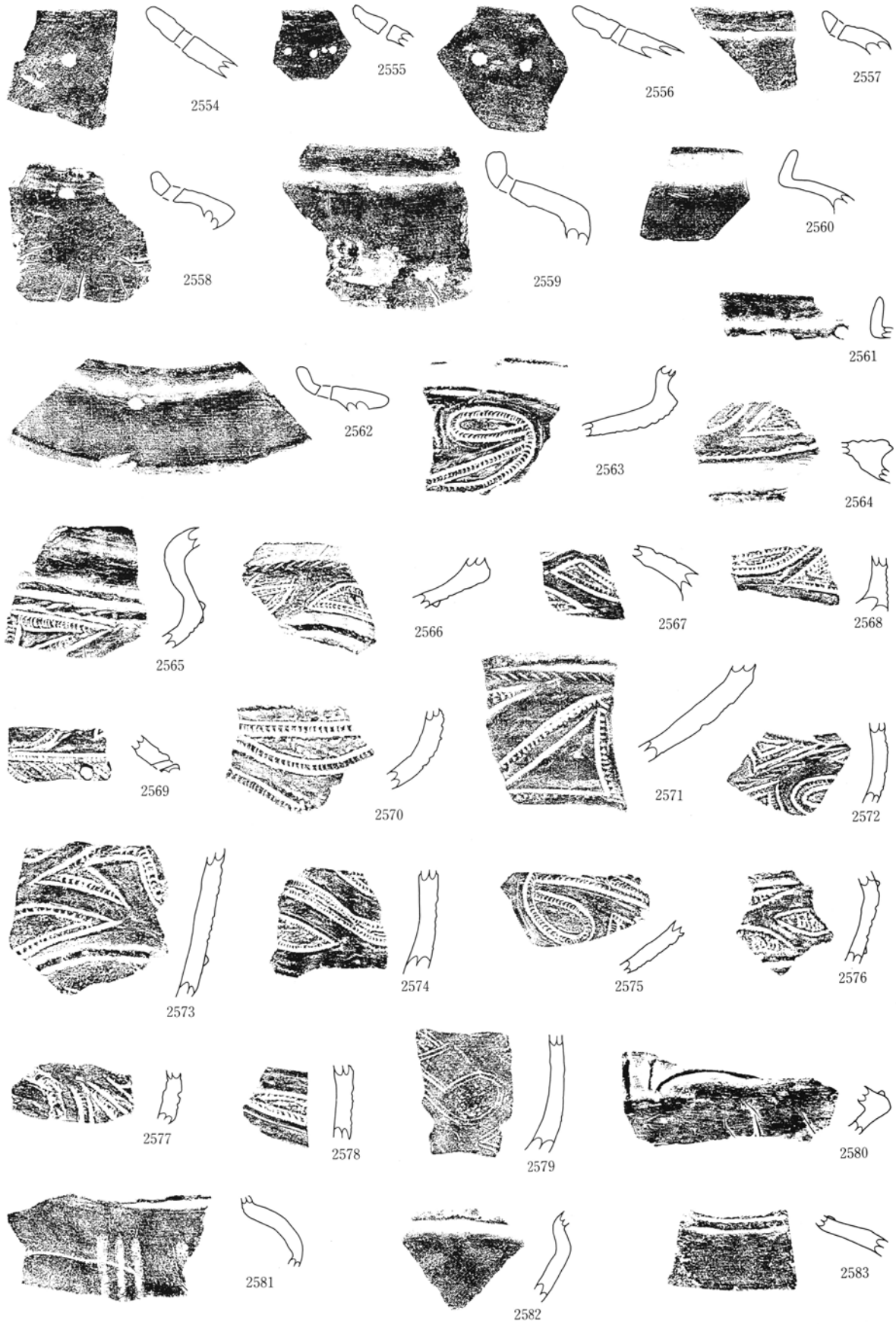
S＝1/3

第201図　遺構外Ｃ区出土土器（72）



第202図　遺構外Ｃ区出土土器（73）

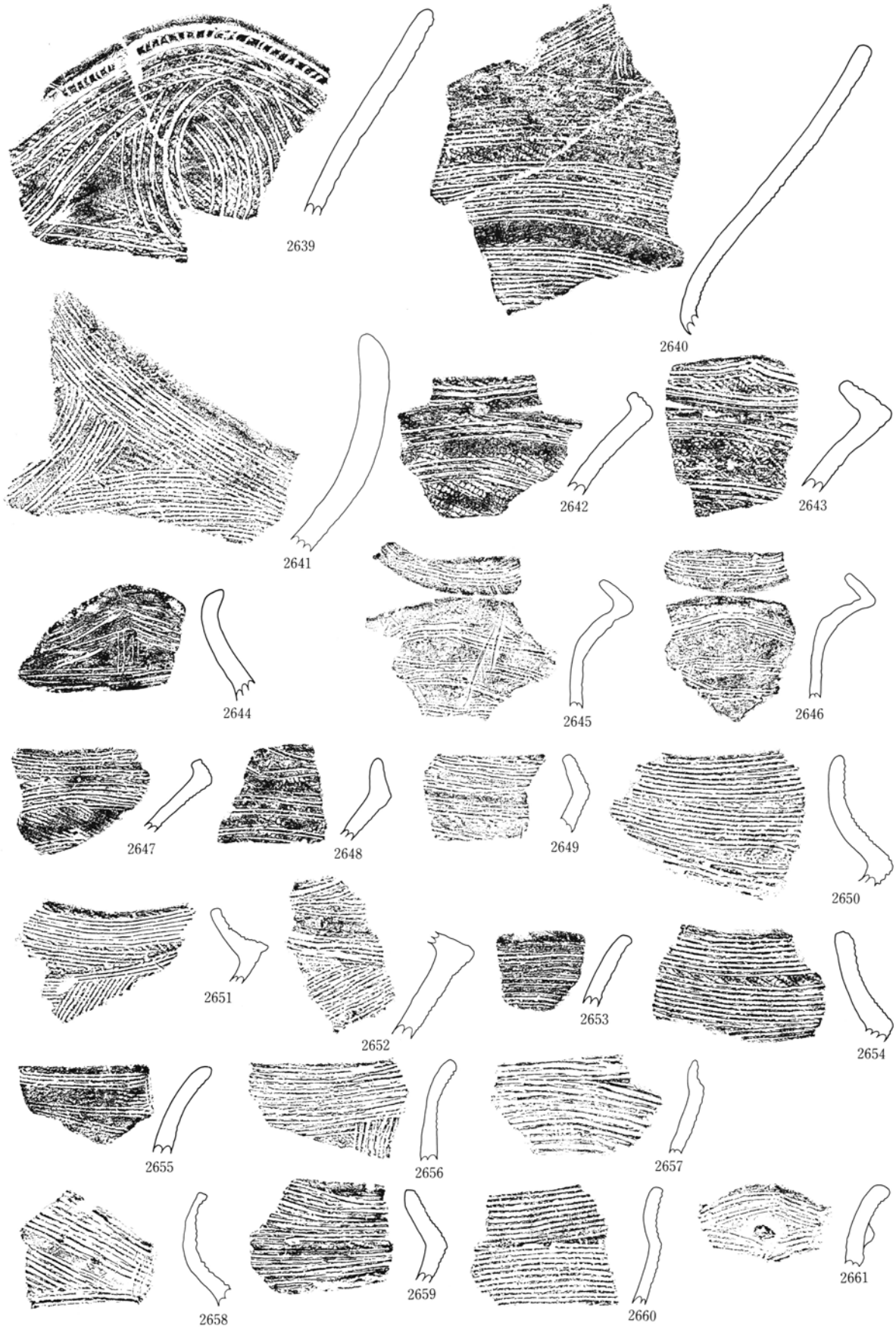
第203図　遺構外Ｃ区出土土器（74）　　Ｓ＝1/3



第204図　遺構外Ｃ区出土土器（75）　　Ｓ＝1/3

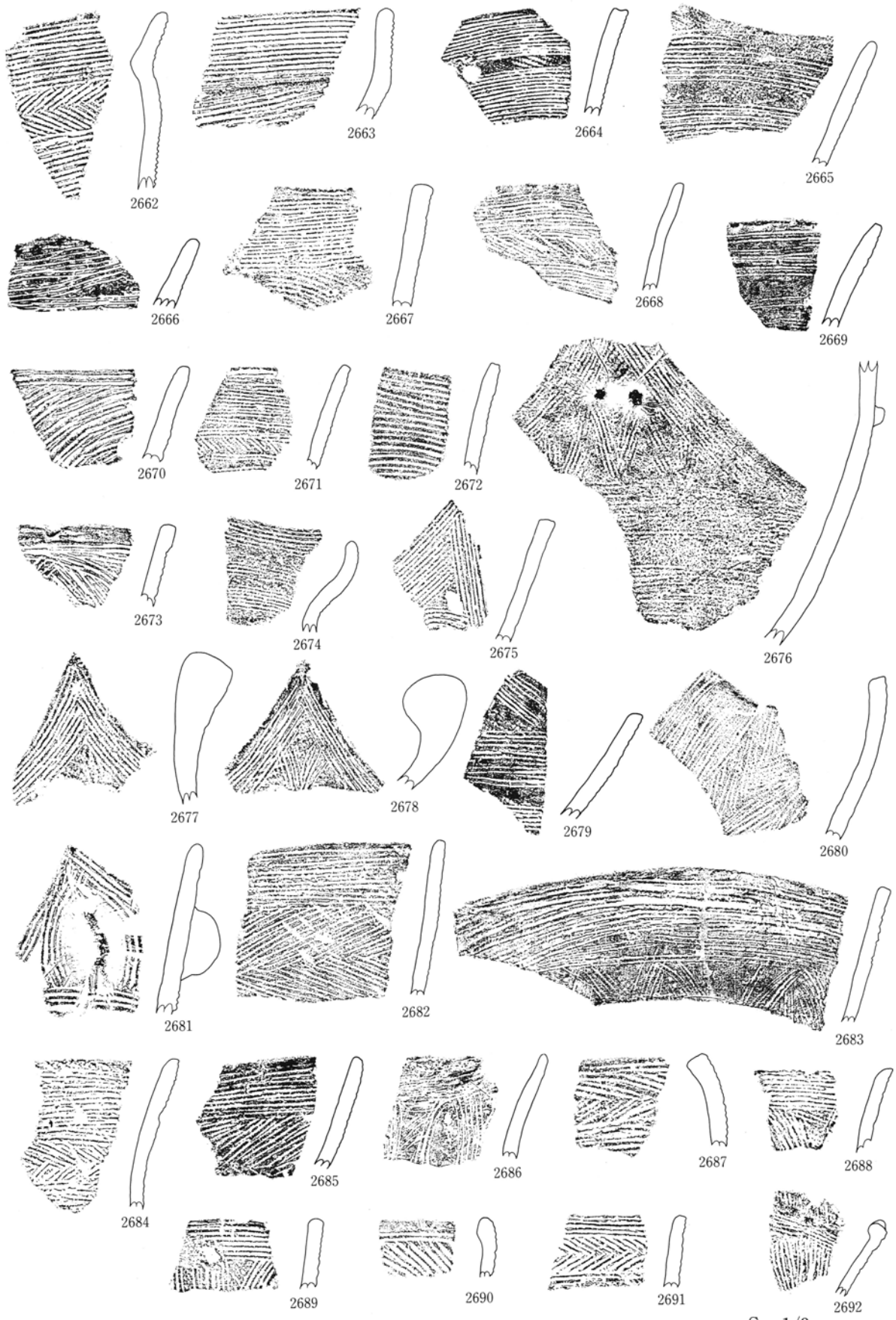
第205図　遺構外Ｃ区出土土器（76）　　Ｓ＝1/3

第206図　遺構外Ｃ区出土土器（77）　　Ｓ＝1/3

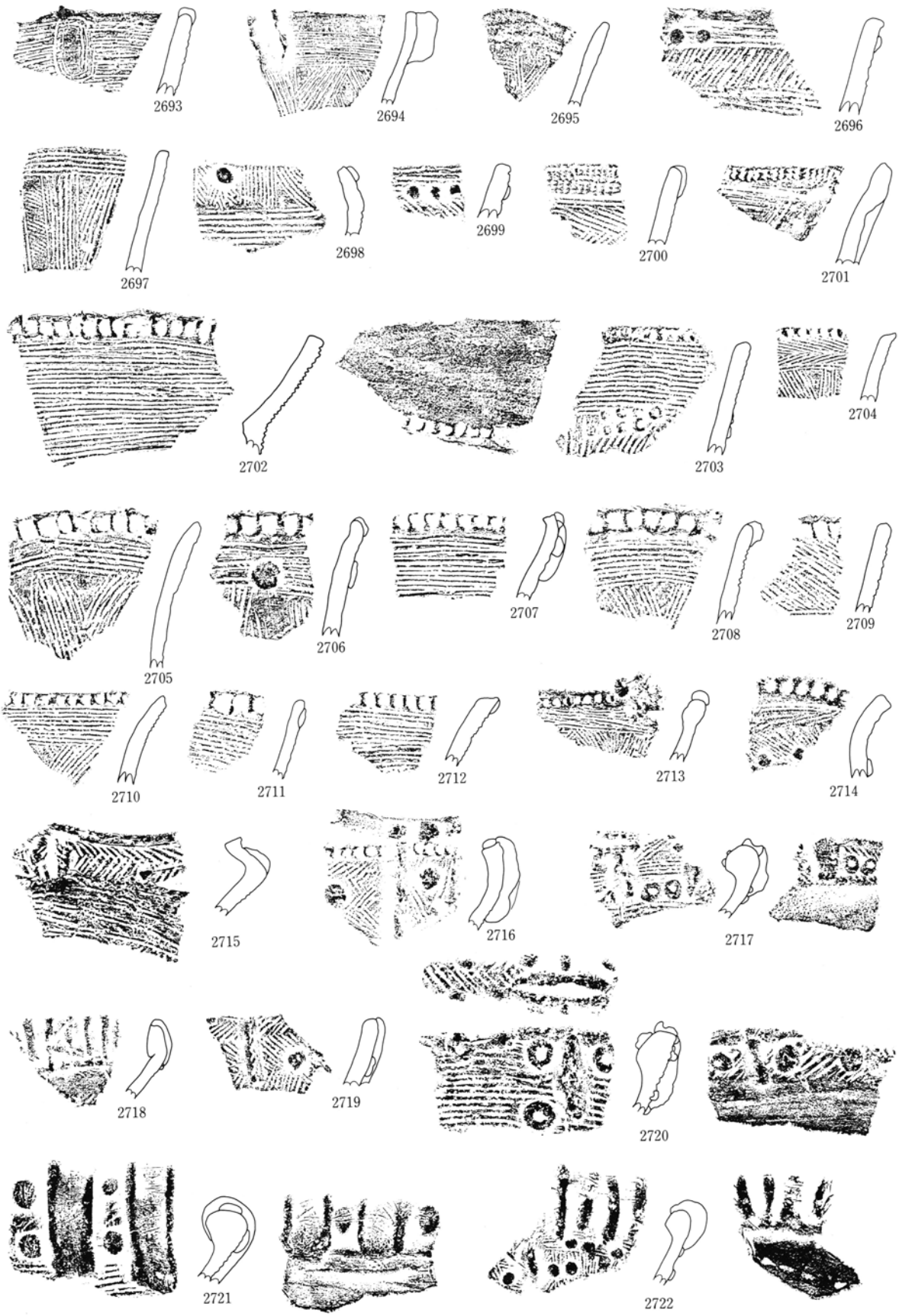


第207図　遺構外Ｃ区出土土器（78）

Ｓ＝1/3

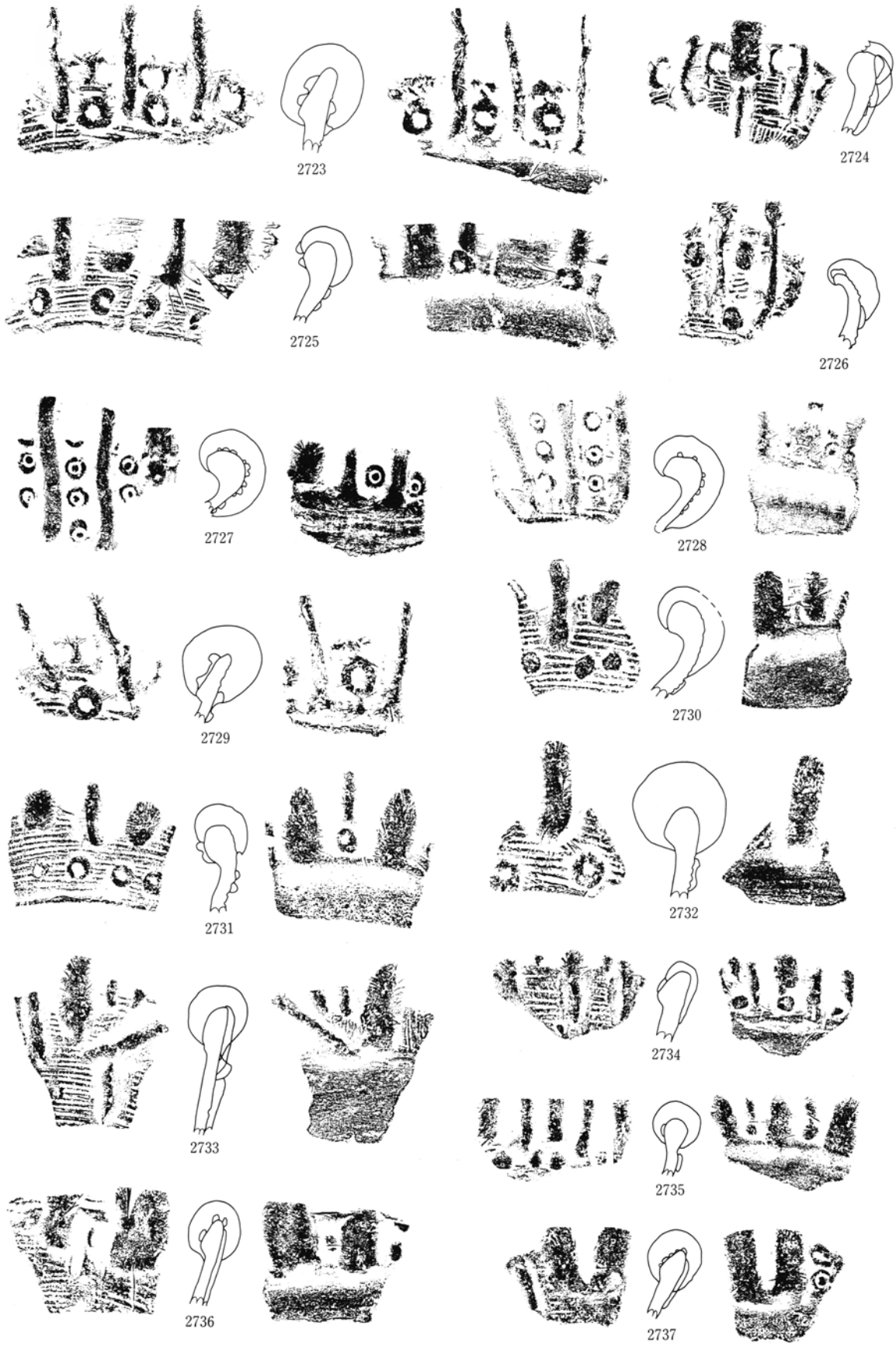


第208図　遺構外Ｃ区出土土器（79）　　Ｓ＝1/3



S＝1/3

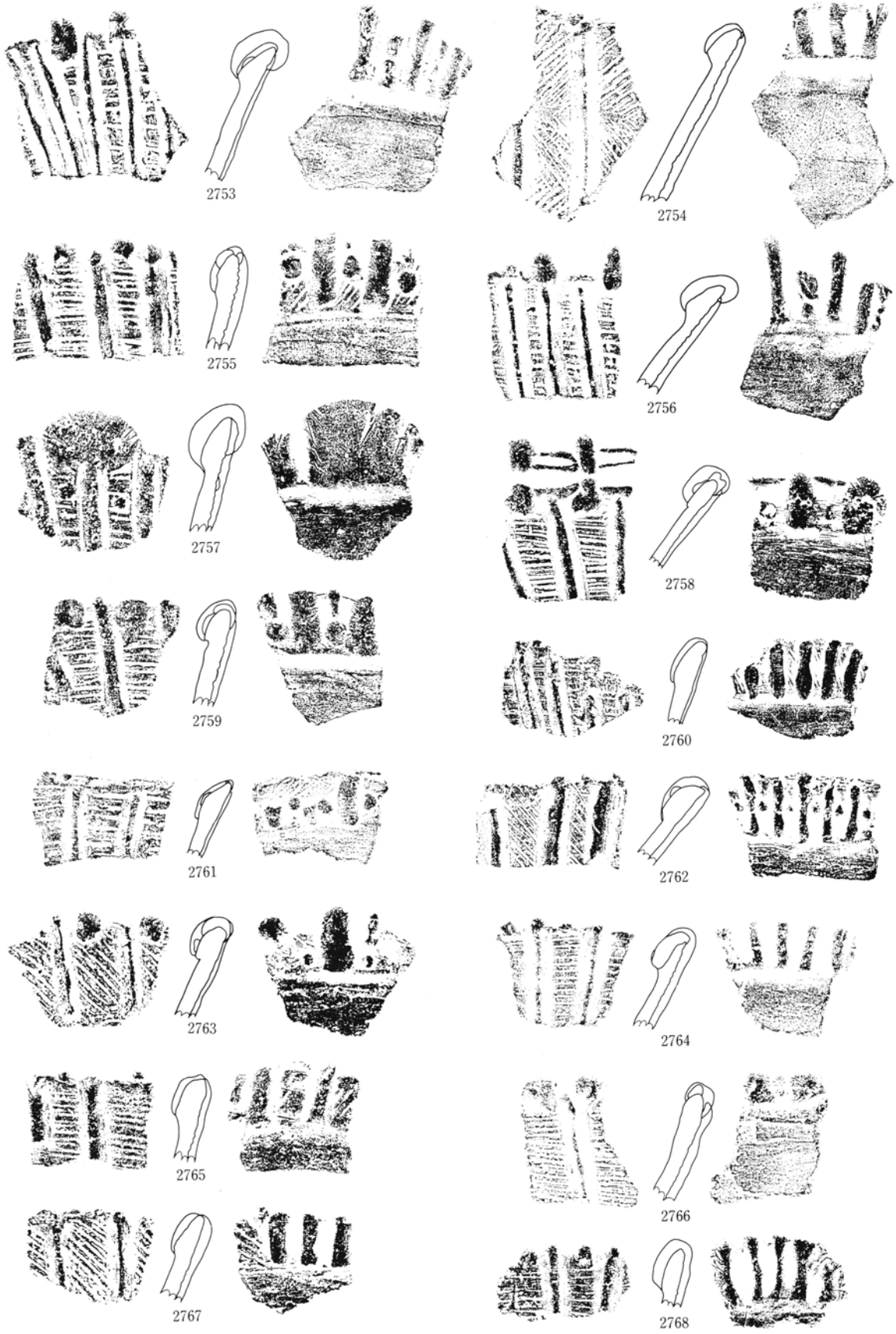
第209図　遺構外Ｃ区出土土器（80）



S＝1/3

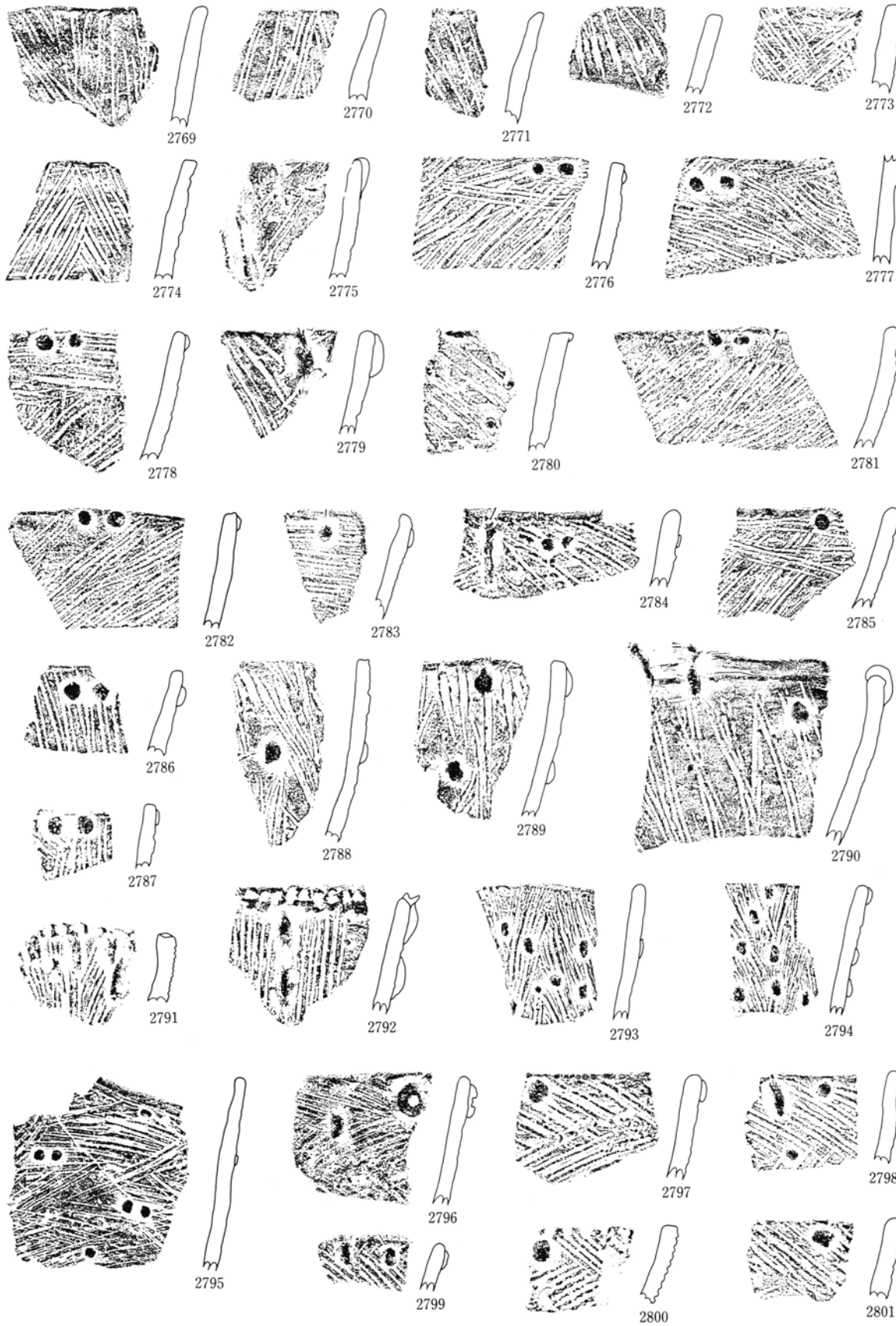
第210図　遺構外Ｃ区出土土器（81）

第211図　遺構外Ｃ区出土土器（82）



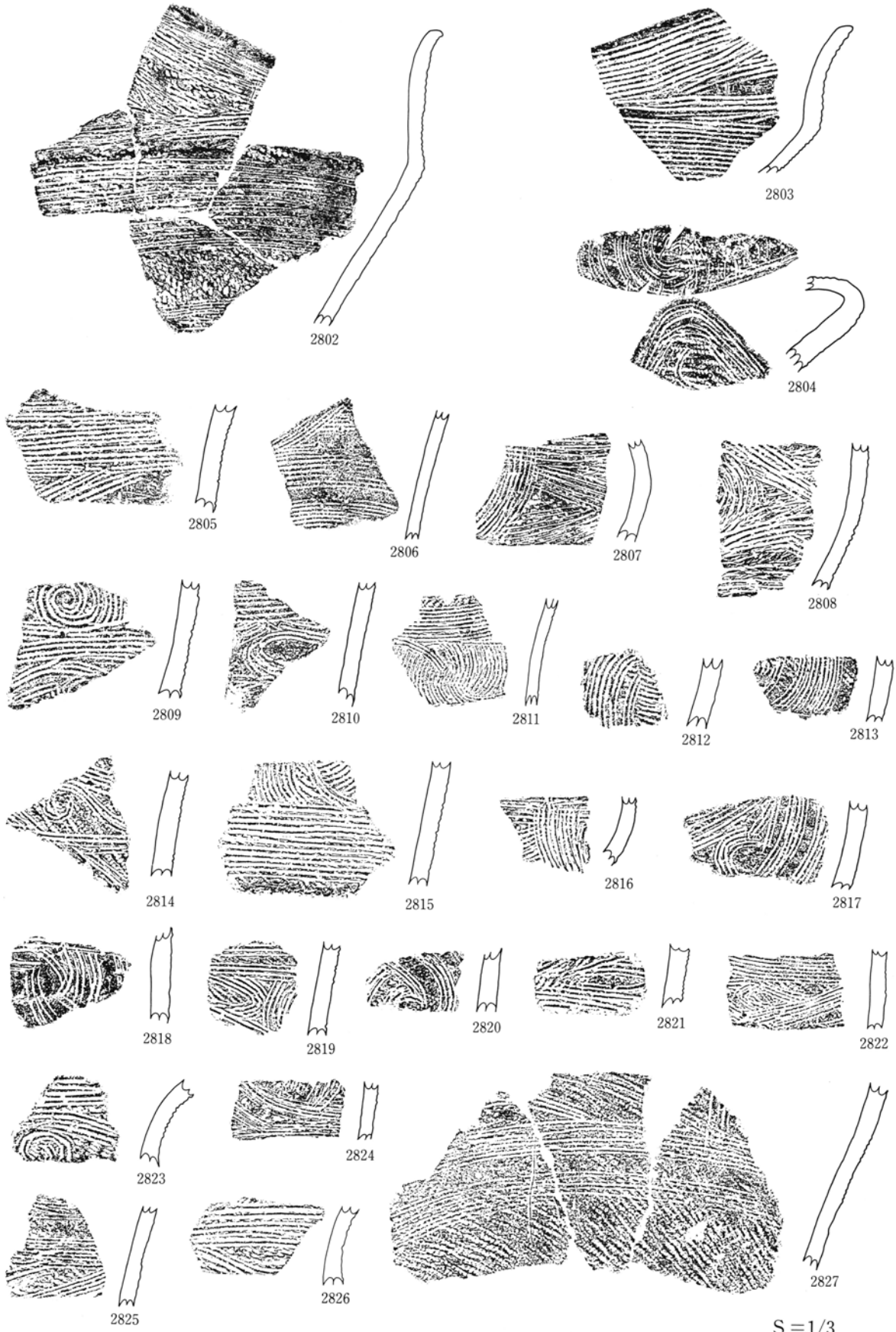
S＝1/3

第212図　遺構外Ｃ区出土土器（83）



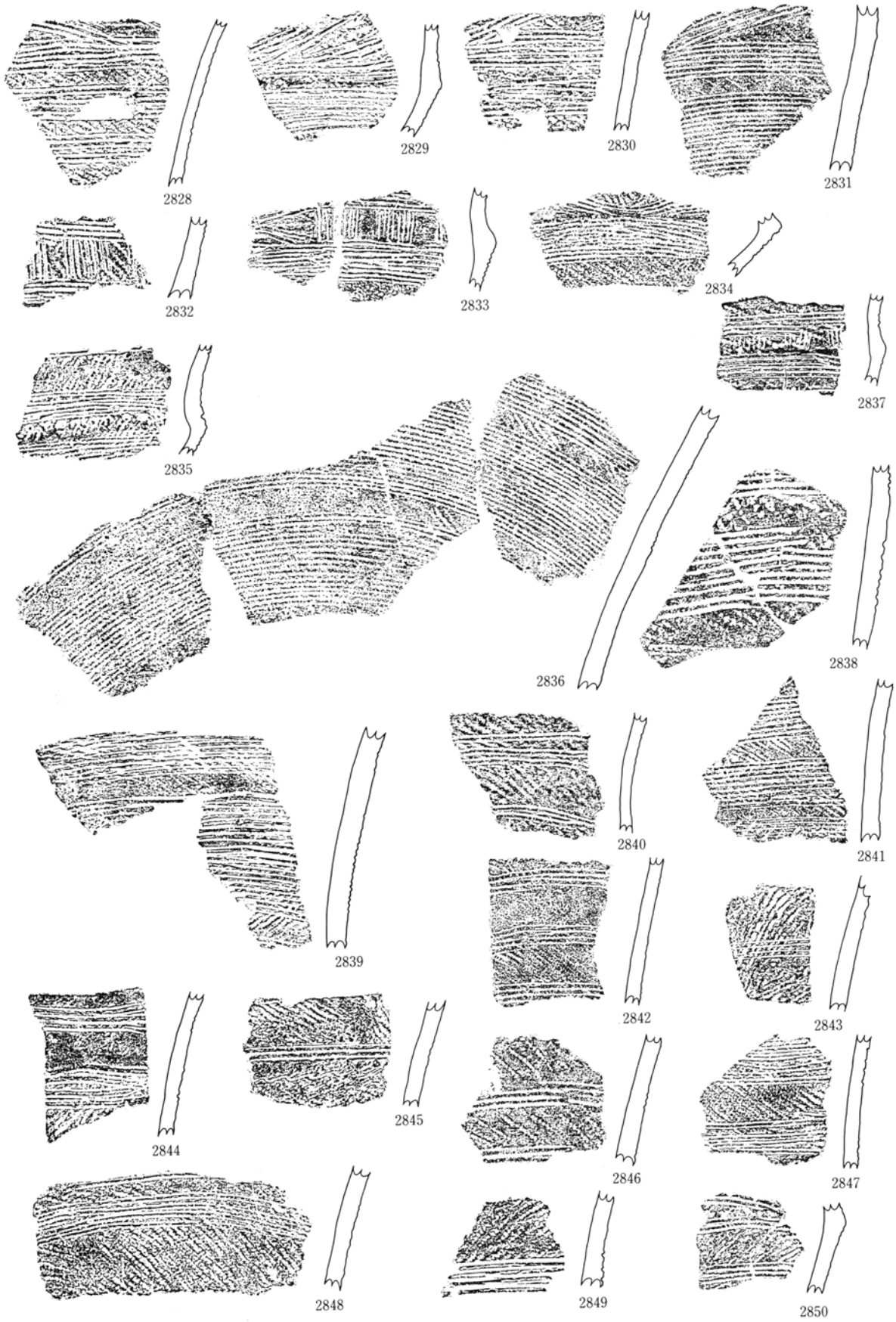
S＝1/3

第213図　遺構外Ｃ区出土土器（84）

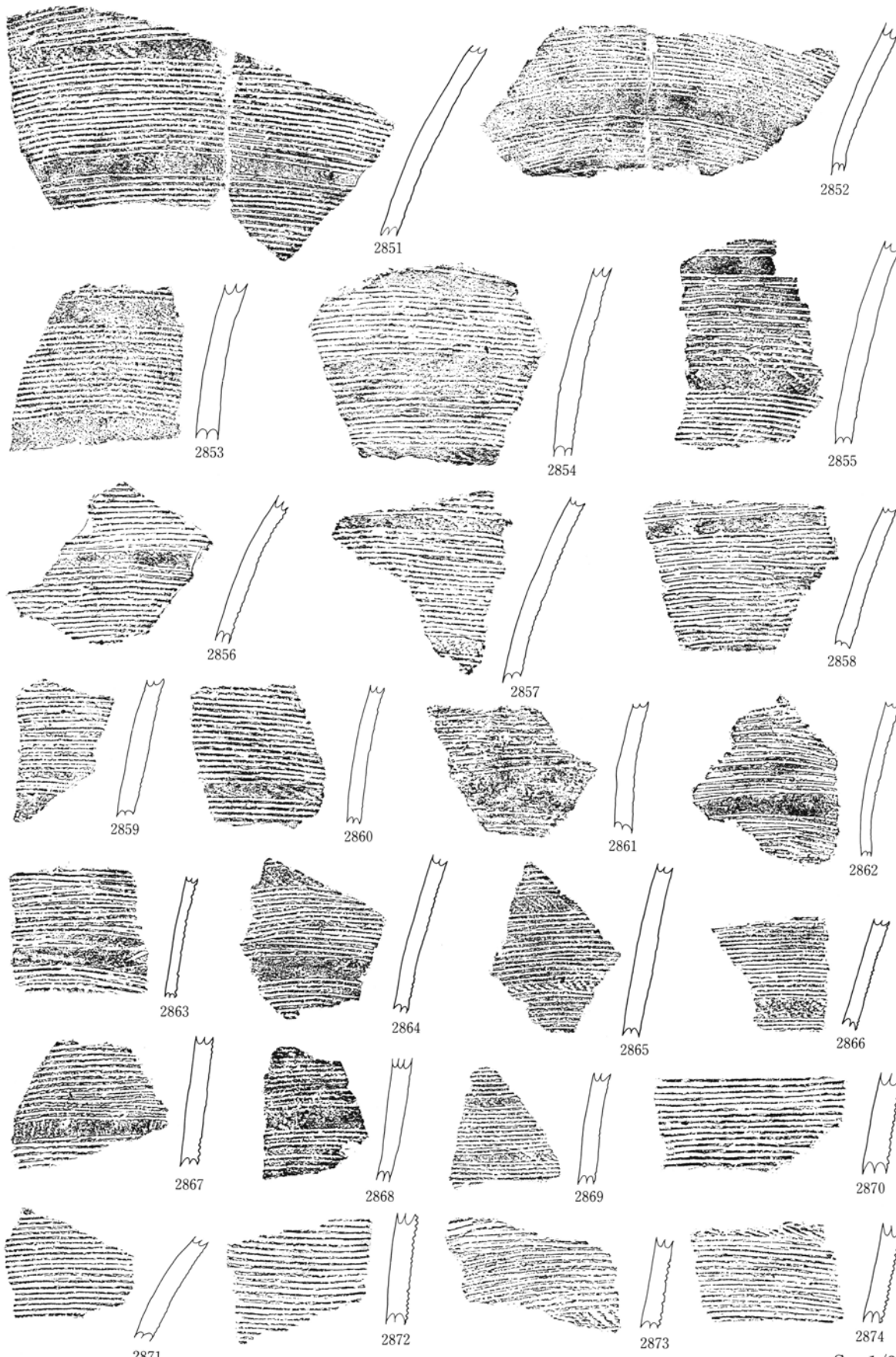


S＝1/3

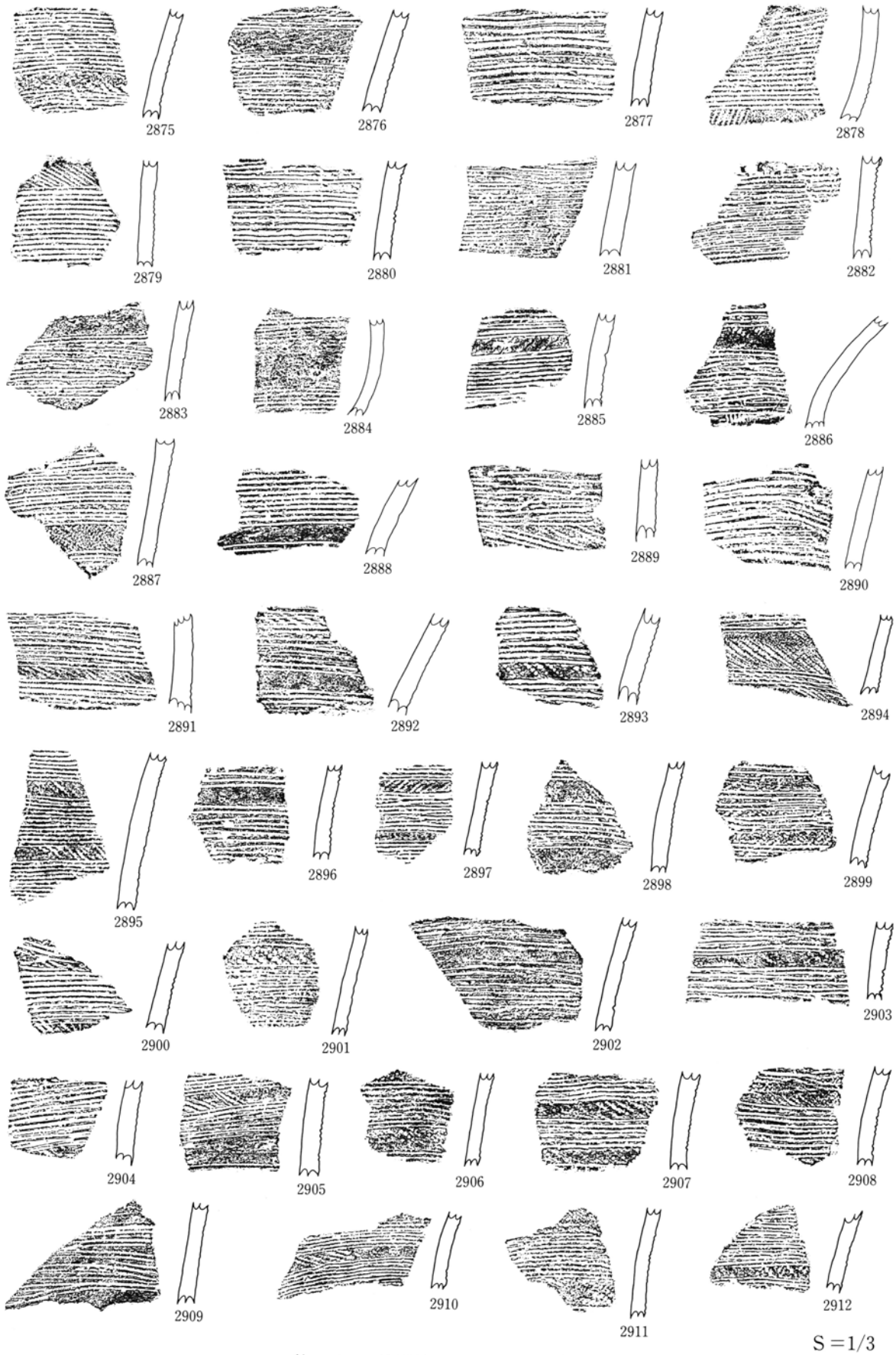
第214図　遺構外Ｃ区出土土器（85）



第215図　遺構外Ｃ区出土土器（86）　　Ｓ＝1/3

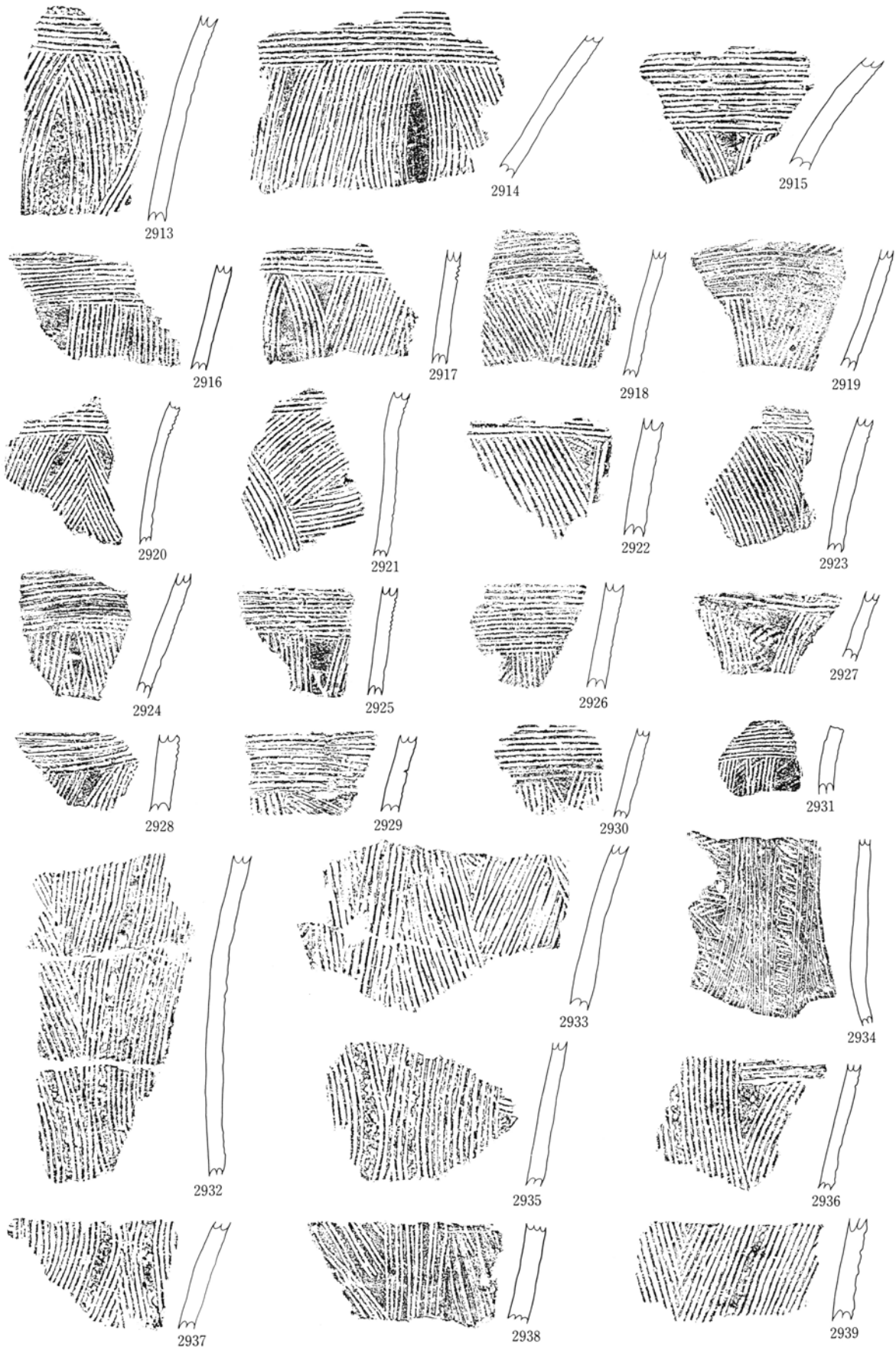


第216図　遺構外Ｃ区出土土器（87）　Ｓ＝1/3

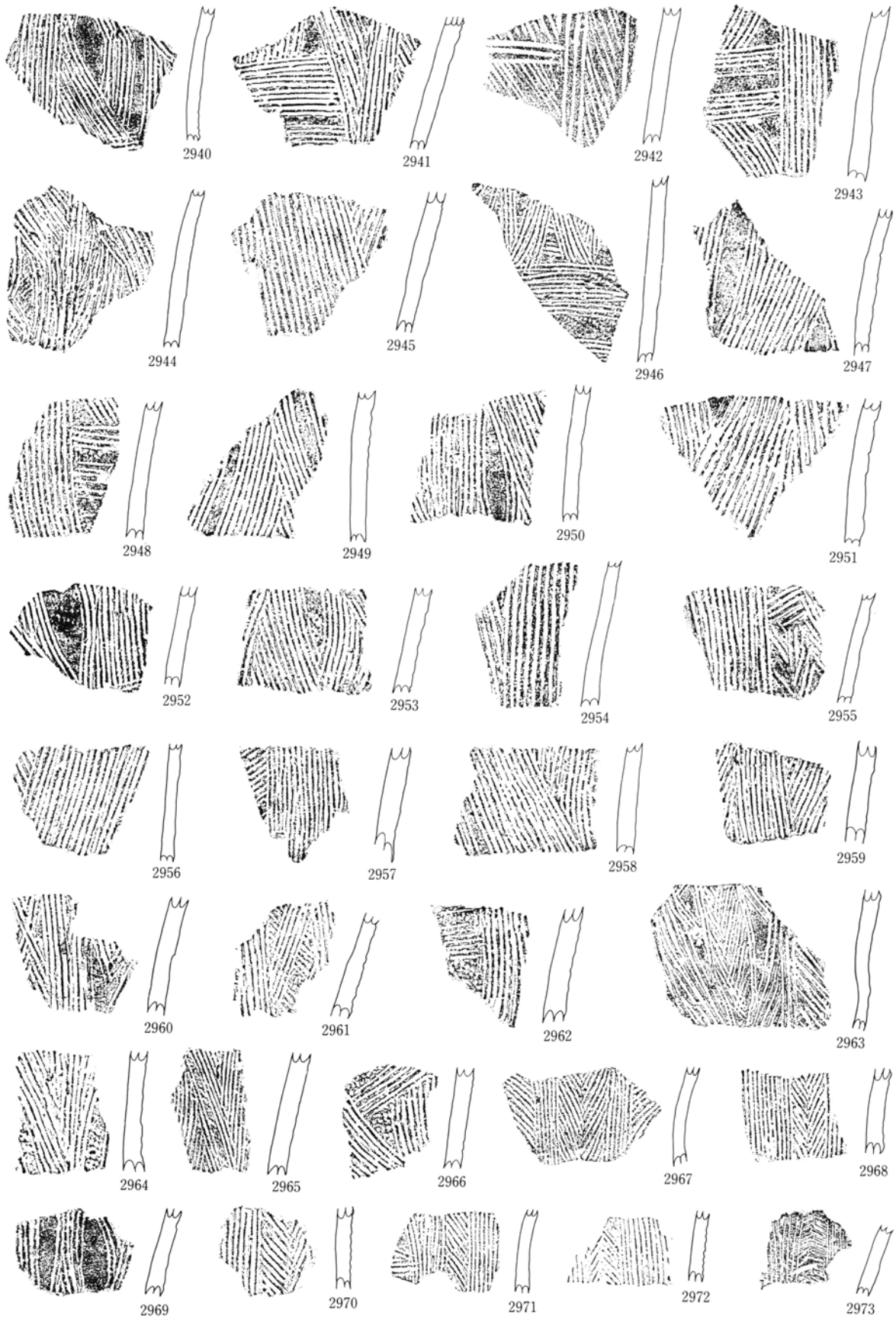


S＝1/3

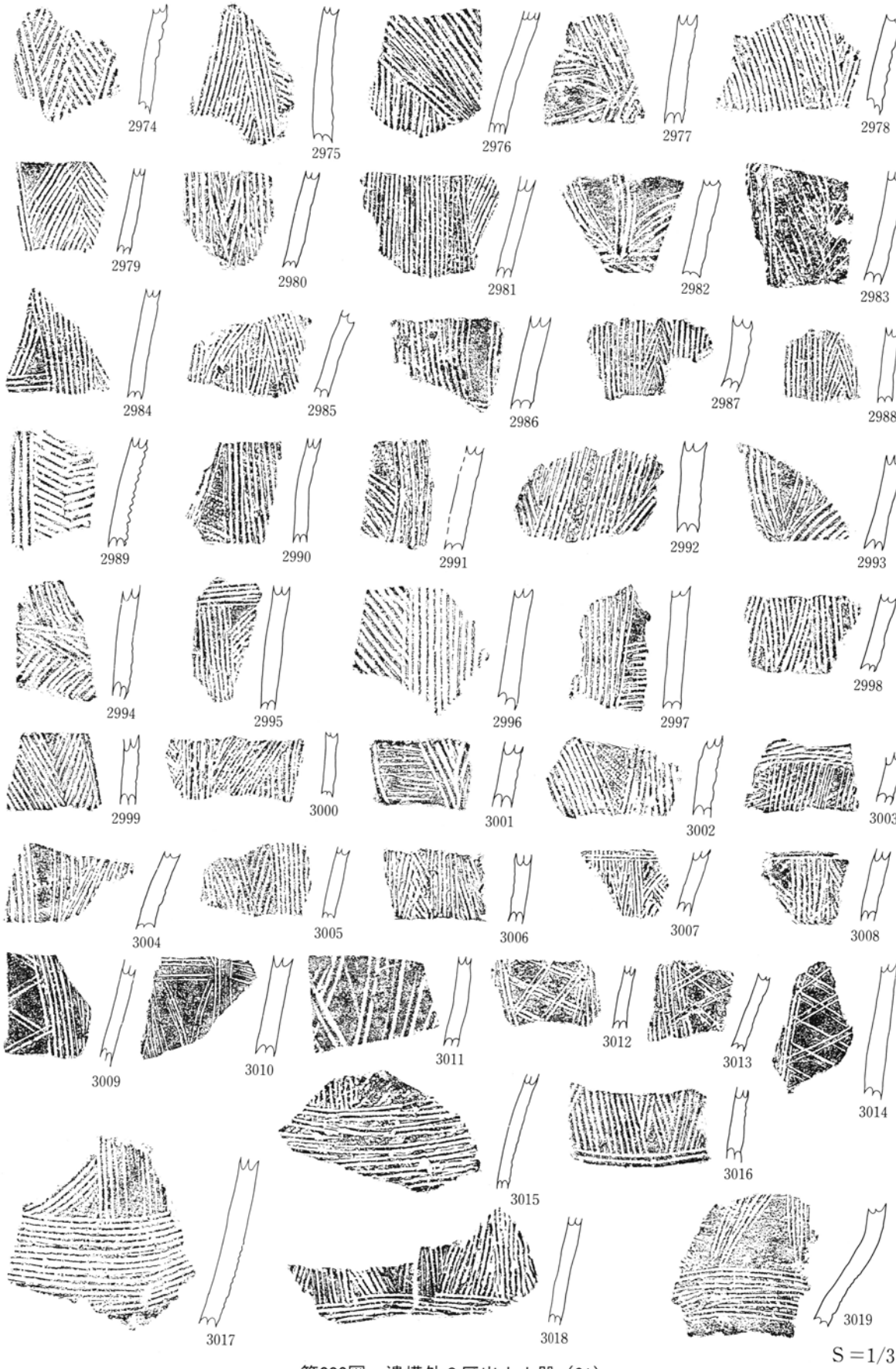
第217図　遺構外Ｃ区出土土器（88）



第218図　遺構外Ｃ区出土土器（89）　　Ｓ＝1/3

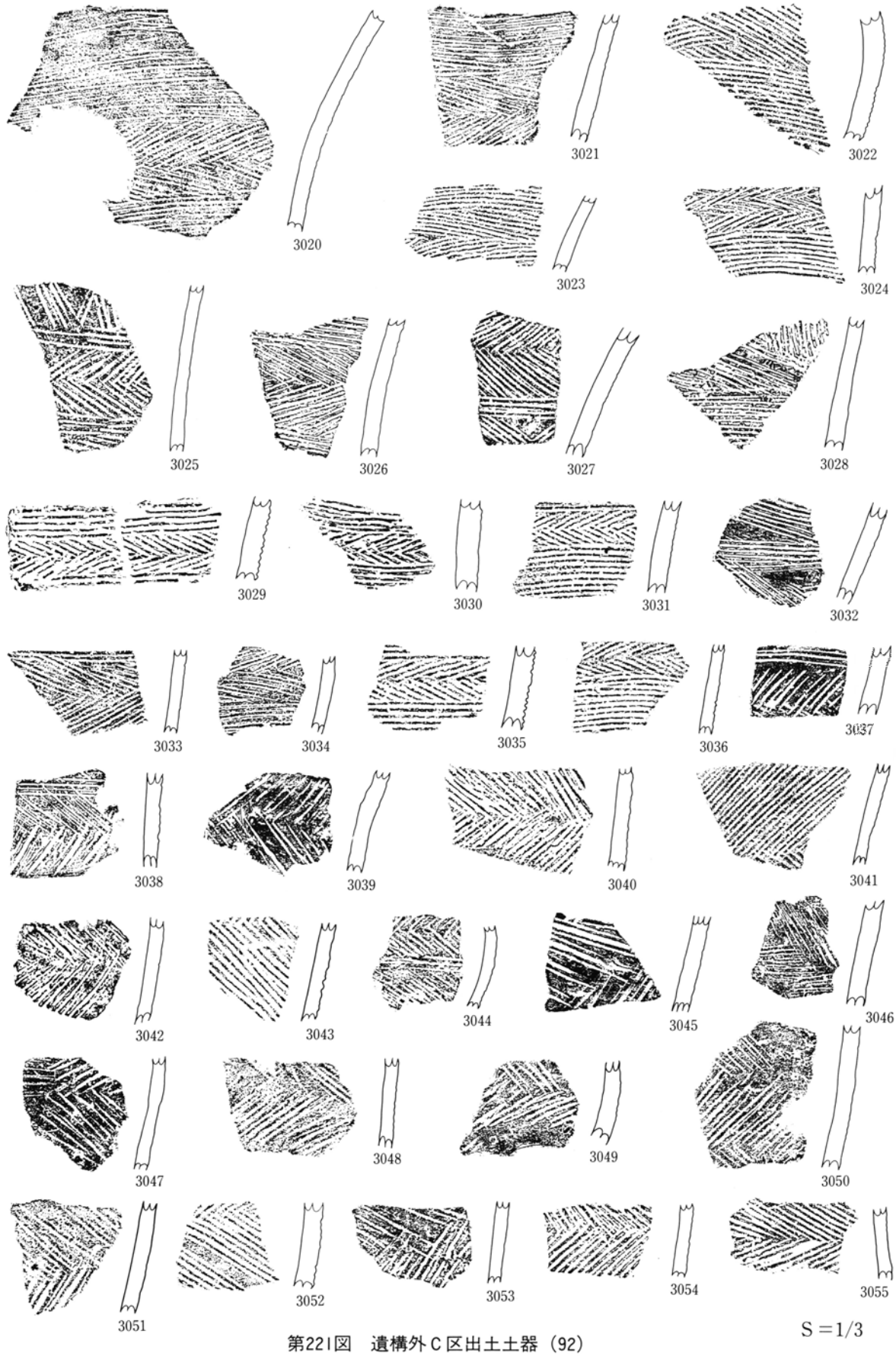


第219図　遺構外Ｃ区出土土器（90）　　Ｓ＝1/3



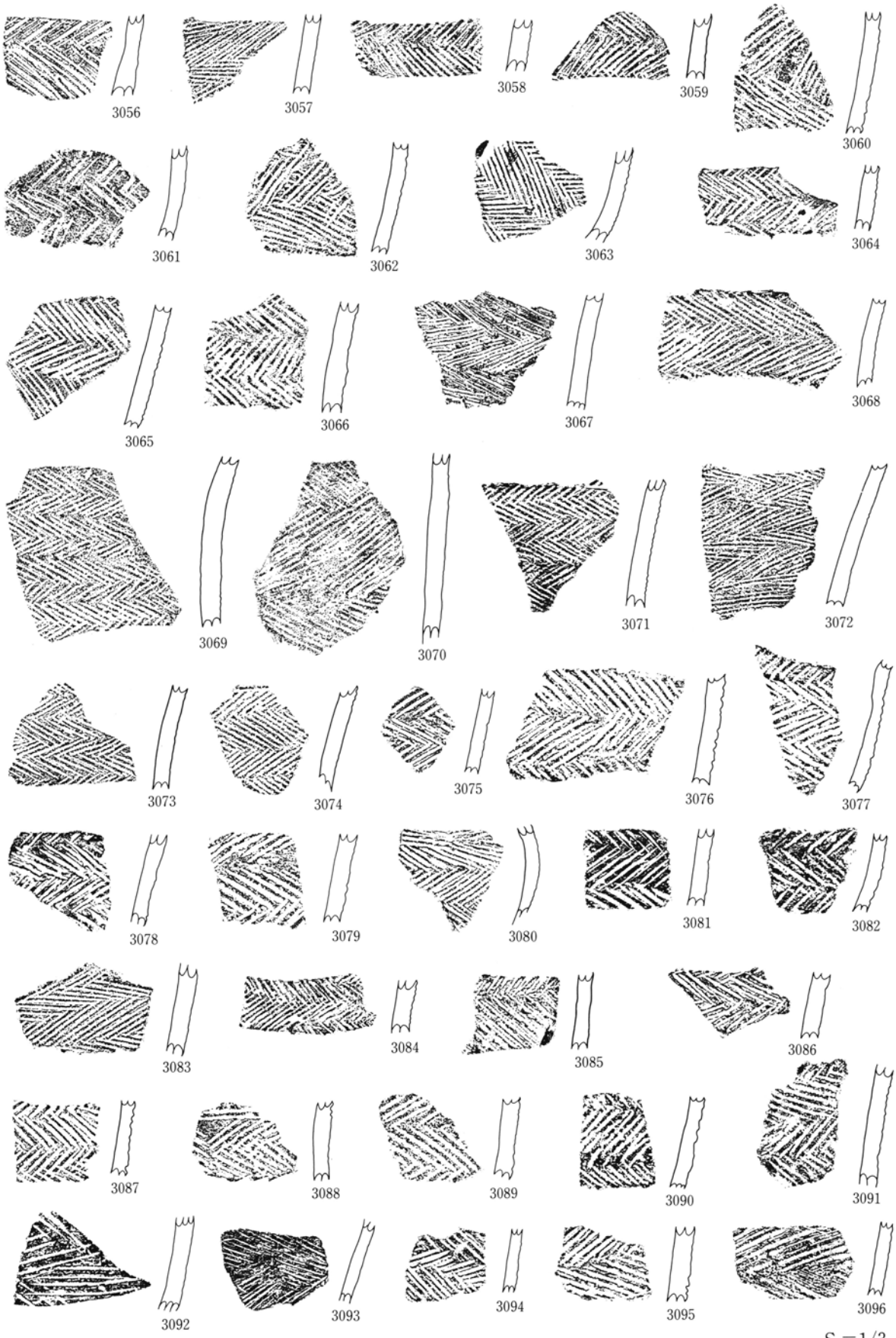
S＝1/3

第220図　遺構外Ｃ区出土土器（91）



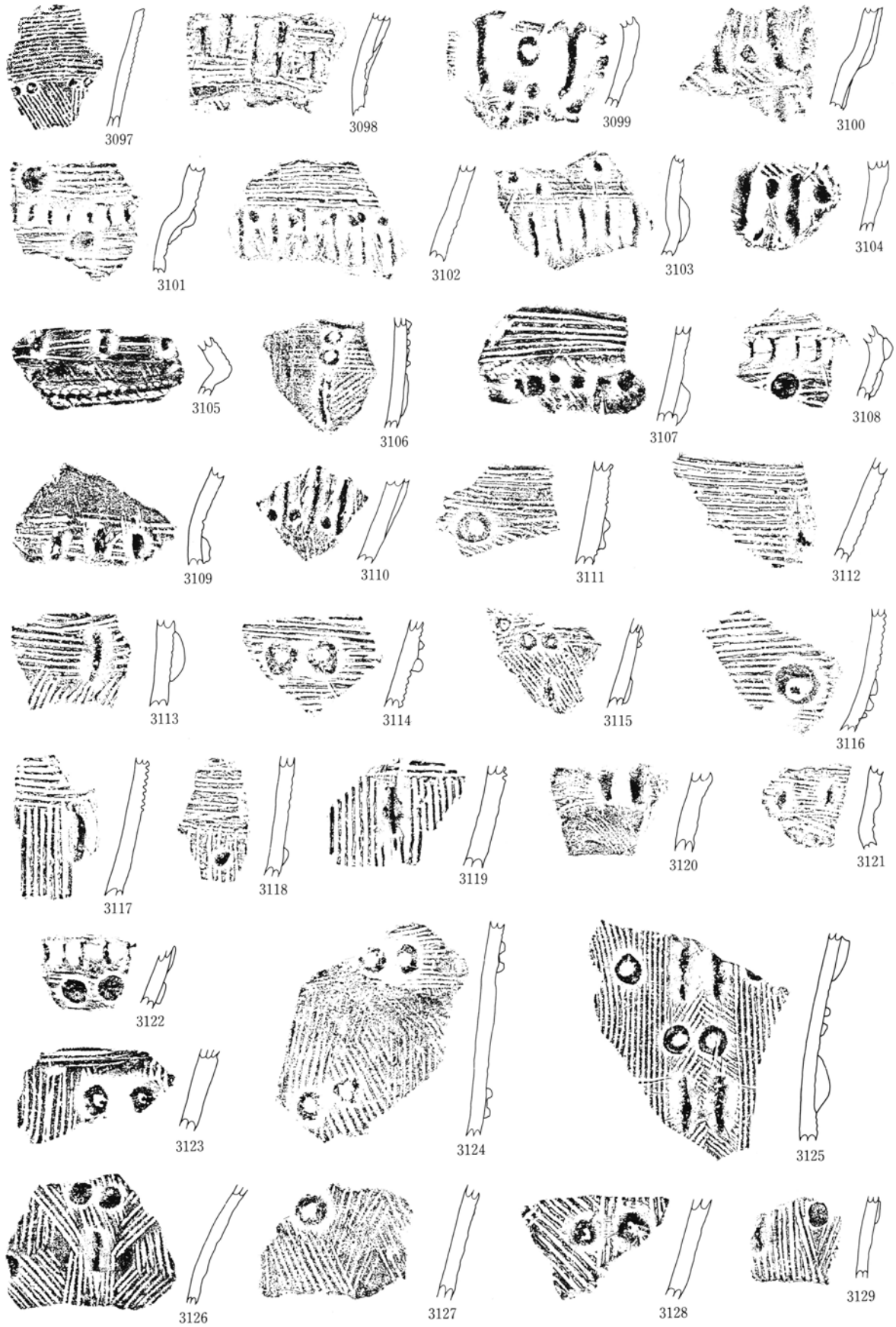
S＝1/3

第221図　遺構外Ｃ区出土土器（92）



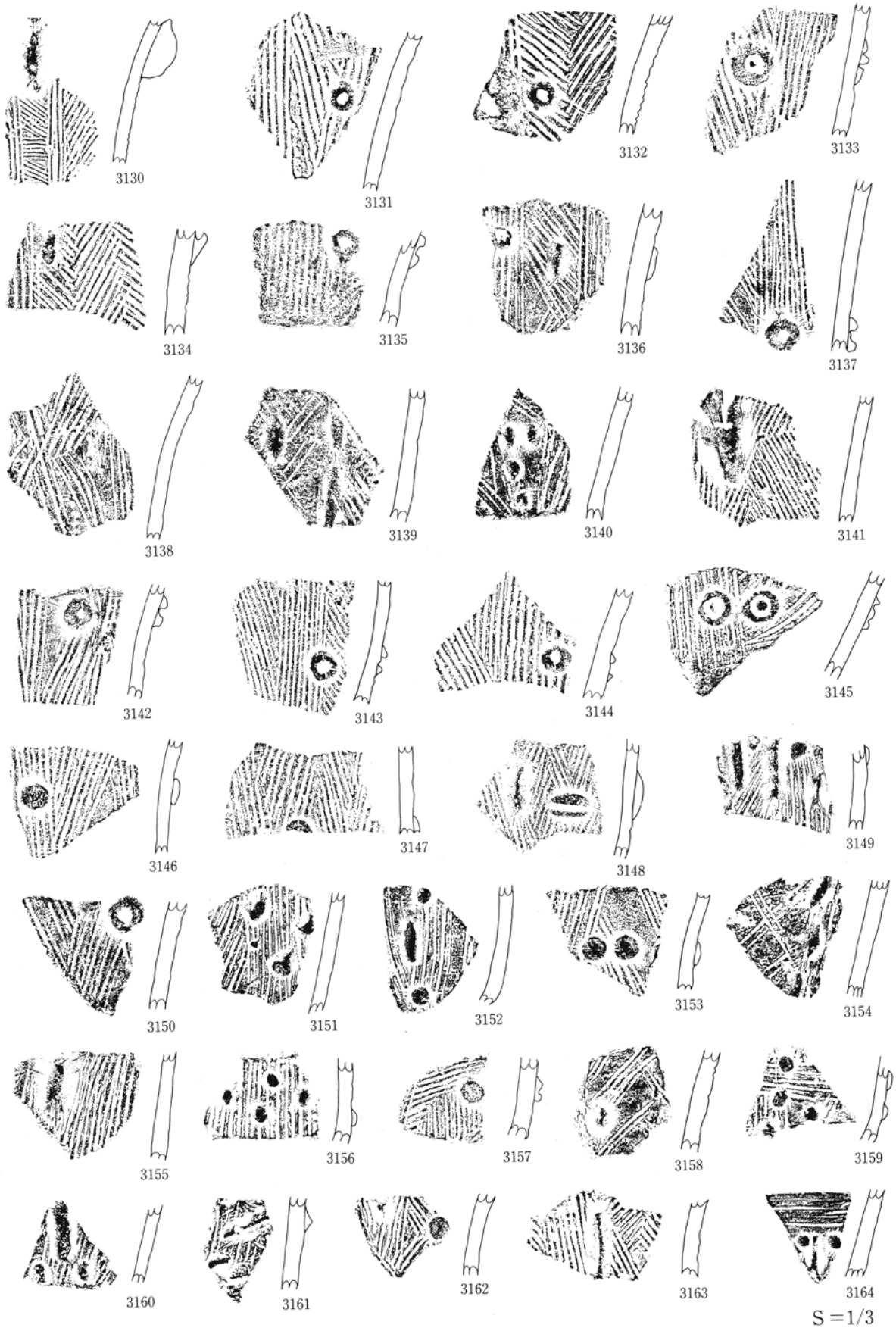
S＝1/3

第222図　遺構外Ｃ区出土土器（93）

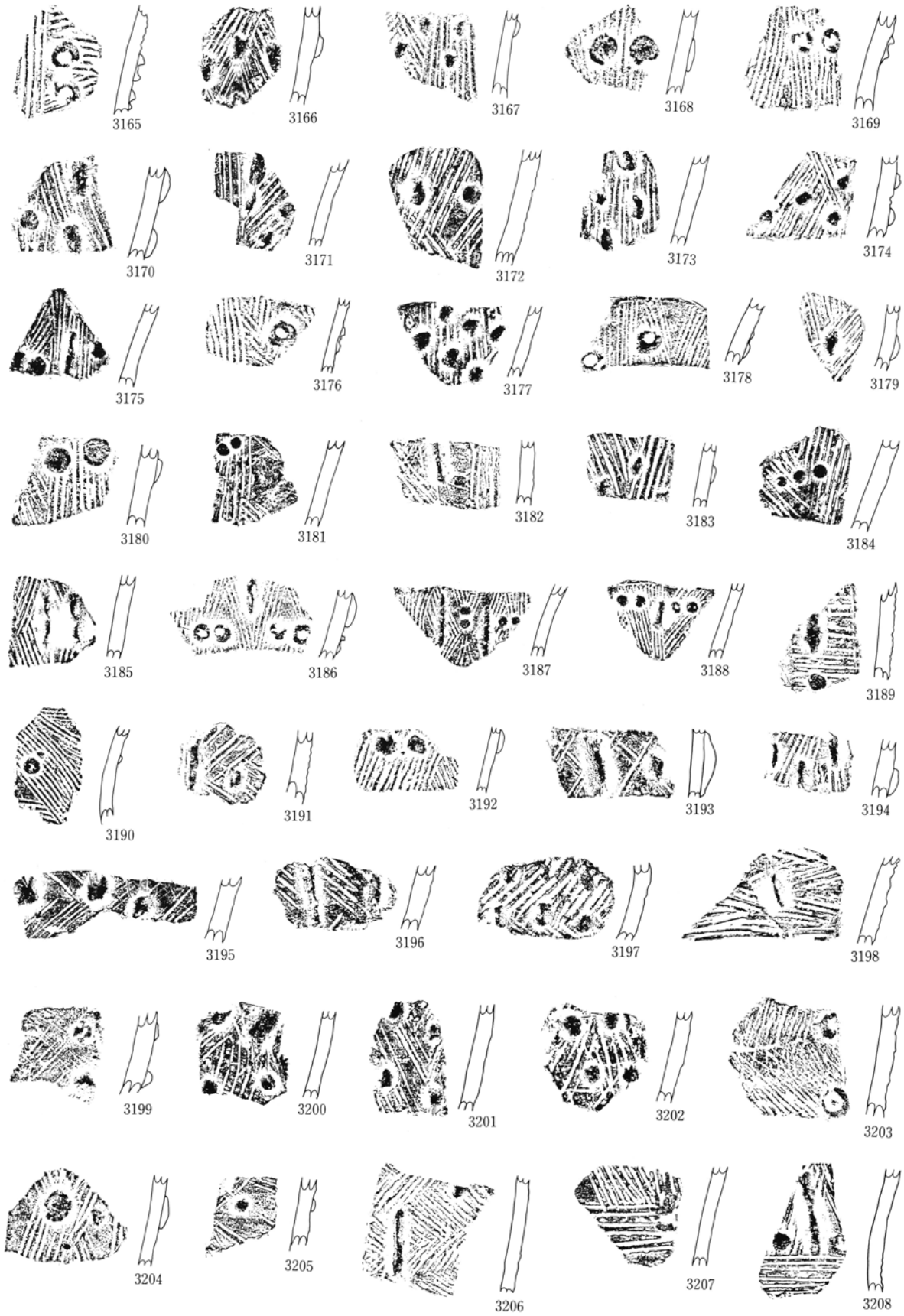


S＝1/3

第223図　遺構外Ｃ区出土土器（94）

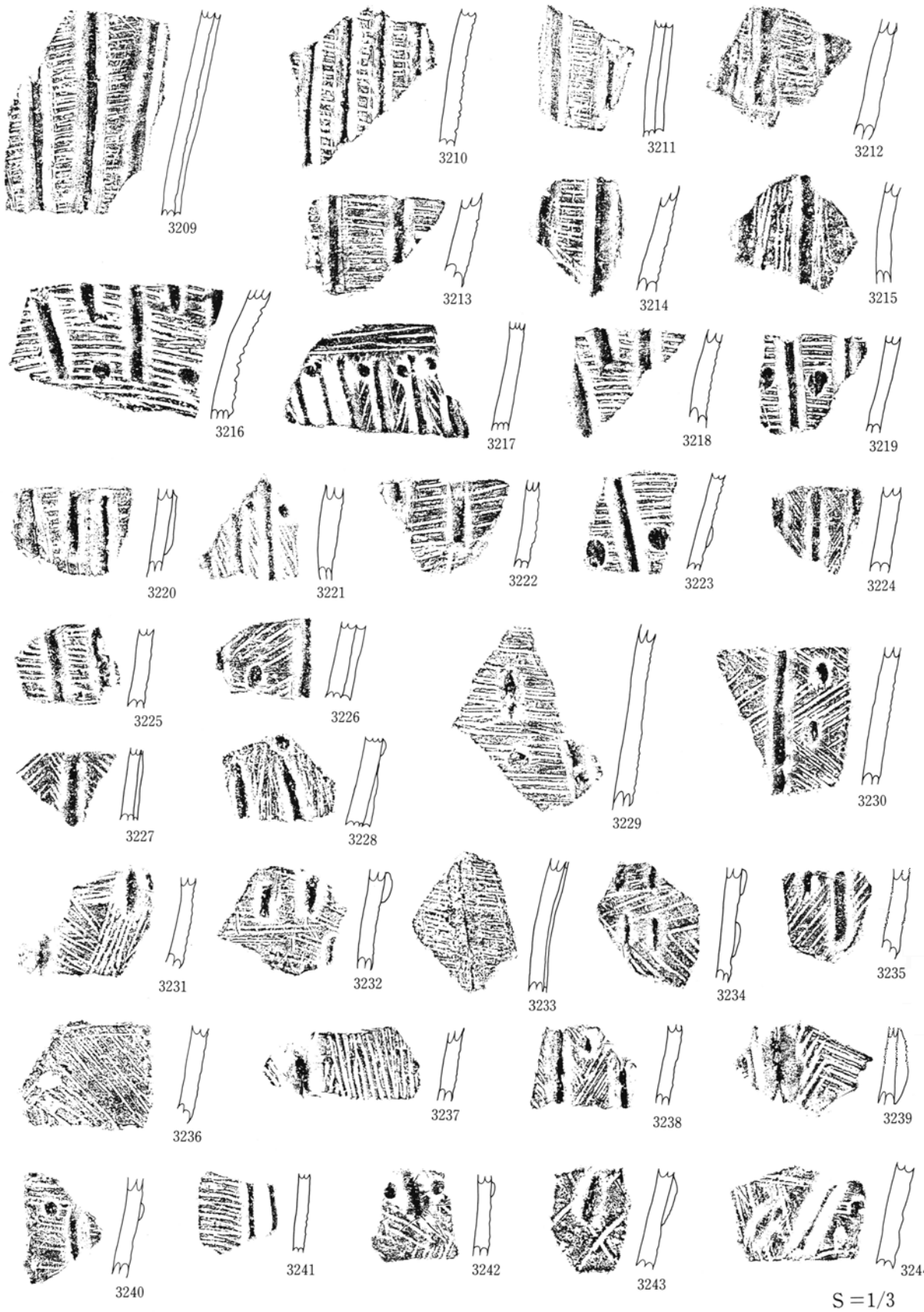


第224図　遺構外Ｃ区出土土器（95）

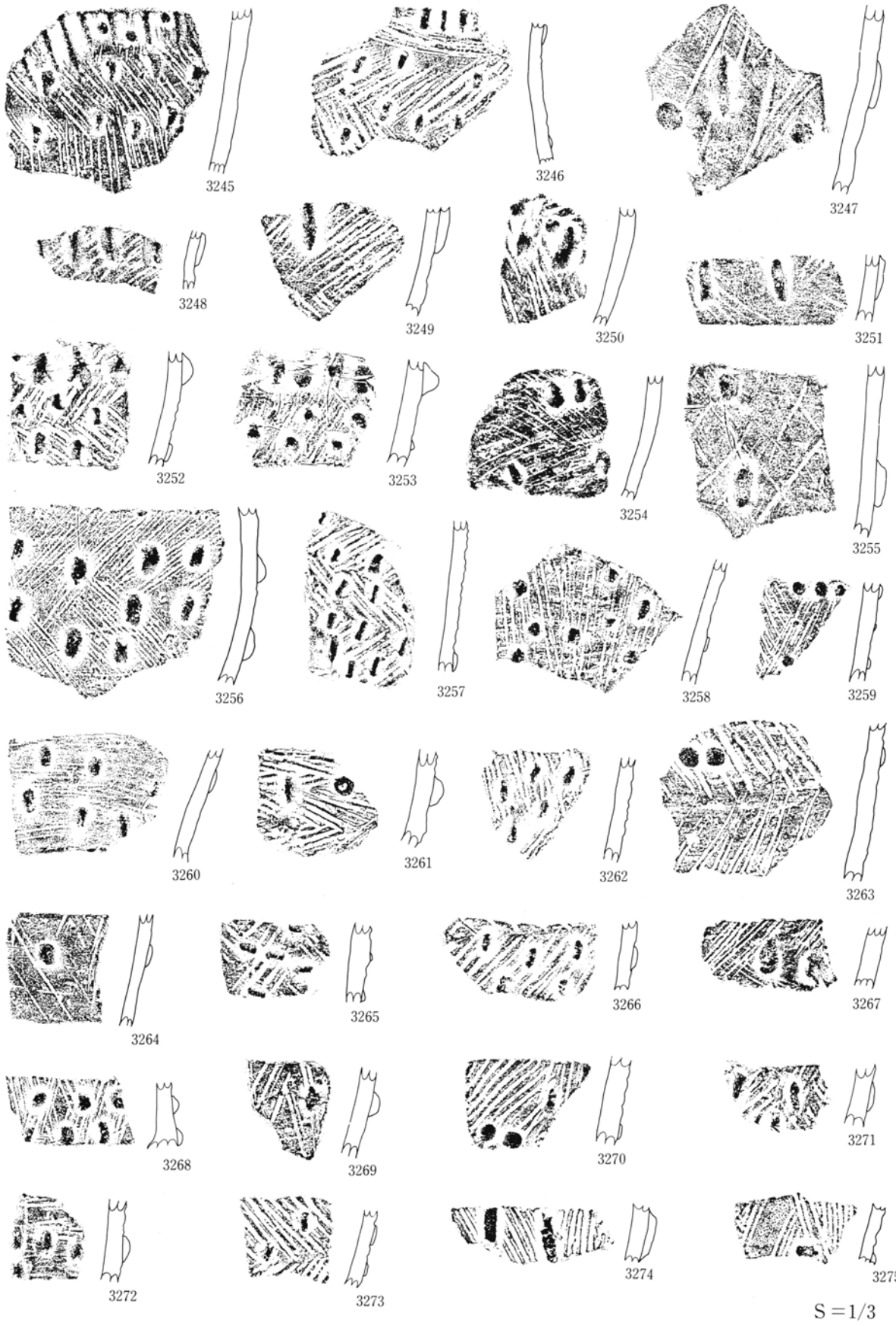


S＝1/3

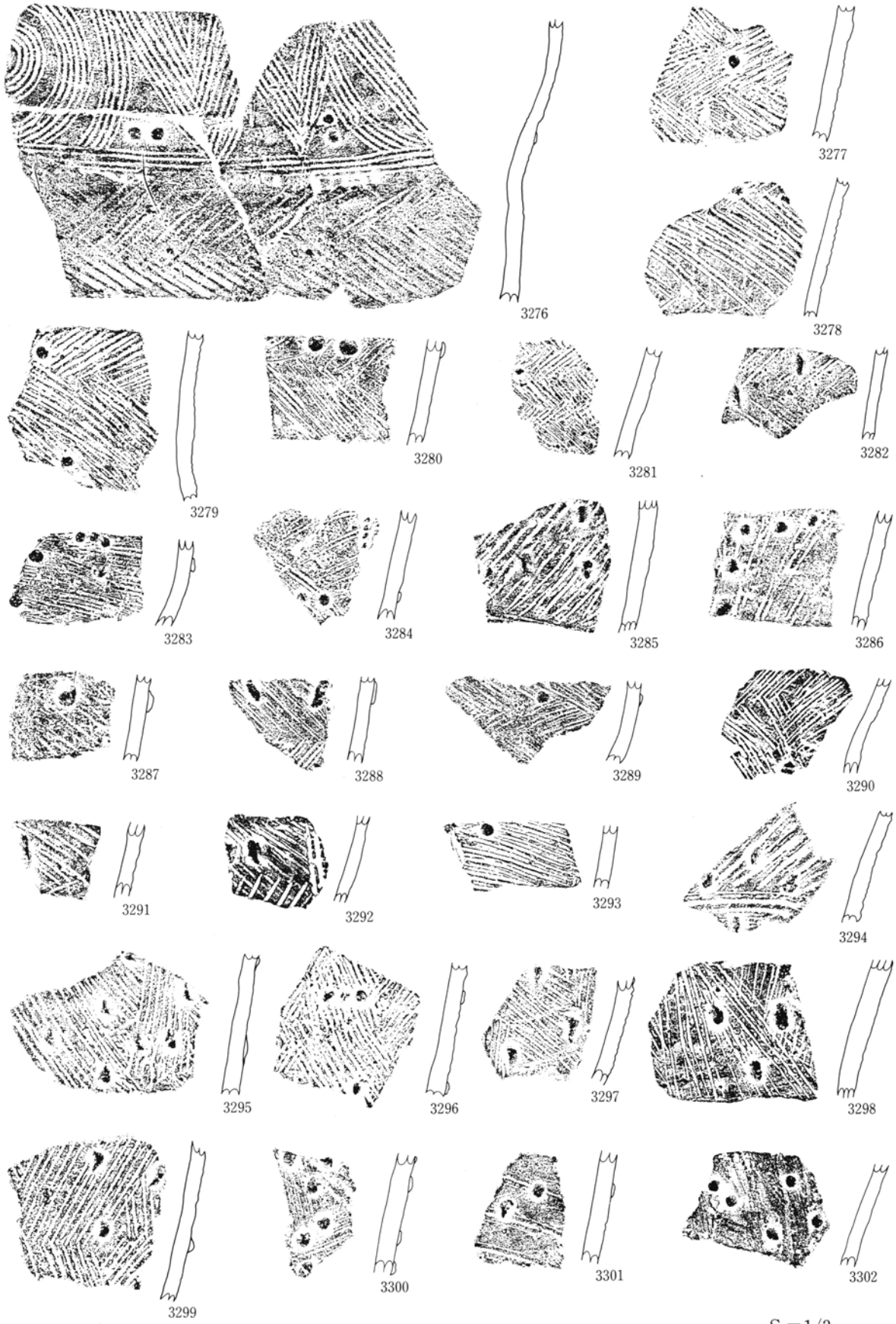
第225図　遺構外Ｃ区出土土器（96）



第226図　遺構外Ｃ区出土土器（97）

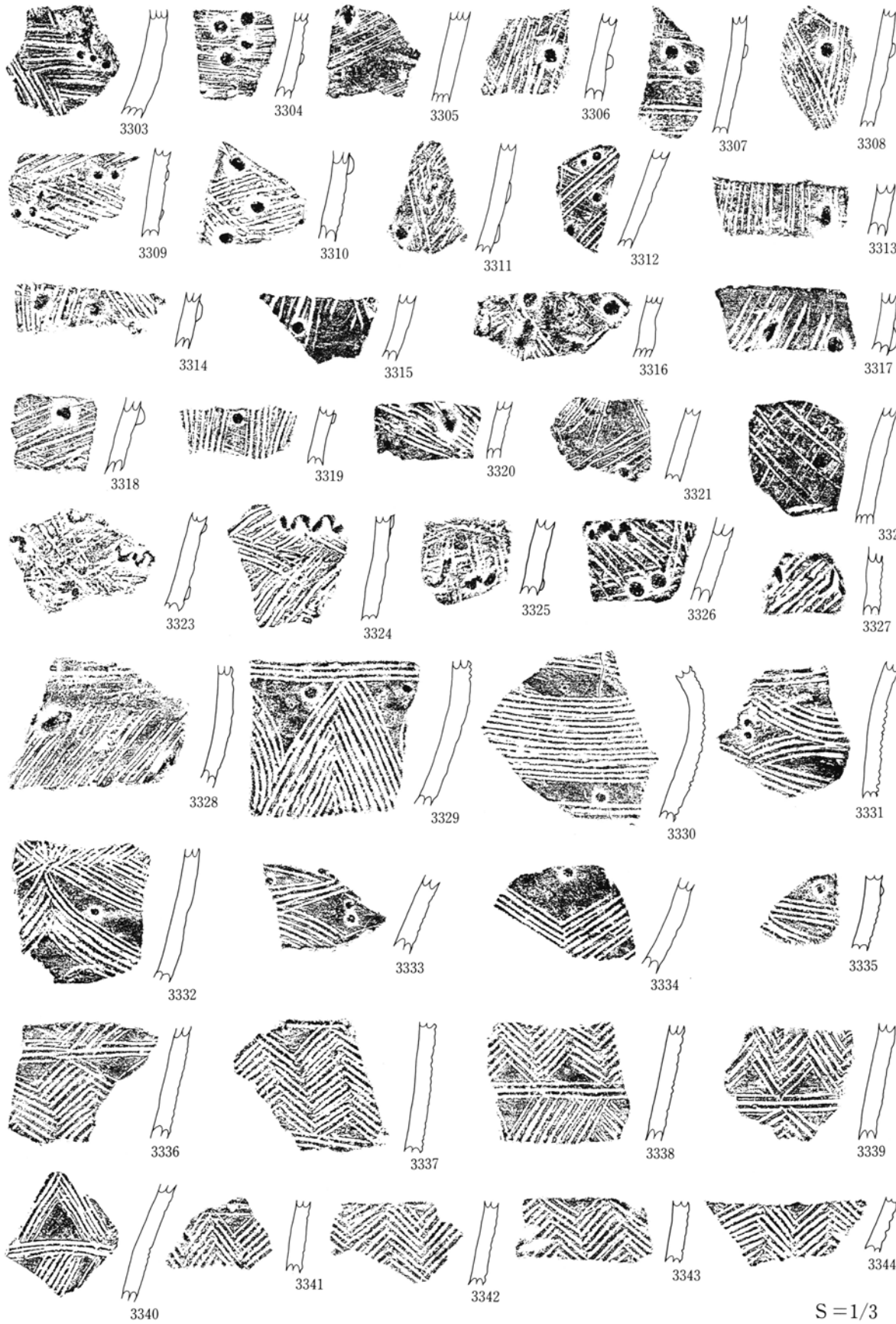


第227図　遺構外Ｃ区出土土器（98）

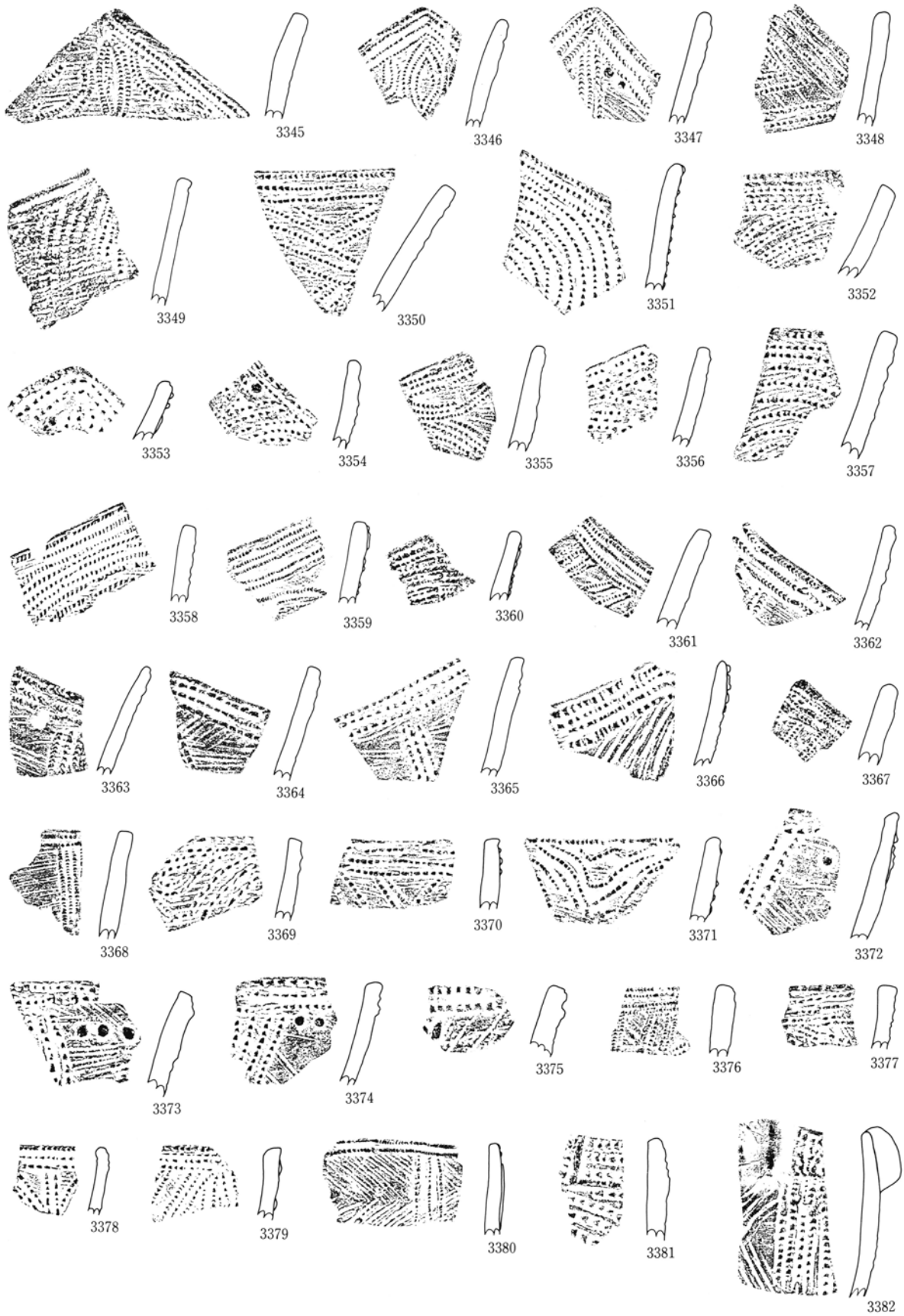


第228図　遺構外Ｃ区出土土器（99）

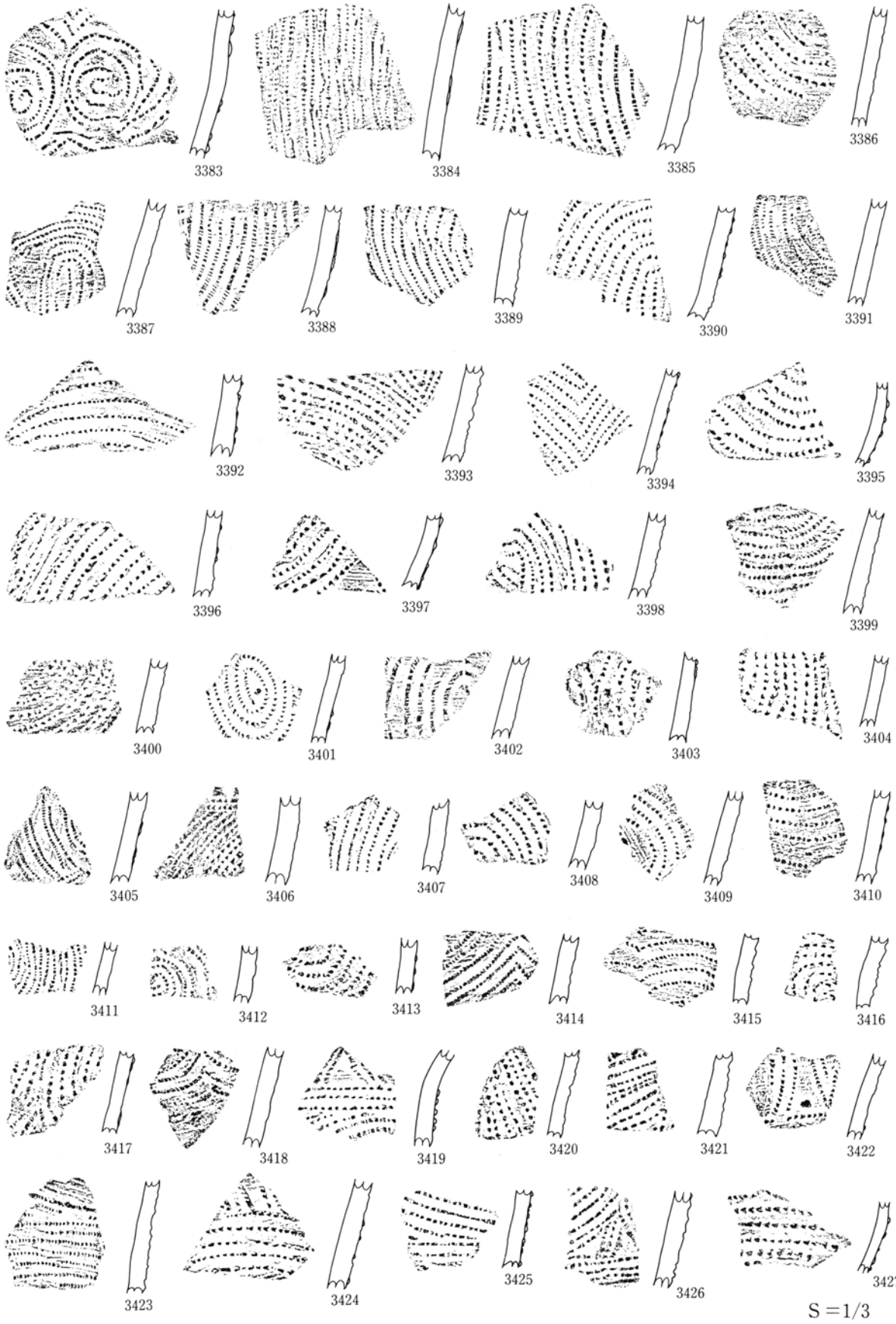
Ｓ＝1/3



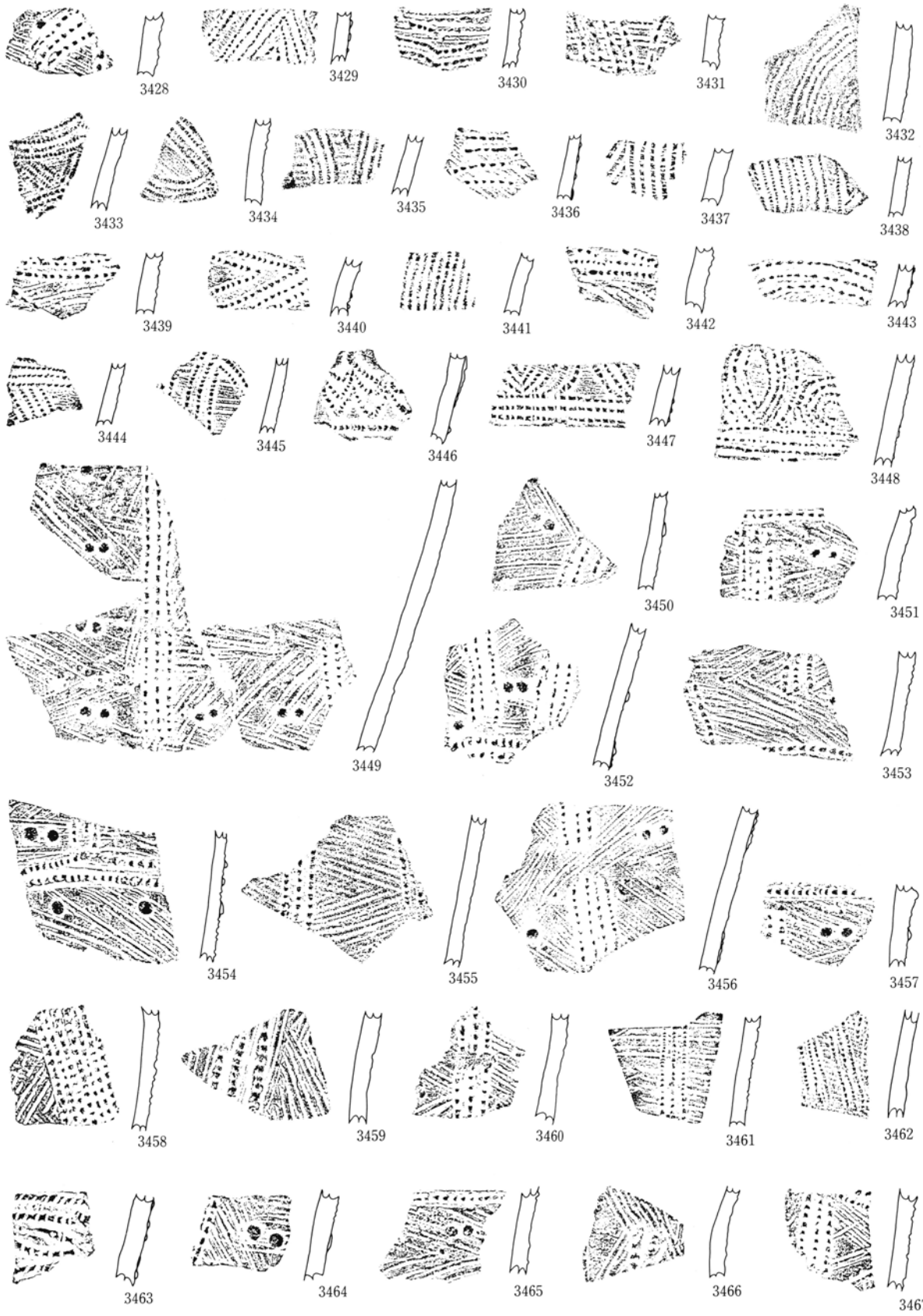
第229図　遺構外Ｃ区出土土器（100）



第230図　遺構外Ｃ区出土土器（101）　　Ｓ＝1/3

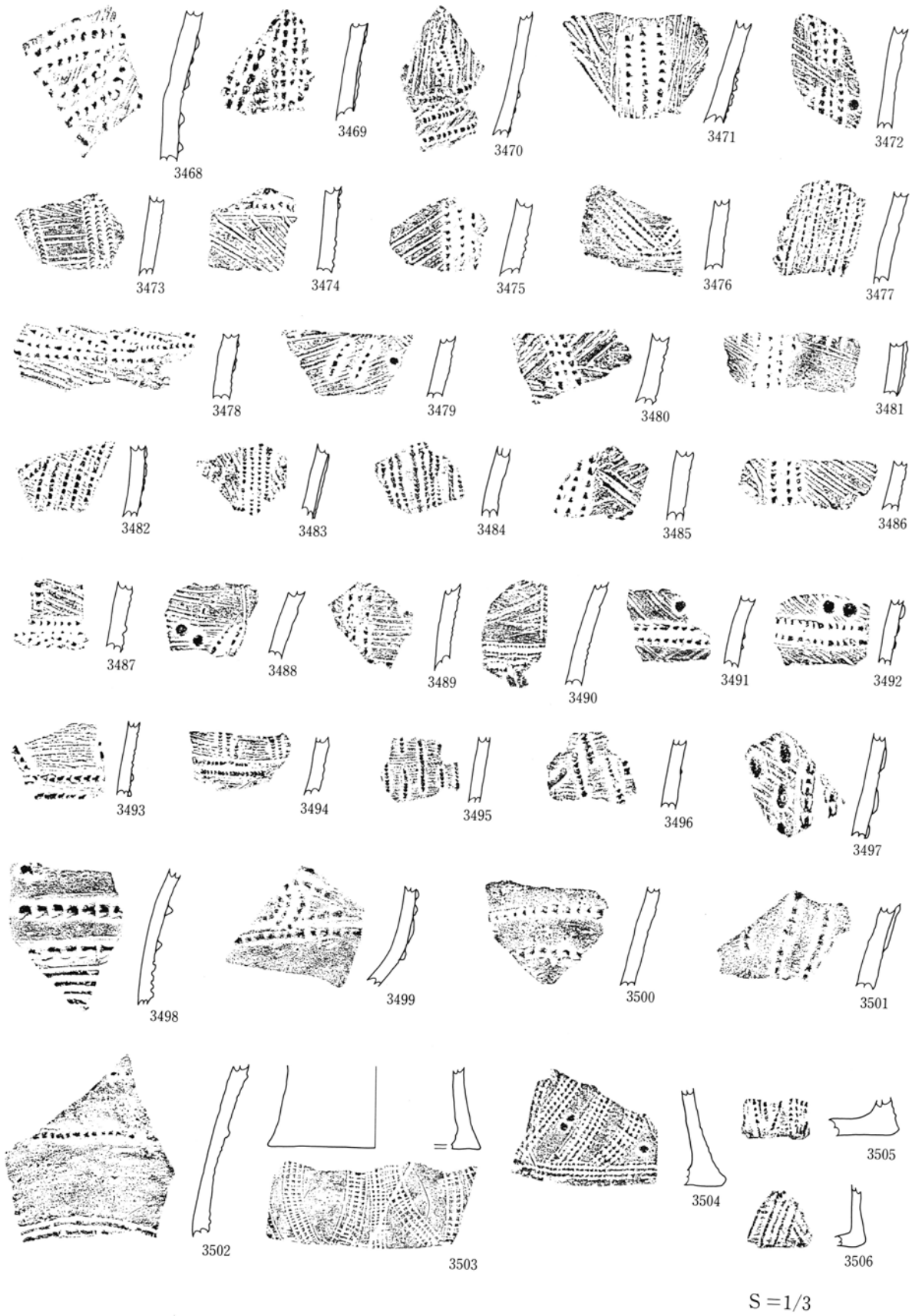


第231図　遺構外Ｃ区出土土器（102）

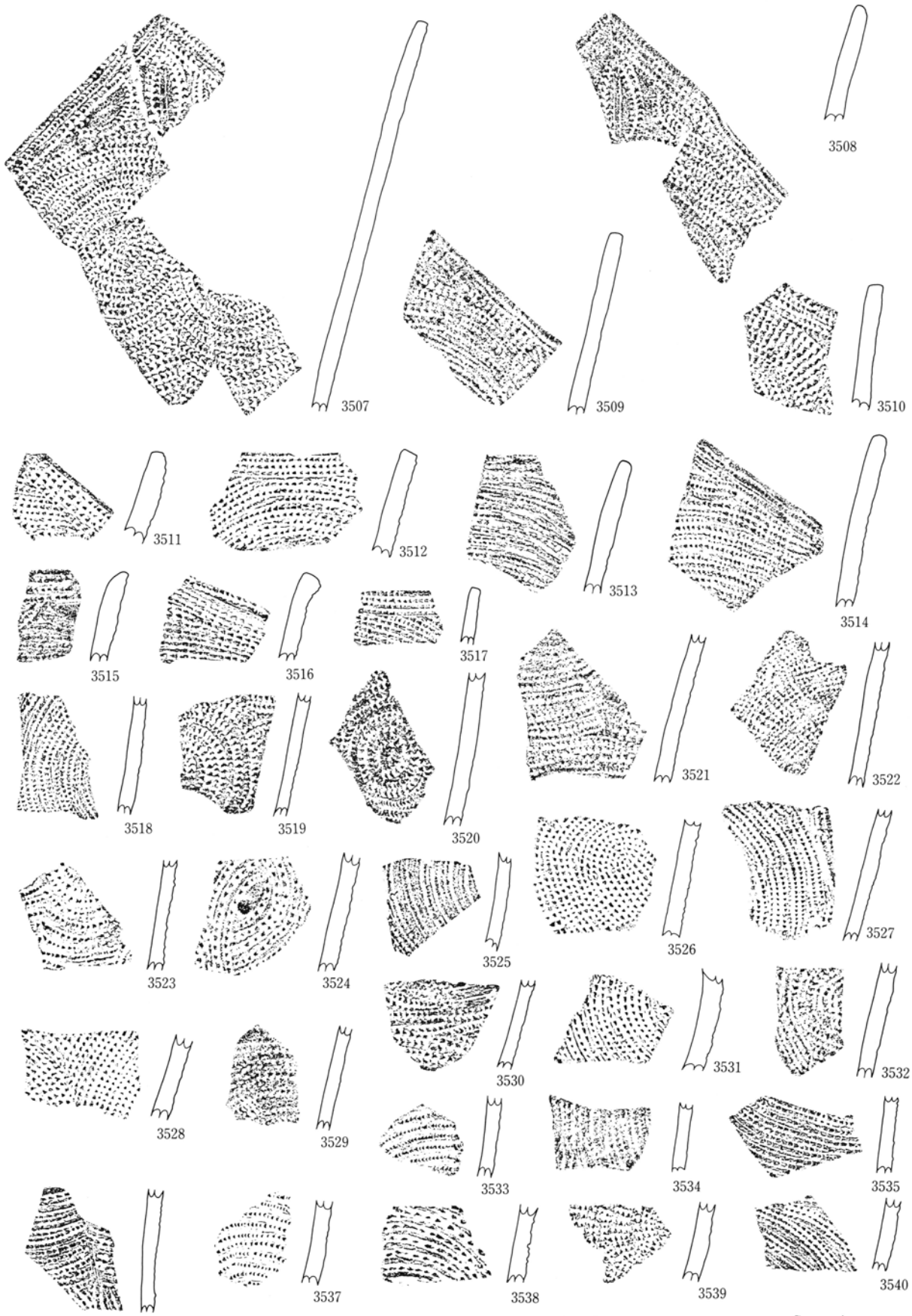


S＝1/3

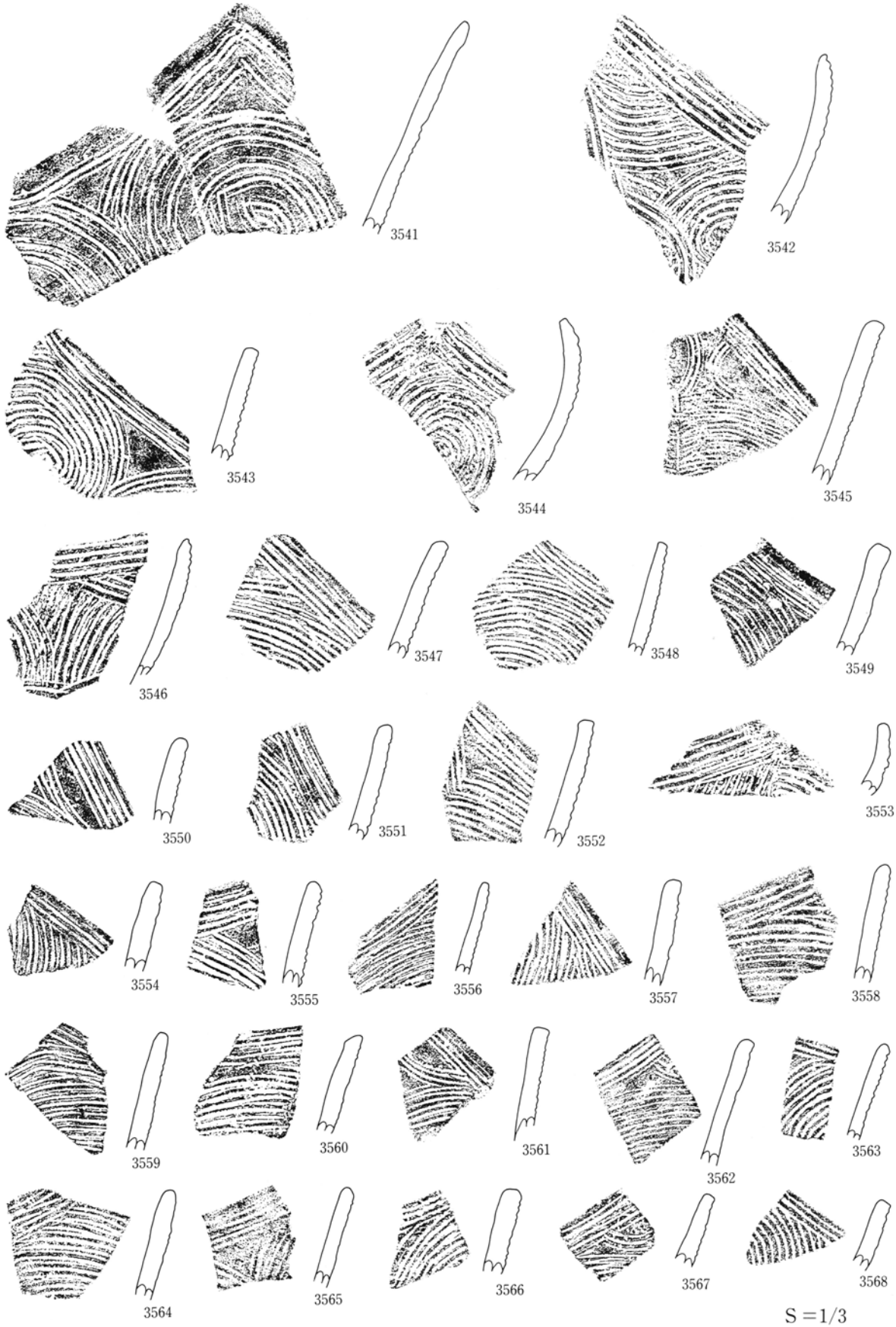
第232図　遺構外Ｃ区出土土器（103）



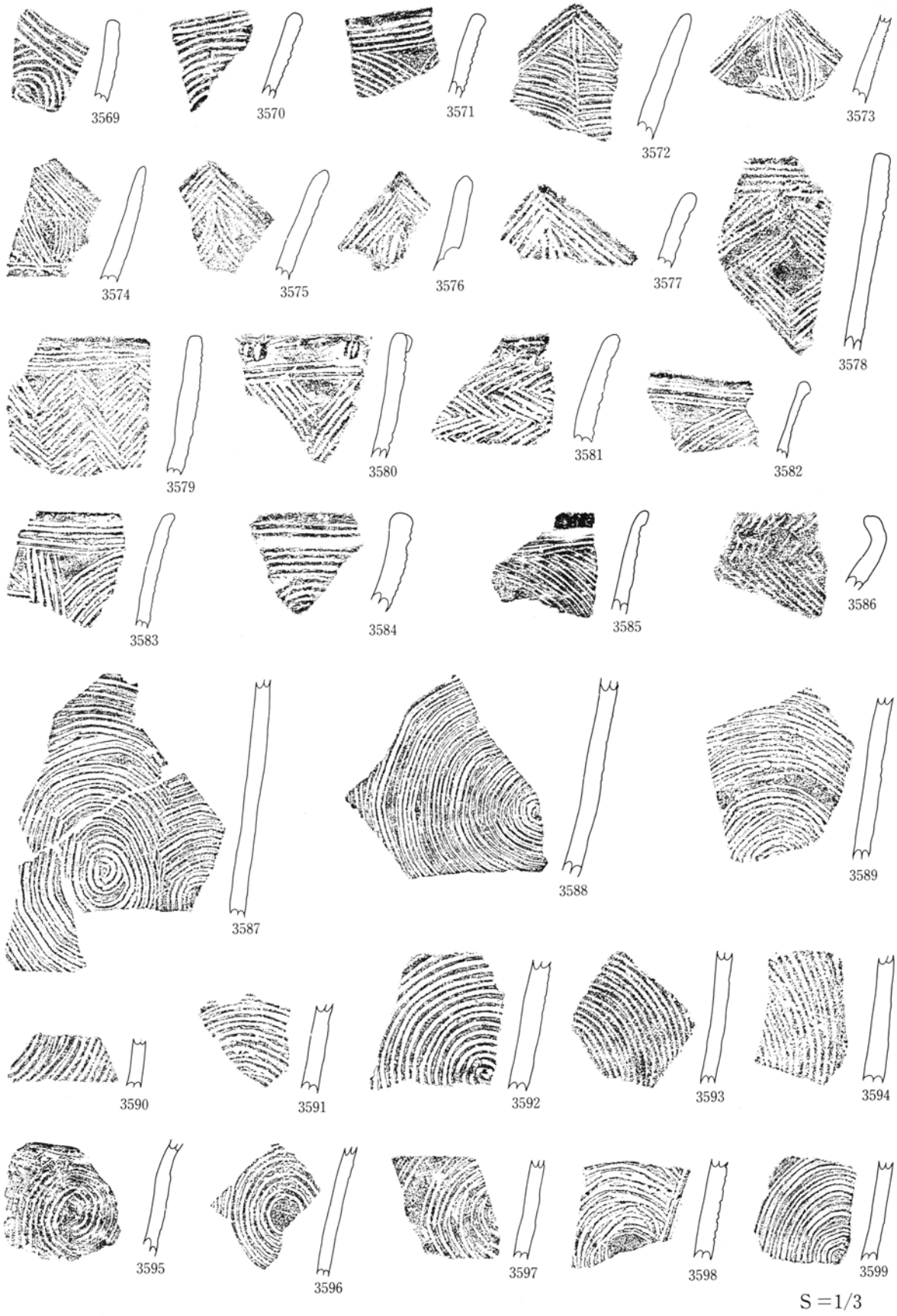
第233図　遺構外Ｃ区出土土器（104）



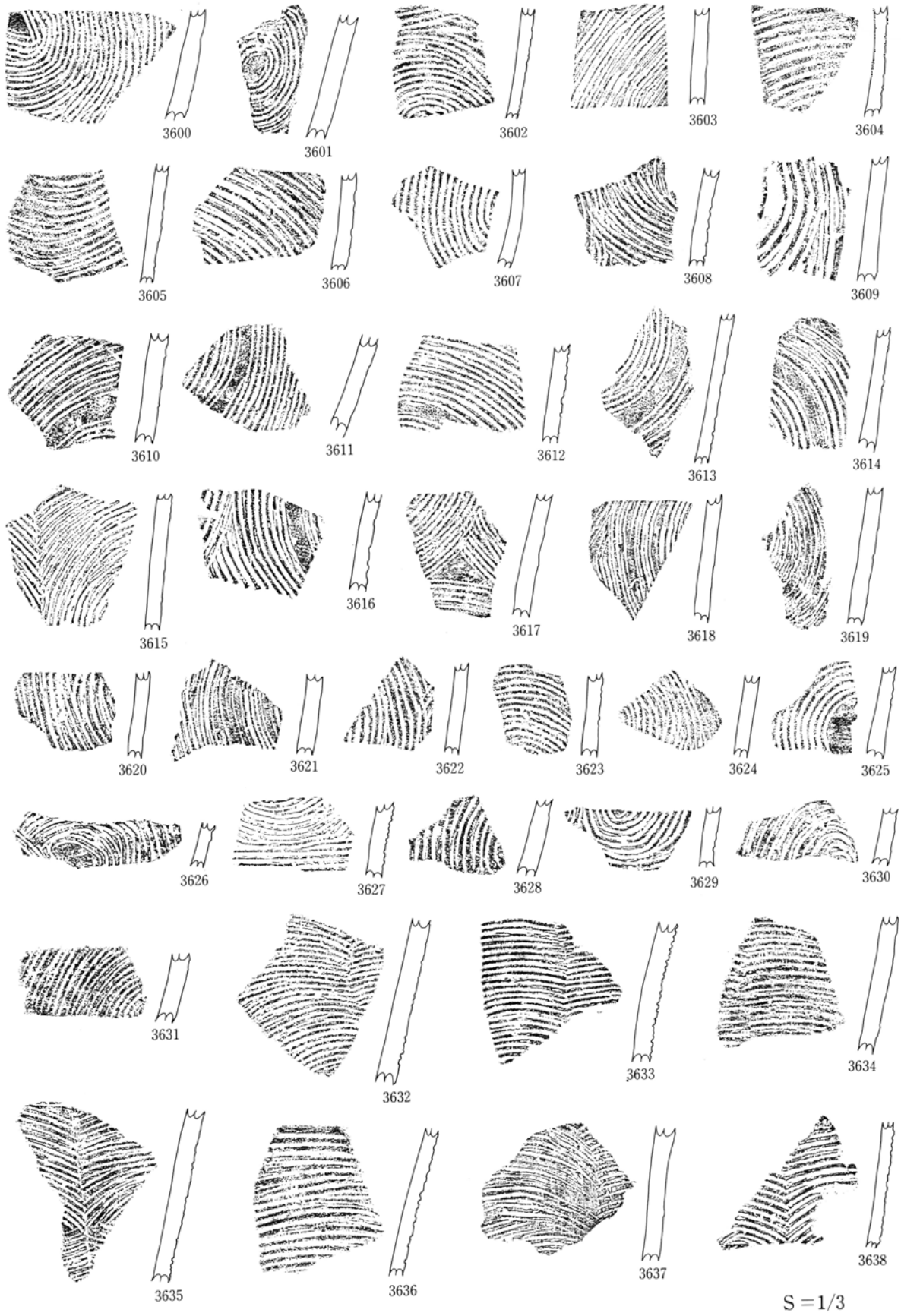
第234図　遺構外Ｃ区出土土器（105）　　Ｓ＝1/3



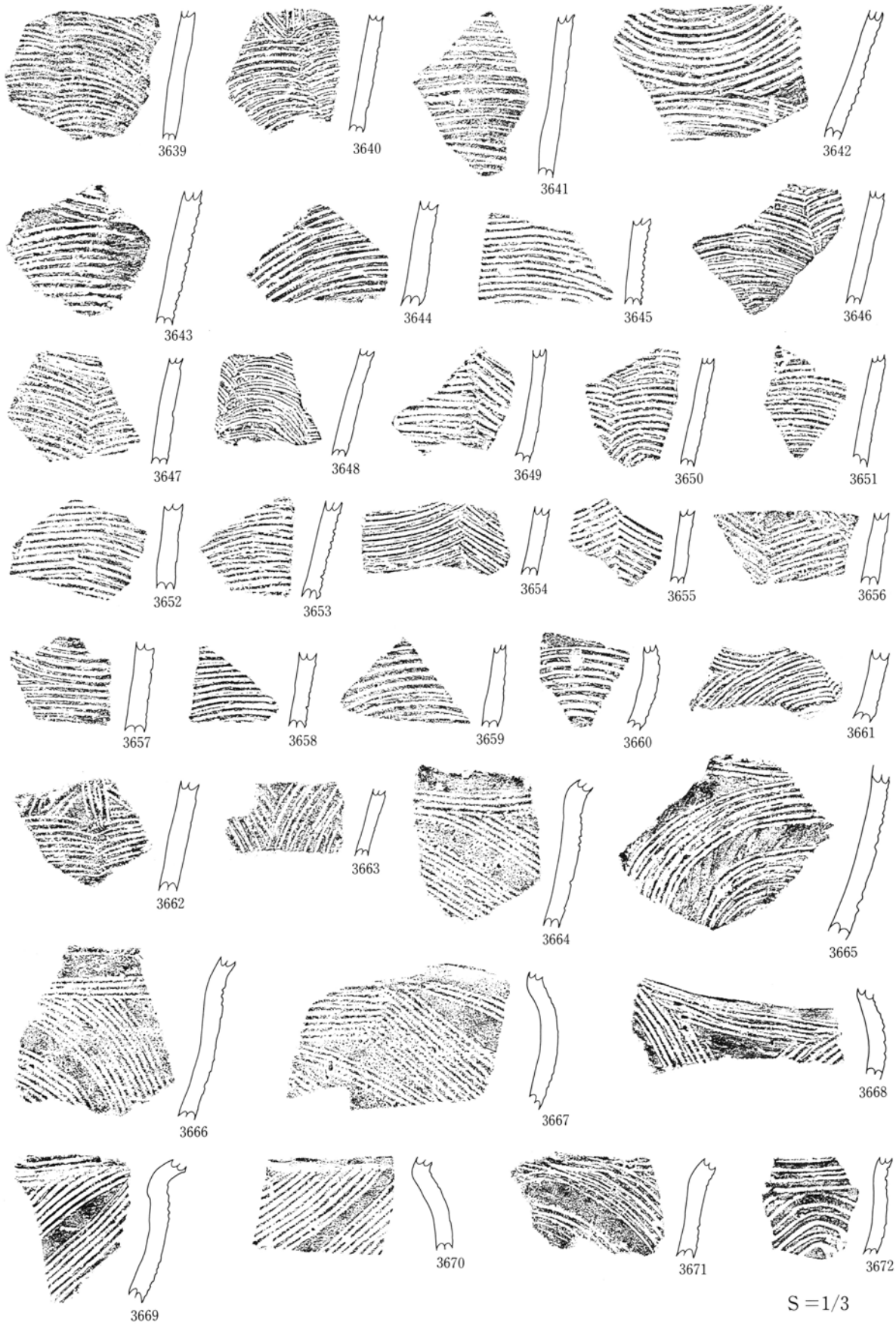
第235図　遺構外Ｃ区出土土器（106）



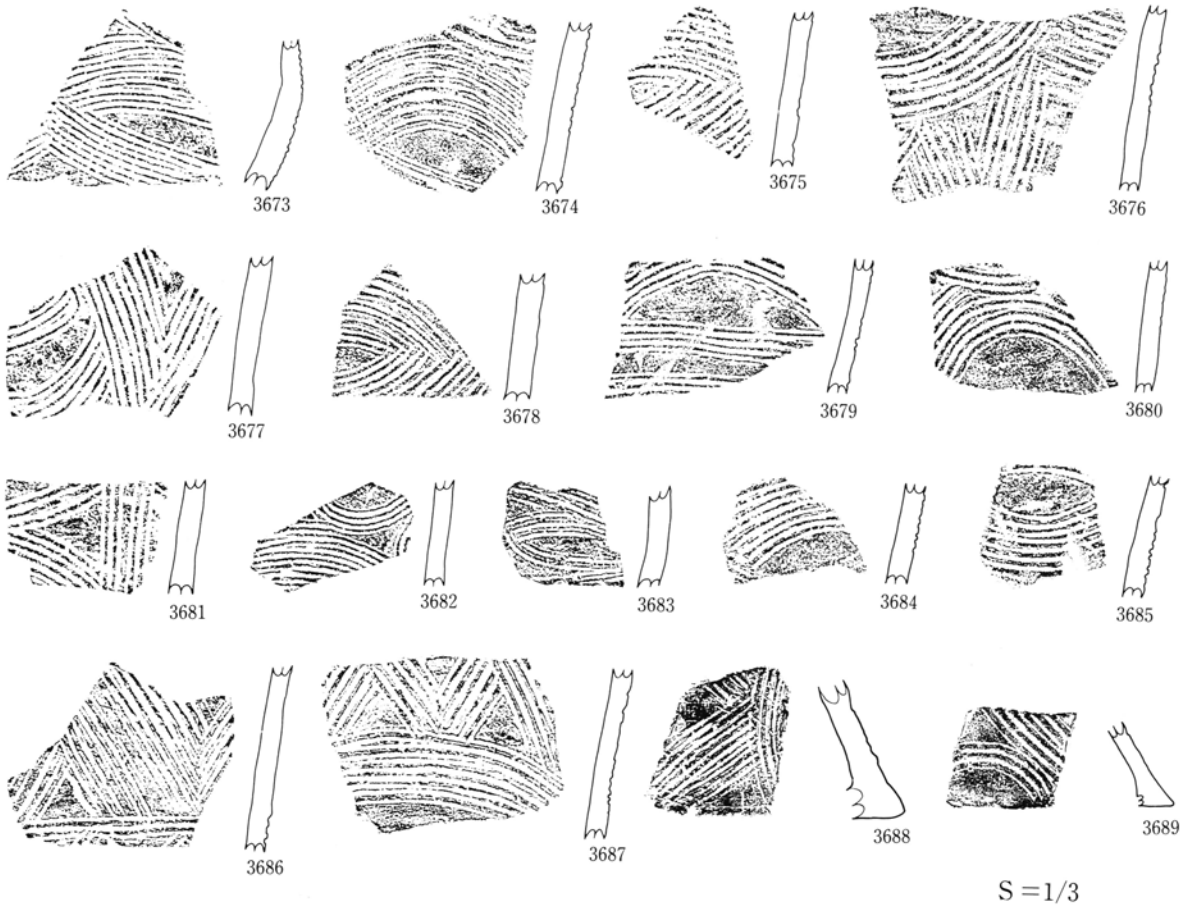
第236図　遺構外Ｃ区出土土器（107）



第237図　遺構外Ｃ区出土土器（108）



第238図　遺構外Ｃ区出土土器（109）



第239図　遺構外Ｃ区出土土器（110）

2542・2546～2550は口縁部が大きく屈曲して内反する浅鉢で、口縁下に浮線文で横位ないし波状等の文様を描くものであり、2546・2549・2550は有孔浅鉢である。2551～2562は無文の有孔浅鉢で、口縁部が大きく屈曲して内反すると共に、口縁が僅かに直立するものもある。

2563～2583は浅鉢の胴部であり、刻みをもつ浮線により横位に区画され、区画内に連続爪形や爪形刺突をもつ平行沈線・沈線で木の葉文等の文様を描いている。中には、木の葉文内に縄文をもつものもみられる。

Ｅ類　Ｃ類に属するものであるが、口縁部に付けられた獣面を本類とした。

2584～2636は波状口縁の波頂部ないし平口縁の口縁に獣面突起が付けられるもので、獣面突起の両脇に小突起をもつものもある。また、口縁部以下には刻みをもつ浮線文による蕨手状や渦巻き状等の文様が描かれ、地文に縄文を施すものも多い。獣面は鼻と口が突き出ることが共通するが、目は刺突のみで表すものや、飛び出させるもの等と表現には幾つかのバラエテイーがみられる。また、頭部についても同様である。これらの獣面は大方が猪を表現したものと思われるが、2633・2635・2636は他の獣面の表現とはやや異なるもので、猪以外の動物の可能性もある。なお、2637・2638は波状口縁となる波頂下の口縁部に、獣面が付くものである。

Ｆ類　半裁竹管により、集合沈線状に平行沈線で文様を描くものを本類とした。

13は口縁部が外反し、口縁が内反する波状口縁となる深鉢で、波頂部が双頂となる。口縁下および頸部括れ部に数条の平行沈線を巡らせて文様帯を区画し、区画内に曲線で（）状等の文様を描く。頸部以下には、数条の平行沈線を数段巡らせると思われ、地文に縄文が施されている。17は頸部が有段状に屈曲し、口縁部が大きく外反する波状口縁の深鉢となるもので、波頂部は内側へ肥厚する。施文される文様は、数条の平行沈線を数段巡らせ、波長下の三角状の区画内に縦位等の平行沈線を施すと共に、２個のボタン状貼付文をもつ。また、頸部の屈曲部には、縦位沈線とＸ字状の沈線で狭い文様帯を構成する。地文には、縄文が施されている。16は胴部に数条の平行沈線を数段巡らせて文様区画を行い、区画内に弧状ないし入り組み状の文様を描き、地文に縄文を施している。15は小型土器の胴部に数条の平行沈線を数段巡らせるもので、地文に縄文を施している。

2639・2640は外反する大波状口縁となるもので、2639の口縁直下には１条の刻みをもつ浮線紋が巡り、口縁部に半裁竹管による数条の平行沈線で波頂下に（）状ないし入り組み状の文様を描き、地文に縄文を施すものである。2640は波頂下に（）状ないし入り組み状の文様を描き、口縁部以下に数条を単位とする平行沈線を数段巡らせるものであり、地文には縄文が施されている。2641は内反する大波状口縁となるもので、波頂下に数条の平行沈線で()状ないし入り組み状の文様を描き、地文に縄文を施すものである。2642～2661・2802～2804は口縁部が屈曲して内反ないし靴先状となり、波状ないし小波状口縁となるものである。口縁部以下に数条を単位とする平行沈線を数段巡らせるものが主体で、波頂下には三角状の区画帯をもち、2644・2656・2084のように縦位や入り組み状の文様が描かれるものもある。地文に縄文を施すものが、大方である。なお、2661の波頂下には、瘤状の貼付文がみられる。

2805～2912は地文に縄文を施した胴部に、半裁竹管で集合沈線状の平行沈線で文様を描くものである。2805～2831・2834は数条を単位とする平行沈線を横位に数段巡らせ、その横位平行沈線間に蕨手状・渦巻き状ないし入り組み状等の文様を、平行沈線で描くものである。2832・2833・2837は頸部の括れ部に、Ｘ字状や縦位に平行沈線を施すものであり、2835は横位平行沈線下に円形刺突を１条巡らせたものである。2836～2912は集合沈線状に数条を単位とする平行沈線で、横位に数段巡らせるものである。中には、横位平行沈線間を無文帯とするものもみられる。

Ⅱ期Ⅷ群

27～30・2662～2801・2913～3327が本群の土器であり、胎土には繊維を含まない。これらの土器は、施文される文様から次のように分類される。

Ａ類　集合沈線で文様を描くものを本類とした。

27は大きく外反する平口縁の深鉢で、口縁下に２個一対となる耳タブ状の貼付文をもつ。口縁部には２段の横位集合沈線が巡り、集合沈線間に刻み状の刺突が巡る。胴部には間に縦位や羽根状沈線をもつ２列の縦位集合沈線で区画し、区画内に集合沈線で（）状となる弧状等の文様が描かれている。

2662～2681は波状口縁となる口縁部に横位の集合沈線を巡らせるもので、2662は集合沈線間に横位の矢羽根状沈線を施している。2668・2671では、集合沈線間に斜位の沈線が施される。2676は波頂下の三角状となる区画内に、２個のボタン状貼付文がつき、鋸歯状ないし波状の文様が描かれている。2678・2681も同様に、波頂下に文様が描かれるものであり、2681は大きめの貼付文を有する。2682～2699は平口縁となる口縁下に集合沈線を巡らせ、2682・2684・2685・2687・2691は横位の矢羽根状沈線を施し、2690・2696・2699は斜位の沈線を施している。2683・2686・2688・2689・2694・2697は頸部以下に縦位の（）状の文様が描かれるようであり、2686では縦位の斜位沈線が加えられている。2693は口縁に小突起をもち、突起下に楕円の文様が描かれている。2694は口縁下に耳タブ状の貼付文を有し、2696・2698・2699にはボタン状貼付文を有する。

2700・2701は口縁が有段となる平口縁で、有段上に細い半裁竹管による押し引きの連続刺突を施し、以下に横位の矢羽根状沈線を施すものである。

2702～2714は平口縁となる口舌部ないし口端部に凹凸状の刺突をもつもので、口縁部以下に施文される文様は集合沈線により、先と同様の文様が描かれている。2702の裏面頸部にも、凹凸状の刺突が巡っている。2713は口縁に小突起をもつものであり、2703・2706・2714の口縁下にはボタン状貼付文が加飾されている。

2913～3096は胴部に集合沈線で文様が描かれたものである。2913～3019は胴部文様帯の上下を横位の集合沈線で文様帯区画し、区画内をさらに縦位の集合沈線で区画を行い、区画内に集合沈線で（）状の文様を描き、（）状文様内に入り組み状や横位の矢羽根状等の文様を描いている。また、3009・3012～3014のように、半裁竹管による平行沈線で、鋸歯状ないし格子目状の文様を描くものもある。これらの文様を区画する縦位の集合沈線間には、斜位や縦位の矢羽根状沈線が施されているものも存在する。

3020～3037は横位の集合沈線間に横位の矢羽根状沈線を施すものであり、3038～3055は横位の矢羽根状沈線が施されるものである。さらに、3056～3096は横位の矢羽根状沈線のみが、多段化して施されているものである。

Ｂ類　集合沈線による文様を基本にし、貼付文で加飾されるものを本類とした。施文される貼付文から、次のように分別される。

１種　耳タブ状・ボタン状貼付文で加飾される類。

30は平口縁となる口縁に４単位の突起状の貼付文をもち、その間の口舌部から口縁部にかけて耳タブ状・ボタン状貼付文を規則的に配して加飾する。口舌部には斜位の沈線を施し、口縁部には横位集合沈線を施している。さらに、頸部下の僅かに膨らむ部分には、横位の矢羽根状沈線が施され、耳タブ状・ボタン状貼付文が加飾されている。28・29は胴部下半から底部に至るもので、集合沈線等を施し、ボタン状貼付文をもつものである。

2716～2744は口縁部に耳タブ状・ボタン状貼付文で加飾されるものであり、口縁が内側に肥圧する平口縁となるものも多く、貼付文の加飾は裏面肥圧部にまで及ぶ。これらの口縁部地文には、横位の集合沈線や斜

位・矢羽根状の沈線が施され、2720のように裏面にまで及ぶものもある。2738では、半裁竹管による爪形刺突が施されている。また、加飾されるボタン状貼付文には、円形刺突が加えられるものもみられる。2722の頸部以下には、集合沈線による縦位の文様が描かれ、その上にボタン状貼付文等が加飾されている。2744の口端部には、凹凸状の刺突が施されている。

3097～3208は胴部に耳タブ状ないしボタン状の貼付文が加飾されるものである。3098～3100は口縁部に横位の集合沈線ないし矢羽根状沈線を施文した後、耳タブ状やボタン状の貼付文をもつもの。3102～3104は口縁部に横位の集合沈線ないし矢羽根状沈線を施文し、頸部に耳タブ状やボタン状の貼付文をもつもの。3101・3108は口縁部に横位の集合沈線を施し、頸部に凹凸状となる刺突をもち、ボタン状貼付文を加えるもの。3113～3208はＡ類の胴部文様と同様の文様が施文され、さらに耳タブ状やボタン状の貼付文をもつものである。なお、3195～3203・3206は横位の矢羽根状沈線を地文とするものであり、後述するＢ類２種ないしＣ類に属するものとも考えられる。

２種　棒状に長い貼付文で加飾される類。

2746～2768は口縁が大きく外反し、内側に肥厚する平口縁となるもので、１種に比べて口縁部文様帯が広くなる。口縁部に加飾される貼付文は、耳タブ状・ボタン状貼付文もみられるが、棒状の縦長となる貼付文が共通して施されている。口縁部の地文には、横位の集合沈線や斜位・矢羽根状沈線が施されているが、１種に比べると総じて粗く乱れる傾向にある。

3209～3244は胴部に棒状に長い貼付文が加飾されるものである。3209～3215は口縁部に横位の沈線が施されるものであり、3216～3244は頸部から胴部にかけて横位ないしは斜位・矢羽根状に沈線を施した後、棒状の貼付文やボタン状貼付文を加飾するものである。

Ｃ類　斜位等の平行沈線を地文に、小さいボタン状貼付文をもつものを本類とした。

2769～2774は平口縁となる口縁下に半裁竹管による平行沈線で、斜位ないし縦位の矢羽根状に粗く文様が施されているものである。2775～2801は平口縁となる口縁下に、先と同様に平行沈線で斜位ないし縦位・横位の矢羽根状に粗く文様が施され、耳タブ状ないしボタン状貼付文が加飾されている。2791・2797の口舌部には凹凸状の刺突が加えられ、2792の口縁以下には縦位の集合沈線が施されている。

3245～3327は胴部に小さいボタン状貼付文が加飾されるものである。3245～3275は斜位ないし矢羽根状のやや粗い沈線を施した後、Ｂ類と同様のやや大粒のボタン状貼付文が加飾されるもの。3276～3322は先と同様の沈線文様に、小粒のボタン状貼付文を加飾するものである。3276は口縁部ないし胴部上半に集合沈線で弧状・Ｖ字状等の文様を描き、文様帯の下部を横位沈線で区画し、胴部下半には横位の矢羽根状沈線を施すものであり、小粒のボタン状貼付文が２個単位で加飾されている。3322は格子目状となる平行沈線である。なお、これらの土器に施文される沈線は、半裁竹管によるものと、単沈線によるものとが存在する。

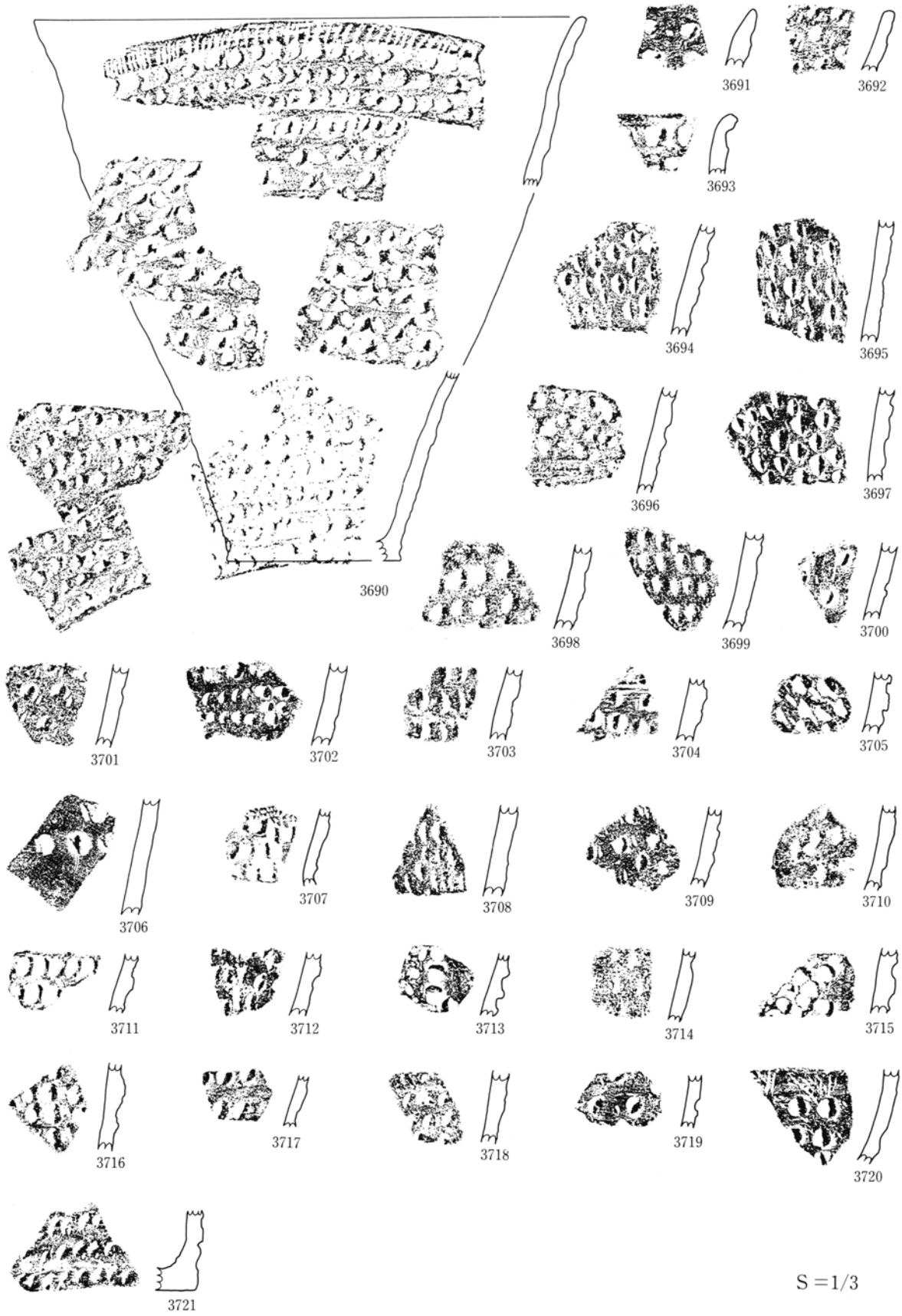
3323～3327は先と同様の沈線文様を胴部に施した後、鋸歯状となる貼付文を加飾するものであり、3326ではボタン状貼付文と共に鋸歯状貼付文が加飾されている。

Ⅱ期Ⅸ群

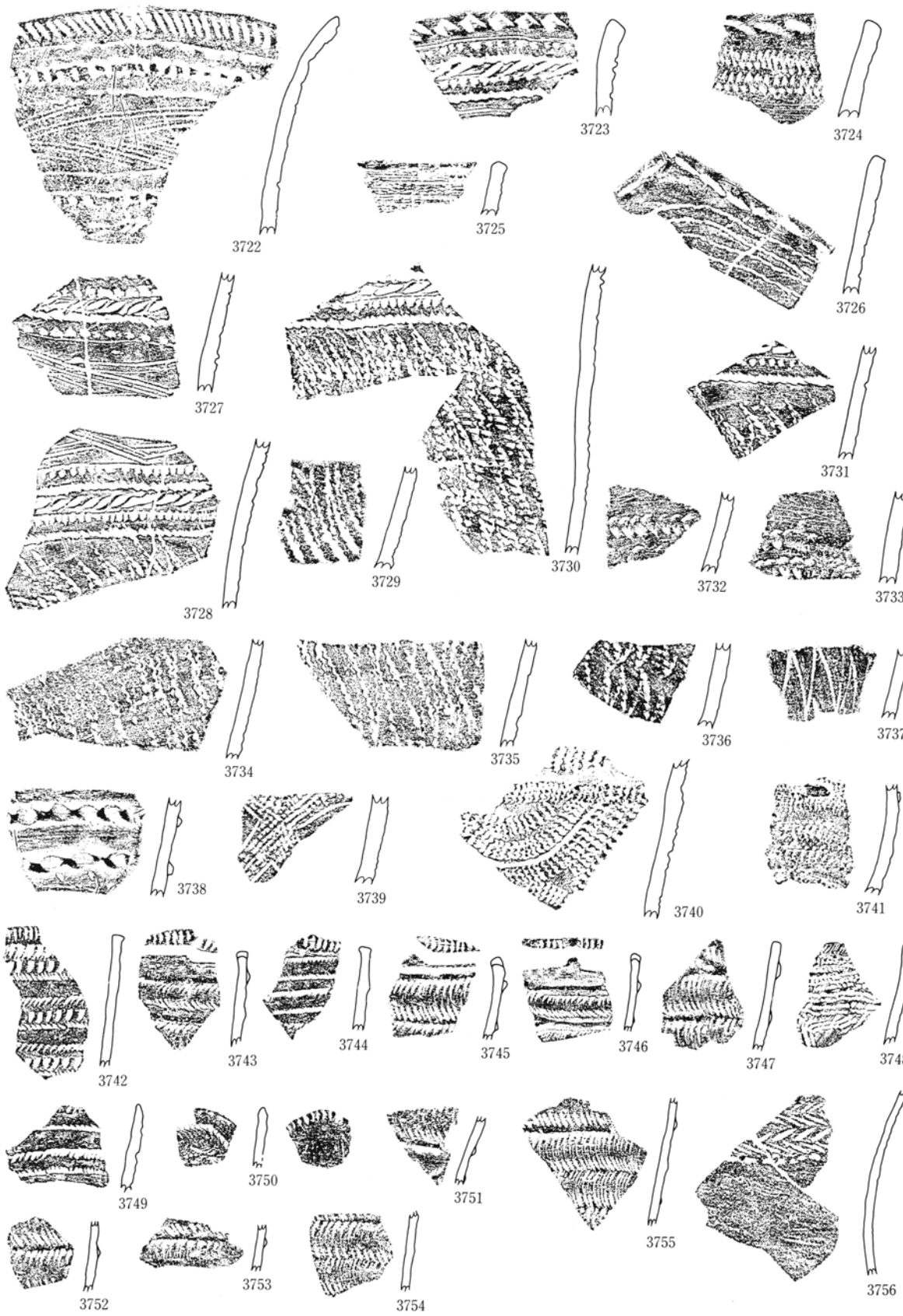
3328～3689が本群の土器であり、胎土には繊維を含まない。これらの土器は、施文される文様から次のように分類される。

Ａ類　集合沈線で文様を描くものを本類とした。

3329～3335は胴部に弧状等の集合沈線による文様を、横位ないし縦位に描くものであり、それぞれ小粒のボ



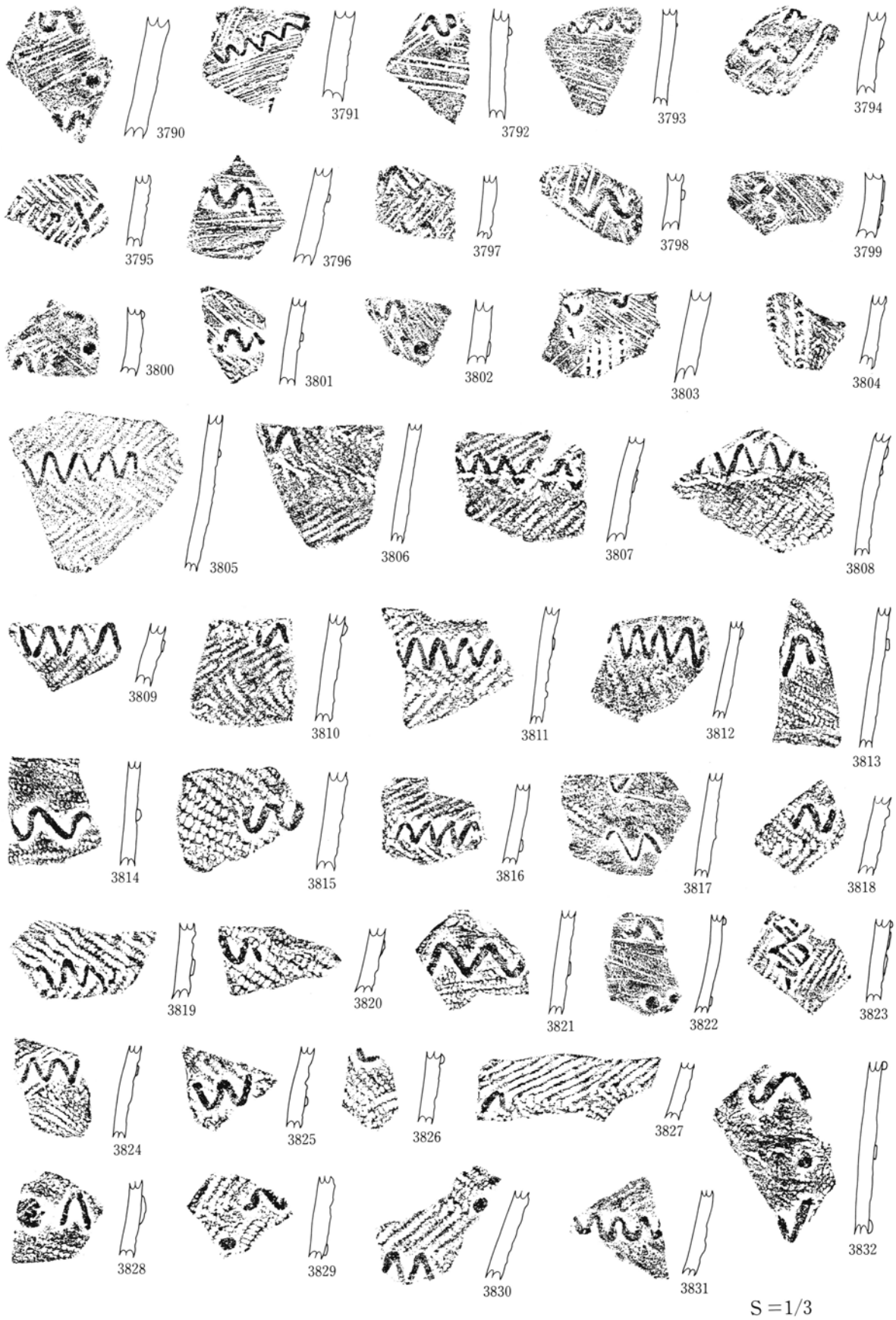
第240図　遺構外Ｃ区出土土器（III）



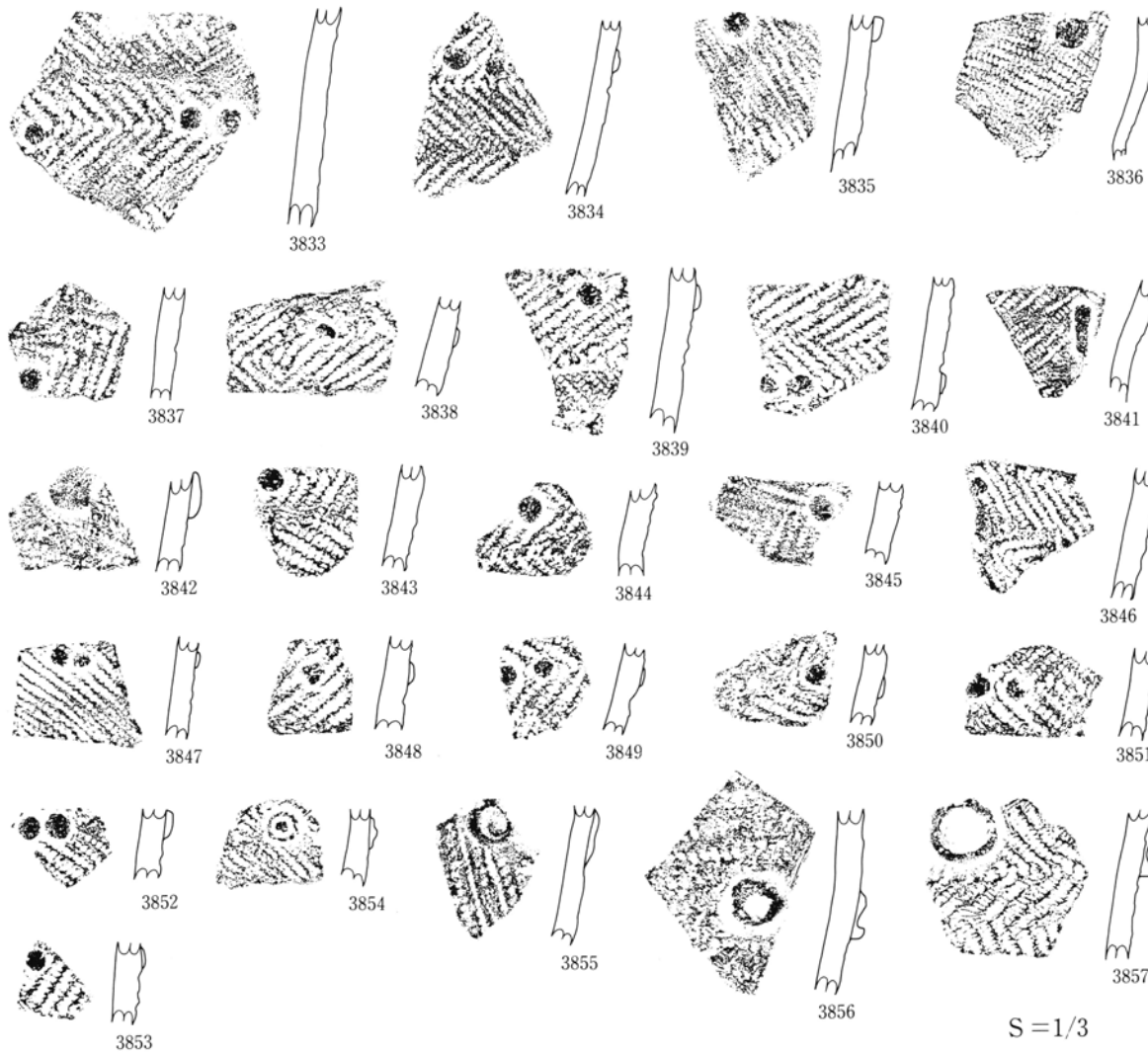
S＝1/3

第241図　遺構外Ｃ区出土土器（112）

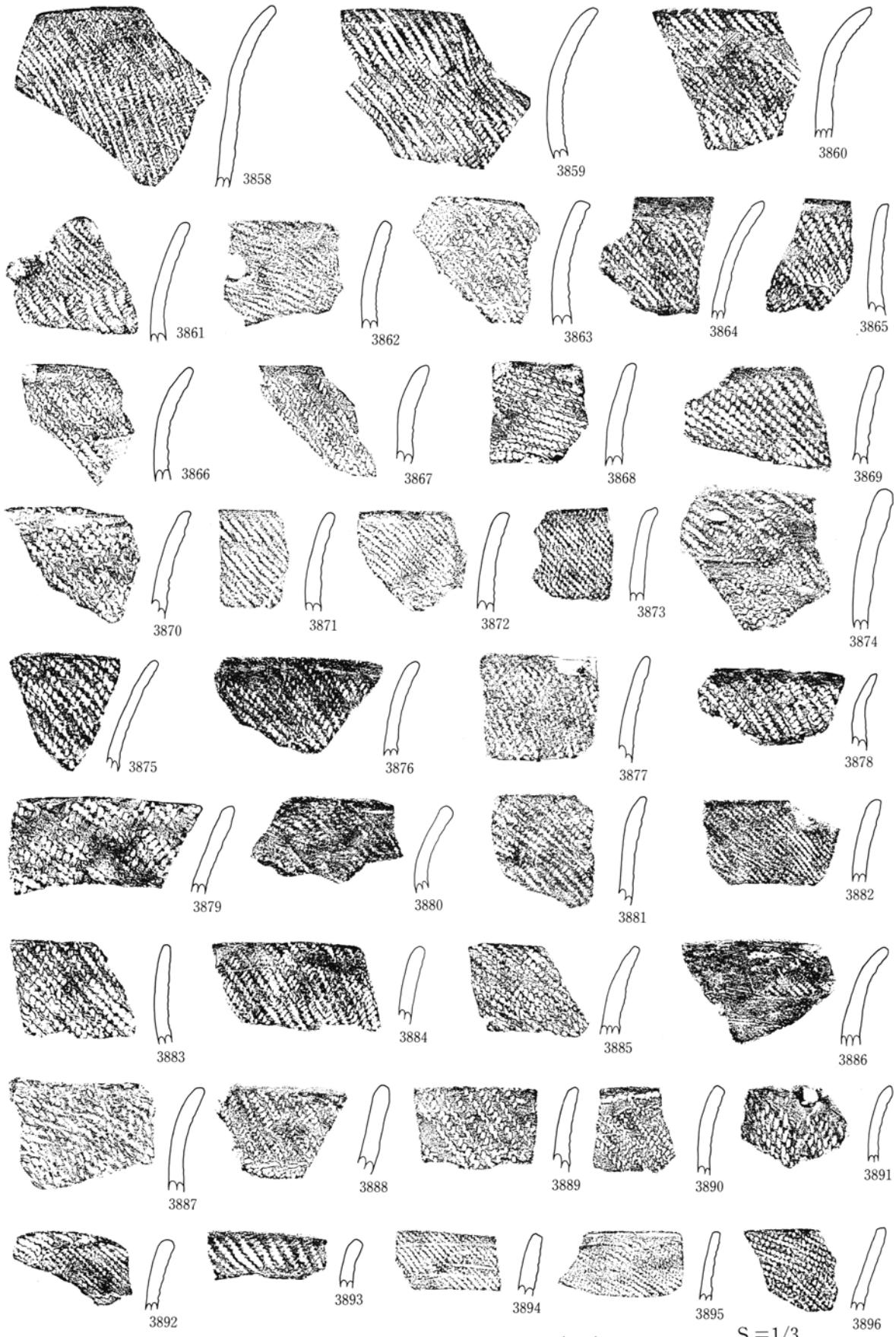
第242図　遺構外Ｃ区出土土器（113）



第243図　遺構外Ｃ区出土土器（114）

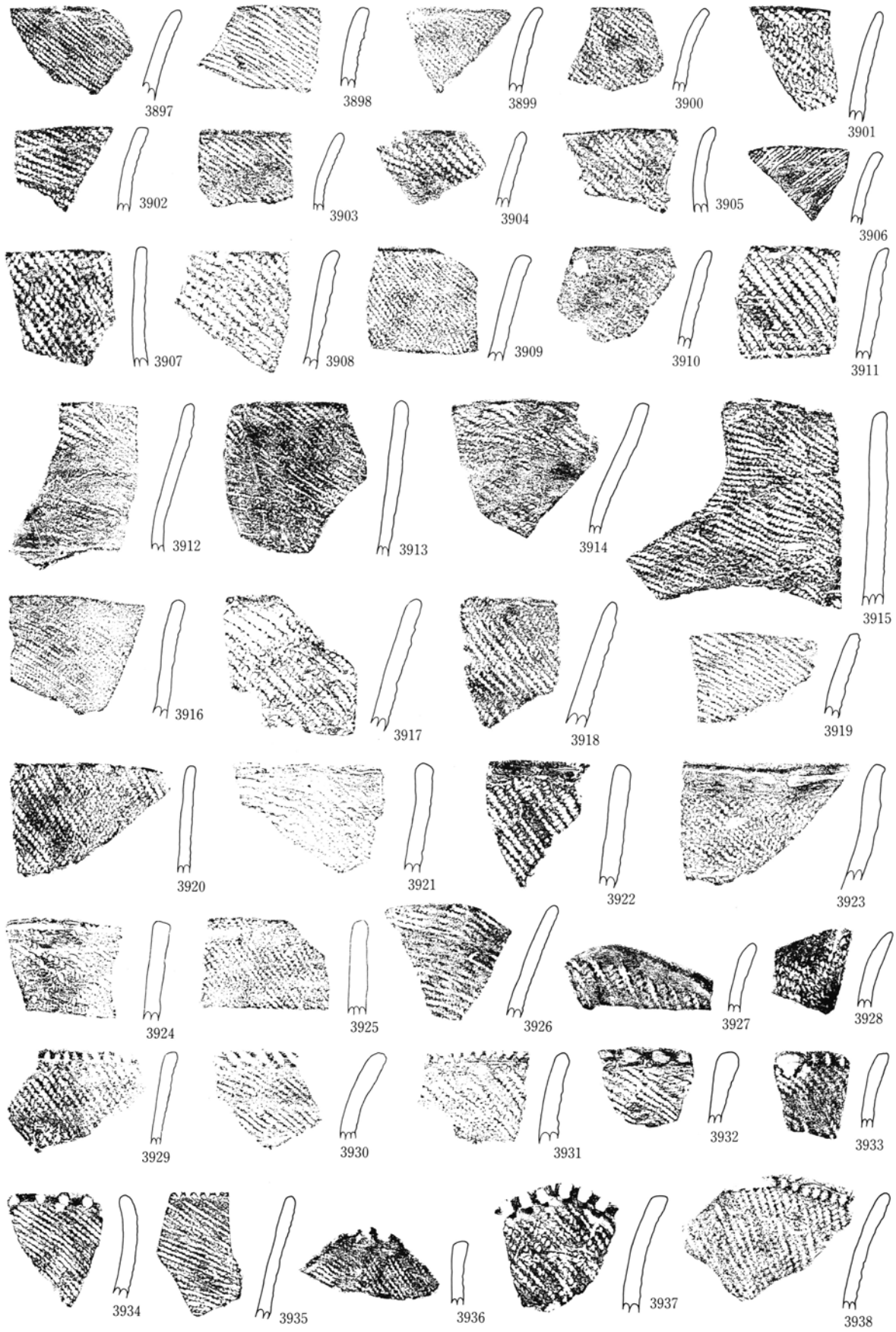


第244図　遺構外Ｃ区出土土器（115）

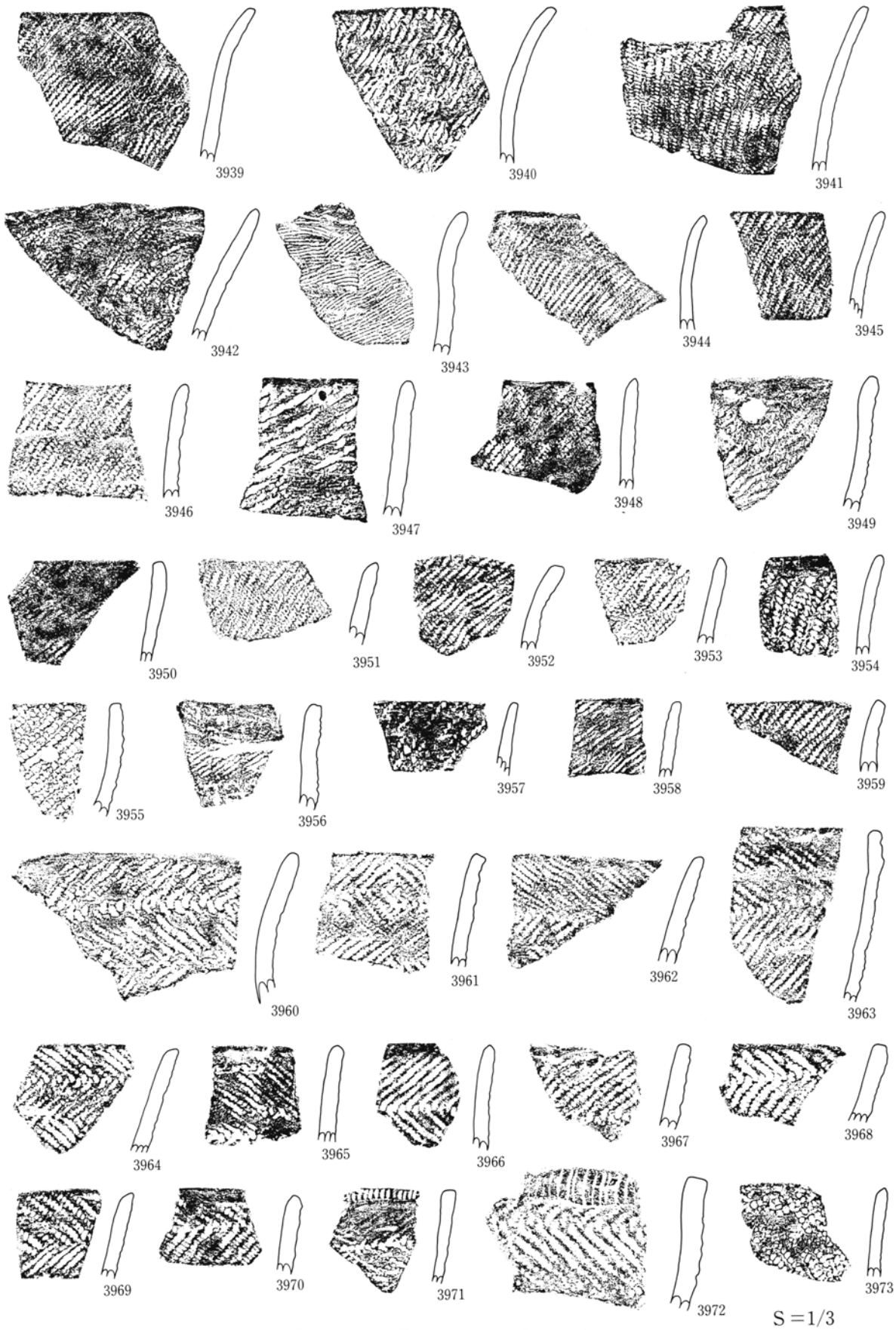


S＝1/3

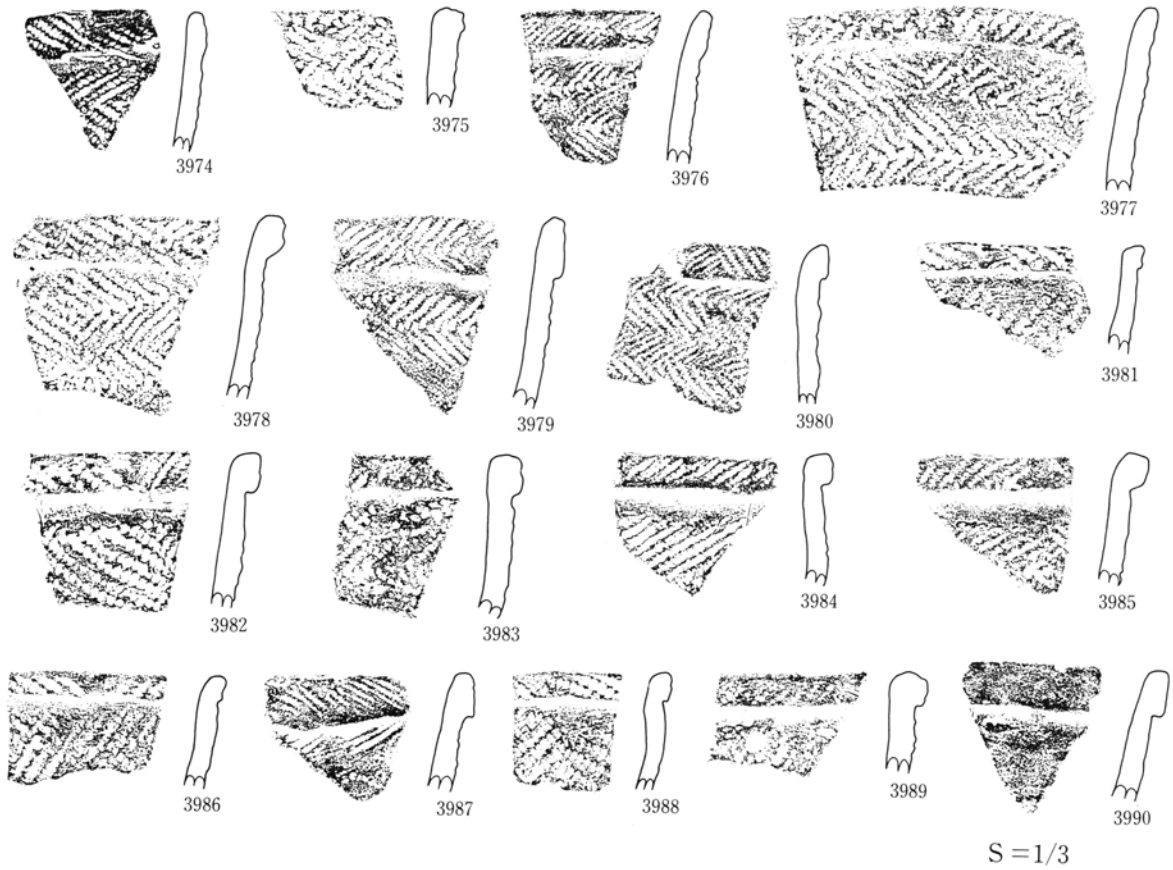
第245図　遺構外Ｃ区出土土器（116）



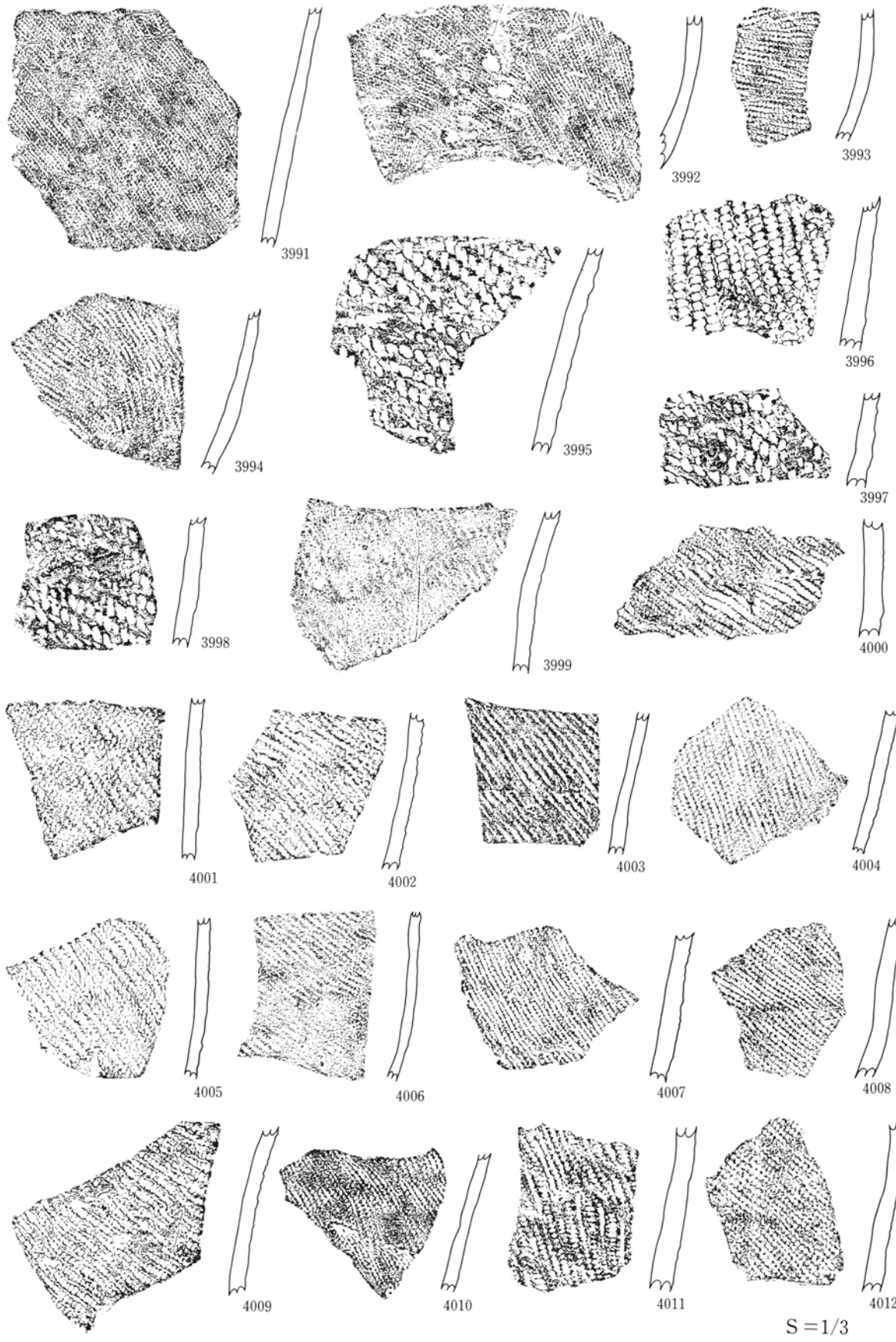
第246図　遺構外Ｃ区出土土器（117）　Ｓ＝1/3



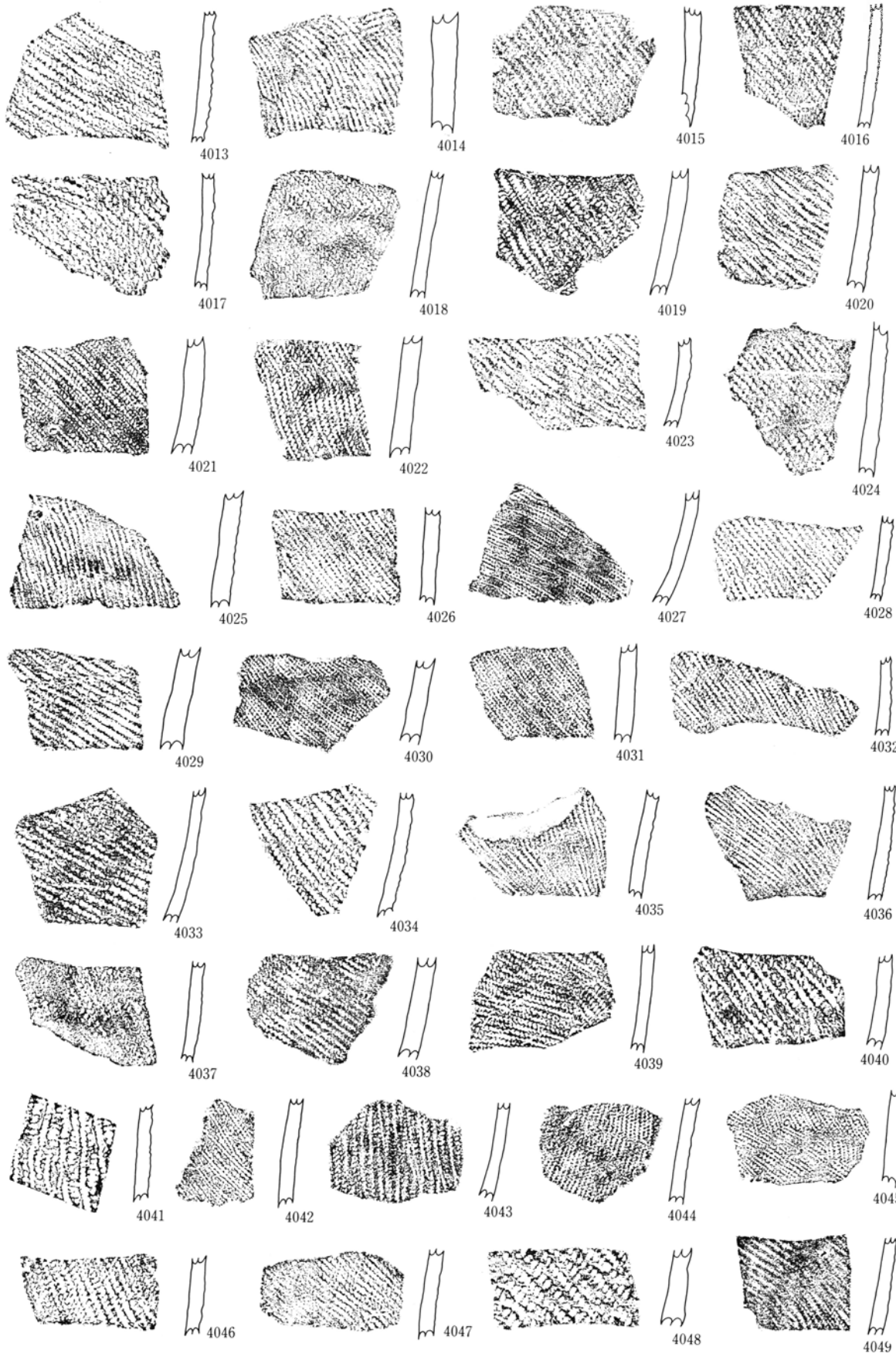
第247図　遺構外Ｃ区出土土器（118）



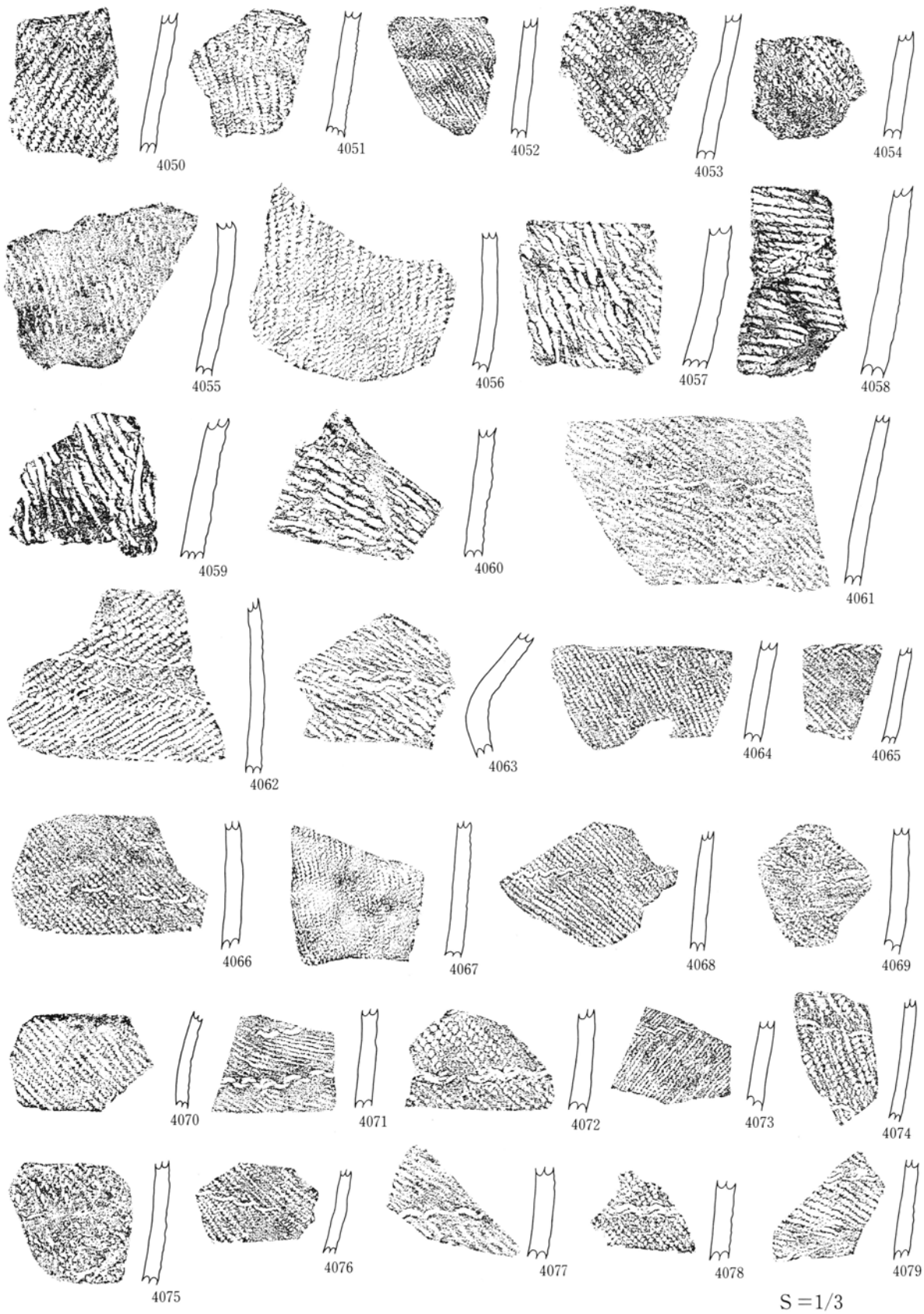
第248図　遺構外Ｃ区出土土器（119）



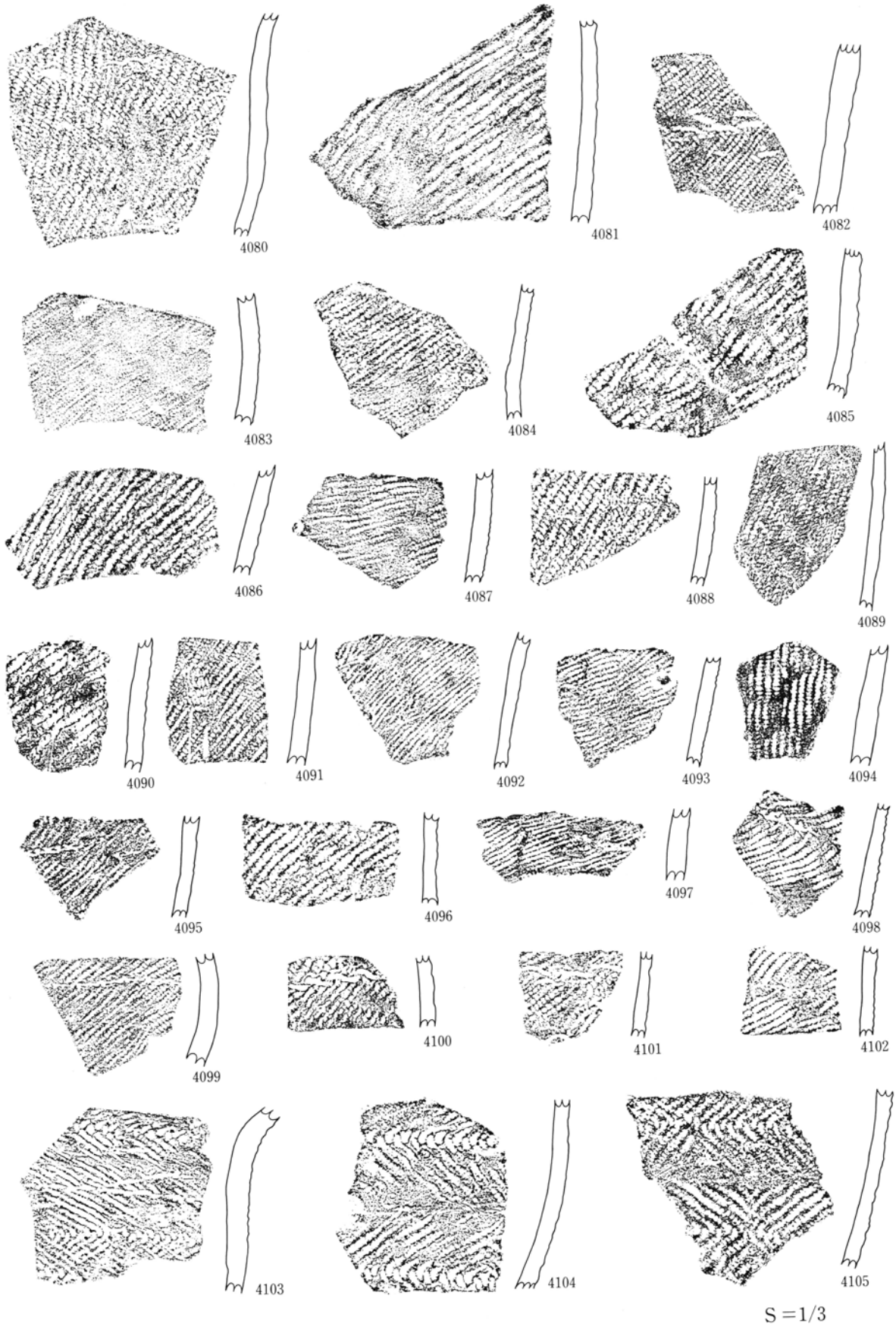
第249図　遺構外Ｃ区出土土器（120）



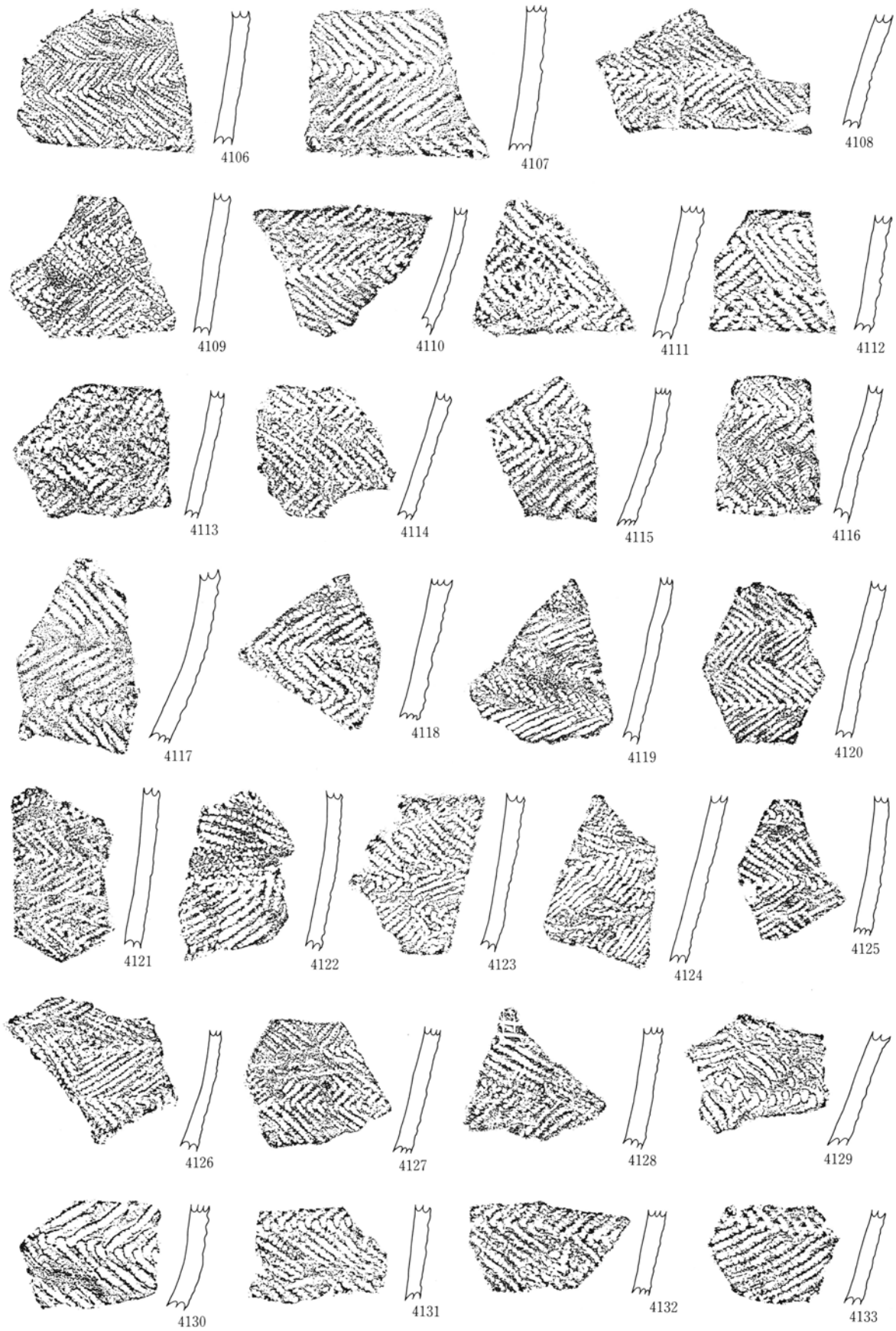
第250図　遺構外Ｃ区出土土器（121）　　Ｓ＝1/3



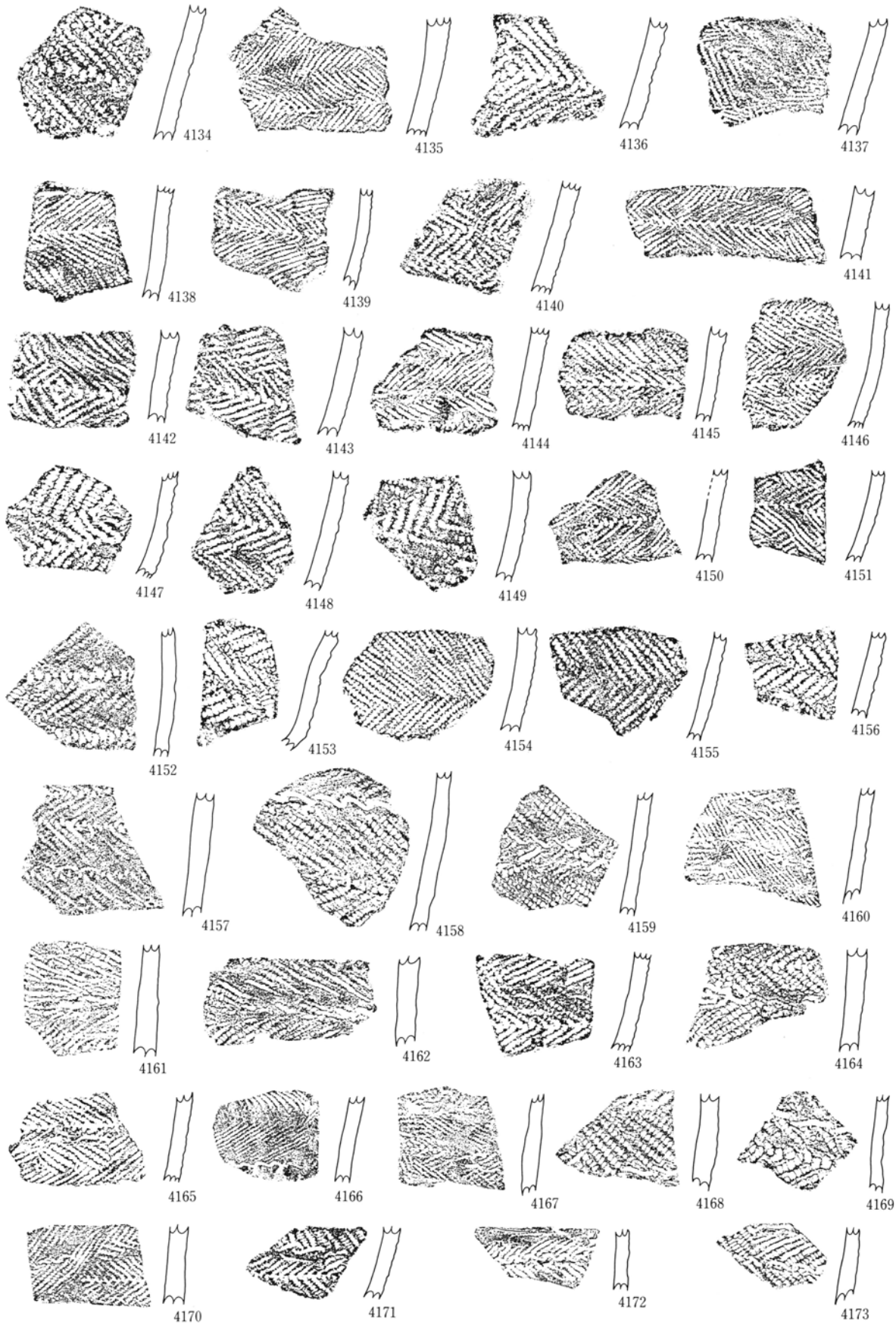
第251図　遺構外Ｃ区出土土器（122）



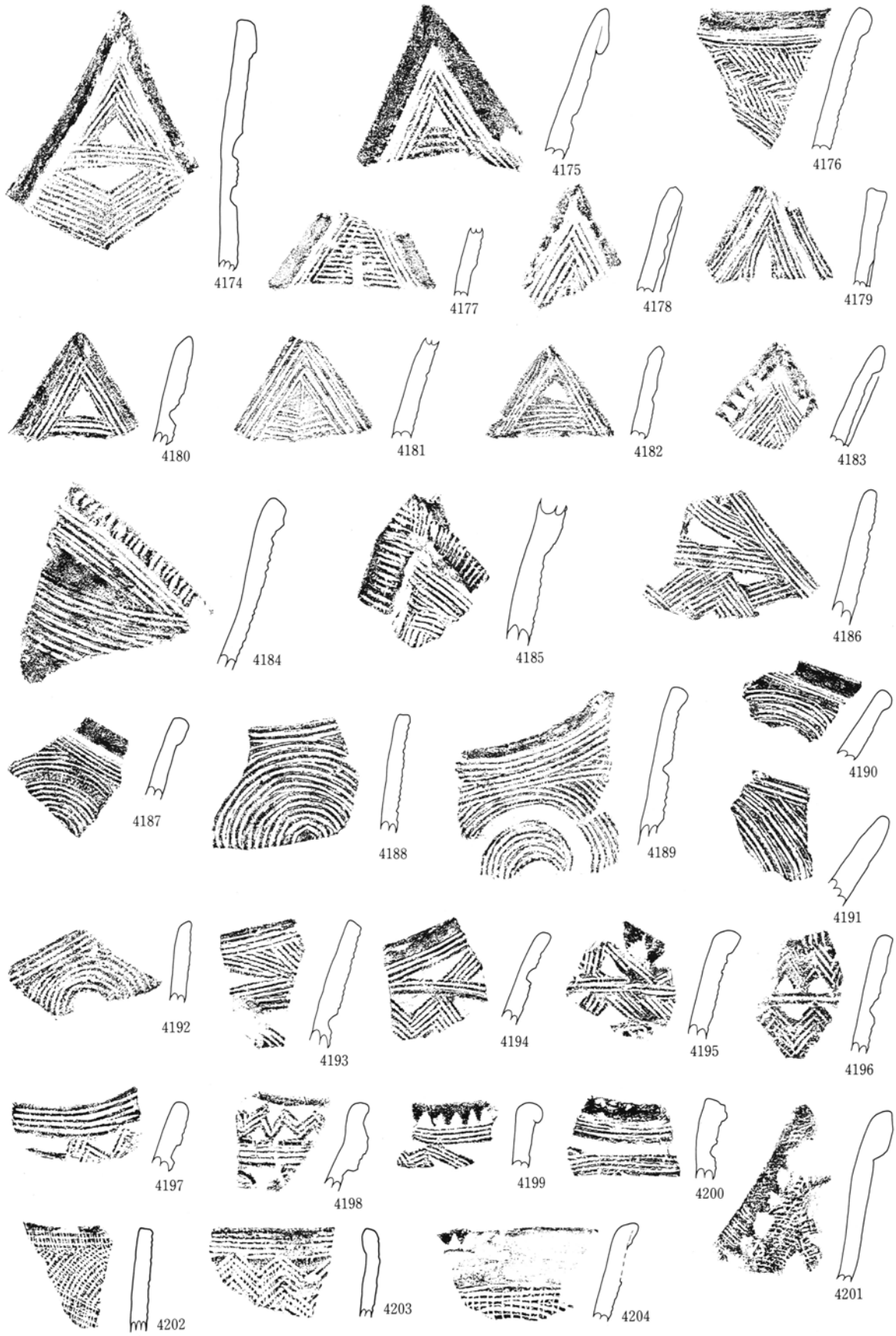
第252図　遺構外Ｃ区出土土器（123）



第253図　遺構外Ｃ区出土土器（124）　　Ｓ＝1/3

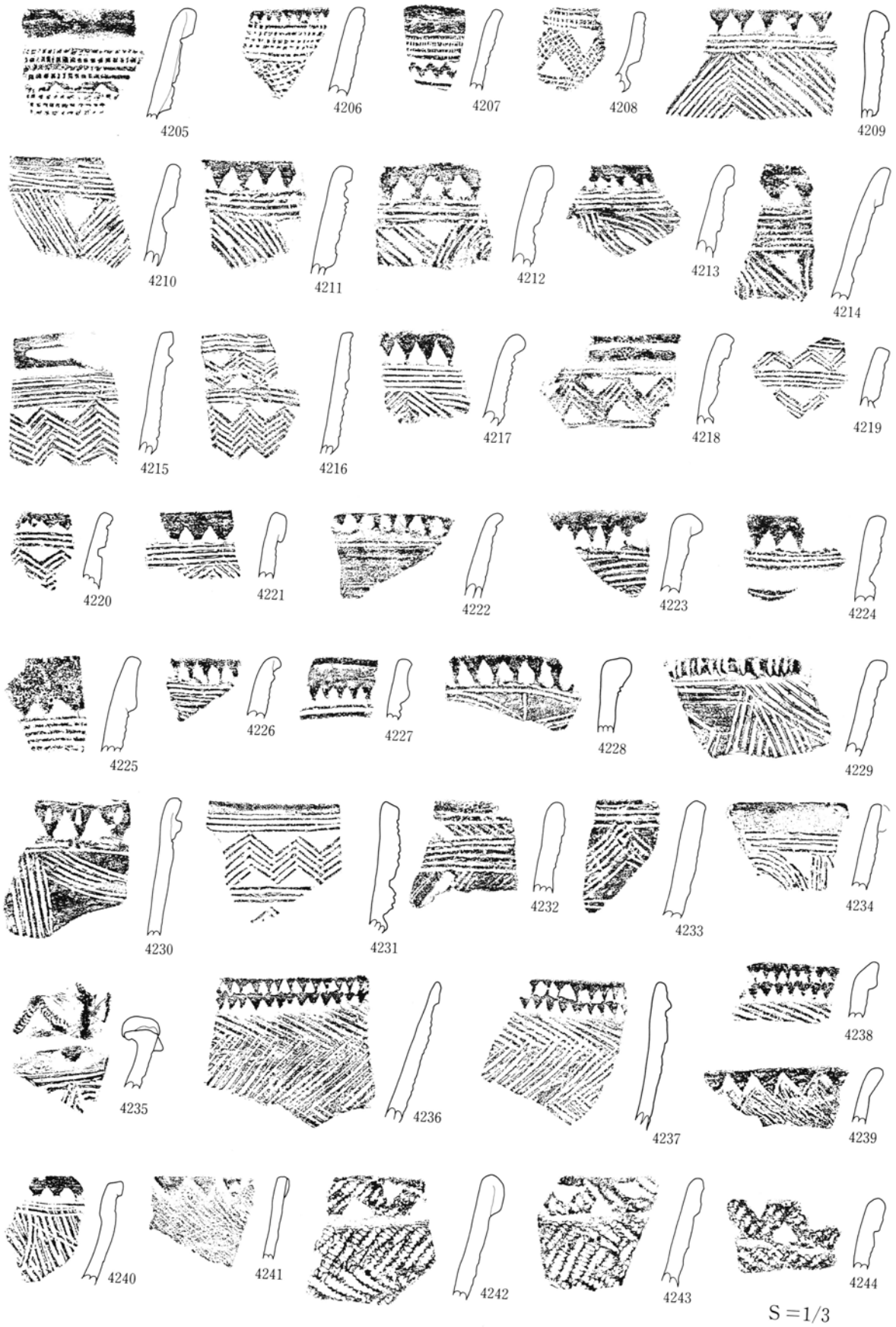


第254図　遺構外Ｃ区出土土器（125）　　Ｓ＝1/3

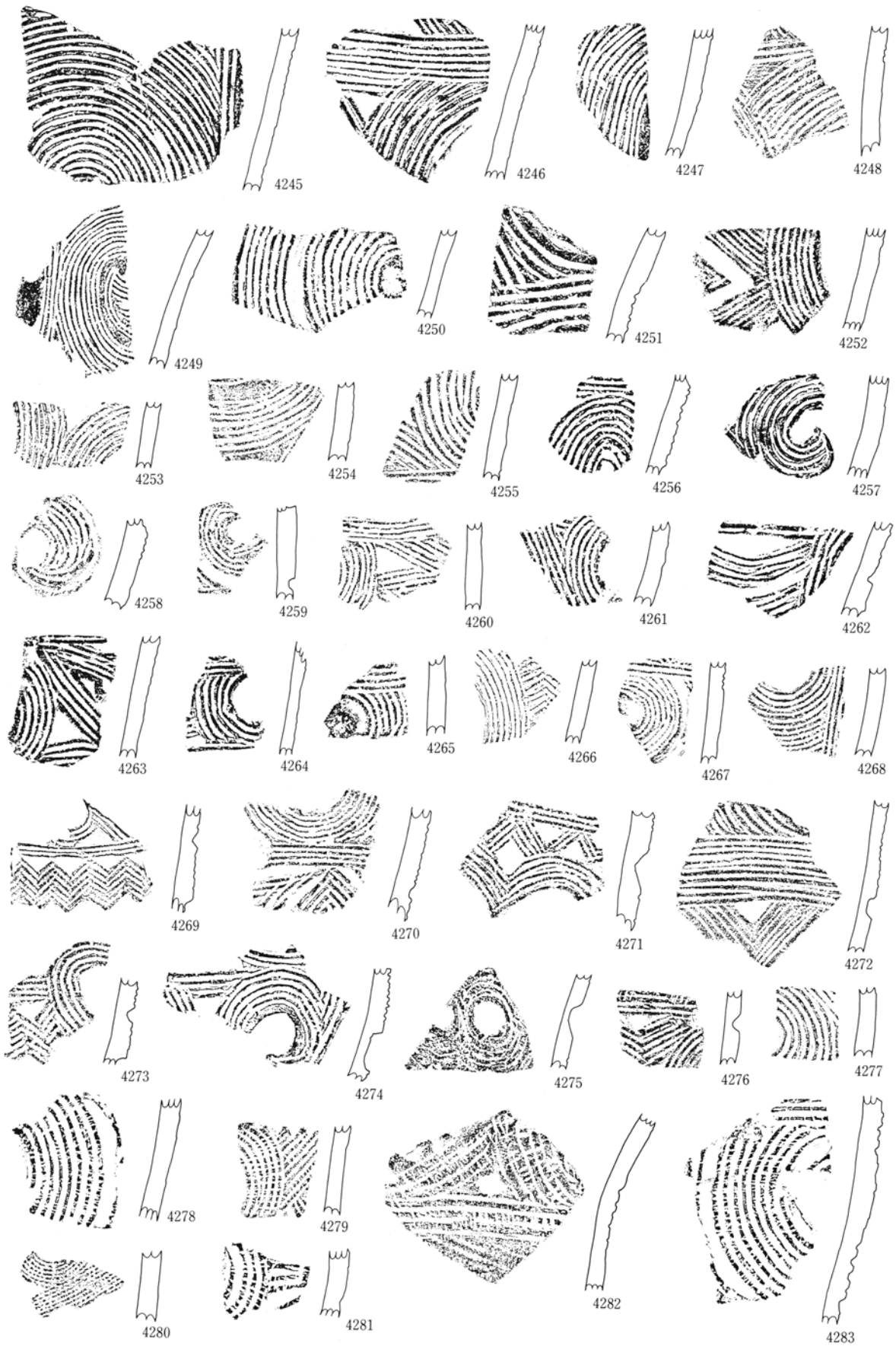


S＝1/3

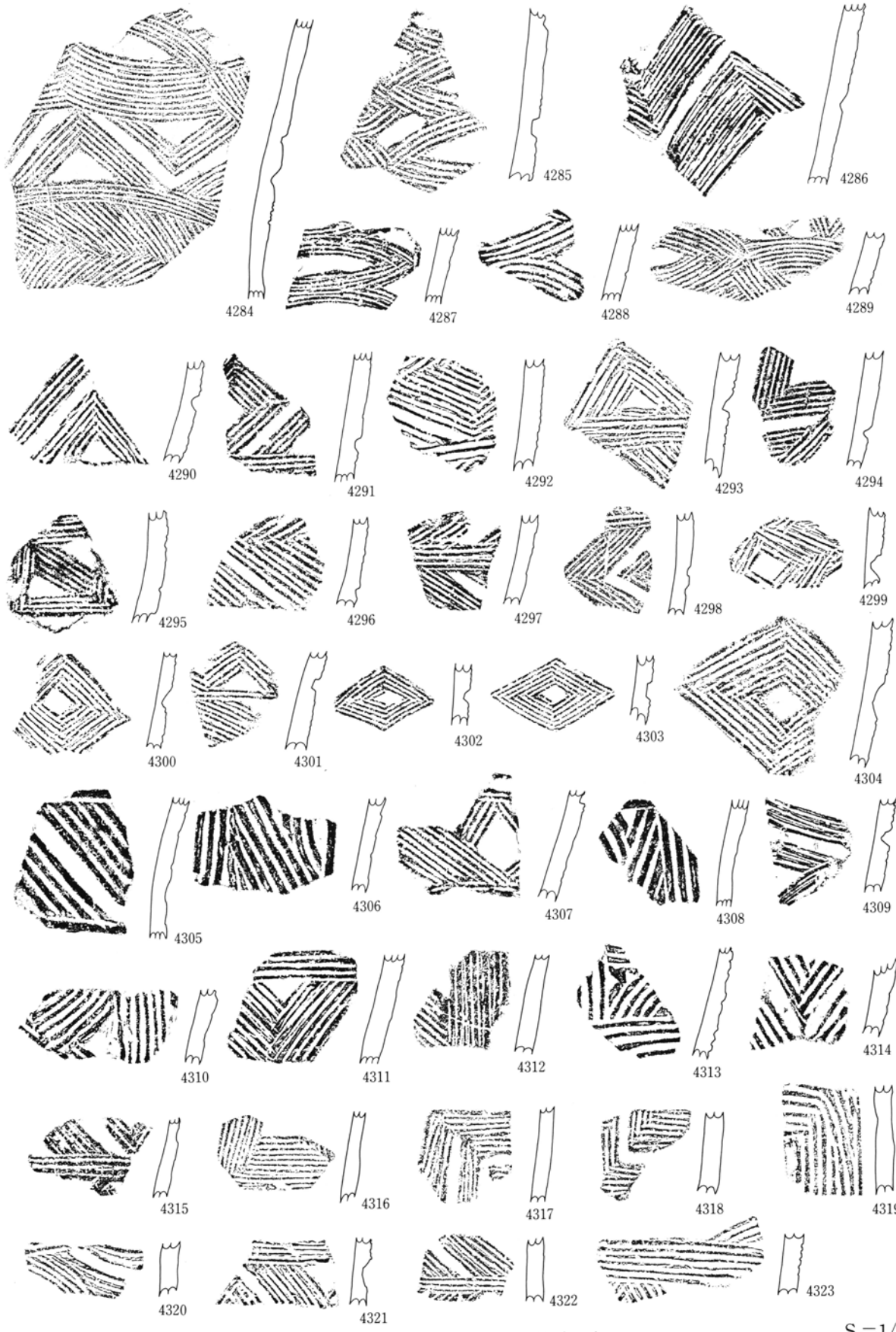
第255図　遺構外Ｃ区出土土器（126）



第256図　遺構外Ｃ区出土土器（127）

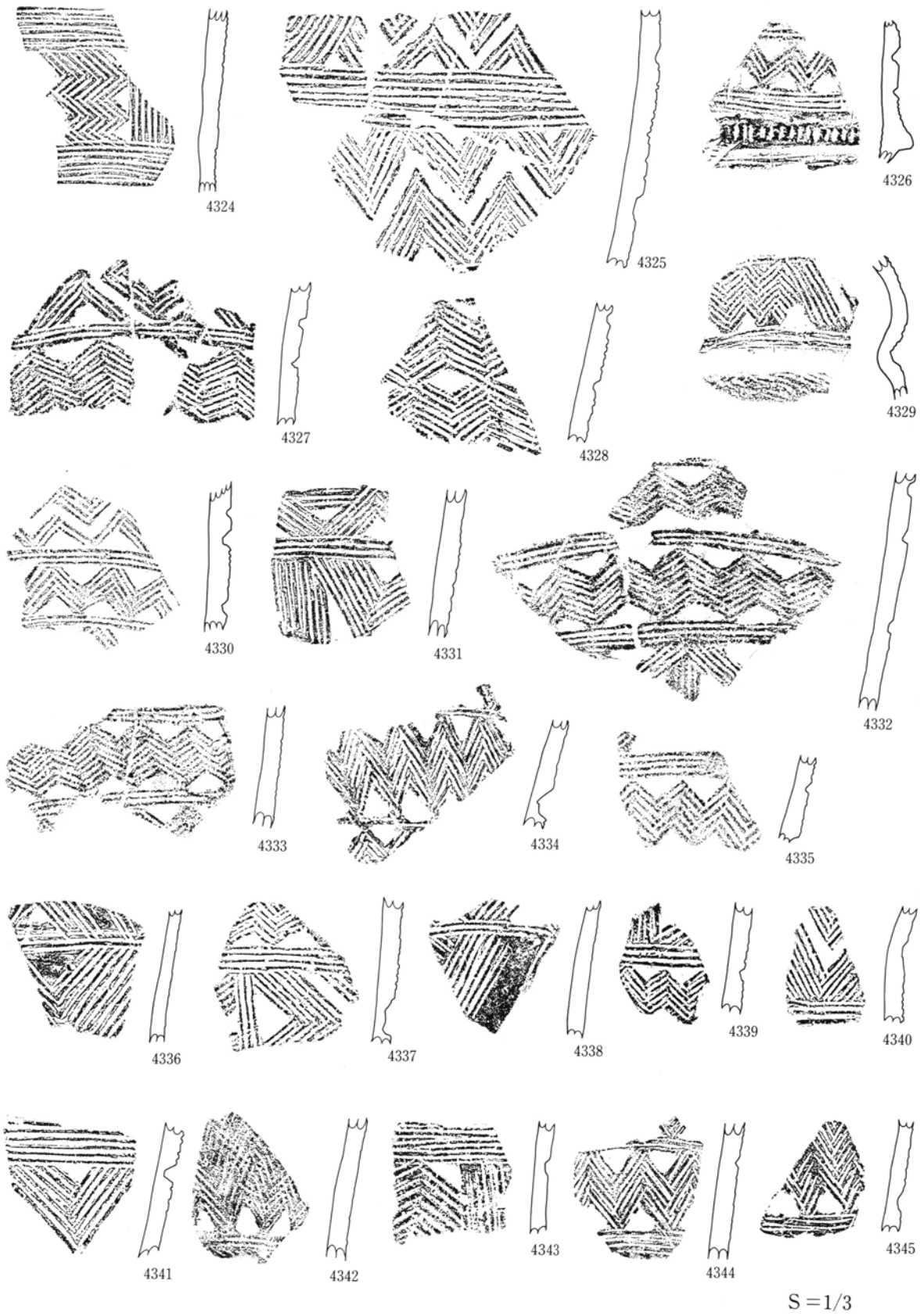


第257図　遺構外Ｃ区出土土器（128）　　Ｓ＝1/3

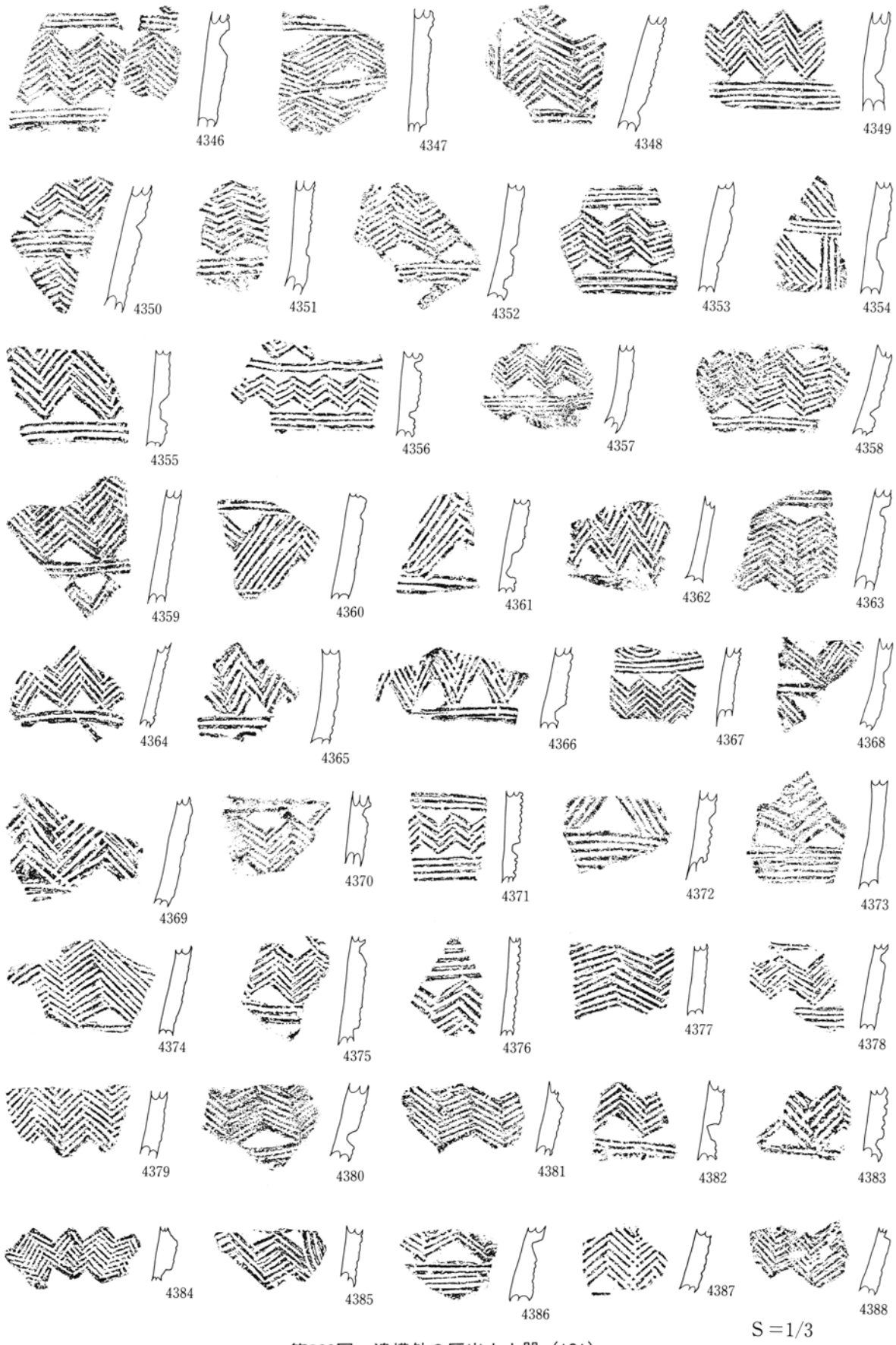


S＝1/3

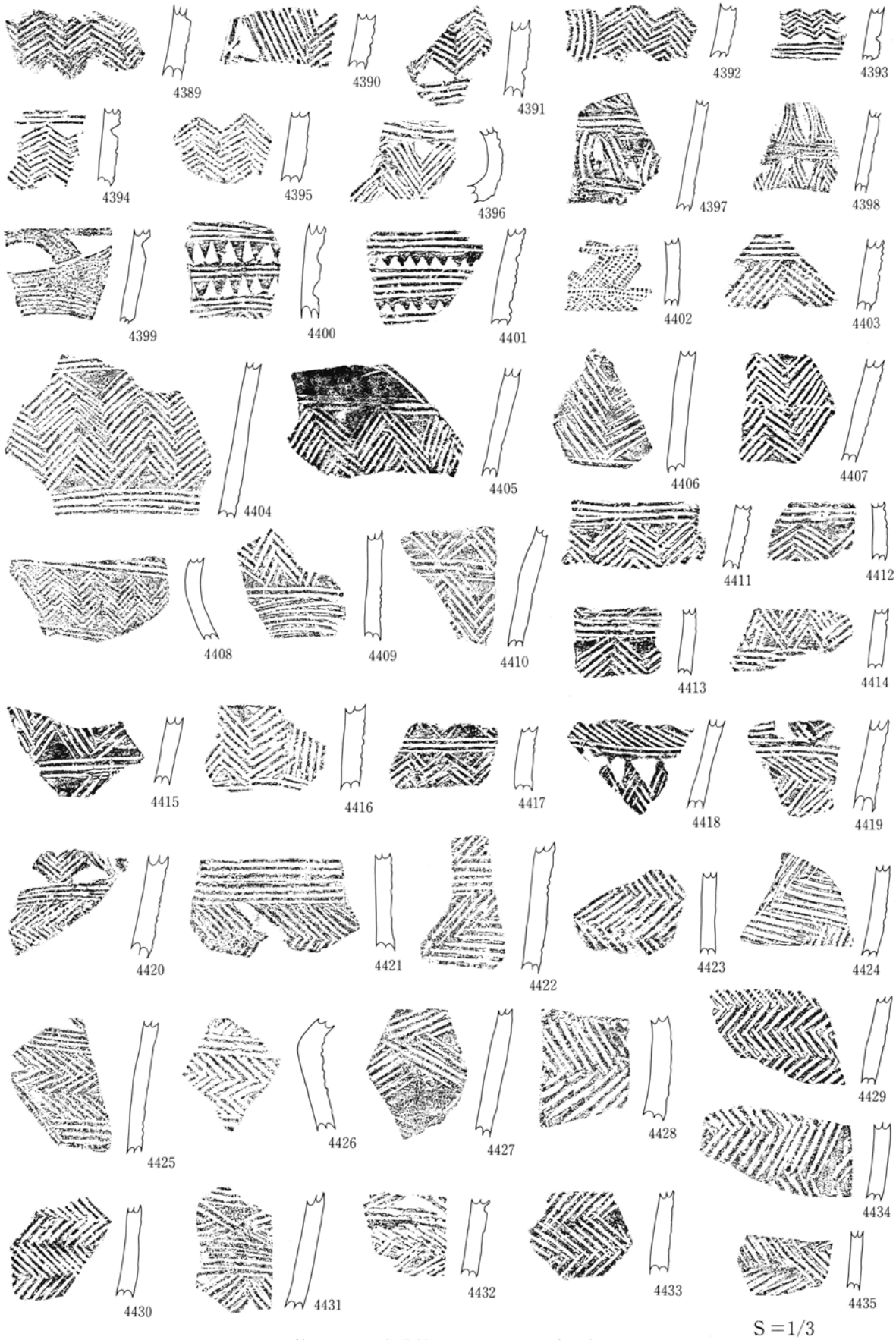
第258図　遺構外Ｃ区出土土器（129）



第259図　遺構外Ｃ区出土土器（130）

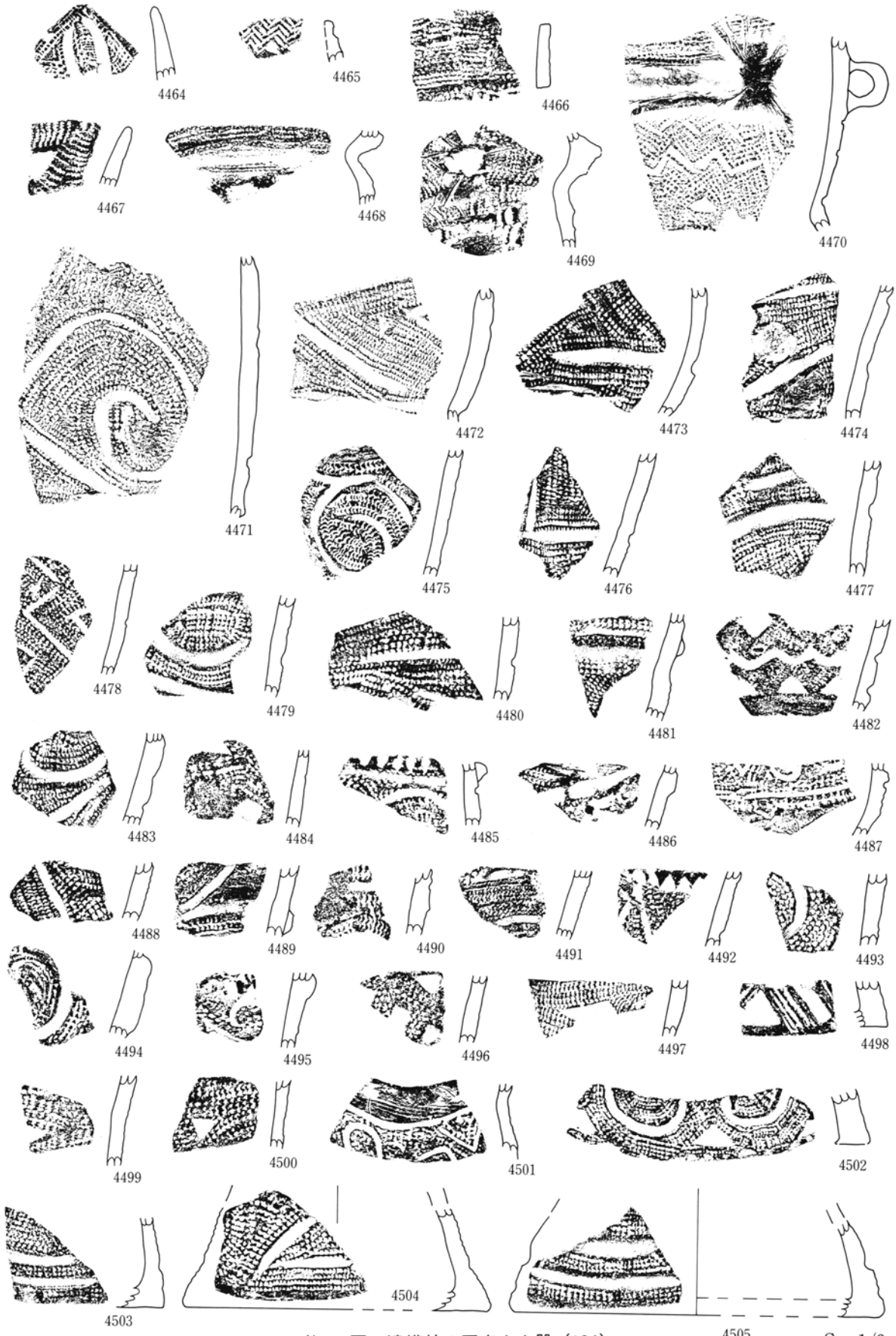


第260図　遺構外Ｃ区出土土器（131）

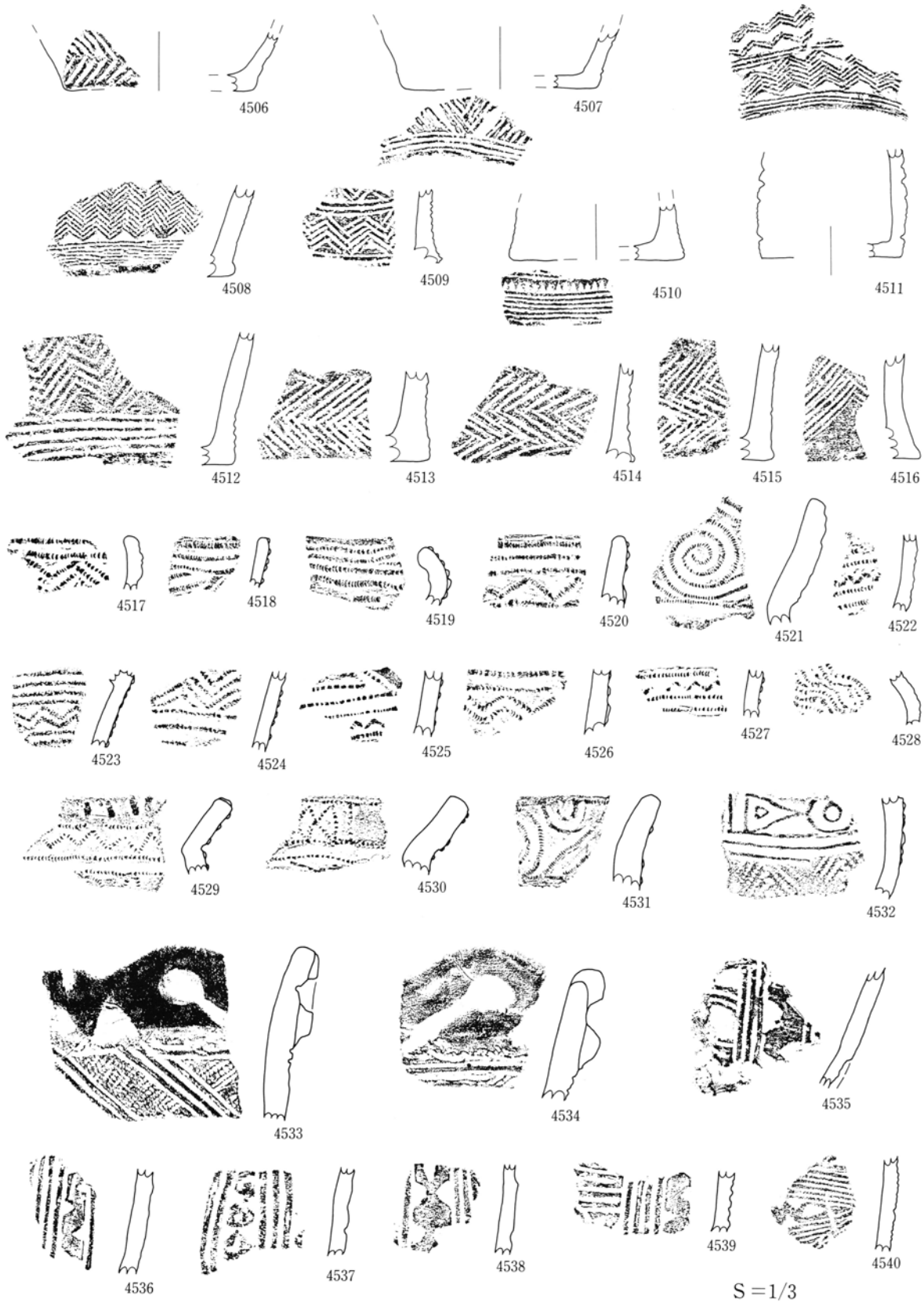


第261図　遺構外Ｃ区出土土器（132）

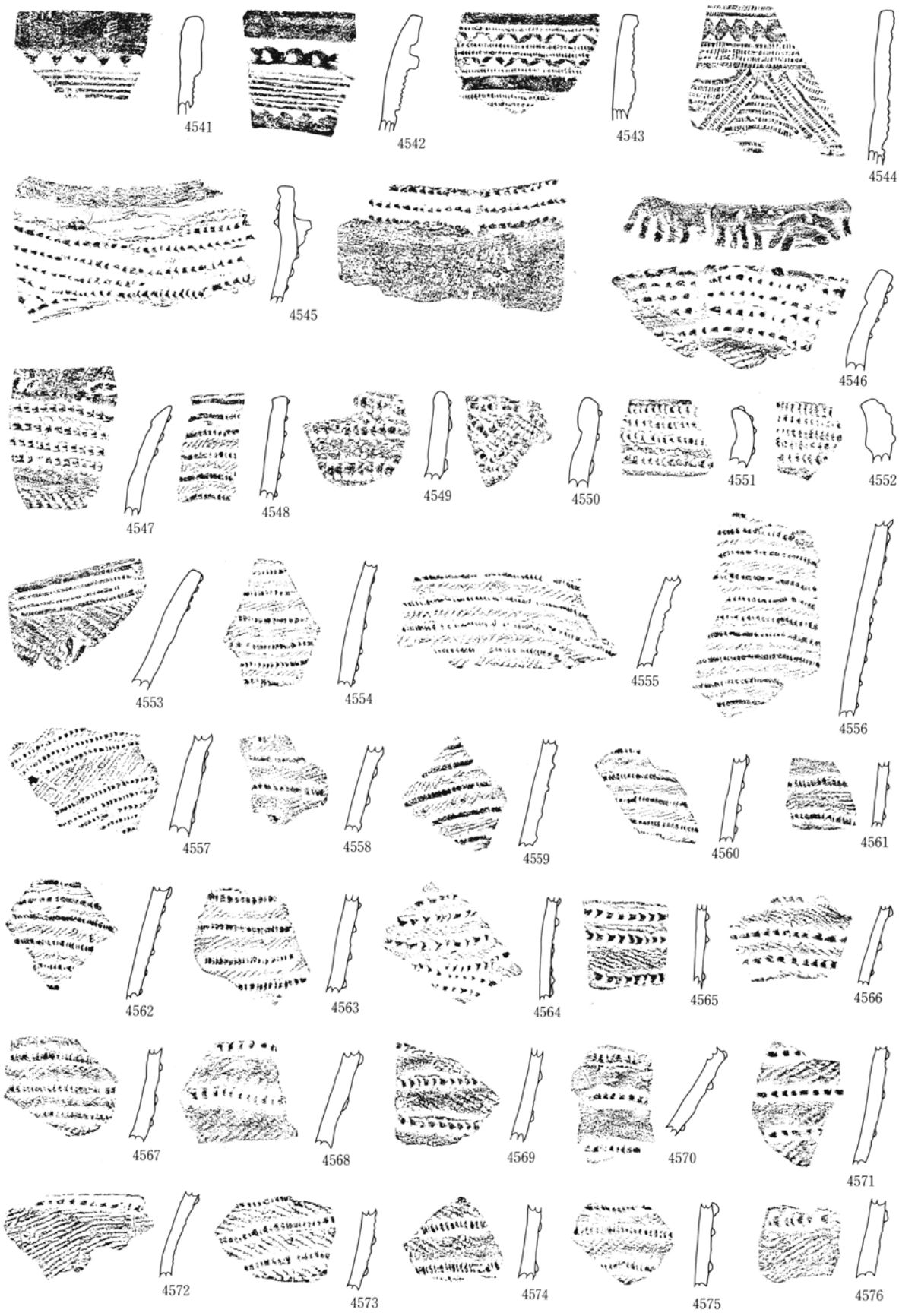
第262図　遺構外Ｃ区出土土器（133）　　Ｓ＝1/3



第263図　遺構外Ｃ区出土土器（134）　Ｓ＝1/3

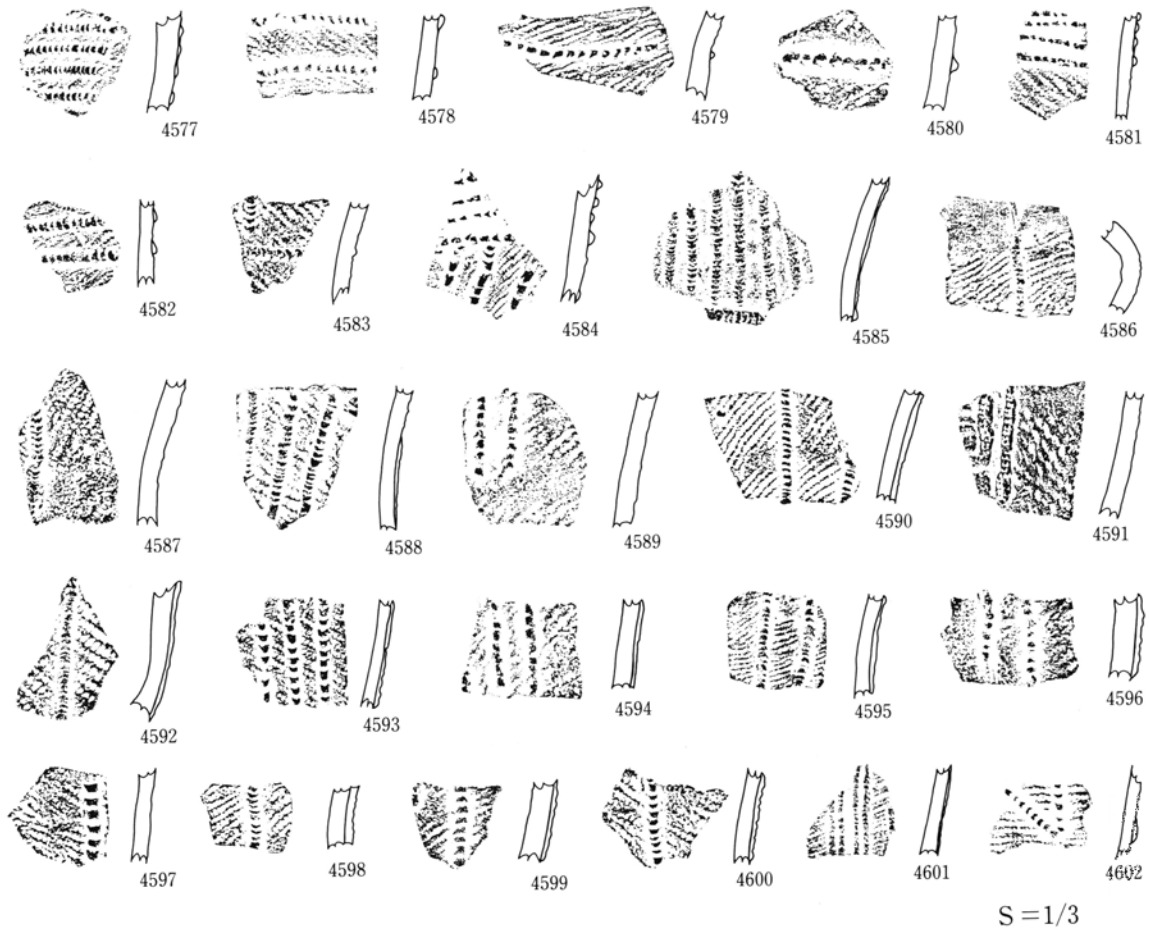


第264図　遺構外Ｃ区出土土器（135）

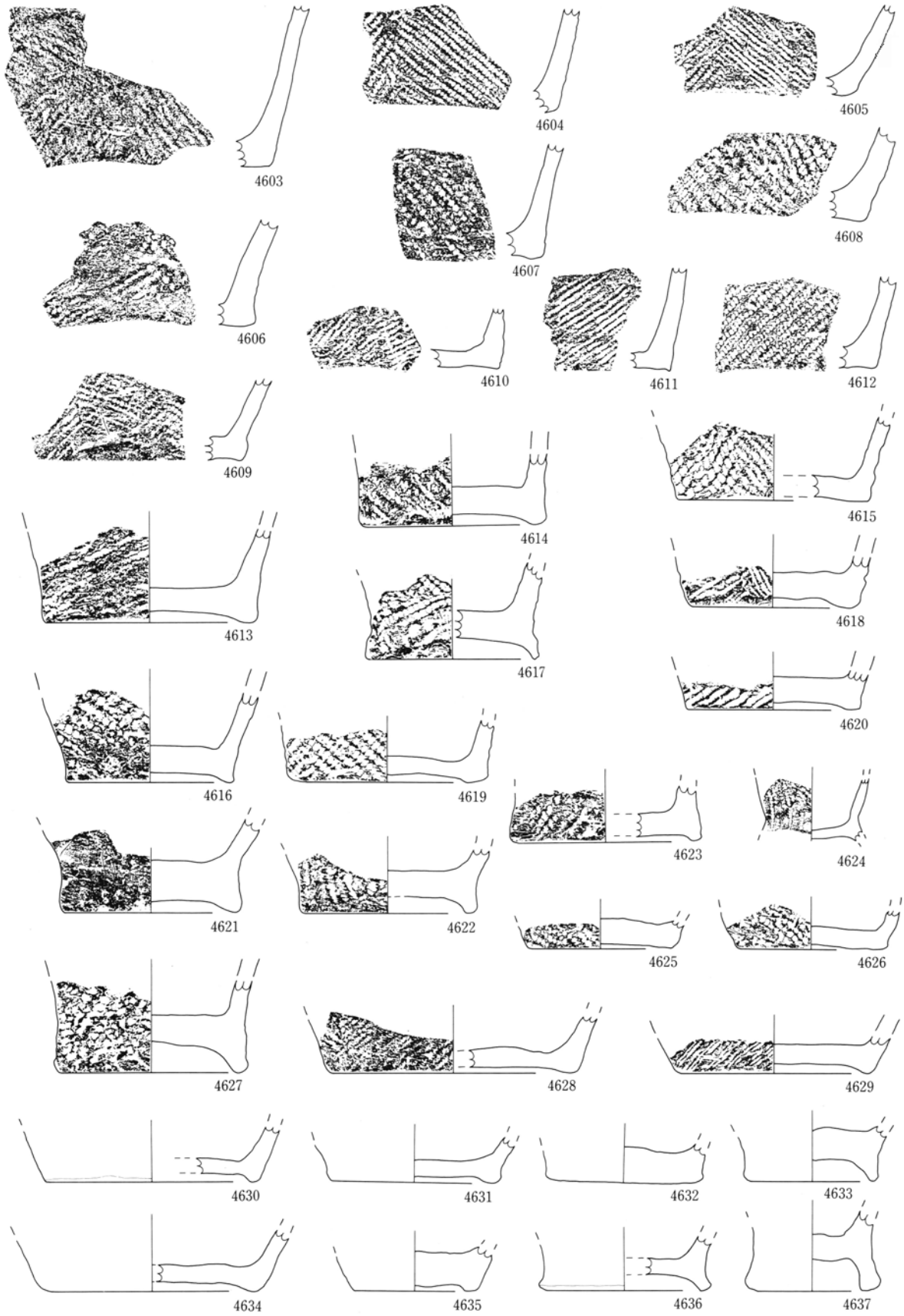


S＝1/3

第265図　遺構外Ｃ区出土土器（136）

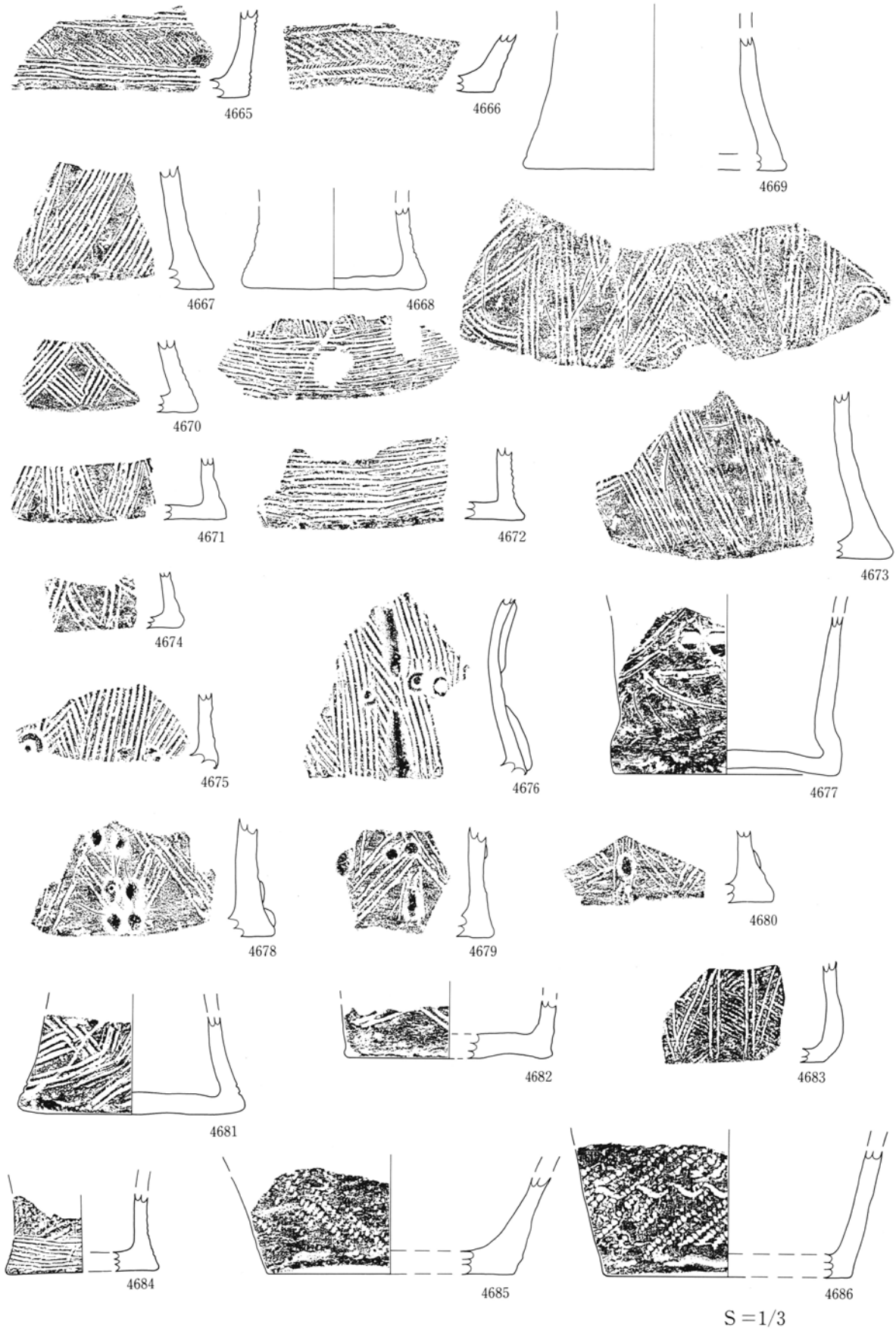


第266図　遺構外Ｃ区出土土器（137）

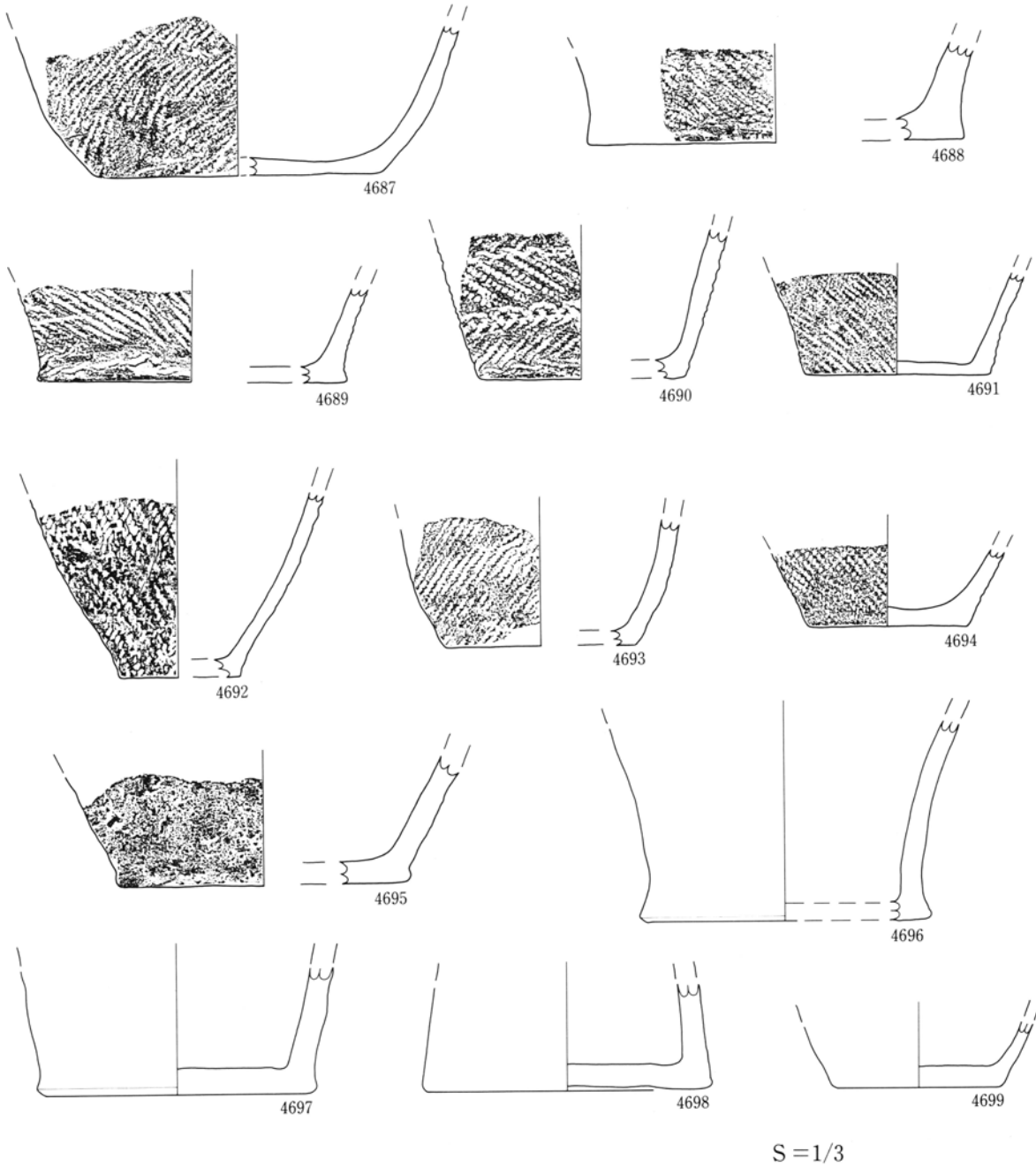


第267図　遺構外Ｃ区出土土器（138）　　Ｓ＝1/3

第268図　遺構外Ｃ区出土土器（139）　S＝1/3



第269図　遺構外Ｃ区出土土器（140）



第270図　遺構外Ｃ区出土土器（141）

タン状貼付文が加飾されている。ボタン状貼付文を加えるという点では、II期Ⅷ群に含める要素ではあるが、施文される文様から本群にした。また、3276と3329が同様の文様を描くことから、両者が同時期ないしはかなり近い時期の所産であると考えられる。3664～3685についても、同様のことが言えよう。3336～3344は胴部に横位の沈線で区画し、区画内に縦位の矢羽根状沈線を多段に施文するものである。

Ｂ類　細い浮線上に半裁竹管による爪形刺突（連続爪形）をもつ、結節浮線文で文様を描くものを本類とした。施文される文様等から、次のように分別される。

１種　曲線的な結節浮線文で文様が描かれる類。

3345～3367は波状口縁となるもので、地文に浅い横位の平行沈線を施し、口縁に添って結節浮線文を巡らせ、3345・3346のように波頂下に結節浮線文で（）状等の弧状の文様を描くもの。3347は波状口縁となる口縁に添って結節浮線文を巡らせ、波頂下に縦位の結節浮線文を描き、小粒のボタン状貼付文を加飾しており、地文には横位の浅い平行沈線を施している。3349～3352・3354～3360は波状口縁となる口縁に添って結節浮線文を巡らせ、口縁部に結節浮線文で渦巻き状の文様を描き、地文は横位の浅い平行沈線を施している。3354には小粒のボタン状貼付文が加飾されており、3355では波頂下に弧状の結節浮線文が施されている。3348・3350・3361～3367は地文に浅い横位の平行沈線を施し、波状口縁となる口縁に添って結節浮線文を巡らせ、口縁部に斜位の結節浮線文をもつものである。3369～3371は地文に浅い横位の平行沈線を施し、平口縁となる口縁に結節浮線文を巡らせ、口縁部に曲線的な結節浮線文をもつものである。

3383～3448は口縁部ないし胴部に、結節浮線文で曲線的な渦巻き状の文様を描くものである。これらの渦巻き文は、波状口縁の波頂下を境に左右対称となるように描かれているものと考えられる。3401の渦巻きの中心には、小粒のボタン状貼付文が加えられ、3422にもボタン状貼付文がみられる。なお、これらの土器の地文には、浅い横位の平行沈線が施されている。3503～3506は本類に伴う底部と考えられるが、地文はもたず、曲線的な文様が描かれ、3504にはボタン状貼付文がみられる。3503は結節浮線文ではなく、刻みをもつ平行沈線で同様の文様が描かれたものである。

２種　縦長の結節浮線文が加飾される類。

3372～3380は地文に横位の矢羽根状沈線ないし斜位の沈線を施し、平口縁となる口縁に結節浮線文を巡らせ、口縁部に縦位ないし斜位の結節浮線文をもつものである。3372～3374には小粒なボタン状貼付文が加えられている。

3449～3497は胴部に縦位・斜位・横位に結節浮線文が施されるものであり、3449～3454・3456・3457・3464・3465・3472・3479・3488・3491・3492・3497には小粒なボタン状貼付文が付いている。これらの土器の地文には、3449に代表されるやや乱れた粗い横位の矢羽根状沈線を施すものと、3493～3496のように浅い横位の平行沈線を施すものとがある。

Ｃ類　半裁竹管による密な押し引き状の連続爪形文で文様を描くものを本類とした。

3507～3509は同一個体となるもので、直立ぎみに外反する波状口縁をなし、口縁に添って連続爪形文を巡らせ、波頂下に連続爪形文で（）状等の弧状の文様を描き、その下に連続爪形文で曲線的な渦巻き状の文様を描くものである。この渦巻き文は、波状口縁の波頂下を境に左右対称となるように描かれている。地文はもたない。3510～3517も波状口縁となるもので、3507と同様の文様が施されている。3518～3540は口縁部ないし胴部に、連続爪形文で曲線的な渦巻き状の文様を描くものである。これらの渦巻き文は、波状口縁の波頂下を境に左右対称となるように描かれているものと考えられる。なお、3524の渦巻きの中心には、小粒のボタン状貼付文が付いている。

Ｄ類　平行沈線により、Ｂ・Ｃ類と同様の文様を描くものを本類とした。

3541～3577は波状口縁となるもので、3542・3544・3546・3553はやや内反ぎみとなり、それ以外は外反する。口縁に添って数条の平行沈線を巡らせ、3541・3543・3544は波頂下に平行沈線で渦巻き文を描くものである。3545・3561・3562・3565・3567・3573～3575は波頂下に連続爪形文で（）状等の弧状の文様を描き、その下に連続爪形文で曲線的な渦巻き状の文様を描くものである。3542・3572は波頂下に縦位の平行沈線をもち、弧状・渦巻き状の文様を描くもの。これらの土器のうち、3542・3544・3546・3567・3574は地文に縄文を施すものである。3578～3586は平口縁となるもので、口縁下に数条の平行沈線を巡らせ、以下に縦位ないし横位の矢羽根状沈線を描く3579～3581や、菱状の文様を描く3578、縦位および曲線的な平行沈線で文様を描く3583がある。

3587～3631は口縁部から胴部にかけて、平行沈線で渦巻き文を描くものであり、3578の渦巻き文は波状口縁の波頂下を境に左右対称となるように描かれているものと思われる。また、2589・3610・3611・3613・3614のように、渦巻き文の沈線間に無文帯をもつものもある。3632～3663は渦巻き文と関わるものも含まれるが、口縁部から胴部にかけて平行沈線による連続する弧状線を描くもので、3635のように弧状線の方向を変えることでレンズ状の無文帯をもつものもある。3664～3685は平行沈線による曲線的な渦巻き状および弧状の文様を描くもので、沈線間にレンズ状等の無文帯を表出するものである。

II期Ｘ群

3690～3721が本群の土器であり、胎土には繊維を含まない。出土量は少ないが、器面全体に凹凸のある刺突（刺突凹凸文と呼ぶ）を施すもので、他の土器群とは異なり、本群に分別した。3690は平口縁となる深鉢形を呈し、口縁下が僅かに括れている。施文される文様は、口縁直下に縦位の刻み状の沈線帯をもち、以下の器面全体に刺突凹凸文を施すものである。3691～3693は平口縁となる口縁以下に、刺突凹凸文を施すもの。3694～3721は胴部に刺突凹凸文を施すものである。

II期XI群

3722～3737が本群の土器であり、胎土には繊維を含まない。3722は外反する平口縁となるもので、有段状の口端部に斜位の刻み状の沈線をもち、以下に幅広な半裁竹管による変形爪形文（ロッキング技法による支点を交互にずらせた爪形文）を２条巡らせ、変形爪形文間に縦位刺突を施す。この変形爪形文は頸部下にも巡らされて文様区画を行い、区画内には細い半裁竹管による羽状となる平行沈線が描かれている。3723は平口縁となる口舌部に半裁竹管による刺突をもち、口縁下に幅広な半裁竹管による変形爪形文を２条巡らせ、変形爪形文間に斜位の刺突を施す。3724は平口縁となる口舌部に刺突をもち、口縁下に幅広な半裁竹管による変形爪形文を２条巡らせている。3726は波状口縁となる口舌部に刺突をもち、口縁に添って幅広な半裁竹管による変形爪形文を２条巡らせている。3727～3731は同一個体となるもので、間に斜位の刺突をもつ変形爪形文を巡らせて文様区画を行い、区画内に細い半裁竹管による平行沈線で文様を描き、胴部にロッキングによるアナダラ属の貝殻背圧痕文を施すものである。3732・3733は変形爪形文を施すものであり、3734～3737はロッキングによる貝殻背圧痕文を施したものである。

II期XII群

3742～3755が本群の土器であり、胎土には繊維を含まず、器厚は薄く、焼成良好な土器である。3742は平

口縁となる口舌部に刻みをもち、口縁以下に先端が平らな棒状工具での深い刺突と、浅い密な刺突を組み合わせて、横位に数段施すものであり、裏面には横位に帯状の朱彩が3段施されている。3743～3746は平口縁となる口縁に小突起を有し、口舌部に刻みをもつ。3744は口縁下に幅広な半裁竹管で、横位に密なシュロ状の連続爪形文を施すものであり、3743・3745・3746は同様の密な連続爪形文の両脇に微隆起線をもつものである。3747～3749は平口縁となる口縁下に、横位の密な連続爪形文を施すものである。3750は波状口縁となるもので、口縁下に密な連続爪形文を施すものであり、裏面口端部に刻みを有する。3751～3755は胴部に密な連続爪形文を施すものであり、連続爪形文の両脇に微隆起線をもつ。3746・3751の微隆起線の一部は、横位以外の文様を構成しているように思われるものである。

II期XIII群

3756の1点のみである。胎土には繊維を含まず、器厚は薄く、焼成良好な土器である。胴部上半が外反する器形を呈し、上半には2段の横位矢羽根状沈線が巡り、その下に刺突列点を1条巡らせて区画し、胴部下半は無文となる。

II期XIV群

3757～3857が本群の土器であり、胎土には繊維を含まない。これらの土器は、施文される文様から次のように分類される。

A類　鋸歯状貼付文をもつものを本類とした。

3757～3766は地文に沈線文をもつもので、3757～3763・3765は平口縁となるものであり、3764・3766は波状口縁をなすものである。3757は口縁内側が肥厚し、口縁に低い耳タブ状の貼付文をもつ。地文に矢羽根状の平行沈線を施し、鋸歯状貼付文と小粒のボタン状貼付文を加飾する。3759は有段となる口縁に爪形刺突をもち、以下に鋸歯状貼付文を加えている。3760は口縁直下を無文帯として隆起線で区画し、以下に鋸歯状貼付文を加える。3767～3781は地文に縄文をもつもので、3767～3773・3775・3777・3778・3780・3781は平口縁となり、3774・3776・3779は波状口縁となるものである。地文となる縄文には、LRないしRLを施すものと、羽状縄文を施す3775、結束羽状縄文を施す3779・3780がある。3767は口縁部以下に横位の鋸歯状貼付文をもつものであり、3768・3769は口縁下に隆起のある鋸歯状文をもつもの。3766は波状口縁となる波頂下に円形刺突をもつボタン状貼付文を有し、口縁下に鋸歯状貼付文をもつものである。3779は波長部に2個の耳タブ状貼付文をもつもので、口縁以下に付いていた鋸歯状貼付文が剝落したものである。他にも、鋸歯状貼付文が剝落したものがある。

3782～3804は地文に沈線文をもつ胴部に鋸歯状貼付文をもつもので、3782～3784・3790・3800・3802には小粒のボタン状貼付文が付く。地文となる沈線は、横位の矢羽根状となるものや斜位となるものである。また、3803・3804には縦位の結節浮線文がみられる。3805～3832は地文に縄文を施す胴部で、小粒のボタン状貼付文を有するものもある。地文に施文される縄文には、LRないしRLの縄文、結束羽状縄文等がある。

B類　縄文を地文とし、ボタン状貼付文のみをもつものを本類とした。

3833～3857は地文に縄文を施す胴部に、ボタン状貼付文をもつものであり、3854～3857のように貼付文に円形刺突を加えたものもある。なお、これらの土器は、II期VIII群B類に共通する。

II期XV群

3858～4173が本群の土器であり、胎土に繊維を含まない、縄文のみが施文された一群である。施文される縄文原体等から、次のように分類される。

A類　R撚りの縄文を一括した。

3858～3925は平口縁となるもので、口縁以下にRLの縄文を施すものであり、3862・3910の口縁下には穿孔する孔を有する。3926～3928は波状口縁となるもので、口縁以下にRLの縄文を施したもの。3929～3935は平口縁となる口舌部に刻みをもち、口縁以下にRLの縄文を施すもの。3936～3938は波状口縁となる口舌部に刻みをもち、口縁以下にRLの縄文を施したものである。3991～4079は胴部にRないしRLの縄文を施すもので、4061～4079には結節縄文が施されている。

B類　L撚りの縄文を一括した。

3939～3959は平口縁となる口縁以下にLRの縄文を施すもので、3949・3955の口縁下には穿孔する孔を有する。なお、3952の口舌部にも縄文が施されている。4080～4102は胴部にLないしLRの縄文を施すものであり、4099～4102には結節縄文が施されている。

C類　羽状縄文を施すものを一括した。

3960～3973は平口縁となるもので、口縁以下にLRとRLによる結束羽状縄文が施されるものであり、3963の口舌部にも縄文が施されている。また、3971の口舌部には刻みをもち、2972の口縁直下には縦位の沈線帯が巡っている。4103～4173は胴部にLRとRLによる結束羽状縄文が施されるものであり、4157～4173には結節縄文がみられる。

D類　口縁が有段となるものを一括した。

3974～3990は平口縁となる口縁が有段となるもので、他の縄文施文土器とは異なる。3974～3989は有段以下にLRとRLによる結束羽状縄文が施されるものであり、3990は無文である。なお、胴部片については、先述したC類と分別することができないため、図示できなかった。

II期XVI群

31～34・4174～4602が本群の土器であり、前期終末の土器群を一括した。胎土には繊維を含まない。施文される文様から、次のように分類される。

A類　印刻文をもつ一群を本類とした。

34は大きく外反する波状口縁の深鉢で、波底下に耳タブ状の貼付文をもち、口縁が有段となる。施文される文様は、口縁部に平行沈線で横位に数段巡らせて文様区画し、区画内に縦位の矢羽根状沈線を施す。さらに、矢羽根状となる上下の隙間に、三角の印刻をもつものである。

4174～4201は波状口縁となるもので、4174～4178・4183～4185・4187・4189・4190・4195・4199・4201は有段口縁となる。4174～4182の波頂下には横位・羽状等の沈線が施され、三角等の印刻を文様の隙間に施すものであり、4183の有段口縁上にも三角印刻が施されている。4184～4186・4193～4200は口縁部に横位沈線で文様区画をしながら、曲線ないし縦位の矢羽根状沈線を描くもので、文様の隙間に三角等の印刻を施している。4184・4185の有段口縁上には縦位の刻み上沈線が、4195・4199の有段口縁上には三角印刻が施されている。4187～4192は口縁部に沈線で渦巻き状の文様を描くもので、4189～4192は沈線間に印刻を施すものである。4201～4208は口縁下に平行沈線で横位および曲線・縦位矢羽根状の文様を描いた上に、刻み状となるような沈線を施すもので、4205・4207・4208は文様間に三角印刻をもつ。4201・4204・4206の有段口縁上に

は、三角印刻が施されている。4209～4244は平口縁となるもので、有段口縁となるものも多い。4209～4234は口縁以下に平行沈線による横位および菱状・縦位矢羽根状・レンズ状等の文様を描き、文様の隙間に三角・菱状・レンズ状・棒状等の印刻をもつものである。有段口縁上には、三角印刻を施す4209・4211～4214・4217・4220～4228と、三角印刻と刺突を施す4230、縦位の刻みを施す4229がある。4236～4241は有段口縁の下に横位の矢羽根状沈線を施すもので、有段口縁上には三角印刻をもつ。4236～4238では三角印刻が2段に施されている。4242～4244は三角印刻をもつ有段口縁で、口縁以下に羽状縄文を施すものである。

4245～4283は口縁部に平行沈線で渦巻き等の文様を描くもので、沈線間および文様の隙間に印刻を施すものである。4269～4273は横位沈線で区画するように、縦位の矢羽根状沈線を併せて描くもので、三角印刻をもつ。4278～4283は渦巻きとなる文様上に、刻み上の沈線を浅く施すものである。4284～4289は口縁部に平行沈線で弧状線によるレンズ状および三角状の文様を描き、文様の隙間にレンズ状・三角等の印刻を施すもの。4284では口縁部文様下に横位の平行沈線を巡らせて区画し、胴部下半に横位の矢羽根状沈線を施している。4290～4323は口縁部に横位の平行沈線で区画しながら、菱形等の文様を描き、文様の隙間に三角・菱状・棒状等の印刻を施すもの。4324は横位・縦位の平行沈線で区画し、区画内に横位の矢羽根状沈線を描き、その隙間に三角印刻を施すものである。31・4325～4420は横位の平行沈線で区画し、区画内に縦位の矢羽根状沈線を描き、文様の隙間等に印刻を施すものである。4325・4367・4392には曲線的な渦巻き状の文様がみられ、4325の下部文様帯には三角印刻の他に鋸歯状の印刻が施されている。4326には刻みをもつ隆帯が巡り、4329の大きく括れる胴部以下には縄文が施されている。これらの土器の中には、4404～4417のように印刻をもたないものもある。また、31・4419～4421では胴部下半に横位の矢羽根状沈線を施し、31の胴部下半には小粒のボタン状貼付文が付いている。4422～4435は胴部下半に施された横位の矢羽根状沈線と思われるもの。32・4506～4516は、これらの底部となるものである。

B類　印刻文と共に、連続する押し引き状の刺突をもつものを本類とした。

4436～4505は胴部下半に括れ部をもち、口縁が外反して波状口縁となり、波長部に把手をもつトロフィー形を呈するもので、口縁部が大きく屈曲して内反するものもある。4436～4439は波長部に付けられた環状となる把手部であり、隆帯をもつ。施文される文様は、櫛状工具等による連続する押し引き状刺突を全面に施している。4436は有段口縁となり、口縁以下にも同様の押し引き刺突が施されている。4441～4452は口縁部が屈曲するもので、4442～4450の口縁には隆帯による文様が施され、隆帯上にも連続する押し引き刺突が施されている。4441は口縁に縦位の隆帯をもち、縦位の矢羽根状沈線と三角印刻を施し、屈曲下の口縁部に横位の平行沈線で区画と、縦位の矢羽根状沈線および三角印刻をもつ。4452は口縁に縦位の矢羽根状沈線と三角印刻を施し、さらに屈曲部に三角印刻をもち、屈曲下の口縁部に印刻状の太い沈線で曲線等の文様を描き、その間を連続押し引き刺突等で充填させるものである。4459～4436は平口縁となる口縁下に印刻等をもち、連続する押し引き刺突を施すもの。

33は胴部下半の括れ部付近のもので、底部ではない。施文される文様は、太い沈線を巡らせて文様区画を行い、区画内に同様の太い沈線で渦巻き状の文様を描き、三角や菱形の印刻をもち、連続する押し引き刺突を施すものである。4470は胴部に2条の隆帯と環状突起をもち、太い沈線で鋸歯状の文様と三角印刻、さらに連続押し引き刺突を施すものである。4471～4497・4499～4501は胴部上半に太い沈線で渦状・棒状・鋸歯状等の文様を描き、連続する押し引き刺突を施すものであり、4482・4492・4496・4497・4499・4500には三角印刻が施されている。4502～4505は胴部下半から底部に至るもので、太い沈線で文様を描き、連続する押し引き刺突を施している。

Ｃ類　浮線文により文様を描くものを本類とした。

4517～4532と、出土量は少ない。4517～4520・4529～4531は平口縁となるもので、4521は小波状口縁となるものである。口縁部は短く屈曲して外反し、密な刺突による結節浮線文で鋸歯状や渦巻き状ないし円形の文様を施すもので、4592の口舌部には結節ではない浮線文が縦位に付く。4522～4528は胴部に同様の結節浮線文で鋸歯状等の文様が描かれるものである。4532は胴部上半に結節をもたない浮線文で円形や三角形の文様を描き、横位の浮線文で文様帯区画を行う。胴部下半には、縦位回転による結束羽状縄文が施されている。

Ｄ類　断面が蒲鉾状となる平行沈線で文様を描くものを本類とした。

4535～4540と、出土量は少ない。これらは、いづれも半裁竹管で断面が蒲鉾状となる深い平行沈線を縦位に施して区画し、区画内に三角印刻や横位沈線等で文様を描いている。

Ｅ類　口縁部に大形の隆帯をもつものを本類とした。

4533・4534の２点だけであり、同一個体と思われる。口縁に厚く大形の隆帯を有段状にもち、隆帯は小突起状ともなる。小突起下には一方が切れる円形刺突をもち、有段部に三角印刻を有する。口縁部には地文を縄文として、深い平行沈線が斜位に施されている。

Ｆ類　縄文を地文に、結節浮線文を施すものを本類とした。

4545は平口縁となる口縁下に鍔状の隆帯を巡らせ、その下に横位の結節浮線文を数条巡らせるもので、下部に横位以外の結節浮線文での文様をもつ。裏面の口縁下にも、横位の結節浮線文が３条巡っている。4546は平口縁となる口縁下に結節浮線文を数条巡らせ、以下に縄文を施すものであり、裏面の口縁下に結節をもたない浮線文で幅狭な文様を描いている。4547～4553は平ないし波状口縁となる口縁下に結節浮線文を巡らせるもので、4550は鋸歯状の文様を巡らせている。これらの地文には、縄文が施されている。4554～4602は地文縄文となる胴部に、横位に結節浮線文を施すものや、縦位に施すものがあり、4584・4602から横位・縦位以外の文様を描くことも窺えよう。

Ⅲ期Ⅰ群

35～37・4700～5095が本群の土器であり、中期初頭の土器群を一括した。施文される文様等から、次のように分類される。

Ａ類　中期初頭の中でも前半に属するもので、渦巻き文や印刻文をもち、球胴状等となるものを本類とした。

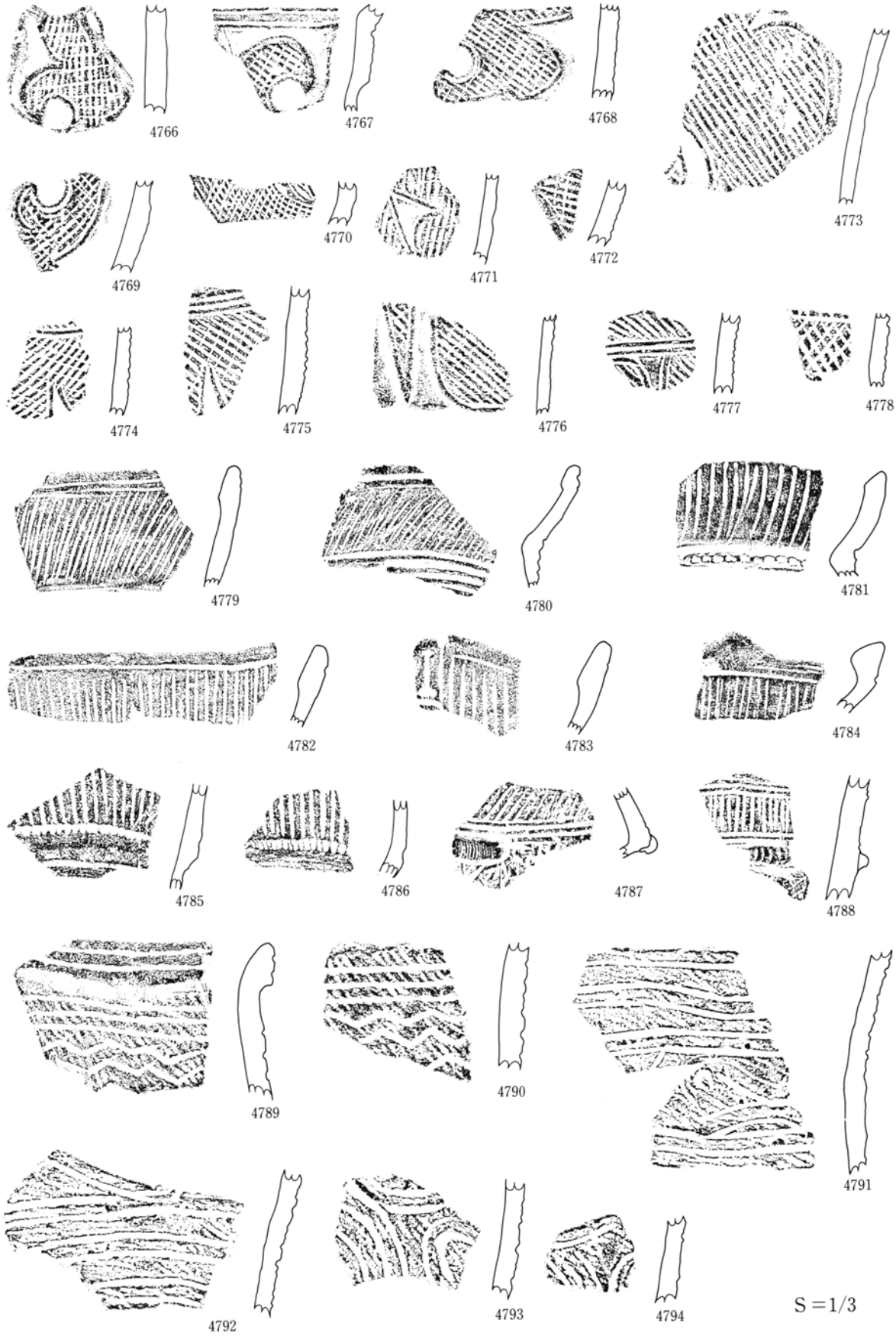
35は胴部が球胴状となり、頸部が屈曲して波状となる口縁が外反気味に立ち上がる器形を呈し、波頂部および波底下に小突起をもつ。口縁は有段となり、縦位の短沈線を施し、波頂下には渦巻き状の隆帯と沈線が施され、裏面にも同様の隆帯と沈線をもつ。口縁部文様には、波頂下に縦位沈線をもち、その下に横位沈線をもつ橋状突起を有し、その両脇に渦巻き状の沈線を施す。さらに、三角や山形状に沈線で文様を構成し、有段口縁下および沈線に添わせて三角印刻を施している。頸部に括れ部には１条の微隆帯を巡らせて区画し、胴部に縦位沈線と端部が渦巻き状となる横位沈線を施す。この横位沈線にも、三角印刻が施されている。胴部の地文には、縦位回転の結節縄文が施されるが、結節部のみが強調されるように施文される。36は先の35と同様の器形を呈し、口縁の有段上には縦位の短沈線と三角印刻が施され、波頂下には刻みをもつ円形の隆帯をもつ。裏面の波頂部および波底部には、沈線で渦巻き文が描かれ、その間に先端が渦巻き状となる横位の沈線を施す。口縁部文様も35と同様の文様が構成されるが、文様間を短沈線で充塡する。なお、橋状突起等の隆帯部は、剝落している。胴部は沈線で菱形状の文様が描かれ、沈線間を三角印刻と短沈線で充塡している。4700は波状口縁となる波頂部が大きく肥厚し、有段口縁上には短沈線をもち、波頂部に渦巻き文と波

S＝1/3

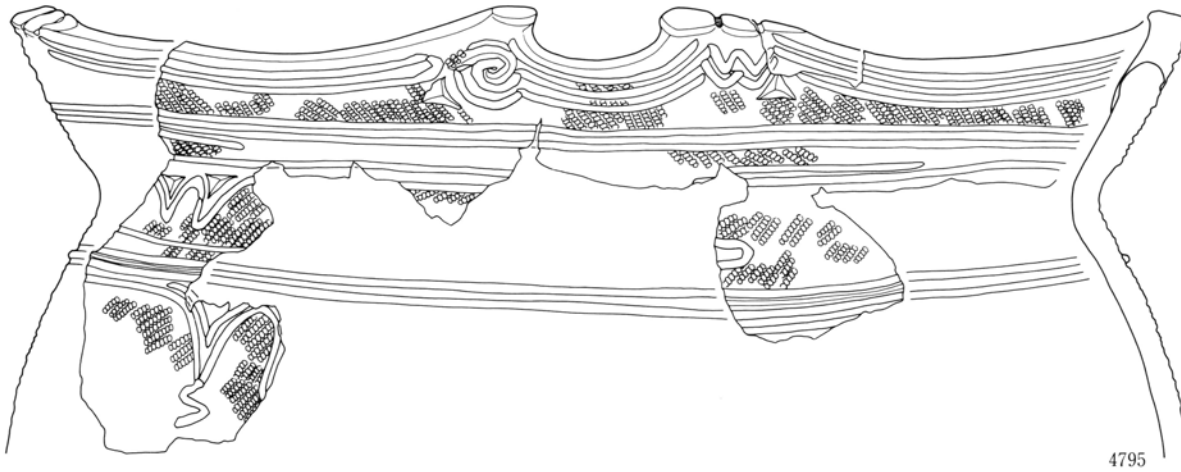
第271図　遺構外Ｃ区出土土器（142）

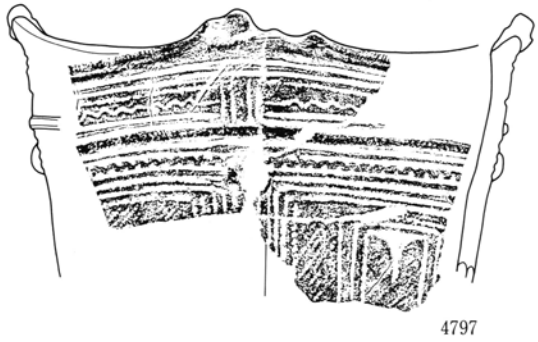
第272図　遺構外Ｃ区出土土器（143）

S＝1/3



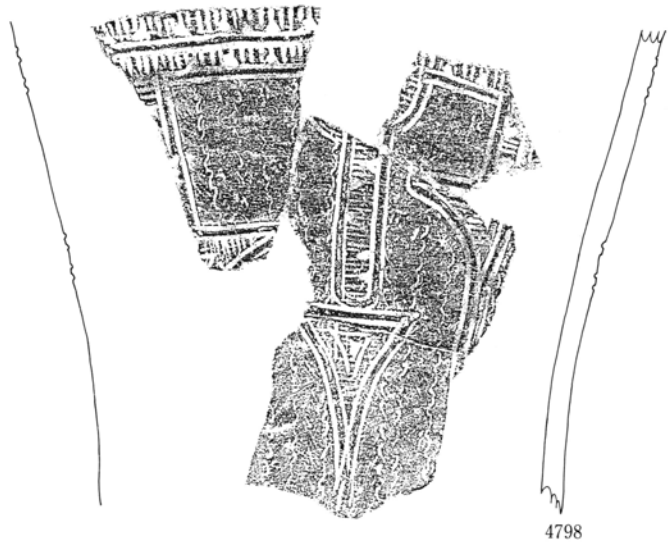
第273図　遺構外Ｃ区出土土器（144）

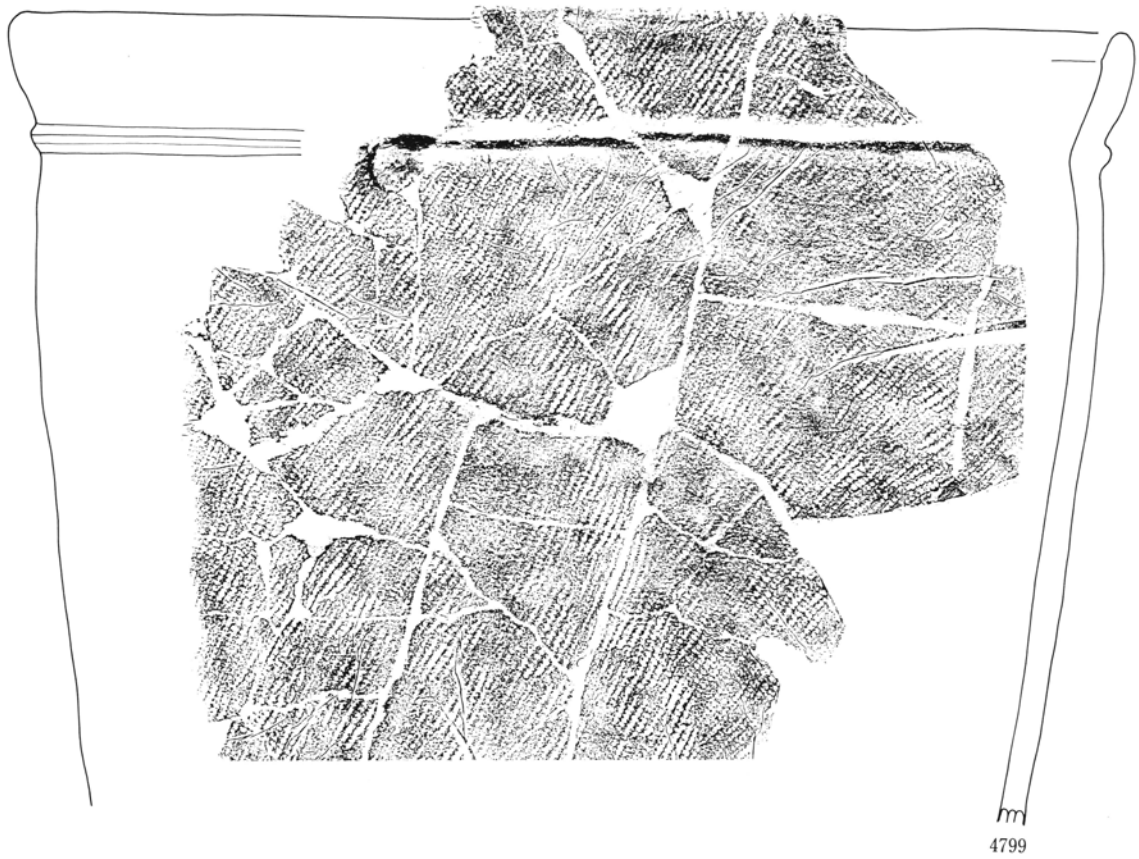




S＝1/3

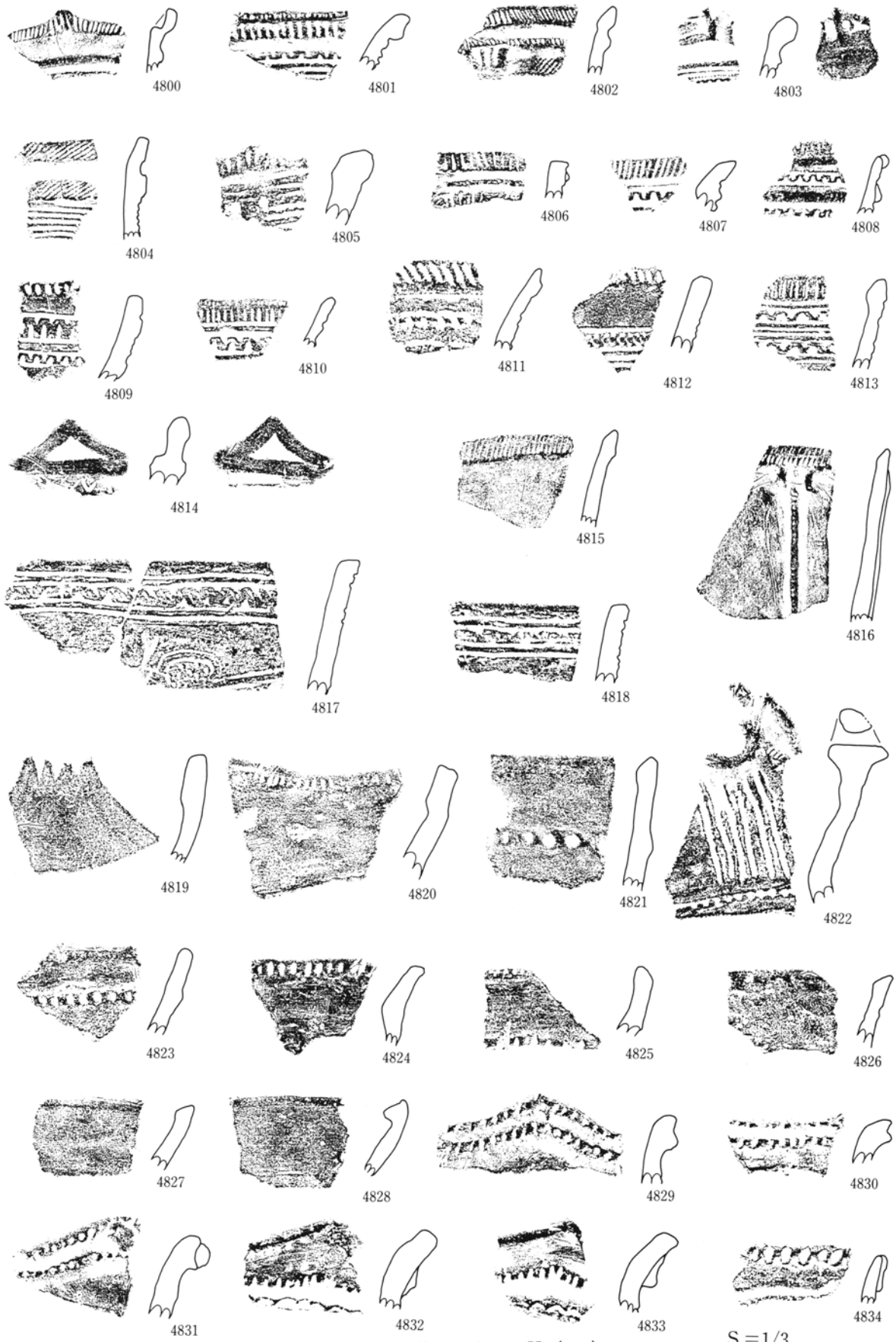
第274図　遺構外Ｃ区出土土器（145）



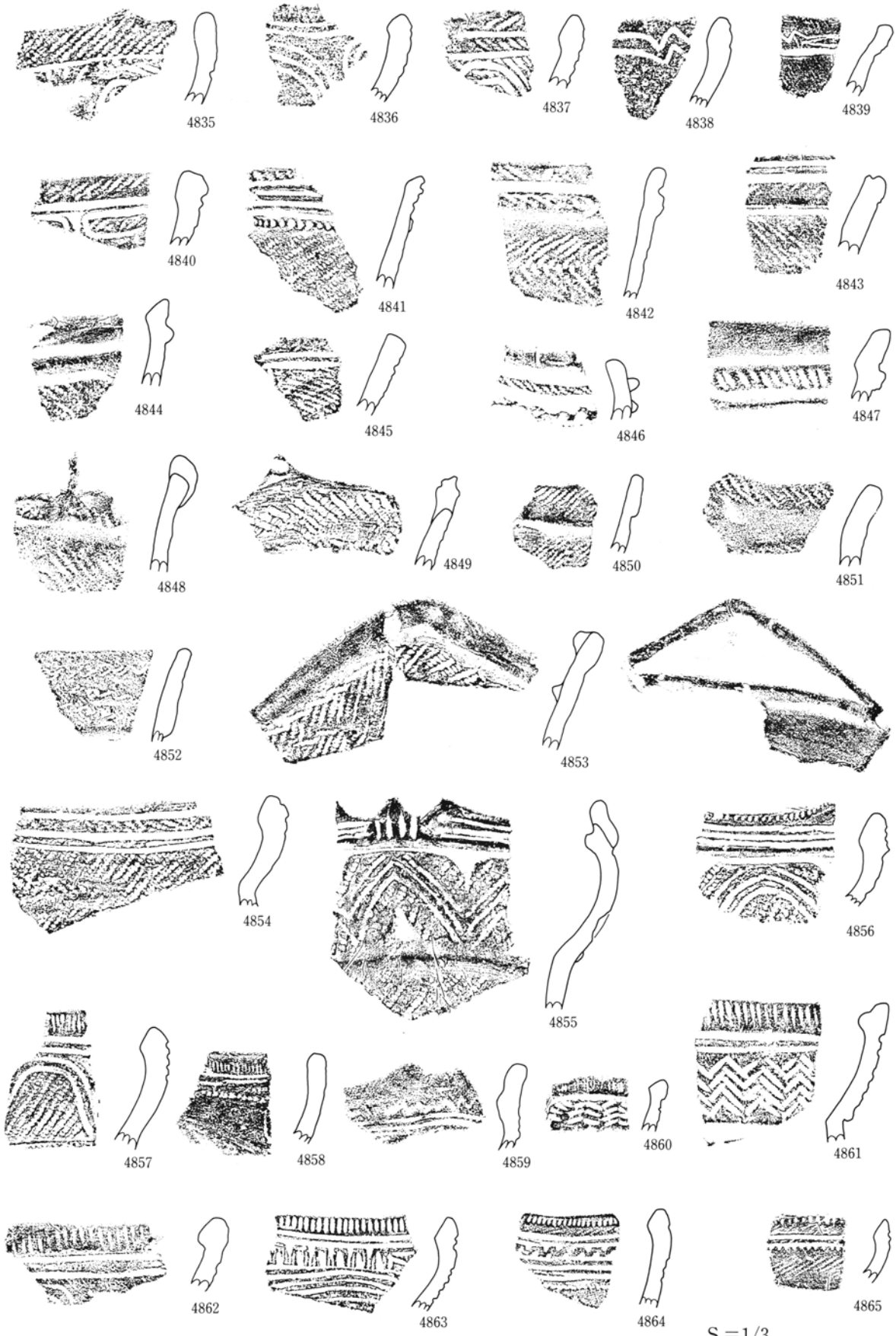


S＝1/3

第275図　遺構外Ｃ区出土土器（146）

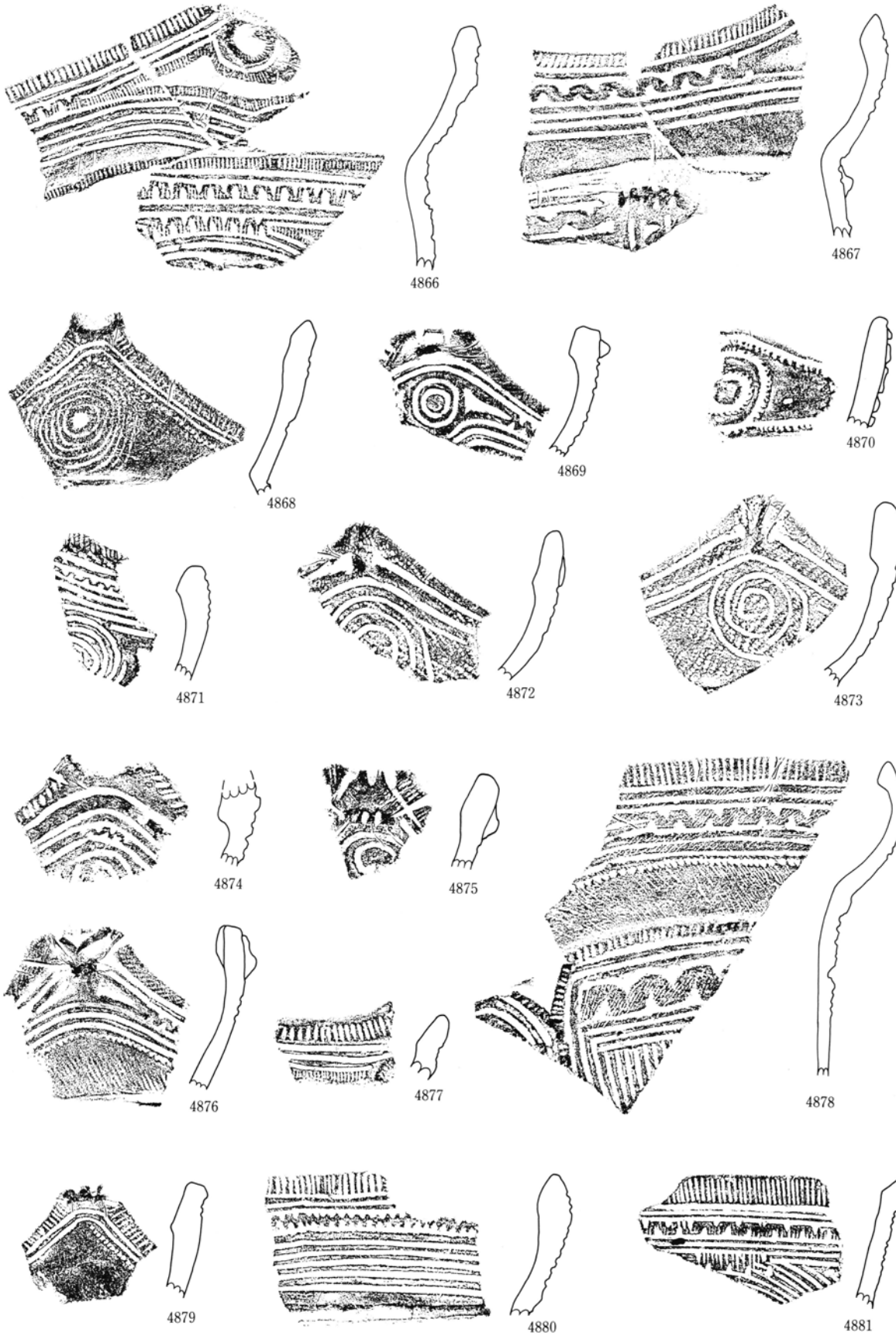


第276図　遺構外Ｃ区出土土器（147）　S＝1/3



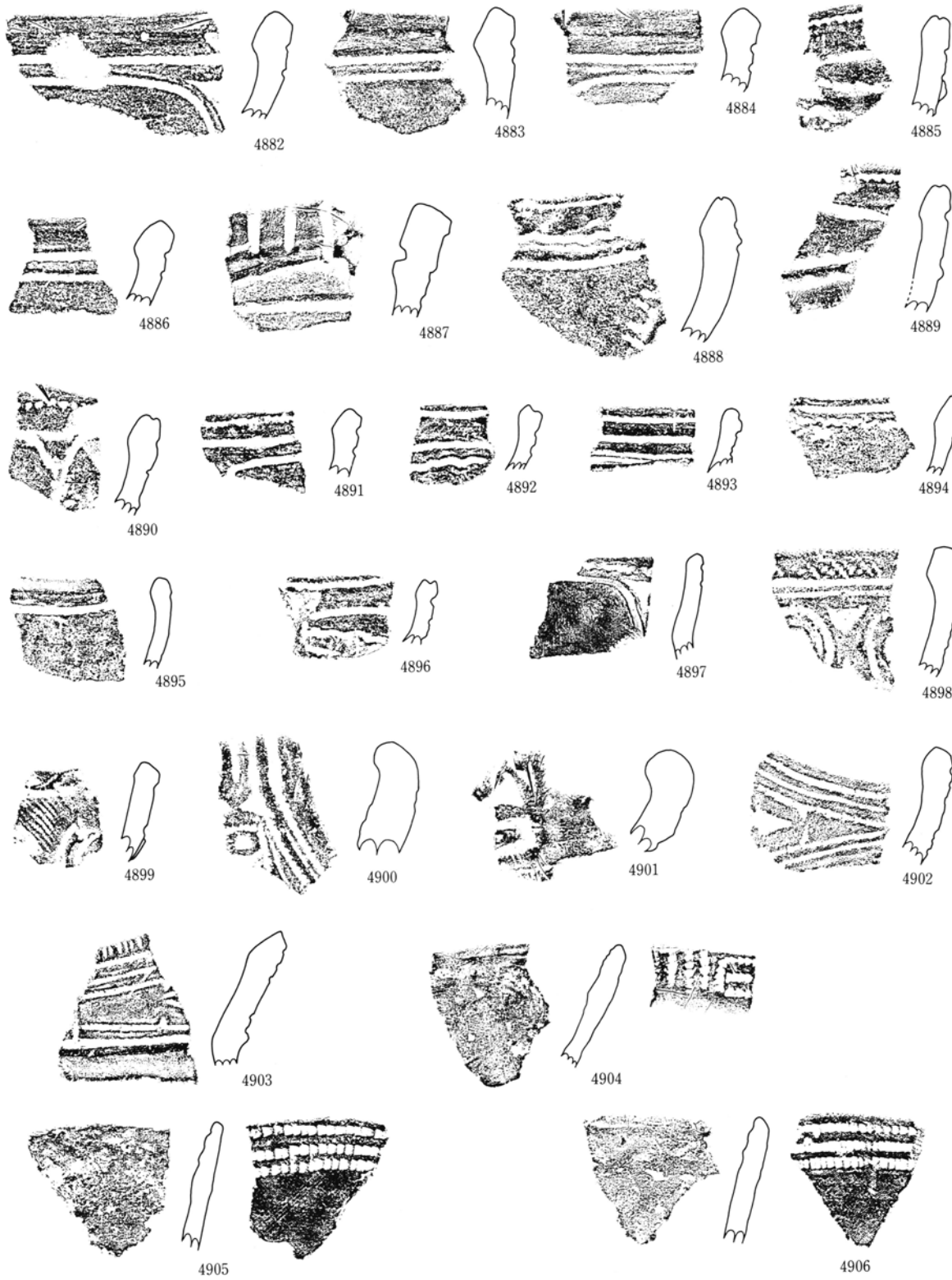
S＝1/3

第277図　遺構外Ｃ区出土土器（148）



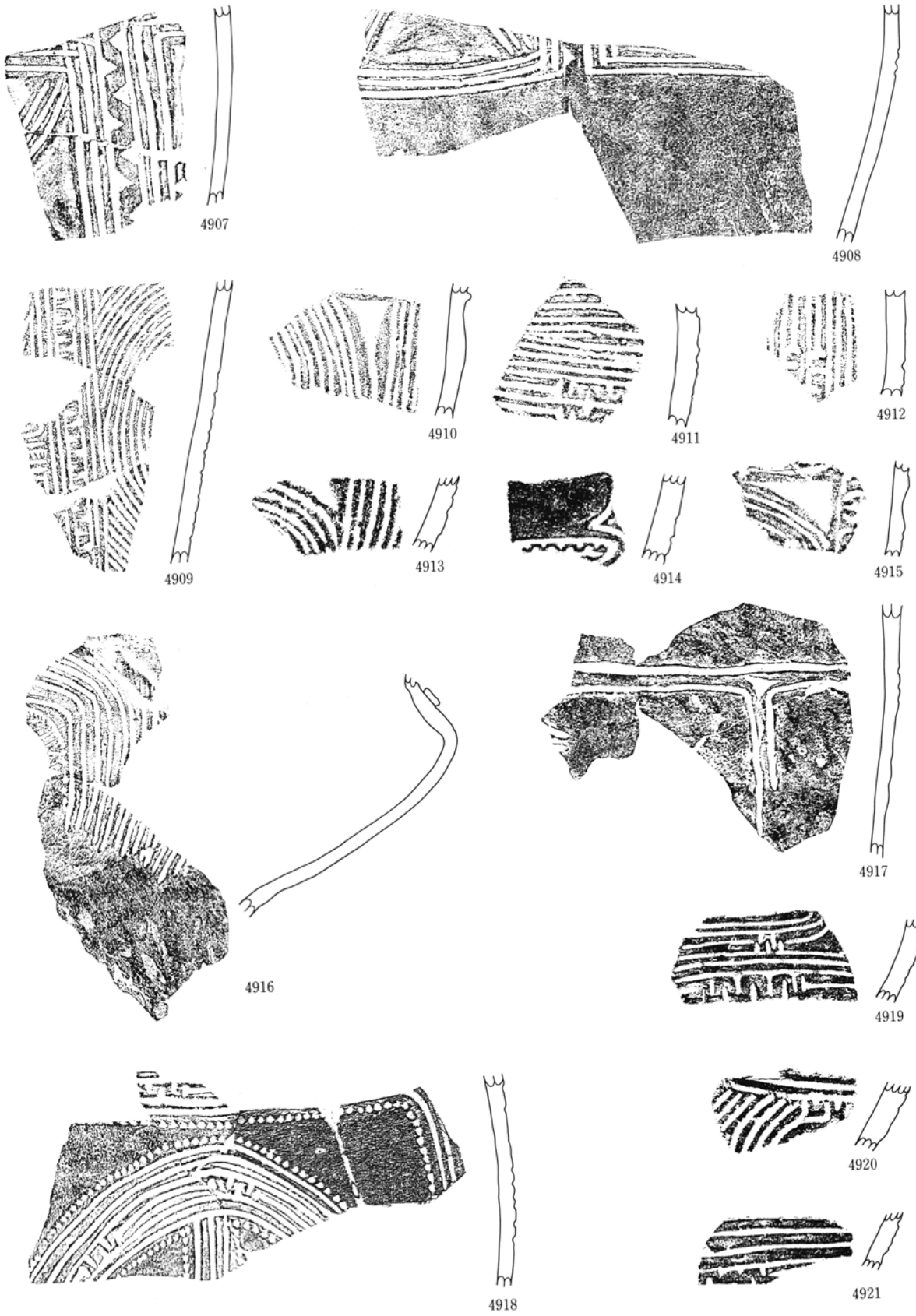
S＝1/3

第278図　遺構外Ｃ区出土土器（149）

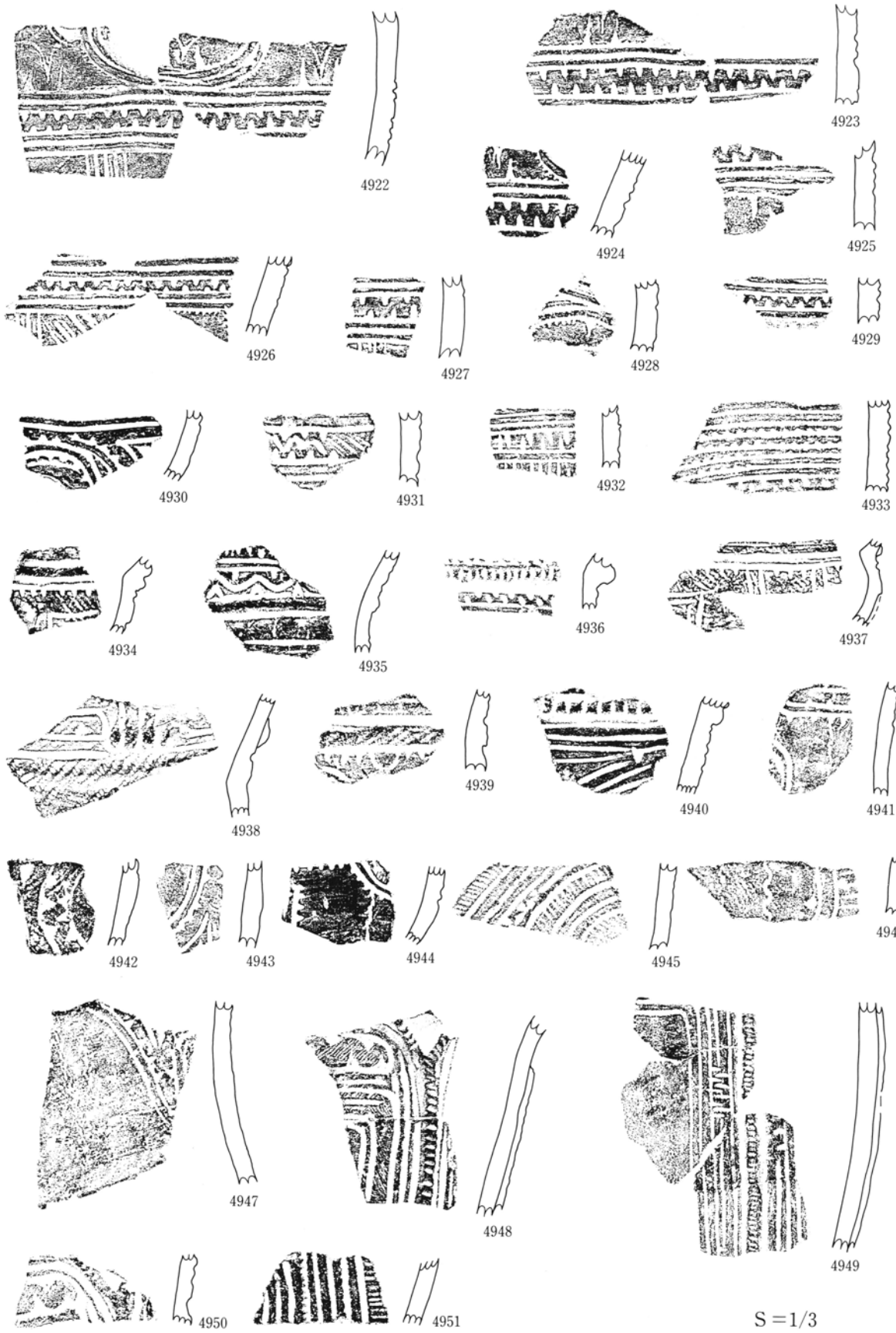


S＝1/3

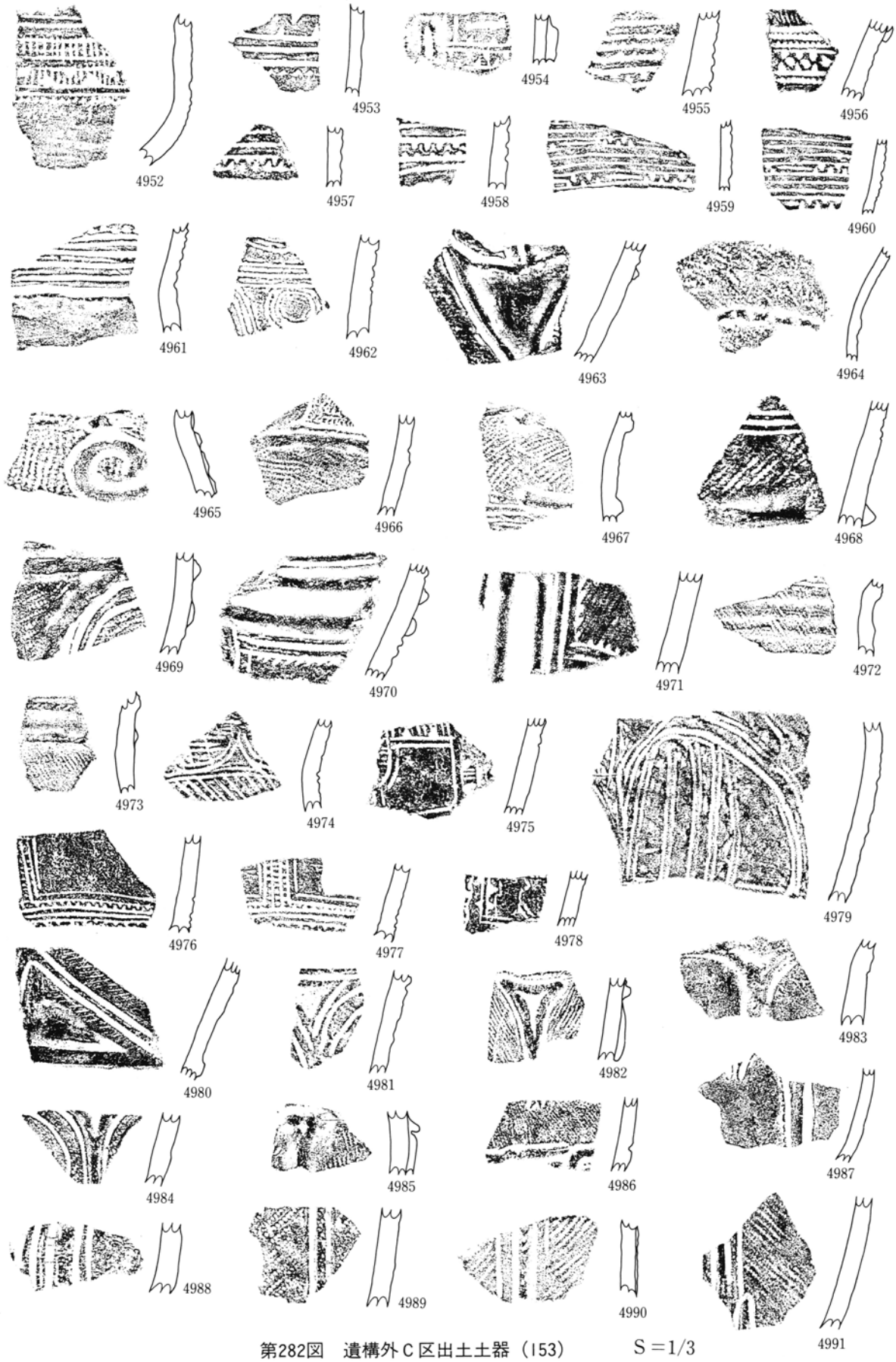
第279図　遺構外Ｃ区出土土器（150）



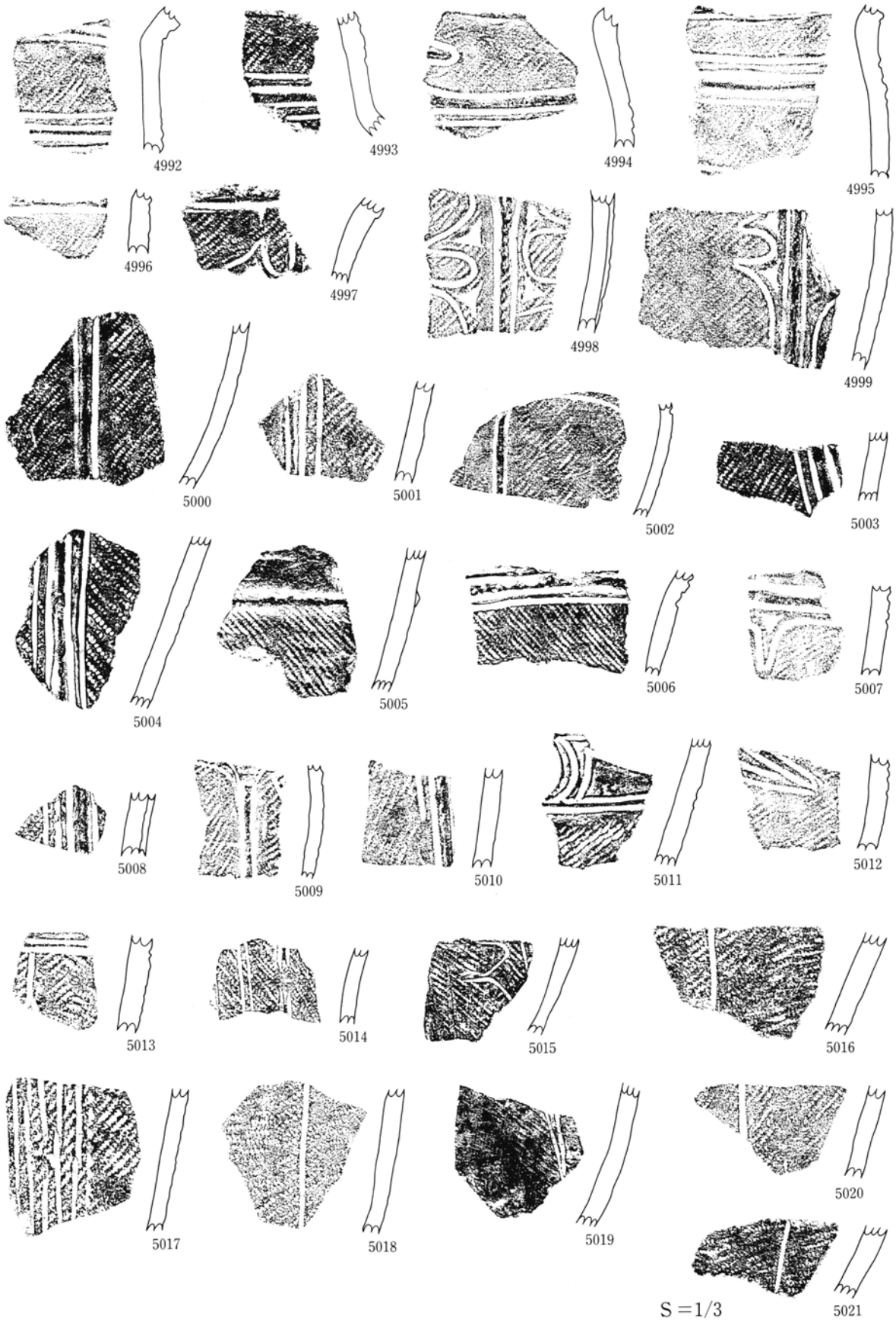
第280図　遺構外Ｃ区出土土器（151）



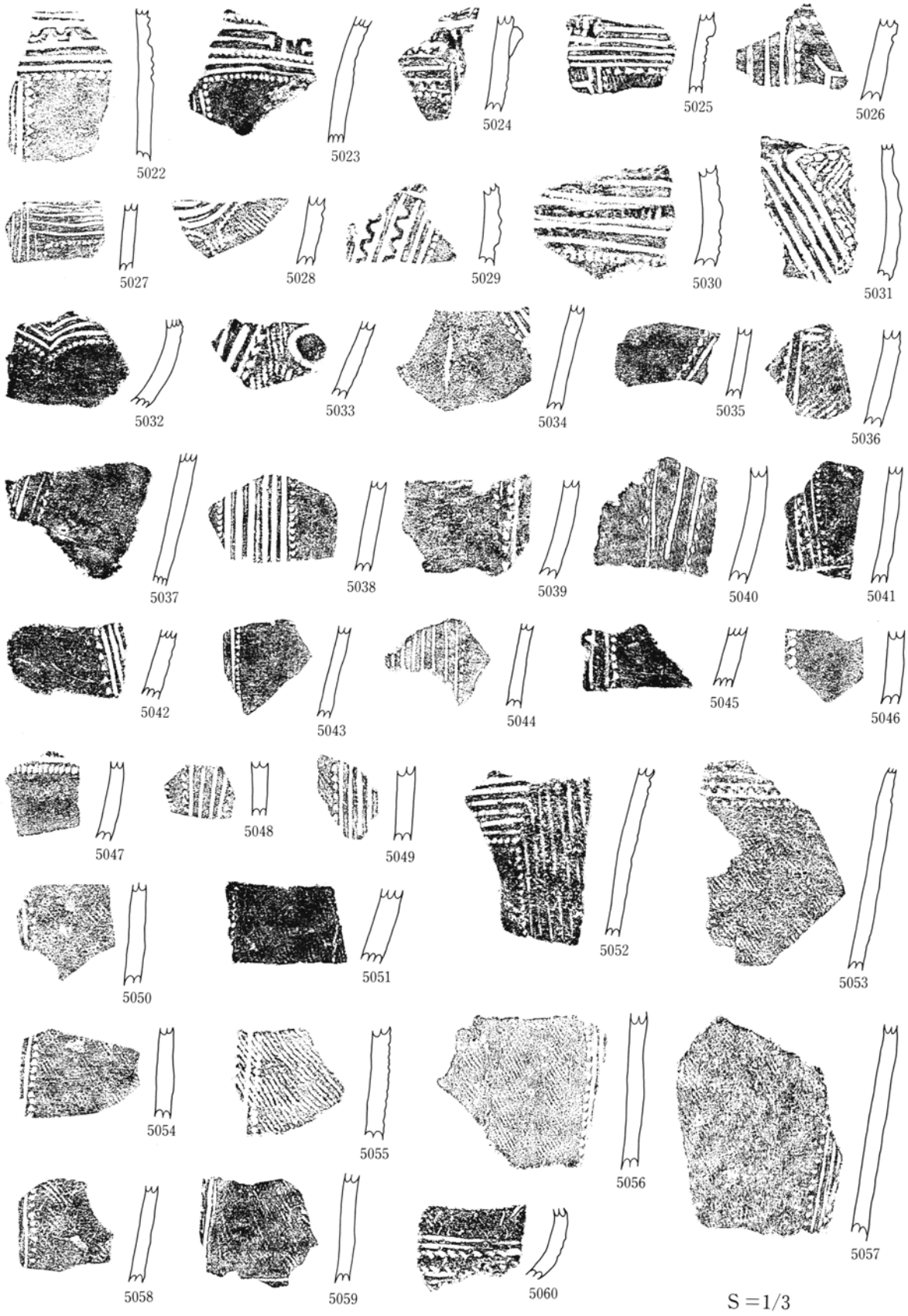
第281図　遺構外Ｃ区出土土器（152）



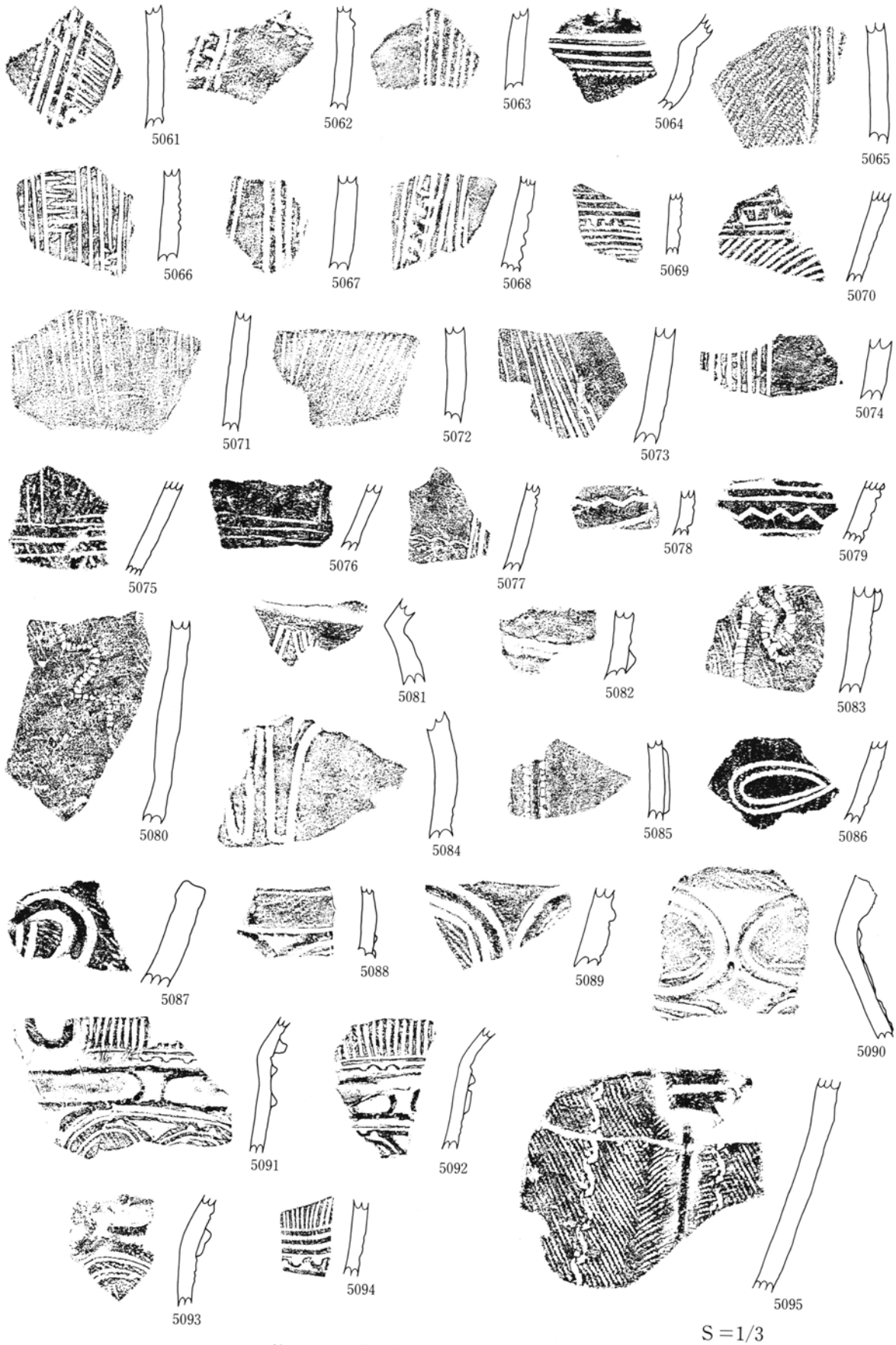
第282図　遺構外Ｃ区出土土器（153）　Ｓ＝1/3



第283図　遺構外Ｃ区出土土器（154）

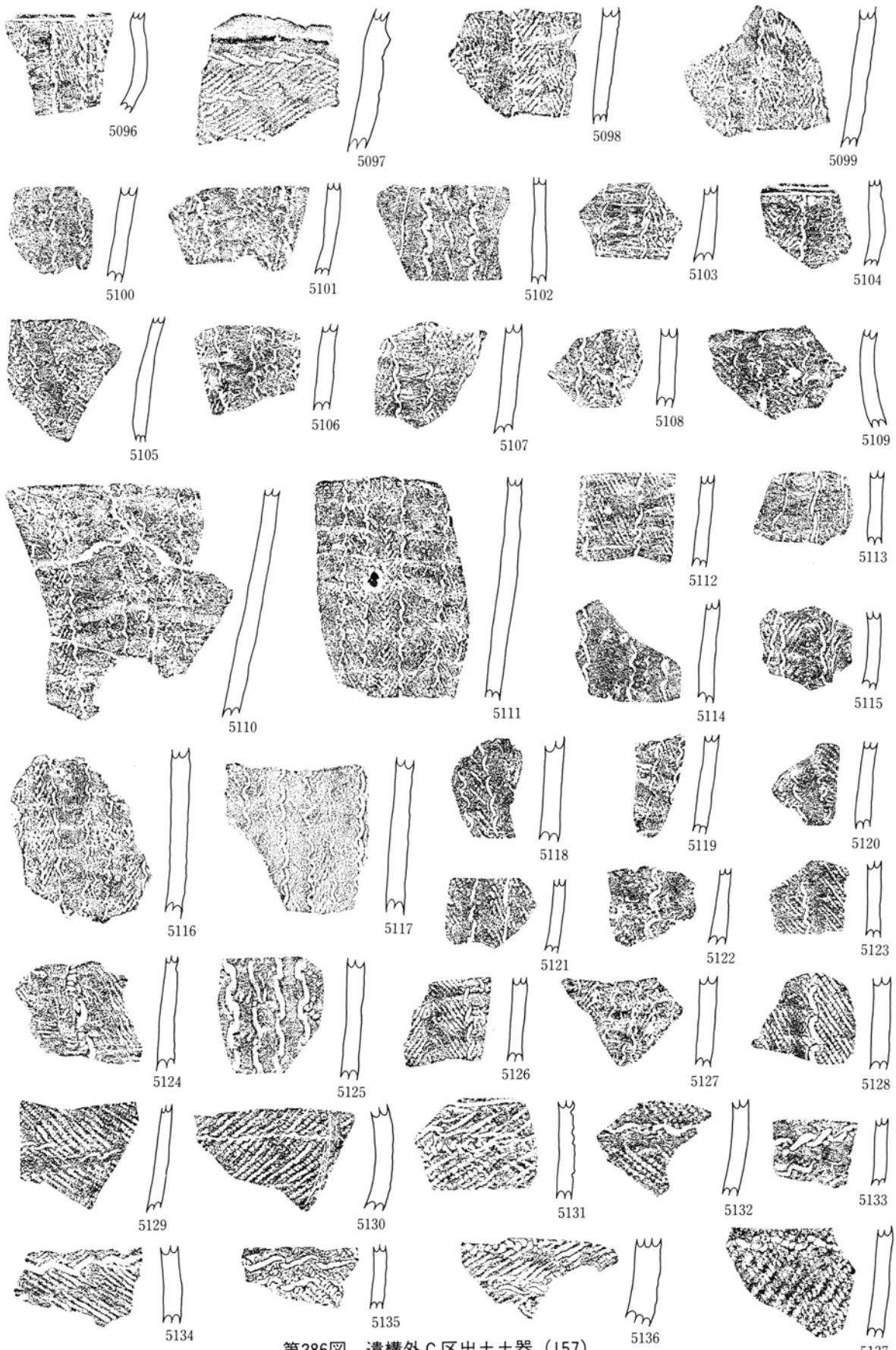


第284図　遺構外Ｃ区出土土器（155）



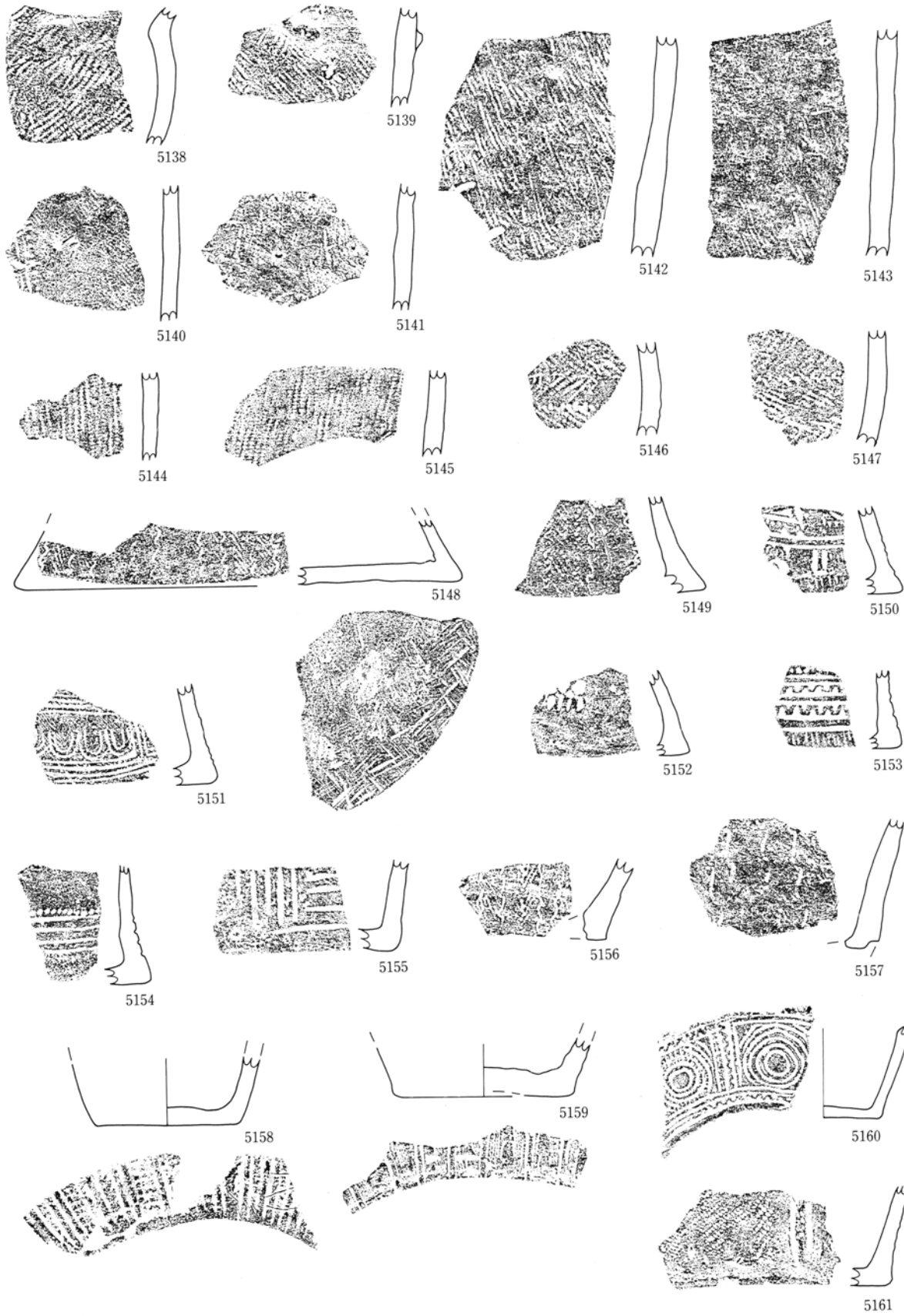
S＝1/3

第285図　遺構外Ｃ区出土土器（156）

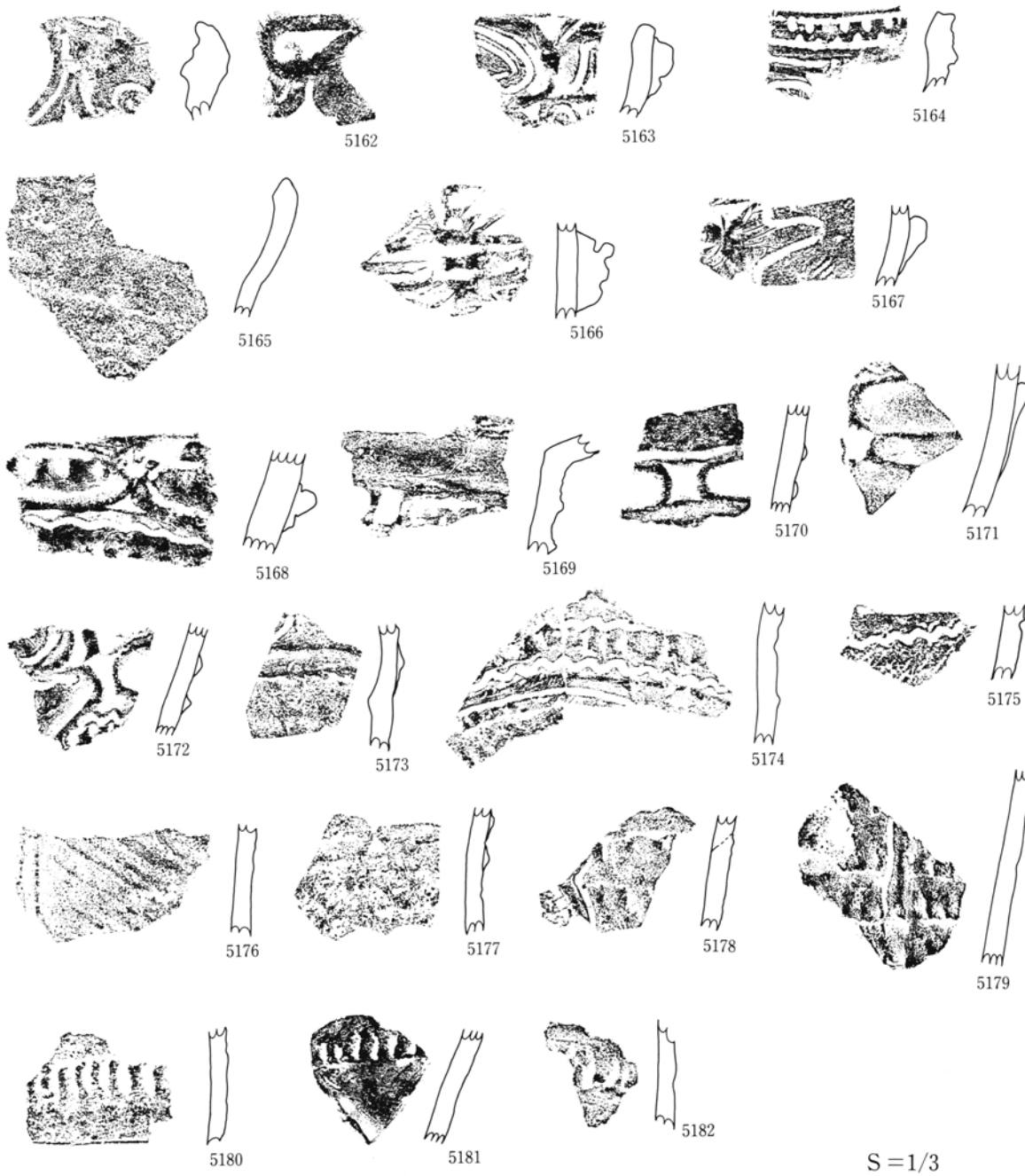


第286図　遺構外Ｃ区出土土器（157）

S＝1/3

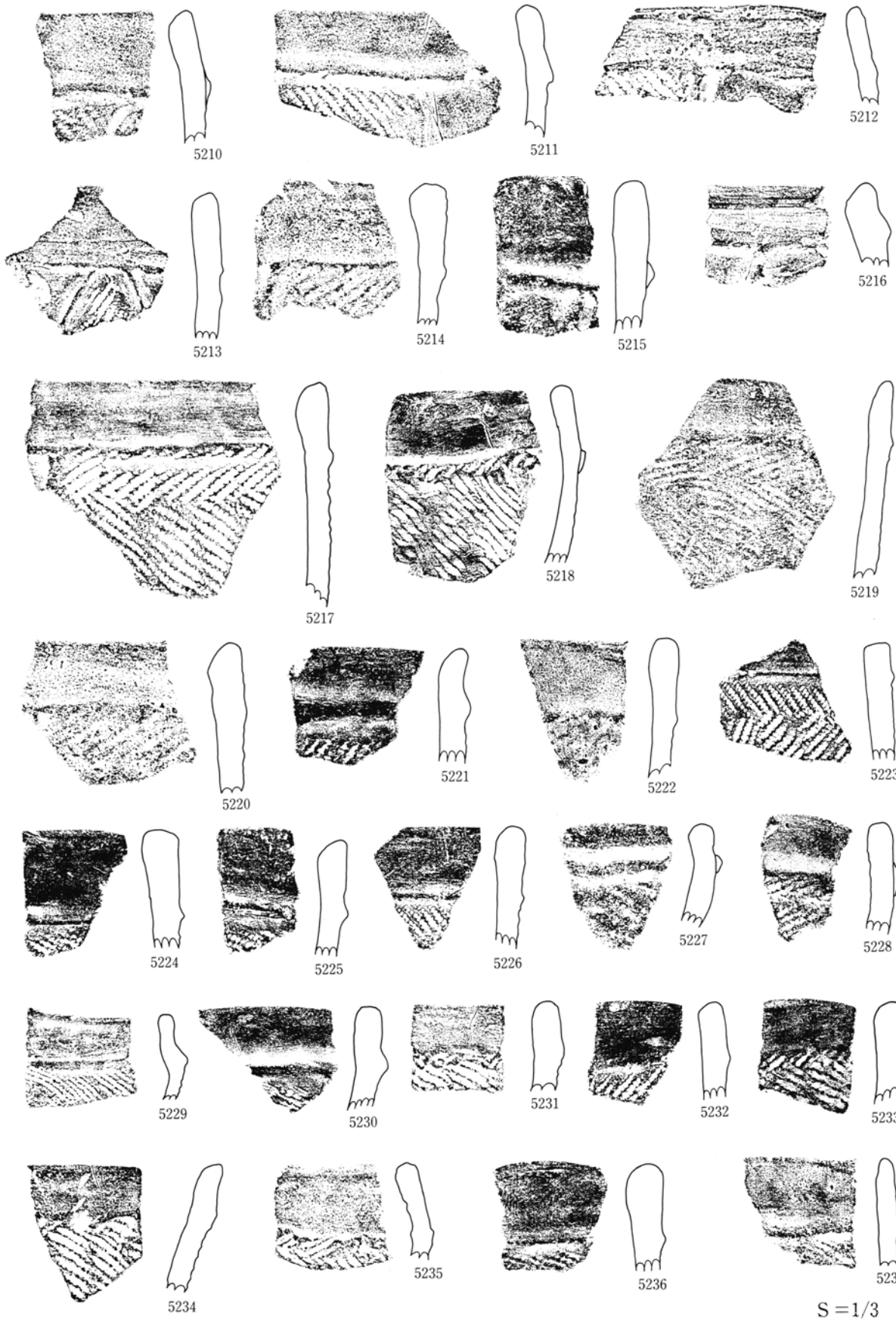


第287図　遺構外Ｃ区出土土器（158）

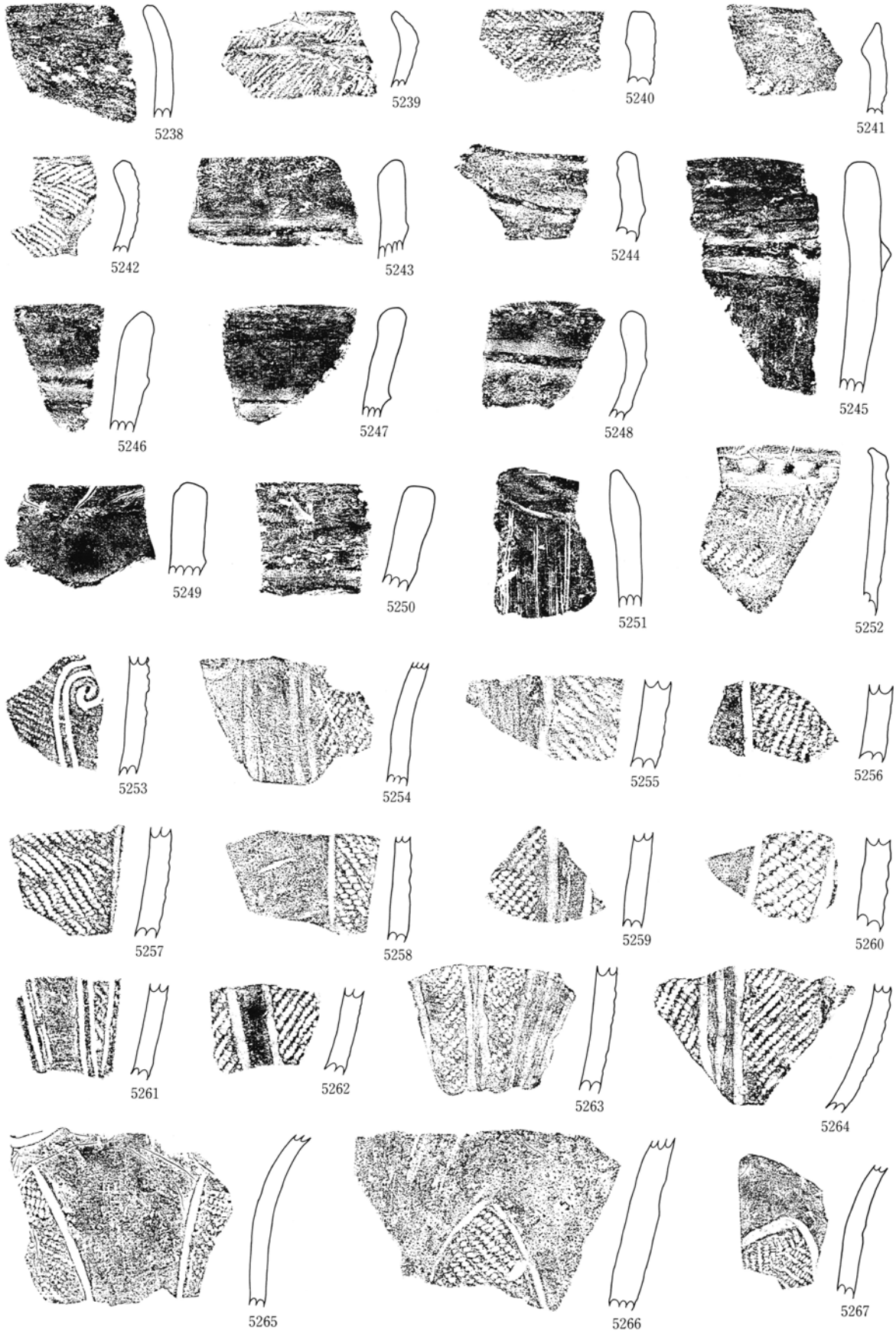


第288図　遺構外Ｃ区出土土器（159）

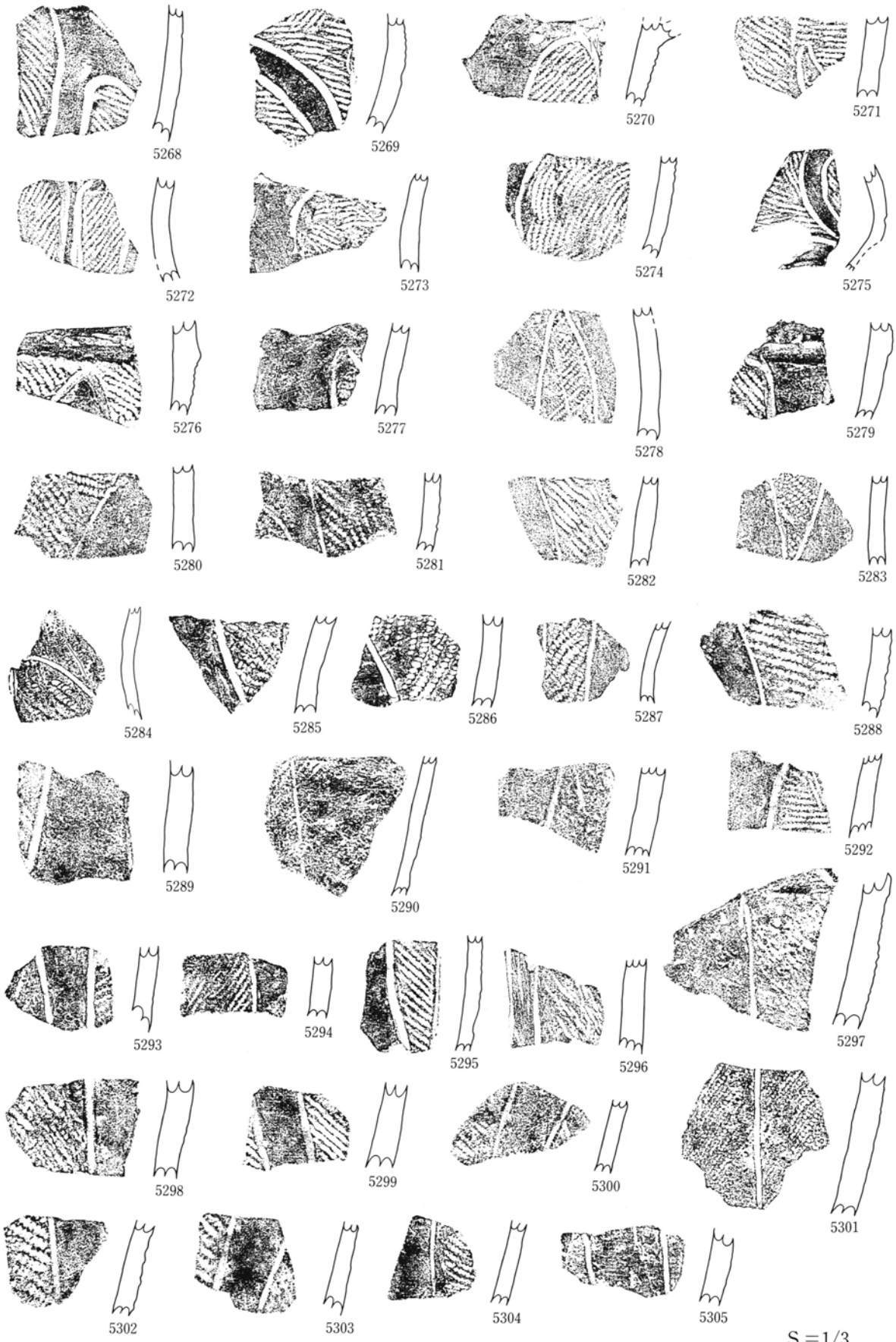
第289図　遺構外Ｃ区出土土器（160）



第290図　遺構外Ｃ区出土土器（161）

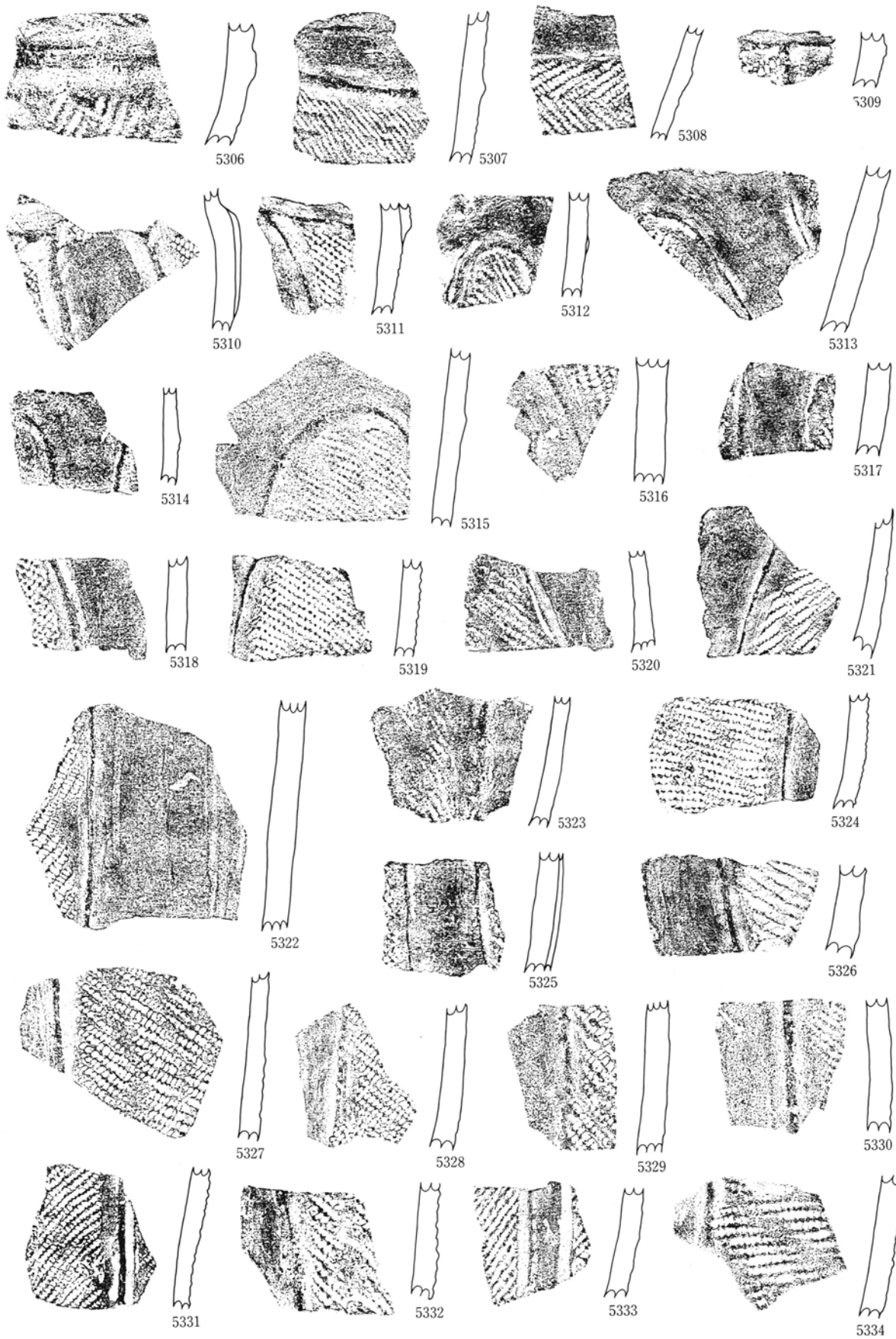


第291図　遺構外Ｃ区出土土器（162）　　Ｓ＝1/3

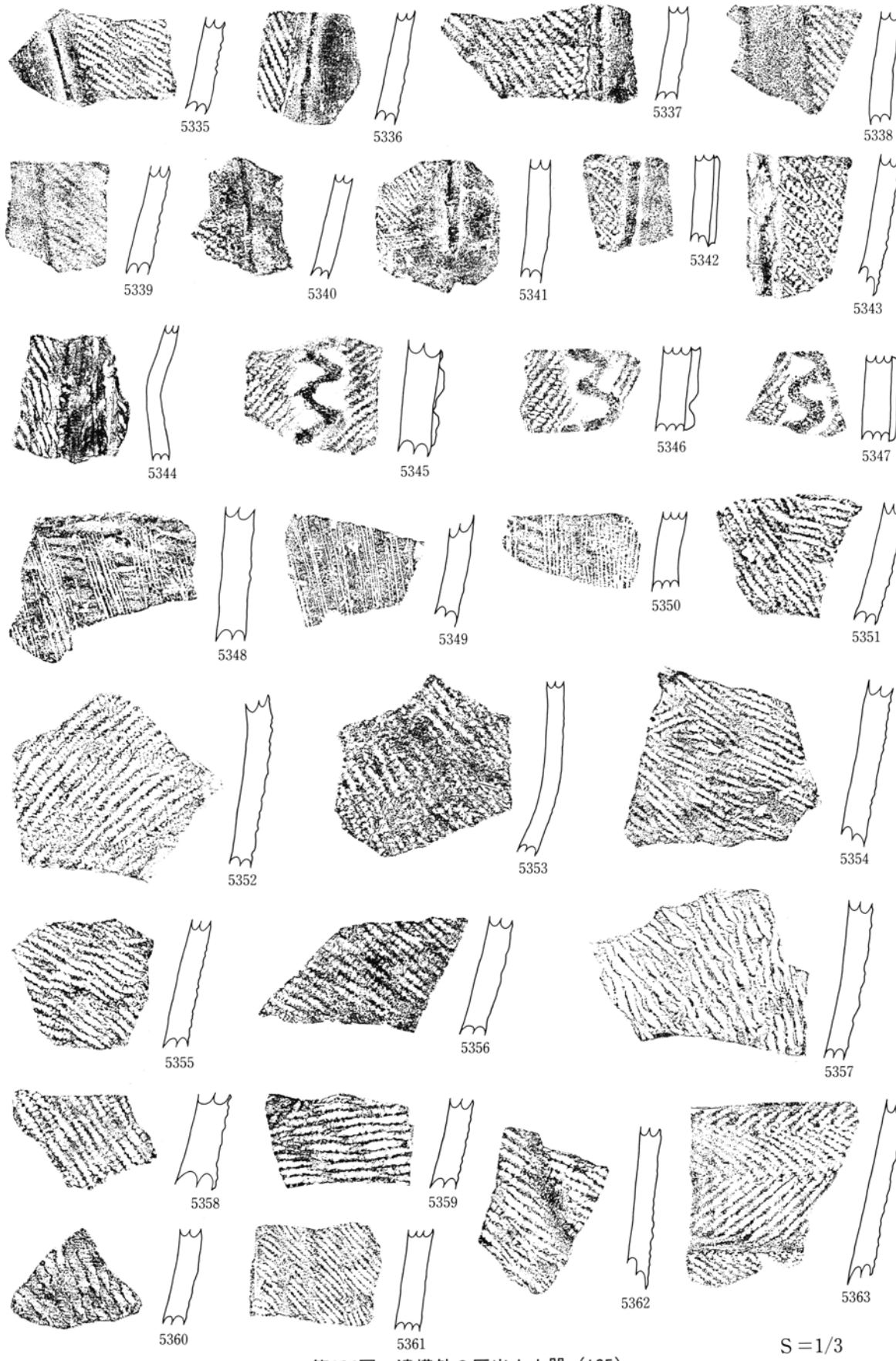


S＝1/3

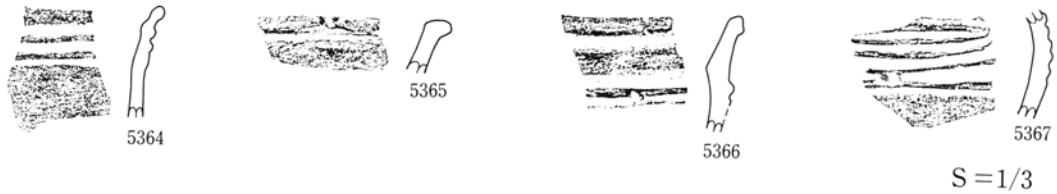
第292図　遺構外Ｃ区出土土器（163）



第293図　遺構外Ｃ区出土土器（164）　　Ｓ＝1/3



第294図　遺構外Ｃ区出土土器（165）



第295図　遺構外Ｃ区出土土器（166）

頂下に三角の孔を有する。4701も同様に波頂部が肥厚、波頂部に円形等の隆帯をもち、裏面に刻みをもつ渦巻き文を描く。口縁は有段口縁となり、有段上に短沈線を施している。4702は口縁部に渦巻き文をもつ小突起をもち、口縁部に刻みをもつ隆帯で渦巻き文様を施している。4703・4704は波状口縁の肥厚する波頂部である。4705・4706は35と同様の文様をもつもの。4709～4711は36と同様の文様をもつものである。4715は口端部に刻みをもち、口縁部を横位の沈線で区画し、区画内に縄文を施文すると共に渦巻き文や印刻文を施したもの。4719～4726は球胴状となる胴部片であるが、4720の頸部には刻みをもつ横長の突起をもち、横位・弧状・円形の沈線および三角印刻で文様が施されている。なお、4720・4726の胴部には、縦位回転による結節縄文が施されている。

Ｂ類　区画された文様帯内に、斜行沈線を施すものを本類とした。施文される文様から、次のように分別される。

１種　斜行沈線が左右に及び、格子状となる類。

4727は外反する口縁部が屈曲して立ち上がる波状口縁となるもので、口縁下に半裁竹管による平行沈線で区画し、区画内に三角印刻をもつ。口縁部も沈線で文様区画を行い、区画内に斜羽沈線を左右に施して細かな格子状の文様を描く。4729～4731は口縁部に沈線で楕円状等の文様を描き、区画内に一方が深く、もう一方が浅く粗い斜行沈線を左右に施し、区画外を印刻するもの。4732～4734は口縁に平行沈線で区画し、区画内に一方が深く、もう一方が浅く粗い斜行沈線を左右に施すもので、4732・4734には区画内に平行沈線がみられる。4735～4753は口縁を平行沈線で区画し、区画内に一方が粗い斜行沈線を左右に施すもので、4735の口舌部には刻みと三角印刻が施され、4751～4753の口端部には刻みを有する。4754～4757は区画された口縁に、粗い左右の斜行沈線が施されるもの。4757の口端部には刻みをもつ。4758の口縁には刻みをもつ渦巻き状の隆帯を有する。　4759～4763は胴部に同様の斜行沈線を施すものであり、平行沈線で区画されている。また、4762・4765には地文に縄文が施されている。4766～4777は胴部に沈線で雲形状の文様が区画され、区画内に一方が粗い斜行沈線を左右に施し、区画外を印刻するものである。

２種　斜行ないし縦走のみの類。

4779～4788は平・波状口縁となる口縁下を沈線ないし刺突列で区画し、区画内に縦位・斜位の単沈線を施すもので、4784の口縁には小突起をもつ。また、4787・4788の頸部には、刻みをもつ横長の突起を有している。

Ｃ類　太い半裁竹管の平行沈線で文様を描くものを本類とした。

4789～4794は同一個体となるもので、波状口縁となる口縁が有段となり、有段上に２条の沈線をもつ。口縁部以下には、横位の沈線と鋸歯状の沈線が巡り、4791では横位沈線間に弧状等の曲線的な文様が描かれるようである。地文には、縄文が施されている。

Ｄ類　中期初頭の中でも後半に属すると考えられる土器を一括した。器形および文様等から、次のように分別される。

１種　沈線および隆帯等で文様を描く類。

4795は頸部が大きく屈曲し、双頂状の小波状口縁をなす大形の深鉢形を呈する。双頂部は非対象となり、双頂下にそれぞれ渦巻き・鋸歯状の文様を描き、印刻文をもつ。口縁下には数条の沈線を数段巡らせて文様区画し、区画内にW字状等の文様を描き、地文に縄文を施している。4796は平口縁となる深鉢で、口縁に突起をもつが欠落している。口縁下には１条の刻みをもつ隆帯が巡り、隆帯下には沈線で長方形状の文様を描き、縦位沈線間には横位の短沈線が施され、文様区画内には列点状の刺突が施されている。地文は、縦位回転の縄文が施される。4797は小突起をもつ小波状的な口縁の深鉢で、口縁部に沈線で区画し、区画内に鋸歯状の文様を描く。頸部には刻みをもつ隆帯が巡り、隆帯下に交互に刺突を施した鋸歯状の文様が巡り、胴部は沈線で長方形状の文様が描かれ、区画内に列点状刺突やT字状の印刻をもつ。地文には、縦位回転の縄文が施されている。4800～4813は平口縁の口舌部ないし口縁直下に刻みをもつもので、4800・4803・4805の口縁には小突起をもつ。口縁部には交互に刺突を施した鋸歯状の文様が描かれている。4817・4818の口縁下にも同様の文様が巡らせれ、その下に曲線的な文様が施されている。4814は波状口縁の波頂部であり、把手状となるもの。4816は口縁直下に刻みをもち、口縁部に隆帯を巡らせ、刻みをもつ隆帯を垂下させている。4819・4820・4822は波状口縁となるもので、4819の波頂部には山形状の刻みをもち、4820の口舌部には刻みをもつ。4822の波頂下には孔を有し、口縁部に縦位の沈線を施す。4821・4823・4825は口縁下に刺突をもつ隆帯を巡らせるものであり、4829～4833は波状口縁となる口縁に刻みをもつ隆帯を巡らせるもの。4853は波状口縁となる口縁以下に結節縄文を施すもので、波頂部の裏面には三角状の隆帯をもつ。4855・4856は平口縁となる口縁に突起をもち、内反する口縁部に鋸歯状の文様を沈線で描き、三角状の印刻をもつ。地文には、縄文が施されている。4860・4861は口縁直下に刻みをもち、口縁部に縦位の矢羽根状の沈線を施すもの。4866～4877・4879は波状口縁となるもので、4866～4868・4871・4874・4875・4877・4879の口縁直下には刻みを有する。4866の口縁部には刻みをもつ隆帯と沈線で文様が描かれ、交互に刺突を施した鋸歯状の文様をももつ。また、波頂下には渦巻き状の隆帯をもっている。4867の頸部には横長の突起をもつ。4868の口縁部には沈線と列点状刺突が巡り、波頂下に円形の文様が施される。4869～4875も同様に、波頂下に円形の文様を描くもので、4870は刻みをもつ隆帯によるものである。4863・4864・4878・4880・4881は平口縁となる口縁直下に刻みをもち、4878は内反する口縁部に平行沈線と列点状刺突を巡らせ、交互に刺突を加えた鋸歯状の文様をもち、胴部には刻みをもつ隆帯で横位・縦位の文様区画を施し、区画内に交互に刺突を加えた鋸歯状の文様や沈線で文様を描く。地文には、細い縄文を施している。4863・4864・4880・4881も口縁部に沈線と交互に刺突を加えた鋸歯状の文様をもち、4881の口縁部文様下には弧状の文様が施されている。

4798は胴部上半に刻み状の縦位短沈線および印刻状の刺突を巡らせ、胴部に半裁竹管で縦位方向のY字状等の文様を描き、文様内に刻みをもつ。地文には、縦位回転の結節縄文を施している。4907・4909は胴部に縦位の沈線と印刻ないし刺突を交互に施した鋸歯状の文様で区画し、区画内に方形および弧状の文様を描くものであり、4910・4913・4915には文様の隙間に印刻をもつ。4908は胴部に沈線で方形の文様をもつものであり、文様内にX字状の沈線を施す。4916は屈曲する口縁部に隆帯を巡らせ、隆帯下に沈線でコ字状の文様を描き、列点状刺突をもつもの。4918～4921は胴部に沈線で弧状等の文様を描き、沈線間に交互の刺突をもち、列点刺突を添わせている。4922～4929は同一個体となるもので、胴部に横位の沈線と交互に刺突を施す鋸歯状の文様を巡らせて区画し、曲線等により文様を描くもの。4948～4951は4878の胴部文様と同様な文様が施されるもの。4963～4972は胴部に隆帯と沈線で曲線的等の文様を描くものであり、4981～5010は縦位に隆帯を施すものである。4992～4999は4795と同一個体となるもので、胴部には縦位にW字状の文様と印刻を